

---

# 約束の蒼紅石

夢宝

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

約束の蒼紅石

### 【Nコード】

N4238Y

### 【作者名】

夢宝

### 【あらすじ】

「もつと強くなつて。」

一人の少女とのたった一つの約束から動き出す少年の運命の歯車。幼き頃の約束から5年。心身ともに成長した少年・卓の前に現れる異世界の住民。5年間解放されることになかった運命が遂に鼓動する。

約束の少女との再会や幾多の戦いを乗り越えてゆく少年。いくつもの思いが交錯するライトノベル風恋愛バトルファンタジー遂に開幕！

## 再開、そして終幕（前書き）

お初にお目にかかります夢宝と申します。

今回初めて小説を連載させていただくことになりました。とはいえまだまだ不慣れなもので乱文になってしまふ部分もあると思ひますがどうか温かく見守っていただけると嬉しいです。

作者は現在高校生なので学業との両立を目標に連載させていただきます。ですので連載の更新は不定期となつてしまふ恐れがあります。どうかご了承ください。

しかし！私の作品を読んでいただいている読者のためにもできる限り早めの更新をさせていけるように努めてまいりたい所存でございます！

一人でも多くの方に読んでいただければ幸いです。

また感想などを書いていただけるとありがたいです。

長々と駄文にお付き合ひいただきありがとうございます。

それでは本編のほうもお楽しみください！！

## 再開、そして終幕

### プロローグ

大地は自分たちの身長の二倍はあるであろう高さの業火に蝕まれていた。円状に燃え盛る炎は大地に生える新芽すらも炭のように漆黒に染め上げていた。そんな炎の中心には二人の子供の男女、そして黒く膝までかかるくらい長い長い上着に身を包んだ細身で長身の男が対峙していた。

「卓、今は戦うことより逃げることを考えよう。」

少女は隣の少年の手をぎゅっと握りしめる。少女の表情はきりつと長身の男を睨みつけているが、少年の手を握った手からは震えと冷たさが伝わっていた。業火で紅く光った少女の表情はきつと少年を不安にさせないようにするための強がりなのだろう。

「ねえ、どうしよう・・・」

少年はそんな少女の想いを知る由もなく自分の抱えた不安を言葉にすることで精一杯だった。しかし少女はそんな少年を責め立てたりはしなかった。いや出来なかったのだ。何せこの少年と少女はまだ一二歳の小学六年生だからだ。

世間の小学生はまだ休み時間に校庭でドッチボールや鬼ごっこなんかで遊ぶ年頃。そんな年頃の子どもが業火に包まれていたら不安にならないわけがない。

それでも少女は不安をぼつりとも洩らさなかった。でも少年を握る手の震えだけは収まることを知らなかった。

そんな必死な姿の小学生に長身の男は無常にも刃を突き付けている。男の手には杖が握られていて、杖の先端部分は鋭利な刃物が姿を現わしている。

「君たちのような存在は私たちの計画に不要、いやむしろマイナスにすらなりかねないのですよ。」

男は傷だらけの少年少女に一步ずつゆっくりと歩み寄る。しかし刃物の矛先を二人から決して逸らすことなく。

大地を燃やしつくす業火は二人の体力と気力も奪いまるで二人の窮地を嘲笑うかのように激しく音を立てている。そんな中でも男のゆっくりとでも確実に近づいてくる足音だけは二人の耳に飛び込んでくる。

「人間の子供を殺めることに罪悪感が無いわけではないのですよ？　しかし私としてもあなたたちはここで大人しく殺されたほうが楽だと思っわけです。」

男は歩みつつ杖の先の刃物に指をなぞらせる。刃物は業火に反射してまるで血を帯びたかのように妖しく光る。

「卓、今から卓をこの炎の外に逃がしてあげるから。」

少女は男から目を逸らすことなく強く握りしめた少年の手をゆっくりと離した。

「えっ？でも真理ちゃんが・・・」

少年は少女の行動に動揺し今にも泣き出しそうな声になった。

「私なら大丈夫よ。卓も知ってるでしょ？私男の子にも喧嘩で負けたこと無いんだから。」

少女は少年に向かってニツと笑いかける。それでも少年の不安げな表情は変わらない。そんな少年を見て少女はふっと優しく微笑み少年の手を引つ張り一つの蒼い石を握らせた。

「これは・・・？」

少年は握らされた石を業火の光に照らした。

「お守りよ。きっと卓を守ってくれるから。」

少女は笑顔だった。でも少年にはとても寂しそうな顔にも見えた。自然と少年も泣き出しそうになる。

「ほら、そんな顔しないの！　男の子でしょ？」

少女は少年の頭をポンポンと軽く叩く。

「じゃあ、行くわよ。」

少女はそう言うと、すうっと深く深呼吸。

「具現せよ！ 我が剣！」

少女がそう叫ぶと少女の手に一本の日本刀がすうつと現れた。少女の小さな体とはアンバランスでその長く鋭い刃は男の刃物同様紅く妖しく光り輝いていた。

「ほお、その年でそこまで石の力を使いこなせるとは大したものです。やはりあなたたちは危険すぎますね。」

男はにやりと笑うと少女に向かって杖を振り上げる。

「卓！」

少女は少年に向き直り鞘に収めたままの日本刀で少年を業火より高く打ち上げた。

「ぐほっ！」

少年はあまりに急なことで事態を把握できずに炎の外に放り出された。そして地面に叩きつけられた瞬間に理解した。少女の身の危険性を理解したのだ。

「真理ちゃん！ 真理ちゃんも早くっ！」

少年は打ちつけられた腹部を抑えながら、それでも業火の音に負けないくらいに声を張り上げた。

「駄目よ。卓は早くここから離れて。」

少女の声は小さかった。それでも少年の耳にはしっかりと届いた。そして気がついたのだ。少女の声は涙声だったということに。

「美しい友情ですね。感服いたしましたよ。」

男は涙を堪えるのに必死な少女の目先に刃を突き付ける。

「卓、一つだけ約束してくれる・・・？」

少女は男をちらりとも見ることもせずか細い声で続ける。

「な、何・・・？」

少年の声も涙交じりとなった。ぼたぼたと地面に涙が落ちても業火によってすぐにそれは乾いてしまう。それでも少年の瞳から涙が絶えることはなかった。

「もつと強くなって。」

少女が口にした言葉はそれだけだった。そのあとに続く言葉はい

くら待っても無かった。だから少年は返事をした。たった一言。

「うん。」

その返事はあまりに短く、そして涙で言葉になっていたかも分からない。まして少女に聞こえたかも分からなかった。それでも少年は炎の向こう側で少女が涙しながら微笑んでくれただろうと思うことができた。

次の瞬間。少女の返事の代わりに業火はさらに激しく燃え上がり、さつき自分がいた炎の内側を燃やし尽くした。炎は次第に青白く光り、そして中心に向かって小さくなっていった。

少年はその様子をただ涙しながら見ることでしかできなかった。青白い炎が大地を燃やし尽くす姿は皮肉にも美しかった。そしてその美しい炎の塊は一瞬で凝縮され気がついた時には大爆発を起こしていた。

少年は爆風に飛ばされ近くにあった岩に体を打ちつけた。

「真理・・・ちゃん・・・」

朦朧とする意識の中虚しく天に舞い上がる爆煙を最後に少年は意識を失った。

少年が意識を取り戻したのはそれから三日後のことだった。しかし病室には少年しかおらず、結局少女も、長身の男も行方不明のままだった。

これが今から五年前の二〇〇七年ドイツで起きた出来事だ。

## 第一章 再会、そして終幕

二〇一二年、ドイツで起きた事件から五年が経っていた。少女に命を救われた少年はすすくと成長し、今は高校一年生となり、私立高校に通っている。少年の名前は城根卓しろねたく。五年前まではドイツに暮らしていたが、今は日本に帰国して鳴咲市に住んでいる。とはいえ母は三年前に病気で他界して、刑事である父はほとんど家に帰ら

ず、たった一人の兄弟である兄は二年前から家出してそれっきりである。

卓の朝は自身の朝食作りから始まる。当然洗顔や歯磨きの後のことだが。

実質一人暮らしのような卓にとってはこれは当たり前前の日常で今となつては苦にすらならない。そして朝食を済ませた後で最後に戸締りを確認してから学校に登校する。

「いつてきます。」

卓は玄関に立てかけてある母の写真にあいさつをしてからいつも出かけるのだ。これは父の教えであり、卓自身もやらねばならないことだと自負していた。

卓は通っている高校の制服に身を包み玄関を出た。

「おはよう。 たつくん。」

卓の玄関先には一人の少女が立っていた。少女の名前は赤桐蓮華<sup>あかぎりれんげ</sup>。卓とは中学からの付き合いで隣に住んでいる。高校も一緒に実質一人暮らしをしている卓によく差し入れを持っていたり、いろいろな世話をしてくれる。

「今日もわざわざありがとな蓮華。」

「そんなわざわざってほどでもないよ？　すぐ隣に住んでるんだし。」

蓮華はにこりと優しい笑顔を見せる。蓮華は明るい茶髪のロングヘアに純白で透き通るような綺麗な肌を制服から晒していて卓も少なからずそれに見とれていた。

「どうしたの？」

そんな卓の様子を見て蓮華は卓の顔を覗き込んだ。すると卓はすかさず顔を蓮華から逸らす。

「なっなんでもない！　ほらさっさと学校行かないと遅刻するぞ。」

「はい。」

すたすたと速足で歩き始める卓に蓮華も嬉しそうについていく。



こんなありふれた日常に卓は満足していた。五年前の出来事がまるで嘘のような日常だったからだ。

「そういえばたつくんいつも竹刀持ち歩いているよね？ どうして？」

蓮華のこと質問は卓が五年前の出来事に束縛されていることを実感させるのに十分だった。

「まあなんだ、護身用だ。」

もちろん護身用ではない。いや、少なからず護身の役割を果たしてはいるのかもしれない。だがそれは剣道部でもない卓が竹刀を持ち歩く理由にはなりかねない。卓が竹刀を持ち歩く理由、それは五年前の約束のほかないのだ。一人の少女とのたった一つの約束。

「強くなれ・・・」

卓はぼそりと呟く。それでも自分に戒めるように強くはつきりと

「何か言った？」

隣を歩く蓮華は首を傾げた。

「いや、なんでもないよ。」

卓は蓮華の頭をポンと叩くと、蓮華の歩幅に合わせて歩き始めた。二人はそれから五分ほどまともな会話もなく通学路を淡々と歩き続けた。

季節は初夏、六月の中ほどだ。それでも春の暖かさは消え蒸し暑さが通学路を包んでいた。歩いているだけでも少量の汗が体を覆い尽くす。

「ねえたつくんは明日の土曜日暇かな？」

突拍子もなく蓮華は歩きながら尋ねた。

「まあとくに用もないけど。俺帰宅部だし。」

「じゃあさ明日一緒にショッピングモールに行かない？」

蓮華は今までにないくらいに弾んだ声になった。期待を込めた眼差しで卓を見つめる。

「お、おう。いいぞ。」

少し呆気に取りられた卓は即答だった。でも卓としても悪い気はし



「逃がすか！」

つい先刻まで地面に這いつくばっていた男は急に跳びあがり卓の背後から跳びかかるうとするが、ドスツという鈍い音を立てて再び地面に這いつくばる姿勢になった。

倒れた陽介の後ろには空手の上段の構えを取った少女がいた。この少女の一撃が陽介の頭部に直撃したのだ。

「春奈！ おはよう！」

その少女の姿を確認するや否や蓮華はパタパタと少女のほうに駆け出した。

「おはよ蓮華、それに城根も。」

「おう、おはようさん。」

この少女の名前は風下春奈<sup>かざしもはるな</sup>。陽介同様、卓と蓮華とは中学のときからの付き合いだ。しかも蓮華とは中学一年のときから今日までずっと同じクラス。蓮華の親友だ。

中学のときはショートヘアだった春奈は今はセミロングといった感じだ。後ろには小さめのポニーテールをゆさゆさと揺らしている。聖徳高校の空手部で一年生ながらに実力が買われレギュラーを務めている。

「蓮華、大丈夫だった？ どうかの汚らしい変態に触れられてない？」

春奈は本気で心配したように蓮華の頭を撫でる。

「あはは、大丈夫だよ。」

蓮華も嬉しそうに撫でられている。まるで姉妹のような光景に卓は少し見とれていた。

「だ、れ、が、変態じゃああああ」

完全にノックアウトしていたはずの陽介は三度起き上がり蓮華と春奈に飛びつく。

「お前に決まっているだろ！」

するとすかさず陽介の顔面に春奈の回し蹴りが直撃。陽介はコンクリートの塀に強打した。

「はあ、汚物を蹴っちゃった。」

春奈はスカートのポケットからハンカチを取り出し、自分の脚を軽く拭いた。

「相変わらず風下は陽介を嫌ってるんだな。」

卓の知る限り、中学の初めの方からこんな関係が続いていると思われた。

「あつたり前でしょ！　こんなド変態気持ち悪いたつらありやしない！」

春奈はふんつと鼻を鳴らし蓮華の手を引っ張る。

「ほら私たちも早く行かないと遅刻よ？」

「おつとそうだったな。」

堀にぶつかって気絶している陽介を除き3人はすたすたと学校に向った。

陽介が眼を覚ましたのは授業の始まる予鈴が町に鳴り響いた時だった。学校に着いてからも教師に説教されたり、昼食のパンを購買で買いあさったりと常に騒ぎの中心だった。

そんな風に慌ただしい一日が過ぎ、放課後のチャイムが校舎内に鳴り響く。

教室には既にほとんどの生徒がおらず、残りの生徒も教科書をカバンに詰めて次々と教室から出て行く。

「俺達もそろそろ帰るか？」

他の生徒と同様、教科書をカバンに詰め終わった卓は後ろの席の蓮華に声をかけた。

「うん。春奈は今日も部活だつて言ってたし。」

春奈とは途中まで帰り道が一緒なので部活の無い日は大体3人で帰る。ちなみに陽介も春奈と同じ団地に住んでいるので、必然的に帰り道が途中まで一緒ということになるが、春奈が頑なに一緒に下校することを拒んでいるためいつも別行動だ。

「卓は今日はまっすぐ帰るの？」

「どうしようかな。一応スパーを覗くだけ行ってみるかな。」

卓と蓮華は帰宅部のためいつも一緒に帰る。帰宅部だからと言って暇というわけでもない。というのも卓は実質一人暮らしのようなものだから、帰りにスーパーなんか寄って食料を買いだしたり、家に帰ってから家事全般をこなさなければならぬという忙しいのだ。

「じゃあ私も付き合っね。」

「別に無理しなくてもいいんだぞ？」

「いいのいいの。私、たつくと一緒に買いもの行きたいし！」  
蓮華は楽しみに足取り軽く正門を出る。

「買い物なら明日一緒にショッピングモールに行くだろ。」

「それはそれだよ。」

蓮華は人差し指をぴつと立ててにこりとほほ笑む。蓮華の笑顔は優しくどこか柔らかい雰囲気に含まれる。

「まあ蓮華が来てくれるならいろいろ助かるしな。」

「そうだよ！」

蓮華も得意げに胸を張る。

「あまり調子に乗らない。」

卓は蓮華の額を軽く小突くと蓮華はそこをさすりながらえへへとはにかむ。

卓はこんななんでもないような日常を堪能していた。けれどいつまでもこんな日常が続くわけではないということは知っていたし覚悟していた。その現れがいつも持ち歩く竹刀だ。

それから卓と蓮華は帰り道にあるスーパーに寄って食材を買いだした。基本的に自炊する卓だがたまに面倒に思うこともあるので、カップ麺なんかも買っておく。

スーパーのレジ袋を片手に卓と蓮華の住む家のある住宅地に入った。

「ねえ、たつくん。」

「なんだ？」

蓮華は住宅地を歩きながらぼつりと呟いた。

「いつもベルトにくくりつけているその石って何？」

蓮華は卓のベルトにチェーンでくくりつけられている蒼い石を指差した。

「ああ、これはお守りみたいなものだな。」

卓は歩みを止めることなく淡々と答える。

「お守り？」

「うん、まあ昔、友達からもらったもんだよ。」

「へえ。」

蓮華はそれ以上何も聞かなかった。中学からの付き合いとは言え、四年間もずっと一緒にいる中だ。卓が何を考えているのかはなんとなく理解できた。だからこそこれ以上何か聞くことは気が引けた。そうこうしているうちに卓と蓮華は自分の家の玄関先に着いた。

卓と蓮華の家は本当にお隣さんで、卓の部屋のベランダと蓮華の部屋のベランダは向いあっていて距離は二メートルもない。

「じゃあ蓮華、また明日な。」

「うん！ 明日楽しみにしてるね。寝坊しちゃダメだよ？」

蓮華はにこりと笑って家に入って行った。卓もそれに続いて自分の家に帰った。

「ただいま。」

玄関先に飾ってある卓の母親の写真に挨拶をすますとレジ袋を台所に運んだ。冷蔵庫を冷蔵庫に入れてダイニングに行くと、テーブルの上に一枚の紙が置かれていた。

卓へ

また新しい仕事がいってしまっただね、次に家に帰れるのはいつか分からなくなっただ

しまった。生活費は卓の口座に振り込んでおくからそれでやりくりしておいてくれ。

父より

「父さん一旦帰ってきたんだ。」

卓は書置きを丸めてゴミ箱に投げ入れた。

父が刑事である以上このようなことは珍しくない。父が家に戻ってくるときは大抵卓は学校だし、帰ってきたときにはすでに父がない。これが普通なのだ。

「昔はもうちよつとみんな一緒だったんだけどな。」

卓はダイニングテーブルの端の方に立て掛けてある写真立てを見た。

その中の写真にはまだ小学生だったころの卓と中学生の兄、そして優しくて美人だった母とその母にソツコンだった若い父がいた。みんななんとも楽しげな笑顔を見せていた。

「母さん・・・」

卓はいつもその写真を見ると、好きだった母を思い出して寂しくなる。けれどその写真をしまうことは出来ないでいた。その写真をしまつと好きだった母を忘れてしまいそうになるから。

卓は写真立てを静かに倒すとキッチンでさつき買ってきたカップ麺を作った。

カップ麺を作る3分間、誰もいない一軒家にはリビングにある大きめの壁時計が秒針を刻む音だけが、静かにでもはつきりと鳴り響いた。

カップ麺の出来あがるまでの3分間は長いとよく言われるが、卓にとってこの時間は永遠のように感じられた。

時刻は8時30分。ちよつと遅めの夕食だ。

同時刻。鳴咲市の北西にある廃工場。初夏といえども既に空は曇一色。しかし、廃工場の上空にうつすらと青白い光が反射している。光源は廃工場にあった。

「ちよつぱりこの鳴咲市に集中して出現するわね。」

廃工場に差し込む月明かりに照らされた少女が青白い光の塊と向き合っている。

少女の手には月明かりに反射して輝く日本刀が握られていた。

「早く卓を見つげ出さないと。」

少女はそう呟いて日本刀を青白い光に向けた。

光の塊は人の形を象っていてゆらゆらと揺れている。目や鼻といったものは存在せずのっぺらぼうな状態だが、顔の部分に赤いラインの模様が刻まれている。

「来なさいよ！」

少女は日本刀を握る手に力を込めた。

人型の光はゆらゆらと左右に揺れながら少女に飛びかかった。そして光の腕をぐんつと少女目がけて伸ばした。

「はあっ！」

少女は勢いよく空中にジャンプしてその一撃をかわす。一瞬前で少女が立っていた地面には光の腕がめり込んでいた。

「はあああああ！」

少女は飛び上がったまま日本刀の先端を地面の人型の光に向けて飛び込んだ。

人型の光は身をよじりするりとかわす。

日本刀は勢い余って地面に突き刺さった。

「ちょこまかと！」

少女は着地してすぐに日本刀を地面から抜き地面を勢いよく蹴って再び光に突撃する。

少女は大振りで日本刀を振り回すも光はそれをひよいひよいと軽々と避けて見せる。廃工場には刃が空を切り裂く音が響き渡る。

「すばしっこいわね。」

少女は一旦動きを止め、すつと深呼吸をした。

「契約の紅、我の刃となつて具現せよ！」

少女が叫ぶと、その声は廃工場の中をこだまする。それと同時に少女の腰にぶら下がっている紅の石が妖しく光り出した。

深紅の光は石から少女の手にある日本刀の刃へと移る。そして深紅の光を纏った刀を再び構えなおす。



人型の光も右腕を鋭い刃のように尖らせて距離を取る。

「そんな程度で私の攻撃に対応出来ると思っているの？ 残念な思考回路ね。」

少女は余裕の笑みを見せると、すたんと地面を蹴りあげる。そして一瞬で人型の光の懐まで潜り込んだ。

光は一瞬遅れて後ろに跳び退くが、その時にはすでに深紅の刃は光を貫いていた。

「反応が遅すぎるわよ。」

少女は腹部に突き刺した刃をそのまま頭部まで引き上げた。

真つ二つに斬られた光はごおつと激しく燃え上がり一瞬で消滅した。

「これで二七体目。」

少女の日本刀に纏っていた深紅の光も消え始め腰にある石の輝きもいつの間にか消えていた。

廃工場の中には何事もなかったように月夜の光が優しく包み込んでいた。

翌日。天気は快晴。澄み渡るような青と純白の雲が休日の空を彩っていた。

そんな青空の下、卓と蓮華はバスに揺られて住宅地から北にある大型のショッピングモールに向っていた。

「それにしてもよく晴れたな。」

卓はバスの車窓から空を見上げて言った。

「ね〜！ やっぱりこういう日にお出かけってテンション上がりちゃうよね！」

隣に座っていた蓮華もどこか浮足立っていた。

「それにしてもたつくんとお買い物ものなんて久しぶりじゃない？」

「昨日一緒にスーパー行ったような。」

「そういうお買い物ものじゃなくて！」

蓮華はブクーっ頬を膨らませた。

「冗談だよ。そう拗ねるなって。」

卓は蓮華の膨らんだ頬をつんつんとつついた。

「くすぐりたいよ〜」

すぐに蓮華は膨らませた頬を崩し卓の手を掴んで離れた。

「ホント頬触られるの弱いな。」

卓は面白くなってまたつつこうとしたが蓮華が若干潤んだ瞳になったので手を引いた。

「もお。意地悪・・・」

「悪い、悪い。あとでパフェおごってやるから機嫌直せ？」

「ホント!？」

蓮華の顔はぱあつと明るくなった。

蓮華はやはり女の子らしく甘いものに目が無い。とくにこの鳴咲市のシヨッピングモールにあるパフェ専門店のイチゴパフェは蓮華の大好物だ。

鳴咲市のシヨッピングモールは大型で、大抵の店はここにある。中には普段見ることのないようなマニアックな店まであったりする。卓と蓮華の住宅地からはバスが通っていて、約十五分で到着する。

「あれ？ そういえば今日は竹刀持ってきてないんだね。」  
隣に座っている卓が小さめのリュックしか持っていないことに気付いた蓮華がひょいっと顔を覗かせた。

「まあな。さすがに買い物に行くときまで竹刀持ってきたら蓮華が恥ずかしいだろ？」

「わあ、優しいんだね！ でもそんな気を遣わなくても大丈夫だよ！ 私それくらいじゃたつくんのこと恥ずかしいなんて思わないから。」

蓮華は無垢な笑顔を見せた。それを見た卓はすぐさま外の景色に目を反らした。

「あゝ照れちゃった？」

それを見た蓮華が茶化すように卓の背中をつつく。

「照れてねーよ。」

そう言いつつも卓は目線を反らすことはしなかった。

そんなこんなしているうちにバスはショッピングモール前のバス停に停車した。

「さすがに土曜日だと混んでるな」

バス停から見えるだけでも、ショッピングモールの大きな入り口付近に大勢の人がいた。

「ここはいつも賑やかだよな」

「まあ俺達の町の数少ない遊び場だからな。」

「だね！」

卓と蓮華も大勢の人ごみの中に紛れてショッピングモールの中に入った。

このショッピングモールは5階建てで店は4階まで入っている。5階は立体駐車場となっている。

「蓮華の行きたい店は何階にあるんだ？」

「2階だよ。2階には結構たくさん服屋さんがあるんだよ！」

蓮華は目を輝かせて2階へと続くエスカレーターに乗った。一応このショッピングモールにはエレベーターもあるが、そちらは大体お年寄りやベビーカーを必要とする子供がいる家族が利用している混雑している。

「でもなんで服なんだ？ 蓮華は服なら結構持つてるだろ。」

卓はエスカレーターの手すりに寄りかかりながら一段下の蓮華を見た。

「たつくんはもつとデリカシーを持つ必要があります！」

蓮華は顔を赤らめてプイツとそっぽを向いた。

「俺なんか悪いこと言ったか？」

卓は少し焦り気味だった。

「知らない！」

蓮華はそっぽを向いたままだ。でも横顔の口元は少し緩んでいた。エスカレーターが卓たちを2階まで運ぶと、蓮華は卓を手招きしながら先頭を歩き始めた。

「今日は特別に夏物のお洋服が安くなってるんだよ！」

蓮華の機嫌もいつの間にか直ったようで、足取り軽く進んでいく。

「そんなのよくチエックしてるな。」

「当然！ 女の子は普通だよ。」

蓮華は振り返って得意げな表情を見せた。

「蓮華って時々強気な態度になるなよな。普段は恥ずかしがり屋なくせに。」

卓は笑いながら蓮華の頭をポンポンと叩く。

「そんなことないよ。」

蓮華は卓に叩かれるまま口だけで抵抗する。

「まあそういうことにしておくか。」

卓は満足げな表情で蓮華の先を歩く。

「あう。私が先に歩くんだから！」

蓮華は頭をさすりながら早足で卓の前に出た。

そんな調子で、二人は目当ての店の前に着いた。

ここのショッピングモールは通路の真ん中が吹き抜けになっていて、反対側の店に行くには少し距離がある。だが、それでも反対側の店の蛍光色の輝きはこちら側からでもよく見える。そしてこちら側の蛍光色も向こう側からよく見えるのだ。

「蓮華……」

「なあに？」

卓は店の前に立ちつくしていた。店に一步踏み入れた蓮華が立ちつくす卓をきよんとして見ている。

「俺はここに入っただけはいけないのでは？」

「どうして？」

卓の目の前には輝かしい蛍光色のピンクが広がっていた。それは店の内装だけではなく女性ものの無数の下着が発する輝きだ。

「いや、どう考えても駄目だろ。」

「駄目じゃないよ！」

「いや。駄目だ。」

蓮華は卓のところまで戻ってきて卓の手を強引に引つ張る。

「たつくんも一緒に来ないと意味が無いの。」

蓮華は力いっぱい卓の腕を引つ張りが、地面に張り付いた卓の足が動くことはなかった。

「ここで待つてやるから。それでいいだろ。」

「駄目！ 中で一緒にお洋服選んでほしいんだから！」

蓮華も負けじと引つ張り続ける。その様子をほかの客が野次馬根性を働かせて見ていた。

「恥ずかしいから蓮華離せ！」

それに気がついた卓は少し焦り始めた。

「じゃあ一緒に来て。」

蓮華は潤んだ瞳で卓を見つめる。

「分かった。分かった。行くから離してくれ。」

「本当！？」

蓮華の表情はぱあっと明るくなった。それと同時に野次馬達はそれぞれの目的の店に散らばって行った。

「はあ・・・」

卓は大きなため息をついてから蓮華に引きづられるように店の奥へと踏み込んだ。

「わあ〜」

蓮華はたくさんさんの輝かしい衣類の前で目を輝かせていた。そのとなりで卓は周りの目を気にして明らかに挙動不審になっている。

「なあ、蓮華。まだ終わらないのか？」

「こんなにたくさんあるんだよ？ すぐに選べないよ〜」

蓮華はハンガーにかけてある洋服を次々と手にとって見比べる。

「そうか・・・」

卓も楽しげな蓮華の様子を見ていると出ようなどと言えるはずもなかった。

「たつくん、私ちょっと試着してくるから試着室の前でちょっと待つてて。」

蓮華はそう言って、両手に服を抱えて試着部屋に入った。

「マジかよ・・・」

取り残された卓はとてつもない孤独感に襲われた。

卓は蓮華の後を追うように試着室部屋の前に向おうとした瞬間背中  
中に何かがドンッと当たった。

「あつ！ ごめんなさい！」

卓が振り返る前にそんな言葉が聞こえた。卓も急いで振り返ると  
少しあたふたしている女性がいた。

身長は160前後といったところで細身の体に綺麗な黒い長髪の  
女性だった。

鼻の部分が少し赤くなっているところを見ると顔面から卓の背中  
にぶつかっただらしい。

「あ、いえ。こちらこそぼつっとしていて。」

卓も申し訳なさそうに女性に頭を下げた。

「そんな！ 悪いのは私の方なので……」

女性は深く頭を下げた。

「じゃ、じゃあお互い様ということ。」

少し困った様子の卓はそれで試着室の方へと向かおうと女性に背  
を向けた。

「早く逃げたほうがいいですよ。」

「えっ？」

突然さつきまで弱腰だった女性の声はつきりしたものに変わっ  
て卓はすぐに振り返った。だがそこにはすでに女性の姿はなかった。

「……何だ……」

卓は自分が鳥肌が立っているのに気がついた。

女の言葉が気になったがとりあえず試着室に向った。

すでに試着室前には着替えを済ませた蓮華が立っていた。

「遅いよたつくん！」

「悪い、ちょっと慣れてないもんだから。」

卓は蓮華の頭の上にポンと手を乗せる。

「どう……かな？」

蓮華は少し照れくさそうに試着した姿を卓に見せた。

蓮華は淡いピンク色のワンピースに純白のチョーカーといったシンプルな服装だったが、夏の清純な雰囲気は漂っていた。

「すげー可愛いと思うぞ。」

卓はにこりと笑って蓮華の頭を撫でる。蓮華も嬉しそうに満面の笑みで撫でられる。

「じゃあこのワンピース買っちゃおう！ 着替えてくるから待っていて。」

蓮華は鼻歌混じりに試着室に戻った。

「なんか店の外が少し騒がしいような。」

卓は試着室の前から店の外を眺めた。

もともと人は多いのだがそんな賑わいとは別の騒がしさが店の外にはあった。

「たつくん？ どうしたの？」

着替えを済ませた蓮華が外を見つめる卓の顔を覗きこんだ。

「あ、いやなんでもないよ。じゃあレジに行こうか。」

「うん！」

蓮華は優しくワンピースを抱きしめ足取り軽くレジに向った。

「9980円です。」

「はい！」

レジ打ちのバイトがさりげなく言った金額をすかさず差し出す蓮華を卓は感心したように見ていた。

「よくそんな大金出せるな。俺なんて安物の服ばかりなのに。」

「女の子のお洋服は高いんだよ？ それに滅多に買わないしね。」

蓮華はにこりと笑った。

「まあ確かに蓮華にはすごい似合ってたしな。」

「ありがとう。」

蓮華は顔を赤くしながら梱包されたワンピースを受け取った。

「さて、次はどこに行く？」

「うーん、どこにしようかな？」

卓と蓮華がそろって店を出ようとした瞬間、店の向い側で爆発が起きた。

「蓮華！」

卓は瞬時に蓮華を爆風と飛んでくる破片から守るため蓮華に覆いかぶさった。

「きゃあああああ」

ショッピングモール中に悲鳴が飛び交った。

「何だ！？」

爆風が収まって卓は爆発した反対側の店のほうを見た。

そこにはゆらゆらと揺れる人型の青白い光が爆煙の中で光っていた。

「何だ……あれ」

卓はその青白い光に見入った。すると人型の光は青い炎の球をこちら側に飛ばしてきた。

「蓮華避ける！」

卓は蓮華を力一杯押して炎の球から守った。

「え？ な、何？」

蓮華は状況を読みこめずにいて完全に混乱していた。

今までの洋服店も今の一撃で炎上して、中にいた店員や客もみんな一目散に逃げ出していた。

「俺達も逃げるぞ！」

卓は蓮華の片腕を掴んで立たせると全速力で走り出した。

「たつくん！ なにが起きてるの！？」

蓮華は片腕にワンピースの入った袋を抱きかかえて、もう片方の腕はがっちり卓に掴まれていた。

「分からない！ でもこのままここにるのは危険だ！」

卓にも今起きている現状は全く分からなかったが、やるべきことは分かっていた。

蓮華の腕を離すことなく真っ先にエスカレーターに向った。



「蓮華、先に行け！」

エスカレーターは非難する人でごった返していた。小さい子供は押しつぶされて泣き出したりしている。

「たつくんは!？」

蓮華はエスカレーターの段に乗るとまだエスカレーターに乗っていない卓を見上げた。

「空いたらすぐに行く！」

卓はそう言っただけで今走ってきた道を見た。するとさっきの人型の光がゆらゆらと左右に揺れながらこちらに向ってきていた。

「何なんだあいつは！」

卓は今だに人混みでごった返しているエスカレーターを見て焦った。

蓮華の姿はもう見えなくなっていた。

人型の光はまたしても炎の球をこちらに目がけて飛ばしてきた。

「やばい！」

卓はエスカレーターとは反対側に跳び退いた。

「きゃああああ！」

炎の球はエスカレーター付近に直撃してその場が青い炎に包まれた。

「このままじゃ避難している人たちが……」

卓は辺りを見回し、武器になるようなものを探した。

「くっそ！ 何でこんなときに俺は……」

卓は唇を噛みしめた。

(強くなれ。)

頭にその言葉が過った。かつて一人の少女に言われた言葉だった。

「俺は、弱い……」

卓は自分の弱さを実感した。無力な自分に苛立った。

卓はその場に座り込み何度も床を叩いた。

そんな間にも人型の光は卓に迫ってくる。

「なんで！ いつも何もできないんだ！」

卓の視界は涙でぼやけていた。

顔を上げたときには目の前に人型の光が立っていた。

顔部分に赤いラインが光っていて怪しげな雰囲気醸し出す。

「こんなところで死ぬのかよ……」

卓は目を瞑った。

「諦めるの？」

閉ざされた視界。それでも卓の耳にははっきりその言葉が飛びこんだ。

「えっ？」

卓が目を開けると片腕を斬りおたされた人型の光が激しく暴れまわっていた。

「何亡霊でも見たような目してるのよ。」

卓と人型の光の間に立っていた少女が卓に振り返りにこりと笑った。

少女の手には少女の身長と大差ないくらいの日本刀が握られていた。服装は短めのチェックのスカートに白いワイシャツ、その上に膝までかかるくらいの黒い上着を羽織っている。

「……ま、り……」

卓のその一言は言葉と言つにはあまりに弱弱しかった。

「ぼうつとしてない！　まずはこいつを片づけるわよ。」

真理はすぐに暴れまわっている人型の光に向き直った。

「ちよつと待ってくれ！」

卓は我に振り返り状況を把握しようとしたが思うように頭が回ってくれなかった。

「いいから、とりあえず今はやるべきことがあるでしょ。」

少女は卓に振り返ることなく言い放った。

卓は言葉を飲み込んで少女の背中を見つめた。

少女の身長は150くらいの小柄だったが、その背中はとても大きく感じられた。

「とりあえずこれ以上の被害はまずいわね。」

少女は目を瞑り大きく深呼吸すると目を見開いた。

「我、この世界との断絶を命ずる！」

少女の言葉の少し後にショッピングモール中がしんと静まり返った。

さつきまでエスカレーターの付近でパニックになっていた人の声もとたんに聞こえなくなり、それどころか、卓と少女以外の人間の姿も見えなくなっていた。

「えっ？」

卓は突然の出来事に戸惑いを隠しきれなかった。

「来る！」

少女が叫んだときにはさつきまで暴れまわっていた人型の光が素早く突っ込んで来ていた。

人型の光は残った腕を前に突き出しそこからまた炎の球を射出した。

「うわっ！」

卓はすかさず横に跳び跳ねたが壁に背中を強打した。

「はあああああ！」

卓が狙われている間に空中に大きく跳び跳ねた少女が人型の光の真上で日本刀の切先を垂直に光に向ける。

少女はそのまま落下し、人型の光に切先をかすめた。

「外した！」

少女は軽々と床に着地して、すぐさま後ろ方向にステップして人型の光との間合いを取った。

「全く、魂玉はすばしっこくて嫌なのよ。」

少女はそう言いつつも余裕の表情だった。

魂玉と呼ばれた光は少女の間合いを少しずつ縮めてきていた。

「……………」

卓は完全に言葉を失っていた。打ち付けた背中 of 痛みさえ忘れているかのように少女の戦いに見入っていた。

「契約の紅、我が刃となって具現せよ！」

少女が叫ぶと腰にぶら下がった深紅の石が輝きだした。そしてその輝きがそのまま日本刀の刃を包み込む。

魂玉なる光はそれに呼応するように激しく揺れ出し、炎の球を連続で射出した。それらは少女を目がけて飛んでいく。

「はあああああああ！」

少女は床を力強く蹴ってそれに飛び込む。

炎の球が当たる直前に床に足を着け、細かに体を反らしそれらを全て避けた。最後の一球を避けると同時に魂玉を真つ二つに切り裂いた。

魂玉は激しく炎上し、そしてゆらりと消滅した。

少女の手にした日本刀の刃にまもっていた紅の光もすうっと消えた。

「あの……」

その一部始終を見ていた卓はゆっくりと立ち上がった。

「久しぶり卓！」

少女はくるりと卓に振り返る。

「真理……だよな？」

「他に誰に見える？」

少女はにこつと笑った。少年のような無邪気な笑みだった。

この少女の名前は篠崎真理しのざきまこと。卓がドイツに住んでいたときに知り合った同年代の少女だ。

5年前、ドイツで男に襲撃されたときに男と共に姿を消した少女であった。

「どうして……」

卓は真理が姿を消した後、その近辺をくまなく搜索し、警察も動いて搜索したが結局発見できず、事故死として処理された。

「生きていたのかって？」

真理はにやつと笑った。

「これ！」

真理は腰に紐でくくり付けていた紅の石を取って卓の目線まで持

ってきた。

「それってお守り……」

「あゝ卓にはそう言ってたね。」

真理はうゝんと考える素振りを見せる。

「これは本当は贈与の石って呼ばれてる石なの。」

「贈与の石……？」

卓は自分の腰にある蒼の石を手を取った。

「そう、これは所持者の努力に見合った力を与えてくれる石なの

よ。」

「……？」

卓は真理の言葉の意味が分からずに言葉が見つからなかった。

「見せたほうが早いかな。よく見ててね。」

真理は日本刀を自分の前に突き出した。

「我が命が下るまでその刃、隠匿いんとくせよ。」

すると真理の手にあった贈与の石が一瞬光って、次に日本刀がその姿を消した。

「なっ!？」

卓は目の前の現実にただ驚くばかりだった。

「これは初歩の初歩、自分の武器を自在に現出させることのできる力。これくらいなら今の卓にも出来ると思う。」

「俺にそんなこと……」

卓は言葉を飲み込んだ。そして自分の手の中にある石を見つめた。

「まあ詳しいことはあとでやるとして、とりあえずこれを解かないど。」

真理は念じるように紅の贈与の石を握りしめた。

するとひゅうつと周りが風の吹くような音を響かせた。次の瞬間、再び雑踏がシヨップینگモール内に響きだした。

変わったのはそれだけではなく、真理が魂玉と戦った跡は綺麗さっぱり修復されていた。

それでもそれ以前の被害はそのままなのだが。

「卓、行くわよ。」

真理は状況の変化に取り残されている卓の腕を掴み、つかつかとエスカレーターの方へと歩き出す。

「真理！ 何がどうなっているんだよ！」

引つ張られる卓がようやく出せた言葉だった。

「詳しいことは全部あとで話すから、今はここからさっさと出るわよ。」

真理は振り返ることなく、一本調子で歩き続ける。

「君たち！ 怪我は無いかい？」

警察官2人が停止しているエスカレーターを駆け上ってきた。

「はい、大丈夫です。」

真理はそれだけ言い残して、不安げな表情の警察官を取り残し、エスカレーターを下って行く。もちろん卓の腕はしっかり掴んだまま。

二人がショップिंगモールを出るとそこには大勢の人だかりがあった。ショップिंगモールから避難した人や、はたまた騒ぎを聞きつけてわざわざ来た野次馬たちだ。それらの前に黄色いテープで立ち入り禁止と叫ぶ警察官たちも多数。

「たつくん！」

人だかりの中から、蓮華の声が響く。そして、梱包されたワンピースを手にした蓮華がこちらに向って駆けてくる。

「蓮華！」

卓は足早に蓮華の元まで駆け寄った。

「たつくん大丈夫！？」

蓮華の声は少し震えていた。

それというのも真理が来るまでの騒ぎは全てショップिंगモールの外まで響いていたのだ。

「ああ。この通りピンピンしているぜ。」

卓は蓮華の頭をそっと撫でてやった。

真理は卓の少し後ろで面白くなさそうな表情でそれを見つめる。

「たつくん、その子は？」

真理の視線に気がついた蓮華が卓から一步下がり訊ねた。

「あ、ああ。こいつは俺がドイツに住んできたときによく一緒にいた友達だ。篠崎真理っていうんだ。」

卓は真理のことを蓮華に紹介したが、卓自身まだ状況を把握できていなかった。

真理は5年前に姿をくらませ、それから連絡一つもなしというところで死亡したとされていた。そんな少女が突如目の前に現れたのだ。穏やかなはずがなかった。

「そうなんだ！ 私赤桐蓮華っていいいます！ よろしくね篠崎さん。」

蓮華はにつこりほほ笑むと真理に手を差し出した。

「真理でいいわよ。」

真理は笑顔を見せはしなかったが蓮華の握手に応じた。

「蓮華、今日はもう帰らないか？ こんな騒ぎになったらもうここにはいられないだろうし。」

「そうだね。残念だけど帰ろうか。」

卓と蓮華はそろってショッピングモール前のバス停に歩き出した。

「真理？」

卓は足を動かすことなく立ちつくす真理に振り返った。

「なんでもない……」

真理はすたすたと歩き出して卓と蓮華を追い抜いた。

「どうしたんだ？」

卓は蓮華と顔を見合わせた。蓮華も首を傾げていた。

それからバス停で5分ほど待って卓達の住宅地に向うバスに乗り込んだ。

バスの中ではそれほど会話も弾むことなく、バスのエンジン音とバス停に停まるたびに開く自動ドアの駆動音が耳に飛び込んでくる。

「次は南住宅地前。南住宅地前。」

バスの中に卓達の降りるバス停の名前が響く。

「真理、次降りるからな。」

3人掛けの椅子の一番窓際に座る真理は窓の外を見たまま頷いた。ちなみに配置は窓際に真理、その横に卓、そして通路側が蓮華となっていた。

バスが完全に停止して、自動ドアが開くと3人は順次バスから降りた。

「ここが今俺が住んでる住宅地だ。」

「へえ〜」

真理は興味深そうに住宅地を見つめる。

特別珍しいものではなくどこにでもある普通の規模の住宅地なのだが。

「ほら、置いていくぞ!」

真理を置いて、先に歩いていった卓が手招きする。

「待ってよ!」

はつと我に返った真理は足早に卓と蓮華の元に駆け寄った。それから少し歩いて卓と蓮華はそれぞれの家の前に着いた。

「たつくん今日の夕ご飯どうするの?」

「う〜んまだ何も考えてないな。」

「じゃああとで持っていくね!」

「いつも悪いな。」

卓は自分の顔の前で手を合わせる。

「大丈夫だよ! いつも多めに作っちゃって余るんだから。」

「助かるよ。」

蓮華は卓に手を振って家の中に姿を消した。

「じゃあ真理はとりあえずウチに上がって行けよ。」

「うん。」

卓と真理も家に入った。

「ただいま母さん。」

卓は玄関に立て掛けてある母親の写真に挨拶をした。

「えっ……? もしかしておばさん……」



それを見た真理はついそんな言葉を漏らしていた。

「3年前に病気だな。」

卓の横顔は淋しげだった。真理は卓のこんな表情を見たことがなかった。だから真理の胸も痛んだ。

「あ、久しぶりに会ったのに重い話だったな！」

卓は真理に笑って見せた。とても不自然な笑顔だった。

「ううん、大丈夫。」

一番つらいはずの卓が笑顔だったのだからと真理も笑顔を作って見せた。

「とりあえずリビングでくつろいでいいよ。」

卓はリビングに繋がるドアを開けて真理をそこに案内した。

真理はリビングのテレビ前にあるソファに座った。

「うわ〜ふわふわ！」

真理は小さな子供のようにソファの上で小さく跳ねる。

「だろ！俺もよくそこで寝落ちしちゃうんだよな。」

卓も真理の横に座った。

「久しぶりだね。」

真理は横に座った卓に少し寄りかかった。

「5年ぶりかな。無事だったんだな。」

「うん。これのおかげ。」

真理は卓の掌に自分の贈与の石を置いた。

深紅の石は窓から差し込む太陽の光で光り輝いていた。

「あのとき炎に囲まれて逃げ場が無かったでしょ。」

「ああ。」

「でも、そしたら急にこの石が光り出して気が付いたらどこか知らない場所に飛ばされたの。」

「どこか知らない場所？」

真理は卓から少し距離をとって顔を向い合わせた。

「うん。私も全然状況が把握できていなかったんだけどね。でまたいつの間にかドイツに戻ってたの。」

「なんだよそれ。そんなことがあるのか？」

「この石にはまだまだ謎が多いのよ。私にもこればかりは分からない。」

真理は少し俯いた。卓はそんな真理の頭にポンと手を乗せた。

「まあ、お前が無事でまた俺のところに戻ってきたんだ。ありがとうな真理。」

真理は顔を上げて満面の笑顔を見せた。

「ところで、じゃあ俺のこの蒼の石も何か力があるのか？」

卓は自分の蒼の贈与の石を腰から外した。

「そう。贈与の石は持ち主の努力に応じた力をくれるの。だから日々鍛えていたなら卓にも何かしらの力を与えてくれるはず。」

「そんなもんなのか。」

「卓はこの5年間強くなった？」

「まあ多少は強くなっただんじやないか？」

「なら試しに石の力を借りてみたら？」

真理は蒼の石を卓に握らせた。

「力を借りるってどうやってだ？」

「石から力を得るには詠唱が必要な。」

「詠唱？」

「そう。言ってみれば力を引き出す呪文みたいなもの。」

真理は卓の掌から紅の贈与の石を手にして軽く握りしめた。

「具現せよ！我が剣！」

真理が詠唱を唱えると贈与の石が妖しく光りだした。そして次の瞬間真理の手には光に反射して光り輝く刃を持った日本刀が手に握られていた。

「これって……」

卓は目の前で起きた出来事にただ口をあぐりさせることしかできなかつた。

「これは基本中の基本の武器具現の詠唱よ。私たちは石の力を纏わせた武器を一つだけ石に記憶させておくことができるの。記憶さ

せた武器は詠唱一つでどこでも具現させることができるのよ。」

「すげ……」

「これなら卓にもできるはずよ？　まず自分の武器を探さないといけないんだけどね。」

「真理はどうやって見つけたんだ？」

「これはお兄ちゃんからのもらいものなの。」

「健介さんの？」

真理には4つ年上の兄がいる。名前は篠崎健介。しのさきけんすけ

「そう。お兄ちゃんも私と同じ討伐者だから。」

「討伐者？」

卓はなんだそれ、と首をかしげた。

「私たちは異界の住民と戦ってるのよ。さつきシヨッピングモールに現れたのもそいつらの仲間。」

「異界の住民？」

卓は話の内容を理解するのに頭の回転が追いついていなかった。

「そう。簡単にいえば天国や地獄に類する世界。多くの人間はそれらを死後の世界と言っけれど、それらは今現在も平行して存在している世界なの。」

「……」

卓は言葉が出なかった。あまりに突拍子でそしてあまりに現実味にかける内容だからだ。

「そしてそのほかに虚無界きよむかいと呼ばれる世界があるの。これは人間の魂が行きつく世界ではなくて、人間の中に巣くう悪魔の魂が行きつく世界。そしてその世界の住民を冥府の使者と呼んでいるの。」

「それはなんかの映画の話か……？」

「そう思いたいのも分かる。けど全部現実の話よ。そして今私たちの世界に冥府の使者がいる。」

「さつきの人型の炎か？」

「あれも虚無界の生物には違いない。けどあれは魂玉と言って悪魔の魂単体の生き物。冥府の使者は何千という悪魔の魂が集まって

できたやつらのこと。」

卓は黙りこくった。それと同時に理解したのだ。自分の世界が今の瞬間をもつてがらりと姿を変えたことに。

「で、冥府の使者を倒すのが私たち討伐者ってわけ。」

「5年前のもそうなのか……？」

「……」

リビングに沈黙が訪れた。リビングの壁に掛けてある時計の秒針だけが空間に響く。

「今私が追っているのは5年前のやつよ。」

沈黙を破つて口を開いたのは真理だった。

「魂の傀儡くくつし子。それがあの男の字。」

「魂の傀儡子？」

「冥府の使者にはそれぞれ字があるの。」

「……」

卓はただただ真理の言葉に耳を傾けた。

「5年前は私も力不足で敵わなかった。そればかりか卓にも危険な目に遭わせた……」

「でも守ってくれた。」

卓は小刻みに震える真理の肩を抱いた。

「お願い、力を貸して。」

真理は自分の小さな手を卓の手に重ねた。

「俺の力なんかで倒せるのか？」

「私と卓なら。討伐者は二人一組で行動するのが基本なの。だから……」

「……」

真理の声は次第に小さなって俯いた。

「分かった。今度は俺が真理を守る！ まだ全然強くないけれど、これからもつと強くなるから！」

「卓……ありがとう。」

真理は卓の肩に頭を乗せるようにもたれかかった。

リビングはいつの間にか夕日のオレンジに染まっていた。



## 再開、そして終幕（後書き）

初の連載小説なのですがいかがでしたでしょうか？少しでも面白いと思っただけだったなら幸いです！そして面白いと思っただけならこれらもどうぞよろしくお願いします！

この作品は長期連載を前提に連載しているので読者の皆様を飽きさせぬようなストーリーもこれからたくさん展開させていきたいと思っています！

## 討伐者の鼓動（前書き）

こんにちは！<sup>むほう</sup>夢宝です。寒い日が続きますが皆様いかがお過ごしでしょうか？さて、約束の蒼紅石<sup>やぐそくのせき</sup>第2話です！今回から登場人物がかなり出てきて作品もにぎやかになってきました！第1話ではこの作品の世界観が分かりにくかった部分も今回でかなり明確になってきたのではないのでしょうか？まだまだこの作品の世界観はこれからストーリーでいろいろ明かしていきたいと思いますので、気長に待っていていただけると幸いです。しかし、おおまかな世界観は今回の話に詰め込んだつもりですのでじっくり読んでみてください。では、本格始動した「魂の傀儡子編」第2話お楽しみください！

## 討伐者の鼓動

「じゃあ卓、まず石の力を纏まとわせる武器から用意しないかね。」

真理は卓の手から蒼の贈与の石を取ってソファからぴょんと飛び降りた。

「でも俺は自主練習用の竹刀くらいしか持ってないぞ?」

「大丈夫! その石にはあらかじめ武器を記憶させてあるから。」

「えっ? いつの間に?」

卓は真理の手の中に転がる贈与の石をまじまじと見つめた。

「5年前に卓に渡す前によ。」

「そうなのか。」

真理は卓に蒼の石を手渡した。

「それを握って心を込めてこう言つて。具現せよ! 我が剣!」

「お、おう。」

卓は贈与の石をぎゅっと握りしめ目をつむった。

「具現せよ! 我が剣!」

卓がそう叫ぶとリビングが一瞬で蒼い光に包まれた。

蒼い光は次第に卓の元の凝縮していき卓の手の中に集まった。光は刀の形を作り上げた。

「おお!」

そして光は贈与の石の中に消えていき卓の手には光の中からその姿を現した長刀が握られていた。

「うまくいったみたいね。」

真理は横で満足げな表情を浮かべていた。

「これが俺の武器……」

「卓の武器は私の日本刀よりリーチの長い日本刀よ。だからそのリーチの差を生かした戦い方が求められてくるわけ。」

「二人一組というスタイルを最大限生かすってわけか。」

「そういうこと。あ、もうそれしまつていいわよ。」



「しまうときは何を言えばいいんだ？」

卓は夕日に反射した長刀を目の前に構えた。

「我が命が下るまでその刃隠せよ、で大丈夫。」

「そうか。我が命が下るまでその刃隠せよ。」

再び蒼の贈与の石は輝きだしその光は卓の手にある長刀を包んだ。そしてすつとゆっくりその姿は光と共に石へと消えた。

「まあこれで戦う分には大丈夫なはず。あとは断絶くらいね。」

「さっきのやつか？」

「そう。贈与の石にはこの世界との空間を断絶する力もあるの。」

「一般的には結界というみたいだけど少し違うわね。」

「どういうことだ？」

「この断絶は虚無界の住民には効かない。つまり断絶しても彼らは自由に動けるということ。それと虚無界または贈与の石のなんらかの力が関与している人間にも効かない。」

「それって……」

「そう、私たち討伐者が動けるのは当然だけど、場合によっては一般の人間も。」

「……!？」

卓の頭に一瞬蓮華の姿が過った。

「どうしたの卓？」

「いや、なんでもなし。ところでその断絶は俺にも出来るのか？」

「分からない。やってみたら？ 詠唱は我、この世界との断絶を命ずる、よ。」

卓は蒼の贈与の石を握りしめた。

「我、この世界との断絶を命ずる。」

「駄目ね。」

卓は真理の声を合図にゆっくりと石を握りしめた手をほどいた。

「はあ……」

「まあこれからもつと経験値を取得していけばいいわよ。」

「そんなんでいいのか？」

「あまり時間はないんだけどね。まあ変に焦ってもしょうがないし。」

「悪いな。」

卓は唇をかみしめた。

(俺は5年前から何も変わっていないのか！)

卓のこぶしには自然と力が入った。

「ところで、私はこれから卓の家に泊めてもらうことになるんだけど。」

「ああ。……えっ？」

卓は噛みしめた唇をほどき目を丸くして真理を見つめた。

「討伐者としてパートナーになったんだし一緒にいるほうが何かと都合がいいのよ。それに私の家この町じゃないしね。」

「い、いやでもさすがにまずくないか？」

「何が？」

「いやなんというかその……」

卓は真理から顔を反らし頭をポリポリ掻いた。

「まあいいや！　そういうわけだからこれからよろしく！」

真理は天真爛漫てんしんらんまんな笑顔で卓に手を差し伸べた。

「お、おう。」

卓はまだ真理の顔を直視できなかったが握手には応じた。

ピンポンと卓の家の呼び鈴が鳴った。

「蓮華か？」

卓はリビングから玄関へと向かってドアを開けた。

「早かったな蓮華。」

「うん、お母さんが肉じゃが作りすぎたから持って行きなさいって。」

蓮華はキッチン用の手袋をはめて両手で大き目の鍋を持っていた。

「おお！　助かるよ。俺が持つよ。」

「あ、熱いから私が持っていくから大丈夫！」

「そうか。ありがとうな。」

卓は蓮華が通れるように玄関のドアを押さえキッチンの方へと案内した。

「あ、」

リビングから顔を出していた真理と蓮華は顔をはち合わせた。

「真理ちゃんもよかつたら食べてね。」

「……」

真理は鍋を見つめてはいたが何も答えなかった。

「蓮華、こつちだ。」

先にキッチンに向った卓は顔を覗かせた。

「うん。」

蓮華とすれ違って卓は真理のいるリビングに向った。

「なあ真理、蓮華には討伐者のこととかは内緒にしておいた方がいいのか？」

「別に内緒にする必要はないと思う。どうせいずればれちゃうだろっし。」

真理の態度はさっきと比べて明らかに冷たかった。

「どうしたんだ？ 真理。」

「何が？」

「いや、なんか蓮華に対してちょっとぶっきら棒なんじゃないかと思つて。」

「別に。」

真理はぼふっとソファに座り込んだ。

「蓮華は優しい奴だから仲良くしろよな。」

卓は真理の頭をぼんと叩いてからキッチンに向った。

「卓の馬鹿……」

真理のそんな呟きは卓の耳には届かなかつた。

「蓮華、よかつたら一緒に夕飯食べないか？」

蓮華は肉じゃがを温め直していたお玉の動きを止めて目を丸くした。

「いいの!?!?」

「当たり前だろ。真理もいることだし仲良くなる機会にでもなればいいしな。」

「ありがとう！ うん、食べていく！」

「決まりだな。」

卓はニツと笑いかけた。蓮華も両手を合わせてにっこりほほ笑んだ。

「じゃあ蓮華はリビングで休んでいいぞ。準備は俺がやるから。」

「大丈夫だよ。私こういうの好きだし！」

「蓮華はお客さんなんだから。」

「じゃあ一緒にやる？」

蓮華は卓の手を取った。

「お、おう。分かった。」

卓は顔を赤らめた。それを蓮華に見られないように顔を反らした。すると顔を反らした方向につまらなそうな表情の真理が立っていた。

「ど、どうしたんだ真理？」

「別に。」

真理はつまらない表情のままリビングに向ってテレビを見始めた。「どうしたんだあいつ？」

卓は蓮華に向き直った。

「もしかして真理ちゃん……」

「え？ 何蓮華？」

「ううん。なんでもない！」

蓮華はそう言って再び夕飯の支度に戻った。

「なんだよ、二人とも。」

状況を唯一把握できなかった卓も渋々夕飯の支度にとりかかった。キッチンには既に肉じゃがの甘い匂いと玉ねぎの香ばしさが充満して食欲を掻き立てるには十分なほどだった。

「毎度毎度わざわざありがとうな蓮華。」

「ううん。お母さんがいつも持たせてくれるだけ。それにたっく

んも一人暮らしみたいなものでしょ？ だからきつと大変なんじゃないかなって。」

「蓮華は中学の時から気が利くよな。」

「ありがとう！」

蓮華は嬉しげに鼻歌混じりに食器の準備を始めた。

それから蓮華の手際の良さもありすぐに夕食の支度は終わった。ダイニングテーブルにはそれぞれ子蜂に入れられた肉じゃがにご飯、そして真ん中には肉じゃがの入った鍋と大皿に盛られた色鮮やかなサラダが並んでいる。

卓の家のダイニングテーブルは洋式で、テーブルの周りには4つの足の長めの椅子がある。

「すっげーごちそうだな！」

「美味しそう……」

さつきまで不機嫌そうな顔でテレビを見ていた真理も目を丸くして呟いた。

「じゃあいただきますよ。」

蓮華のその言葉を合図にそれぞれいただきます、と言って箸を取った。

「うまい！」

早速肉じゃがを頬張った卓は何度も噛みしめながら肉じゃがを飲み込んだ。

「たつくん普段はカップラーメンとかで済ませてるんでしょ？」

蓮華は卓と真理にサラダをよそいながら訊ねた。

「まあ時間がないときは。おっサラダありがとうな。」

「どういたしまして。はい、真理ちゃんも。」

蓮華はにこりと笑って真理にサラダを差し出した。

「……ありがとう。」

真理はちょこんと手を出してそれを受け取る。

「どういたしまして。」

蓮華は最後に自分のサラダを取って食事を始めた。

「ところで真理ちゃんはたつくんとは昔からの友達なのかな？」  
「うん。」

真理は一言だけ返事をして黙々と箸をすすめた。

「真理は俺がドイツに住んでいたころの友達なんだ。」

「そうなんだ！　じゃあ付き合いは私より真理ちゃんの方が早いんだ。」

「まあそういうことになるな。」

「……」

真理は反応を見せずもぐもぐと肉じゃがを頬張っていく。

「真理ちゃんは今はこの辺に住んでるの？」

「……」

真理は箸を止めて卓の方を一瞥した。それ気がついた卓は言葉を選ぶように口を開いた。

「あゝ真理はしばらく家で預かることになったんだ。」

「えっ？　たつくんの家に住むの？」

さすがに蓮華も驚きを隠せなかった。

「まあそこらへんはいろいろ事情があって……」

「そうなんだ。まあでもたつくんびっくりするくらい人畜無害だもんね。」

蓮華はまたすぐに柔らかな笑顔に戻った。

「それ、褒めてるのか？」

「褒めてますよー！」

「ならいいけど。」

それから真理はあまりしゃべることはなく、ほとんど卓と蓮華の談笑で夕食の時間が過ぎていった。

食後はまた卓と蓮華で食器の後片付けを済ませ、そのときには既に7時を回っていた。

「ところで真理ちゃんは高校はどこに行っているの？」

食器を拭き終えた蓮華が卓に訪ねた。

「そういえばまだ聞いてなかったな。聞いてみるか。」

卓と蓮華がリビングに向くとテレビはついていているが真理の姿が見えなかった。

「あれ、真理のやつどこに行ったんだ？」

卓がテレビの電源を消そうとリモコンのあるソファに近づくと小さな寝息が聞こえた。

「真理、こんなところで寝てたのか。全く食べたらずぐ寝るって子供かよ。」

「可愛いじゃない。」

蓮華はソファに丸まって寝ている真理の寝顔を見てほほ笑んだ。

「まあ学校のことはまた明日にでも聞くか。」

「そうだね。じゃあ私はそろそろお邪魔するね。」

「おう、本当にありがとうな。助かったよ。」

「どういたしまして。」

卓は蓮華を玄関先まで見送った。玄関を開けると外はなんとも言えない色だった。空は夕日のオレンジと夜の闇で綺麗に分かれていた。

「じゃあお休み。鍋は明日にでも持っていくよ。」

「うん。ありがとう！ おやすみ。」

蓮華は小さく手を振った。卓はそれを見送りながら玄関を閉めようとした次の瞬間。

「きゃああああ」

蓮華の悲鳴が卓の耳に飛び込んだ。

「蓮華!?!」

卓は急いで靴を履くのもままならない状態で外に飛び出した。

すると卓の玄関先に昼間ショッピングモールに現れたのとよく似た人型の青い光がいた。だがその大きさは昼間のは比べものにならないくらい大きかった。そしてその大きな手の中には蓮華が握られていた。

「蓮華!」

「たっ……くん」

蓮華は苦しそうにしながら卓を見下ろした。

周りの家からは騒ぎに気付いた住民たちがまばらに出てきた。

「我、この世界との断絶を命ずる！」

卓の背後から声が聞こえた。次の瞬間、周りの音は全て消え、家から出てきた住民たちも一瞬でその姿を消した。

だが、青い巨大な魂玉に握られた蓮華だけはそのままの状態だった。

「真理！」

「何してるの卓！ 早く武器を出して！」

卓の背後に立っていたのはさつきまでリビングのソファに寝ていた真理だった。

真理は卓の腰にある贈与の石を指差した。

「お、おう。」

「具現せよ！ 我が剣！」

卓と真理の詠唱は綺麗に重なった。

蒼と紅の石が同時に光り出し、それぞれの武器が二人の手の中に出現した。

「今回のはちょっと大きいわね。」

「蓮華！ 今助ける！」

「たつくん……」

卓は冷静さを完全に失っていた。

「蓮華を放せええええ！」

卓は長刀を上段に構え魂玉に突っ込んでいった。

「馬鹿！ むやみに責めないの！」

真理の声が聞こえたときには既に卓は魂玉の大きくて太い腕で地面に打ち付けられていた。

「ぐはっ！」

卓を襲った痛みと衝撃は今まで経験したことのないようなものだった。軽く意識が飛びそうにもなった。

「全く！ 契約の紅、我に躍進やくしんの力を与えよ！」



真理が詠唱を唱えると、贈与の石から放たれた紅の光が真理を包み込んだ。

魂玉はもう一度、地面に打ち付けられた卓に拳を振り下ろした。

「たつくん！」

魂玉の手の中にいた蓮華が思いつきり叫んだ。だがその叫びも魂玉の腕が地面にめり込んだ轟音にかき消された。

「たつくん！」

「大丈夫よ。」

魂玉からすこし距離をとった場所に地面に転がった卓と真理が立っていた。

「たつくん……良かった。」

蓮華は安堵して涙目になった。

「くっ……真理、助かったよ……」

卓はゆつくりとふらつく足で立ち上がった。

「だからむやみに突っ込まないで！」

「ああ……」

卓は長刀で自分の体を支えた。

「さっきの詠唱は……？」

「肉体強化の詠唱よ。人間離れた速さや跳躍力が手に入るの。なるほどな。それで俺を助けてくれたのか。」

卓も真理も話をしている間も決して魂玉から目を放さなかった。

巨人の魂玉は顔にある赤いラインでこちらを見据えていた。

「卓も試してみて。」

「詠唱なんだっけ？」

「はあ。卓なら、契約の蒼、我に躍進の力を与えよ！」

「了解。契約の蒼、我に躍進の力を与えよ！」

卓が詠唱を唱え終わると腰にある贈与の石が光り輝いた。そして真理と同様にその光は卓を包み込んだ。

「出来た！ 体の痛みも消えた！」

「これくらいは出来て当然よ！ じゃあ行くわよ！」

「おう！」

巨人の魂玉はまた大きな拳を振り上げた。

「卓、右に避けて！」

「分かった！」

卓は地面を素早く蹴りあげた。すると一瞬で向いの家の前まで移動した。

「すげ！」

「余計なことは考えない！ 来るわよ！」

卓の頭上には魂玉の拳が迫っていた。

「反応が早い！ なら。」

卓はまた地面を蹴りあげ魂玉の体の下に潜り込んだ。標的を失った魂玉の拳はそのまま民家に直撃した。

「上手いじゃない！」

真理は5メートルはあるであろう魂玉の頭上遙か上を跳んでいた。

「卓！ そいつの左腕を斬り落として蓮華を助けて！」

「分かった！」

卓は魂玉の目の前まで移動して左腕の上までジャンプした。

「くらえええええ！」

卓は左腕めがけて大振りで長刀を振り下ろした。

左腕は呆気なく陥落して、腕が地面に落ちる前に卓はそのまま蓮華を抱きかかえた。

「大丈夫か蓮華？」

「うん……」

卓は上手く地面に着地した。

蓮華の体は震えていた。卓は蓮華を抱える手に力を込めた。

「もう大丈夫だ。」

卓は蓮華ににこりと笑いかけた。蓮華もそれを見てにこりと笑った。でも震えはまだ完全にはおさまらなかった。

「卓！ そこから離れて！」

「お、おう！」

卓は蓮華を抱きかかえたままその場を素早く離れた。

「契約の紅、私の刃となって具現せよ！」

真理の贈与の石が光って、その光が日本刀の刃を纏う。

「はああああああ！」

真理は紅の光を纏った日本刀を魂玉の遙か頭上で振り下ろした。

すると刃の形をした紅の光が日本刀から放たれ魂玉を直撃した。

どごおおおと轟音と共にその場に小規模な爆発が起きた。

「うわっ！」

卓は蓮華に爆風が直撃しないように自分の身体でかばった。

魂玉はばらばらに散って最後はゆらゆら揺れる青の光も消滅した。

「ふう。我が命が下るまでその刃隠匿せよ！」

真理の詠唱を合図に日本刀はすうっと消えた。

「その子、怪我はなかった？」

真理は地面に座り込んでいた蓮華とその横で立っていた卓に近づいた。

「ああ、蓮華は無事だ。」

「卓が少し怪我をしてるみたいだけど。」

「これくらい平気さ。」

「そう。」

蓮華は卓の手を借りてゆっくり立ちあがった。

「あ、ありがとう二人とも。」

まだ何が起きたのか理解していなかった蓮華の表情は困惑に満ちていた。

「あの蓮華、話があるんだ。」

「……うん。」

それから卓はその場で自分たちの立場や魂玉、冥府の使者のことについて話した。補足が必要な部分は適宜真理が付け足しながら説明した。

話を聞いているときの蓮華の表情を驚きを隠しきれなかったが、それでも最後まで黙って卓と真理の話聞いた。

話を聞き終わった蓮華はふっと大きな呼吸をした。

「蓮華……」

卓は心配そうに蓮華を見つめた。

「うん。大丈夫、ちゃんと話してくれてありがとう。」

蓮華は卓に笑って見せた。けれどもその笑顔はどこか無理をしているようにも見えた。

「真理ちゃん。」

「……何？」

「たつくんをよろしくね。」

「えっ？」

真理は蓮華の言葉が意外だったのか目を丸くして蓮華を見た。

「私じゃたつくんは守れないから。悔しいけど。」

蓮華は言葉とは裏腹に笑顔で真理に手を差し伸ばした。

「うん。」

真理は蓮華の握手に応じた。すると蓮華は真理の耳元で小声で話した。

「真理ちゃんたつくんのこと好きでしょ？」

「なっ!?!? 何で!?!?」

真理は急に顔を赤らめて慌てた。

「その反応凶星だね。」

蓮華は楽しげに笑った。

「どうしたんだ？」

それを見た卓は首を傾げた。

「何でもないよ!」

真理が大声で卓を牽制した。

「そ、そうか。」

「私たち恋のライバルだね。」

「えっ？」

真理が蓮華の方を見たときにはすでに蓮華は卓のところに向って  
いた。

「真理ちゃん！ これからよろしくね。」

「……うん！ 負けないから！」

蓮華と真理はにこりと笑った。

「負けないって何がだ？」

卓は一人だけ状況に置いてけぼりにされていた。

「じゃあまずこれを解かないと。」

真理は紅の贈与の石を握りしめた。するとまた雑踏が耳に飛び込んできた。

魂玉に壊された民家や道も全て元通りになっていた。

家の前に出てきた住民たちはざわついていたがすぐにそれぞれの家に帰って行った。

「これが断絶なんだ。」

話を聞いた蓮華は納得したように頷いた。

「俺はまだ使えないんだけどな。」

卓ははあつとため息を漏らした。

「これは精神の方で経験値を稼ぐ必要があるから。」

「なるほど、肉体的な訓練しかなかった俺にはまだ使えないっ

てわけか。」

「でも、訓練すればすぐに使えるよ。」

「そっか。」

「じゃあ私は帰るね。二人とも本当にありがとう。」

「おう、しっかり寝るんだぞ蓮華。」

「おやすみ蓮華。」

「うん！ おやすみたつくん、真理ちゃん。」

蓮華は笑顔であいさつを済ませると卓の家の隣にある自分の家へと姿を消した。

「俺達も帰るか。」

「うん。」

卓の後に続いて真理も家に入った。

「あれ？ そういえば俺の長刀いつの間にか消えてるな。詠唱唱

えてないのに。」

「それはまだ力のコントローラが出来ていないからよ。まあこんなのは慣れの問題だから。」

「そんなもんか。そうだ、真理は先に風呂にでも入れよ。」

「いいの?」

「ああ。お前もいろいろ疲れてるだろ。」

「ありがとう。」

真理は卓にこつとほほ笑んだ。卓はその笑顔に少し見とれた。

「そ、そういえば着替えとかはあるのか?」

「一応数日分は持って来てある。昨日、卓のお父さんに運んでもらったから。」

「父さんに会ったのか?」

「うん。その時にここに住む許可ももらったから大丈夫!」

真理はリビングの端に置いてあるスーツケースから寝巻と化粧水などの消耗品を取り出した。

「まあいいや。ゆっくり入っていいぞ。」

「うん!」

真理は足早に風呂場へと入って行った。

「卓! 覗かないでよ!」

真理の声が風呂場のドア越しに聞こえてきた。

「覗かねーよ!」

卓はそう答えてリビングのソファに座りこんだ。

ソファの柔らかさが疲れの溜まった卓に眠気を与えた。

「このままじゃ寝落ちしそうだな。」

卓はリモコンでテレビをつけると適当なチャンネルを回した。

「あまり見たいのやっつてないな。」

卓はすぐにテレビを消すとリビングに静寂が訪れた。

次第に卓の視界は瞼で閉ざされていき遂にはソファで寝てしまった。

「……………く! ……卓ってば!」

真理の声で夢の世界から帰った卓はゆっくり瞼を持ちあげた。

「真理か、風呂上がったのか？」

「うん、今上がった。そしたら卓寝てるんだもん。」

「悪い悪い、じゃあ次は俺入るわ。」

卓はむくりと体を起こすとのそのそと風呂場に向った。

「大丈夫？」

その様子を濡れた髪をタオルで拭きながら真理が不安そうに見ていた。

「ああ。ちょっと眠たいだけ。」

「お風呂で寝ちゃ駄目だよ？」

「分かってる。」

そう言っつて卓は風呂場のドアを閉めた。

「卓、大丈夫かな。」

真理はソファに座ってテレビをつけた。

それから15分くらいして卓が風呂からあがってきた。

「早いね！」

真理は卓が予想以上に早く風呂からあがってきたことに驚いた。

「男はこんなもんだよ。それに今日はシャワーだけで済ませたか

ら。

「そうなんだ。」

「ところで真理は俺の兄さんの部屋でいいか？」

「えっ？」

真理はなんのことやらという表情をしている。

「寝る場所だよ。まさか俺と同じ部屋ってわけにもいかないし。」

「あ、ああ！ そうだね。」

真理も理解したのか少し顔を赤らめた。

「じゃあ部屋に案内するよ。」

「うん。」

真理は卓の後をついていきながら二階に上がった。

「ここが兄さんの部屋。」

卓は自分の部屋の向いにある兄の部屋を開けて真理を案内した。  
「ここ使つていいの？」

「ああ。兄さん今は家にいないから。」

卓は少し寂しそうな表情をした。それを真理は見逃すはずもなかったが何も問わなかった。

「ありがとう。」

「ああ。じゃあ俺はもう寝るな。」

「うん。おやすみ。」

「おやすみ。」

卓と真理はそれぞれ部屋に入った。

その日は開放してある窓から鈴虫の鳴き声がよく聴こえる初夏の夜だった。

同日、午後2時。スイス。

スイスの山脈に囲まれた湖上空にて度々火花が散っていた。

「さすがですね。あなたたちほどの討伐者と交われることにただただ感謝しますよ。」

言葉の主は細身で長身の男。手には先端部分が刃物になっている杖、そして膝までかかる黒い上着を羽織っている。見た目だけで言えば20代前半。しかしその態度は見た目とはかけ離れて大人びていた。

「笑えない冗談だな、魂の傀儡子！」

長身の男と向いあっているのは長い槍を持った体格のいい身長190メートルくらいの男と眼鏡をかけて、手には分厚い本を持っているスレンダーな女性。

「いやいや、本心ですよ。ベテラン討伐者のあなたがた、ウィスタム・ブレイン一本槍のヴァーグナー、そして明解の頭脳イザイ。」

魂の傀儡子と呼ばれた男は不敵に笑みを浮かべた。

「ぶつた押す！」

ヴァーグナーは3メートルはあるであろう大槍を構えた。

ストロング・ランサー



「こんな安い挑発に乗らないのヴァーグナー。」  
イザイはパラパラと厚手の本を捲りながら眼鏡をくいつと持ちあげた。

「冷静ですね、さすがは名高き無限の知性を持つ女と言ったところですかね。」

「褒め言葉として受け取るわ。魂の傀儡子。まああなたは見た目ほど用心深くは無いのかしら？」

魂の傀儡子の背後に瞬時に移動したヴァーグナーは大槍を勢いよく突き出した。

「そうでもないですよ？」

魂の傀儡子はその一撃を杖でなんなく止めた。

「いいえ、やっぱり用心が足りなくてよ！ 書架魔術降魔炎上！」  
しょかまじゅつこうまえんしょう

イザイがそう叫ぶと厚手の本がパラパラと勝手に捲られ止まったページから湖を覆い尽くすほどの量の炎が飛び出した。

「おいおい、俺まで巻き込む気かよ！」

ヴァーグナーはすぐに槍を引つ込めさらに上空に飛んだ。

「だから避けれるように飛行魔術を与えたんですよ。」

ヴァーグナーと同じ高さまで飛んできたイザイははあつとため息をついた。

「それでもやるならやるで一言言ってほしいもんだ！」

「はいはい。まあこれで冥府の使者の一角は潰したわ。」

「だな。日本でも魂の傀儡子に対して討伐者を配置していると聞いていたが必要なかったな。」

山脈に囲まれた湖の水面は炎の赤が映し出されていた。

「気の早いお方たちだ。私を退場させるには少々あなたがたでは役不足なのではないでしょうか？」

突然燃え上がっていた炎は散らばって次第に消えた。そしてヴァーグナーとイザイの下に魂の傀儡子は無傷でいた。

「な!？」

イザイは動揺を隠しきれずに目を見開いた。

「イザイの最大魔術を受けて無傷だと!？」

ヴァーグナーも顔の輪郭に沿って汗を垂らしていた。

「何を驚くことがありますか？ 私は冥府の使者、その力はあなたたちもよくご存じなのではないでしょうか？」

魂の傀儡子はすうつと静かにヴァーグナーとイザイの高さまで上昇した。

「くそ！ イザイ！」

「分かってるわよ！ しよかまじゅつそごじゅつばいか 書架魔術槍術倍加！」

イザイの手にある本から金色の光が放たれ、ヴァーグナーの大槍に纏った。

「ほう、贈与の石の力を元とする書架魔術、さらにその力を相方の武器に与える。素晴らしい。」

魂の傀儡子は杖を自分の腕に引っかけ小さく拍手した。

「ほざけ！」

金色の光を纏った大槍を手に行っているヴァーグナーはものすごいスピードで魂の傀儡子に突っ込んでいった。

「攻撃が単調すぎますよ？」

魂の傀儡子は空中でそれをひょいっと軽々しく避けた。

「俺も少しは頭を使うさ！」

ヴァーグナーはすぐに動きを止め、自分の頭上に避けた魂の傀儡子に向って槍を突いた。すると大槍の先端から金色の光が弾丸のごとく魂の傀儡子に向って飛んでいく。

「何!？」

魂の傀儡子はその光に直撃し、その直後その場で大爆発が起きた。爆風で湖には荒波が生じ、山脈に囲まれたその場所には爆風がこだましていた。

「はあはあ……やったのか？」

ヴァーグナーの大槍から光は消えていた。

「今度こそ終わったのね。」

イザイもパタンと厚手の本を閉じた。

「よし、ならこのことを総帥に報告に……!?」

ヴァーグナーが大槍を降ろした瞬間、爆風の中から杖が飛んできてヴァーグナーの身体を貫いた。

「ぐぼっ！」

「ヴァーグナー!?」

イザイはすぐさまヴァーグナーの元に駆け寄ろうとしたがそれより先に魂の傀儡子がヴァーグナーの身体に突き刺さった杖を引き抜いた。

「ぐあああああ」

痛みに悶えるヴァーグナーはそのまま湖へと落下した。

「今のは少し効きました。」

魂の傀儡子の顔には少し血が流れていた。それでも笑みを絶やすことなく杖の先端部分の刃に付着したヴァーグナーの血をぺろりと舐めた。

「貴様ああああ！」

怒りに乱心したイザイは勢いよく本を捲った。

「書架魔術！ 風神終焉！」ふうじんしゅうえん

イザイの声を合図に山脈に囲まれたこの場所に風の激しく吹く音が鳴り響き始めた。

「まだそのような力があるのですね。いいでしょう。では私もとっておきをお見せしましょう。」

「黙れえええええ！」

イザイの目からは涙が絶え間なく零れおちていた。

「私が魂の傀儡子と呼ばれる所をお見せします。」

魂の傀儡子は杖をくいっと持ちあげた。すると下の湖から意識を失ったヴァーグナーがイザイの目の前まで飛んできた。

「ヴァーグナー!?」

正気を取り戻したイザイは本を閉じた。それと同時に激しく吹き荒れた風も治まった。

「私は人間の魂でも自在に操れるのですよ。もうその男は瀕死の

状態ですが、魂さえあれば可能なのです。」

魂の傀儡子はふふつと笑って杖を空中で突き出した。

「!?!? 何を……?」

すると意識を失っているヴァーグナーの手にあつた大槍はイザイの身体を貫通させていた。

「言つたでしよう? 今その男の動きを制御しているのは私です。」

「く、そ……」

イザイの手から厚手の本が落ち、そのまま湖へと沈んで行つた。

「フィナーレです。」

魂の傀儡子は杖を持たない方の手を空中に掲げた。次第にそこに炎の球が浮かび上がった。

「あなたたちでは防ぎきれないので、彼らの計画は。」

魂の傀儡子はそう言い残して炎の球をヴァーグナーとイザイに向けて放つた。

「くつそおおおおお」

イザイの悲痛の叫びと炎の燃え上がる音だけが湖に虚しく響き渡つた。

魂の傀儡子は上着のポケットから桃色の石を取り出した。

「必ずあなたの世界は守ります。しばしお時間をくださいスミレさん。」

魂の傀儡子は桃色の石に軽く口づけをした。

この騒動は後日スイスの政府によって調査が行われたがヴァーグナーとイザイの遺体は完全に焼き払われていて証拠もなかったため事故として処理された。

翌日、鳴咲市の最北部湾岸。

「謙介、スイスの事件聞いた?」

湾岸にある灯台の近くにあるテトラポッドの上に座っていた青年に一人の女性が話しかけた。

「ああ、ヴァーグナーとイザイだろ。惜しい人材を無くしたな。」  
爽やかな声だが芯の強い声の青年は掌で紫の石を転がしながら答えた。

「あの二人でも敵わないなんてね。やっぱり傀儡子？」

「間違いないだろうな。」

「謙介、あまりいつもと様子変わらないのね。」

女性は謙介という名前の青年の隣に立った。

「俺のことあまり言えないだろ要<sup>かなめ</sup>。」

「ううん。それでも結構衝撃受けてるよ。」

要と呼ばれる女性は黒髪にロングヘアで右耳には緑色の石がついたイヤリングを付けている。

「あの二人は討伐者の中でもトップクラスだからな。」

「心配？」

「何がだ？」

「妹さんのことよ。いつもより表情が硬いわよ篠崎謙介君？」  
要はにっこりと笑った。

「からかうな。それよりこちらも迎え撃つ準備を始めないとな。」

「そうね、思ったより襲撃が早かったからね。」

「今日あたり行くか。」

「ええ。」

謙介と要はテトラポッドから飛び降りて鳴咲市の中心部に向った。

鳴咲市、卓家。

「卓！ 起きてよ！」

「う、う……ん。」

布団に潜り込んでいた卓の身体を布団の上から寝巻姿の真理が激しく揺らしている。

「もう朝だつて！」

「今日は日曜日だろ……」

卓は頑として布団から顔を出さなかった。

「卓がその気なら……」

「ん？」

急に身体を揺らすのを止めたので布団から顔を出した次の瞬間。

「ぐほっ!？」

真理が布団の上からのしかかってきた。

「目覚めた？」

「……ああ。」

卓は腹部をさすりながらゆっくりベッドから出た。

「真理はズいぶん早起きなんだな。」

「早起きでもないわよ。もう8時なんだし。」

卓は真理を部屋に残したまま洗顔のため洗面所に向った。

バシャバシャと冷水で顔を洗った。夏の蒸し暑い朝に冷水で顔を洗うと気分が引きしまった。

卓が部屋に戻ると真理は卓のベッドの上で漫画を読んでいた。

「真理は今日は予定あるのか？」

「ん〜? とくにないよ? だから卓の訓練してあげる!」

真理は読んでいた漫画をぱたんと閉じてベッドからぴょんと飛び降りた。

「訓練？」

「そっ! 少しでも多く贈与の石の力を使えるようにしておかないとね。」

「なるほどな。」

「まあそれはそれとして朝食はいつもどうしてるの？」

「食パンで済ませてるな。」

卓は即答した。それに対して真理は少し間を開けて切り返した。

「えっ? それだけ？」

「そうだが？」

「蓮華のそこ行つて来る。」

真理はそそくさと卓の部屋を出て行こうとした。

「待てい! 朝から蓮華に迷惑をかけるんじゃない。」

卓は真理の肩をがっちりつかんだ。

「私は食パンだけじゃ嫌だよ。」

「分かった分かった、なんか適当に作ってやるから。」

卓ははあつとため息をついて階段を下りてキッチンに向った。

真理も寝巻のままリビングでテレビを見始めた。

「とは言つたのものの何を作るかな……」

卓は冷蔵庫を開けて中をチェックした。それほど食材は入っておらず昨日スーパーで買ってきたお惣菜がいくつか入っている程度だった。

「まあ、たまには和洋混ぜてもいいか。」

卓はトースターでパンを焼いて、子蜂にそれぞれお惣菜を移し替えてテーブルに並べた。

「真理、飯だぞ！」

「はい！」

真理はテレビの電源を消してテーブルにパタパタと着いた。

「なんか、変わってる朝食だね……」

テーブルに並んだものを見るなり真理は当然の反応を見せた。

「斬新と言ってくれ。」

卓は先に椅子に座り、食パンを食べ始めた。

「いただきます！」

真理も席に着いてお惣菜を口に頬張った。

「そうだ、これ食い終わったら蓮華に昨日の鍋を返しに行くから。」

「蓮華って隣の家なんだよね？」

「おう、昔から世話になってる。」

「へえ。」

真理は食パンにお惣菜を乗せるといふ斬新なサンドウィッチを作って食べた。

「意外と美味しいかも……」

「だろ！」

真理の反応に卓はにっこり笑って見せた。それから朝食を済ませた卓は食器を洗って、真理はまたリビングでテレビを見始めた。

「じゃあちよつと蓮華のところへ鍋返ししてくるからな。」

卓は綺麗に洗った鍋を持って玄関へと向かった。

「私も行く！」

リビングから勢いよく飛び出してきた真理は勢い余って卓の背中にぶつかった。

「痛っ〜」

真理はぶつけた鼻をさすった。

「すぐ帰ってくるってのに。」

「いいじゃない。それとも何？ 私がついていたら困るの？」

真理はまだ鼻をさすっている。

「はあ……分かったよ。」

卓はため息交じりに答えた。

真理のあとに玄関を出た卓はしっかりと鍵を閉めて隣の蓮華の家のインターフォンを鳴らした。

「はい。どちら様ですか？」

インターフォンのスピーカーからすぐに蓮華の声が聞こえてきた。

「卓だ。鍋を返しに。」

「たつくん！？ 待ってて今開けるから。」

ガチャと声が切れた音がして、パタパタと玄関に走ってくる足音が聞こえてきた。

玄関の扉が開いて蓮華が顔を出した。

「ずいぶん朝早いんだね！」

「ああ。今日は真理に起こされてな。」

「へへん！」

真理は胸を張って得意げな表情を見せた。

「そうなんだ〜！ あ、お鍋ありがとう！」

「おう、キッチンまで運ぶよ。」



「じゃあお願いしちゃいます！」

「任せとけ！」

卓と真理は蓮華の後について蓮華の家のキッチンに入った。

「あれ、今日おばさんたちは？」

「お母さんとお父さんは朝早くから親戚の家に行ったの。」

「じゃあ蓮華一人か。」

「うん。」

「蓮華、俺の家来るか？」

卓の急な誘いに蓮華はきよとんとした表情になった。

「あ、嫌なら別にいいんだけど。」

妙に恥ずかしくなった卓は蓮華から顔を反らして頬をぼりぼり掻いた。

「ううん！ 行く！」

「お、おう。とは言っても今日は真理に訓練してもらうんだけどな。」

「訓練って討伐者の……？」

「ああ。やっぱり蓮華は退屈だよな。」

「ううん。見るよ。」

蓮華は優しい笑顔を浮かべた。

「じゃあ俺と真理は一旦帰るよ。」

「分かった！ じゃああとでたつくんの家に行くね。」

卓と真理は蓮華の家を出て卓の家に戻った。

「なあ真理。」

「何？」

卓は玄関で立ち止まって唐突に真理に向き合った。

「5年前の約束守れなくてごめん……」

卓は自分の拳にぐっと力を入れた。

「昨日から謝りたかったんだ。まだ俺は真理に守られてはっかで。」

「卓……」

真理は卓をもの悲しげな表情で見つめた。

「でも！ 絶対に強くなって、いつか真理を守れるくらいになるから！」

「うん。ありがとう。」

真理は静かに卓の胸に身体を預けた。

卓も真理の肩を抱こうとした瞬間ピンポーンと呼び鈴が鳴った。

「ひゃあ！？」

「うわっ！」

卓と真理は瞬間的に距離をとって、真理は慌ててリビングに逃げ込んだ。

卓は真理がリビングに入って行くのを見計らって玄関を開けた。

「早かったな蓮華。」

「だって玄関を閉めてくるだけだもん。」

「そ、そうだよな。ハハハ。」

卓はその場を笑ってごまかした。

「変なたつくん。」

「そんなことないって。まあ上がれよ。」

「お邪魔します！」

蓮華は靴を脱いでリビングに向った。リビングでは急いで戻った真理がいつものようにテレビを見ていた。

「真理ちゃんは本当にテレビが好きなんだね。」

そんな真理の様子を蓮華は微笑ましく思っていた。

「ま、まあね。面白いじゃんテレビ。」

「でもこんな休日の朝ってそんなに面白い番組あるかな？」

蓮華の言うことはもっともで事実真理がいつも見ているのはお笑いなどのバラエティ番組だが、今テレビに映っているのはラジオ体操だった。

「ひ、暇つぶしくらいにはなるよ？」

「そうなんだ〜」

蓮華はそれから真理と一緒にじっとテレビを見始めた。

「おいおい、二人して何真剣にラジオ体操見てるんだ？ 普通そ  
ういうのは一緒に体操するもんだろ。」

キッチンからお盆に3つのグラスに入ったお茶を運んできた卓が  
来た。

「いいのよ！ こういうのは見るだけってのもありなんだから！  
真理は顔を赤らめて反論した。

「私は真理ちゃんが暇つぶしくらいにはなるって言ってたから。  
確かに暇つぶしにはなるかも！」

蓮華は新しい発見をしたのか嬉しそうだった。

「そ、そうか。」

卓はそれに苦笑いで反応した。

それから3人で世間話をしながらお茶を飲み干した。

「ところで真理、どこで訓練するんだ？ ウチの庭はそんなに暴  
れられるほど広くはないと思うんだが。」

「……考えてなかった。」

真理は卓から視線を反らした。

「おいおい……」

卓はそんな真理の様子を見てはあつとため息をこぼした。

「私たちの住宅地の道場はどうか？」

蓮華は小さく手を挙げて提案した。

「道場？」

すかさず真理がそれに反応した。

「うん。前にこの住宅地に住んでた人が建てただけどね、その  
人引越しちゃって自由に使っていいよって寄付してくれた道場が  
あるの。」

「そうだな、あそここの道場はかなり広いしちょうどいいか。」

「じゃあそこに決定！」

真理は勢いよく立ちあがった。

「卓、蓮華、すぐに行くわよ！」

真理はそう言ってパタパタと玄関に走って行った。

「まったくせわしないな。」

「真理ちゃんらしくていいと思うよ。」

卓と蓮華も真理の後に玄関に向った。

卓の家をあとにした3人は歩いて2分のところにある道場に入った。

道場の端っ子には鉄製のかごに入ったバスケットボールが置いてあり、他には何も無い殺風景なものだった。

「さすがに熱がこもってるな。」

道場に入るなり卓の額には汗がにじみ出ていた。

初夏とはいえエアコン設備などない道場には夏の熱がすっかりこもっていた。

「じゃあ早速始めるわよ!」

真理は卓とは反対に意気揚々として、ズボンのポケットから手ぬぐいを取り出した。

「手ぬぐい? 剣術を訓練するんじゃないのか?」

卓は持ってきた2本の竹刀を前に突き出した。

「それもあるけど、まずは精神の訓練からよ。卓には断絶を使えるようになってもらわないといけないから。」

蓮華はへえつと感心したように真理の説明を聞いていた。

「なるほど。でも手ぬぐいで何をするんだ?」

「これで目隠しをするの。私がバスケットボールを卓目がけて投げるから卓はそれを目隠ししながら避けるのよ。」

「何!??」

卓の叫びは道場に響き渡った。

「いいからやるの!」

真理はそう言い放って手ぬぐいを卓に投げつけた。

「……分かったよ。」

卓は渋々手ぬぐいで自分に目隠しした。

「しっかり縛るのよ?」

「分かってるよ。」

卓は最後に後ろをぎゅつと縛った。

「蓮華は危ないからこっちに来て。」

卓の後ろで立っていた蓮華を真理は手招きした。

「あ、そうだね。」

蓮華は急ぎ足で真理の後ろに回った。

「じゃあ始めるわよ。」

真理は自分の横にバスケットボールの入ったかごを運んできて一つ手に取った。

「お、おう……」

目隠した卓はふらふらとその場を少し動いていた。

「行くわよ！」

そう言っただけで真理はバスケットボールを勢いよく卓に投げつけた。床と平行なままボールはかなりのスピードで卓目がけて飛んでいく。

「どこだ！？ ……ぐぼがっ！」

ボールの位置を把握しようとしてキョロキョロしていた卓の顔面にバスケットボールは無情にも直撃した。

「いつてええええええええ！」

目隠しをしたまま卓は顔を手で押さえて床をのたうちまわった。

「たつくん！？」

心配した蓮華が卓に駆け寄り寄りとしたが真理の出した腕で制された。

「卓！ もつと意識をボールに集中して！ 音を頼りに避けるの！」

真理はまたしてもかごからバスケットボールを一つ手に取った。

「そんなこと言っただけで！ 気が付いたらボールが俺に直撃してるんだよ！」

卓は顔をさすりながらよろよろと起き上がった。

「だから集中力が足りないの！ もう一発行くわよ！」

真理は卓に向けてまたボールを勢いよく投げた。

「くつそ！ 今度こそ！」

卓は腰を落としてボールに構えた。

「ぐはっ!?!?」

次は卓の鳩尾みぞおちにボールは直撃した。そして卓はその場に倒れ込んだ。

「反応が遅い！」

真理はすでに3つ目のボールを手にしていた。

「……ああ。だけど、音は聞こえた。」

卓の口元は緩んでいた。目隠しをしているから全体の表情は何えないが何か核心に迫ったような表情だった。

「そう。」

それを見た真理も口元を緩めそして間を開けずにボールを投げた。  
(意識を集中……)

卓は手ぬぐいの奥で目を瞑った。すると卓の耳にボールが風を切る音が小さくはあるがはつきり飛びこんできた。

「……今だ！」

卓は右足を軸にすつと身体をよじってボールをかわした。ボールはシャツに少しかすって卓の後ろに飛んで行った。

「やるじゃない！」

「すごい……」

真理は目を輝かせ、蓮華はただただ驚いていた。

「はあ……はあ……」

卓の額からはもう大量の汗が流れ出ていた。

「確かにこれは精神的に鍛えられそうだ。」

卓は手ぬぐいで目隠ししたまま次に構えた。

「真理、どんどん来い！」

「言われなくてもそうするわよ！」

それから真理はかごに入っていたバスケットボールを全て投げきった。

コツを確実に掴んできた卓だが、途中集中力が途切れたりと結果

的に半分近くのボールは身体に直撃していた。

「はあ……はあ……」

卓はすでに息も絶え絶えで道場の床に大の字で寝転がっていた。さっきまで目隠しにしていた手ぬぐいも汗でびしょびしょになっている。

「思ったより上達が早いわね。」

「どうも。」

卓と真理は軽く拳を合わせた。

「あの、2人ともよかつたらお水どうぞ。」

真理の後ろで訓練を見ていた蓮華が冷えたペットボトルの水を2本差し出した。

「サンキュー！」

「ありがとう。」

卓はぱつと状態を起こしてぐびぐびと水を飲んだ。真理もちよつとずつ水をのどに流し込んだ。

「くは〜！ 生き返った！」

水を飲み干した卓はまた床に寝そべった。

「卓、次の訓練始めるわよ。」

ペットボトルのフタをしめながら真理は道場の隅っこに立て掛けである竹刀を2本手に取った。

「休憩もう終わりかよ！」

「私たちには時間があまりないんだから。」

真理はそう言つて竹刀を1本卓の足元に投げた。

「へいへい。」

卓はその竹刀を手にとつてのらりと立ち上がった。

「じゃあ私は端っ子で見てるね。」

蓮華は2人からペットボトルを預かると道場の隅に座った。

「いつでも来ていいわよ。」

真理は卓と5メートルくらい間合いを取つて竹刀を構えた。

「じゃあ遠慮なく！」

卓は道場の床を力強く蹴って大き目の足幅で真理に突っ込んだ。

卓は上段で構えた竹刀を真理に向って勢いよく振り下ろすが、真理はそれをひよいつと軸足で身体を回転させ避けた。

「動きが単調すぎる！」

真理はそのまま回転の勢いを利用して竹刀を卓の腰に直撃させた。  
「ぐあっ！」

卓は痛みに耐えながらバックステップで間合いを取った。

「もつと繊細な動きが剣術には求められるのよ。それにさっきの精神の訓練もこれに生かさないと！」

真理は再び竹刀を構え卓との間合いを詰めた。

「はああああー！」

真理は勢いよく卓の胸目がけて突っ込んだ。

「真理こそ動きが単調だぜ！」

卓は真理の頭上に竹刀を振り下ろした。

「甘い！」

すると竹刀が真理の頭をかすめる一瞬前に真理の姿が卓の視界から消えた。

「なっ！？」

真理は低く屈んで片足を軸に勢いよく卓の背後に回転して回り込んだ。

「一本！」

真理の一撃はそのまま卓の背中に決まった。

「くはっ！」

卓は手から竹刀を手放し床に叩きつけられた。

「はあ、はあ………」

卓の息は完全にあがっていた。

「たつくん………」

その様子を蓮華は動きだしそんな自分の身体を自分で抑えつけながら見ていた。

「卓、人間は視覚からの情報を一番頼りにするのよ。でも、その



情報が正確でなかったらどうする？」

「……正確じゃない？」

卓は落ちた竹刀を手にとってふらふらと立ち上がった。

「そう、視覚が封じられたのなら他の情報網から正確な情報を得るしかない。」

「……つまり聴覚か。」

「ビンゴ。精神を研ぎ澄ませば聴覚からのほうが正しい情報を得られるときもある。」

真理は再び竹刀を構え深呼吸した。

「聴覚からの情報か……」

卓も竹刀を構え、そしてゆっくり呼吸を整えた。

「行くわよ！」

真理は勢いよく卓との間合いを詰めて竹刀を振り上げた。

「受けて立つ！」

卓も真理との間合いを詰めて竹刀を構えなおす。

パーンと竹刀と竹刀がぶつかる音が道場に響き渡り二人の竹刀は綺麗に交わった。

「動きが機敏になったじゃない。」

真理は卓の竹刀を自分の竹刀で床に押さえつけ、そのまま卓の顔部分に竹刀を突きあげた。

卓はそれを片足で受け止めそのまま竹刀を蹴って後退した。

「へえ、やるじゃないの。」

真理は卓の動きに感心して口元を緩めた。

「お前もな。」

卓はそう言っ竹刀を構えなおす。

「でも、本番はこれから！」

真理は左右にステップしながら確実に間合いを詰め、2メートル近くで床を蹴りあげ一気に間合いを無くした。

「来い！」

卓は自分の正面に竹刀を構え握っている手に力を込めた。

「だから甘いのよ！」

真理はさらに床を蹴りあげ卓の頭上を飛び越えた。

「これでもう一本！」

卓の背後を取った真理は勢いよく竹刀を突いた。

パーンつと竹刀は弾かれ空中を舞って床に落ちた。

「えっ？ 嘘！？ たつくん……」

その様子を蓮華は驚愕して見ていた。

「たつくん……目を瞑っている。」

卓は目を完全に閉じて前を向いたまま背後から攻撃してきた真理の竹刀を弾き飛ばしていた。

「卓……」

あまりの一瞬の出来事に真理はしばらく身体を動かすことが出来なかった。

「ふう……。聴覚を頼るってこういうことだろ？」

卓は目を開け真理に向き合ってにつと齒を見せて笑った。

## 討伐者の鼓動（後書き）

「約束の蒼紅石」第2話いかがでしたでしょうか？第1話に比べて内容もにぎやかになってきたと思います。この作品はバトルシーンが多いので出来るだけ迫力のあるバトルシーンを書いていきたいと思えます！また1話1話が長いと思いますが、これは出来るだけこの作品を楽しんでいただきたいという願いのもとにそうさせていたでいてますので、どうか最後まで読んでいただけると嬉しいです。第3話も読みごたえのある話にしていきたいと思えますので楽しみに待っていていただけると作者のモチベーションも上がります（笑）では、読者の皆様も寒さに負けないように頑張りましょう！

## 出会いの交錯（前書き）

こんにちは夢宝<sup>むほう</sup>です！ 今回、「約束の蒼紅石」第3話です！この小説は1話1話が結構長いので意外とこの頻度で更新するのは大変ですね（笑）それで読者の皆様に連絡があります。今週から作者のテスト期間が始まるわけでもしかしたら次の更新は少し遅めになってしまいかもかもしれません。どうかご了承願います。しかし！出来るだけ早めに更新していきたいと思えますので、ちなみに今の目標は12月4日には更新したいと思えます。読者の皆様にご迷惑をおかけすることをここでお詫び申し上げます。出来ればその間、これまでの話を読み返していただければ幸いです！あと、感想なんか書いてもらえるとうれしいです！それでは「約束の蒼紅石」第3話お楽しみください！

## 出会いの交錯

「驚いたわ……まさかここまで成長が早いなんて。」

真理は弾き飛ばされた竹刀を拾い上げた。

「いや〜うまくいくと気持ちいいな！」

卓はうーんと伸びをした。

「まだ訓練は終わってないわよ。」

真理はまた竹刀を構えた。

「おう！ 何度でも来い！」

それから1時間以上卓と真理は竹刀を交えた。

「ふう……」

体中汗まみれになった卓は竹刀を手からこぼしてその場に倒れ込んだ。

「さすがに疲れたわね。」

真理も顔の汗をハンカチで拭きとった。

「お疲れ様！」

ぞつと訓練の様子を見ていた蓮華がまたペットボトルを差し出した。

「おつ！ ありがとな。」

卓はまた水を飲み干した。

「なあ真理、もう隔絶使えるようになったんじゃないのか？」

「分からない。確かに卓の成長はかなり早いけど。」

「なら試してみるか！」

「まあいいんじゃない？」

真理は一口水を飲んだ。

「えつと私、邪魔かな？」

蓮華は少し申し訳なさそうに笑った。

「別に蓮華がいても問題ないんじゃないか？ なあ真理？」

「うん。ただ蓮華が隔絶されないためには贈与の石に触れておか

ないと。はい。」

真理は自分の贈与の石を掌に乗せた。

「う、うん。」

蓮華は真理の手の上の石にちよんつと指先で触れた。

「じゃあ行くぞ！ 我、この世界との断絶を命ずる！」

卓が叫ぶと石が蒼く光って周りの雑踏が消えた。

「成功した……？」

「成功ね。」

真理は軽く頷いた。

「すごい！」

蓮華はまわりをキョロキョロしてはわーっと驚いた。

「やった！」

卓がガッツポーズをしたすぐ後に再び雑踏が復活した。

「なっ！？ もう断絶が！」

「まあ、これだけの短時間で隔絶できたなら上出来よ。」

「でも悔しいな。」

卓は肩の力を抜いてはあつとため息をこぼした。

「魂の傀儡子はまだ日本で目撃されていない。まだ少しなら時間があるはず。」

「そうか……」

卓は贈与の石を強く握りしめた。

「今日はもうお終い。」

「だな。訓練ありがとうな。」

「どういたしまして。」

卓と真理は拳を軽く突き合わせた。

3人は道場を出た。

「ずいぶん汗かいたな。帰ったらシャワー浴びるか。」

「私も汗でびしょびしょ……」

真理はシャツをパタパタと仰いだ。

「そうだよな。2人とも早くお風呂に入らないと風邪ひいちゃう

よ。よかつたら真理ちゃん私の家のお風呂入る？」

「えっ？」

「そうだよ、真理。せつかくだからそうしろよ。」

「いいの？」

「うん！」

蓮華は優しく笑いかけた。

「じゃあ入ってく……」

真理は照れ臭そうな顔をそむけた。

それから卓は自分の家に、蓮華と真理は蓮華の家へと帰った。

「気持ちいい。」

真理は蓮華の家の風呂で頭からシャワーを浴びていた。

「真理ちゃん、ここにタオル置いておくれ。」

蓮華は浴場と洗面所を隔てるスモーク扉越しに声をかけた。

「うん、ありがとう！」

真理はシャワーのノズルを回してお湯を止めた。

「ねえ、蓮華。」

シャワーの水の音が消えたため真理の声は蓮華の耳によく届いた。

「どうしたの真理ちゃん？」

「蓮華はどうして卓と仲良くなったの？」

蓮華は真理のその言葉を聞いて少し口元を緩めた。

「ちよっと昔話になっちゃうけど聞く？」

蓮華はスモーク扉に軽く寄りかかって真理に問う。

「うん。聞かせて。」

真理はゆっくりと浴槽に入った。

「私とたつくくんが仲良くなったのは4年前の中学一年生のころだったの。」

それから蓮華は思い出を掘り返すようにゆっくりと目を閉じた。

2008年4月中旬。

鳴咲市にある市立鳴咲南中学の1年3組の教室は朝から賑わって

いた。

1年生は入学式から1週間ほどしか経っていないため皆がそれぞれ小学のころからの友達同士で談笑しているのがほとんどだ。少数の人はすでに中学に入ってから友達も出来ていたがそれは本当にごく一部だった。

蓮華もその一人で教室の端っ子の方で小学からの友達2、3人でいつも話していた。

もともと活発的でなかった蓮華には男友達はおらず、いつも女の子同士で一緒だった。

ガラガラガラ、と教室のドアの開く音がそれらの雑踏を消し去った。

「はい、今からホームルーム始めますよ。」

教室のドアからゆつとりとした口調の女性教師が入ってきた。年齢は20代後半と若く、そのマイペースぶりから生徒からは人気のある教師だった。

談笑していた生徒たちもそそくさと自分たちの席に着いた。

「でも、今日はホームルーム前に大事なお知らせがあります。」

女性教師は名簿をパンパンと2回叩いて教室のドアの方を向いて手招きした。

ドアがまたゆっくり開いて一人の男子生徒が教壇に登った。

見たことのない生徒の登場にクラスはざわついた。

「はい。静かに。今日からこのクラスで一緒に勉強することになった転校生君です。自己紹介お願いします。」

「城根卓です。よろしくお願いします。」

少年は軽く頭を下げた。あまりに端的な自己紹介にクラスには沈黙が訪れた。

「じゃあじゃあ、城根君の席が一番後ろのあの席ね。」

女性教師は窓際が一番後ろの席を指差した。

「はい。」



卓はつかつかと自分の席に向った。

卓が椅子に座った瞬間クラスに再びざわめきが起こった。

卓の斜め前に座っていた蓮華も卓の方に視線をやっていた。

卓はそんなクラスの空気なんてお構いなしに窓の外をぼんやり見  
ていた。

「ねえねえ、城根君はどこから来たの？」

「……ドイツ。」

「えっ？ 帰国子女！？」

休み時間になると卓に訪れるのは決まってこのやりとりだった。

帰国子女が珍しいのか興味を持った生徒が集まるが、卓はそれ以上の会話をしようとはしなかった。

昼食はそれぞれ持参した弁当なのだが、卓はいつも一人で自分の席で黙々と食べていた。そんな様子を蓮華は毎日少し心配したように見ていた。

ある日、いつものように一人で昼食を食べていた卓のところに一人の男子生徒が来た。

男子生徒は卓の前の席に座って卓に向き合った。

「城根っていったっけ？ お前ドイツからの帰国子女なんだろう？」

男子生徒は目を輝かせていた。

「だから？ というか君誰？」

卓はそんな男子生徒に目もくれず食事を続けた。

「つれないな。同じクラスじゃないか！ 俺の名前は伊勢陽介  
！」

陽介は椅子の上に立ってポーズを決めた。

「食事中に暴れないでくれ。」

「あ、わりいわりい」

陽介は頭をポリポリ掻きながら座りなおした。

「ところで！ やっぱ外国の女はあれなのか！？」

陽介は卓の顔を覗き込むように身を乗り出した。

「……あれ？」

「だーから。エロいバディなのか!？」

陽介の瞳の輝きは増していた。

「はっ？」

さすがに卓も箸の動きを止めた。

「俺、この前洋画を見たんだけどよ! やっぱ外国はすげーよな

!

「……変態か。」

卓は小さく陽介の頭にチョップした。

「男はみな変態だ!」

陽介は両手を広げて豪語した。

それから卓と陽介は一緒にいる時間が増え、昼食のときは大抵一緒に突っ込むといた。そのたびに陽介のエロ談義に付き合わされ卓はそれに突っ込むといたのが日常となっていた。

卓はそんな他愛もない時間が少しずつ好きになっていた。それでも卓が話せるのはそれから一カ月経っても陽介だけだった。

ある5月の日。

「先生、あの、ちょっと具合が悪いので保健室に行ってもいいですか?」

一人の生徒がおずおずと立ち上がった。生徒の顔色は決して良いとは言えず表情も引きつっていた。

数学教師はチヨークを止め振り向いた。

「大丈夫か赤桐? 一人で行けるのか?」

「はい……」

蓮華はふらふらと教室から出て行った。

その様子を卓はぼんやりと見ていた。

「失礼します……具合が悪いので休ませてもらいたいですけど。」

┌

保健室のドアをゆっくり開けて蓮華はキョロキョロと保健室の中を見回した。

「あれ、先生いないのかな……じゃあちよつと休ませてもらいます。」

蓮華はベッドに入って目を瞑った。それから眠りに着くまでその時間はかからなかった。

その日の昼食もいつものように陽介と馬鹿みたいな話をしながら済ませ午後の授業を受けた。

午後になっても蓮華は教室に戻ってこなかった。

「であるからして、この動詞はこのように活用して……」

ぼんやり外を眺める卓の耳には教師の眠くなるようなトーンの声が入ってきた。

卓の教室からは桜の木に囲まれたグラウンドが見え、グラウンドの周りには散った桜の花びらでピンクに染まっていた。

(平和だな……)

卓は何の変哲もないこの日常の光景に若干の違和感を覚えていた。しかし、そんな日常が崩れるのはいつもたった一瞬の出来事だった。

ブーブーブーブー!

突如中学全体に響き渡る警報が鳴り響いた。

どの教室も一瞬で騒がしくなった。教師たちは戸惑いながらも生徒たちを落ち着かせようとしていた。

「火事です! 校舎1階の実験室から火事が発生しました! 生徒たちは先生の指示に従い速やかに避難してください!」

警報の後に教室に聞こえた放送により生徒たちはパニックに陥った。

「落ち着いて! 避難経路からグラウンドに避難して!」

先生たちは生徒たちを順番に教室から避難経路に誘導した。

1年生の教室は1階にあるのですでに教室の外には煙が充満していた。

クラスの列に紛れて避難していた卓はふと蓮華のことを思い出した。

(あの子、避難出来たのか?)  
この学校の保健室も1階にあるため火の回りは思いのほか早かった。

卓は列から外れて反対方向に走った。

保健室の周りには既に火が完全に回っていた。

「う……ん」

周りの暑さと騒がしさに目を覚ました蓮華はよろよるとベッドから降りた。

そして保健室のドアを開けるとそこから炎と煙が入ってきた。

「きゃあ!」

蓮華はあまりに突然の出来事に尻持ちをついた。

「えっ!?!」

蓮華は自分が火に囲まれている現状を把握出来ずにパニックになった。

ちなみにこの学校の保健室には天井付近に小さな換気用の窓しかなくそこから人が二何することは出来なかった。

「誰か! 助けて!」

蓮華は朦朧とする意識の中必死に声を振り絞った。

しかし、教師は他の生徒の避難に必死でそれどころではなく、そもそも蓮華が保健室にいると把握している人間はあまりに少なすぎた。

「誰か……」

蓮華の目には涙が溜まっていた。

保健室の中も次第に火に浸食されていた。

保健室のベッドやカーテンにも火が燃え移り蓮華はいよいよ完全に包囲された。

天井に備え付けられたカーテンレールが火で溶けて蓮華の頭上に落ちてきた。

「きゃあああああ!」

蓮華は頭を押さえその場にうずくまった。

カンツと甲高い音とともにカーテンレールは火の中に弾き飛ばされた。

「……………えっ？」

蓮華がゆっくり目を開けるとそこには木製の箒をもった卓がいた。

「怪我は？」

卓はうづくまっっている蓮華に手を差し伸ばした。

「大丈夫……………」

蓮華はその手に掴まってゆっくり立ちあがった。

「えっと、城根君だよ……………？」

「そう。君は赤桐さんだっけ？」

「うん。あの、助けてくれてありがとう。」

「まだ助けてないよ、ここから出ないと。」

卓はそう言っただけで周りをキョロキョロ見渡した。

「おっ、これはちょうどいいな。」

卓はまだ燃え移っていない棚から精製水の入った容器を取り出した。

「赤桐さん、これを頭からかぶって。」

「えっ？」

蓮華が気付いた時にはすでに水を頭からかけられていた。そのあとに卓も自分の頭から水をかぶった。

「これで少しはマシになったかな。」

卓は箒を構える。箒の柄の部分は水に湿っていて木が黒ずんでいた。

「それ……………」

蓮華はその箒を見て言った。

「ああ、木製は確かに燃えやすいんだけど、水に浸しておけば他の材質より燃えにくくなるんだよ。」

「そうなんだ。」

蓮華は驚いた様子で卓を見た。

「とりあえず、さっさとここから出よう。」

卓は蓮華の手を強く握った。そして箒の先端に自分のびしょびしよになったブレザーをくくりつけ旗のようにした。

「行くぞ！」

卓は箒の先端のブレザーをバタバタと振って火に突っ込んだ。

火はブレザーで少しだが避け卓と蓮華の通る道を作った。

卓と蓮華は止まることなく走りきって保健室から飛び出た。

「けほっけほっ！」

火の海から抜け出した蓮華は煙を吸って咽返った。

「大丈夫か？」

卓は蓮華の背中を優しくさすった。

「うん……ありがとう。」

「ああ。みんなグラウンドに避難してる。行こう。」

卓は蓮華を立ちあがらせて正門からグラウンドに向った。

まだ校舎の中は火で赤く染まっていた。

グラウンドに出ると先生が生徒を並べさせていた。

「城根！ 赤桐！ 無事か！？」

卓と蓮華がグラウンドに着くと真っ先に数学教師が駆け寄ってきた。

「城根が赤桐を助けてくれたのか！？」

「まあ。」

卓はそう言い残して列の最後尾に並んだ。

「赤桐大丈夫か？ 先生も気が動転していて忘れていたんだ。す

まなかつた。」

数学教師は蓮華に頭を下げた。

「いいですよ。城根君が助けてくれましたし。」

蓮華の顔色はまだ悪かったがそれでもそのとき見せた蓮華の笑顔は美しかった。

蓮華もクラスの列の最後尾に並んだ。

結局そのあと消防員が来て消火作業にあたった。生徒たちはそれぞれの家へ帰宅した。

「城根君！」

通学路をすたすたと歩く卓の背中から蓮華が追ってきた。

「何？」

「えっ、あ、あの家隣だから一緒に帰ってもいいかな？」

蓮華は乱れた呼吸を整えながら聞いた。

「いいよ。」

卓はそう言ってまた歩き出した。

「ありがとう。」

真理も卓に合わせて歩いた。

「別に一緒に帰るだけなんだし。」

「あ、ううん。それもだけど、今日助けてくれて。」

「……」

「城根君？」

黙った卓の後ろ姿を蓮華は不安そうに見つめた。

「俺の目の前でもう犠牲になる人は見たくない。」

卓はポツリと呟いた。それでもその言葉は蓮華の耳にははっきり

届いた。

「犠牲者……？」

「なんでもない。」

卓は少し歩く速度をあげた。蓮華もまた合わせるために速度をあ

げた。

それから卓と蓮華は会話もなくそれぞれの家に帰った。

最後卓が家に入る前に蓮華はバイバイと笑顔で手を振った。卓は

それに反応を見せることはしなかったがなぜかその笑顔に心を奪わ

れた気がした。

「私とたつくくんが仲良くなるきっかけはその火事だったの。」

蓮華はスモーク扉から離れた。

「そんなことがあったんだ。」

真理は浴槽から出て脱衣所に出てきた。

「うん、あ、タオルはこれね。」

蓮華は真理にタオルを差し出した。

「たつくんとはそれから毎日一緒に登下校するようになってそのうち仲良くなつて私はたつくんって呼ぶようになってたつくんは私のこと蓮華って呼んでくれるようになったの。」

蓮華は幸せそうな笑顔を見せた。

「卓が蓮華を守ったんだ。」

その事実にも真理も少し嬉しそうな表情を浮かべた。

同時刻、卓家風呂場。

卓はシャワーを浴び終えて湯船に浸かっていた。

「気持ちいいな。なんかこんな早い時間に風呂に入るなんていつ以來かな。」

卓はお湯に映った自分の姿を見ていた。

「そういえば中学の火事事件のときもこんな時間だったかな。」

2008年、鳴咲南中学火事事件の日

「ただいま。」

卓が玄関で靴を脱いでいるとキッチンから卓の母親である城根結衣子が来た。

「卓！ 中学校が火事になったんだって？」

「うん。」

「怪我は無かった？」

結衣子は卓に駆け寄って全身を見た。

「大丈夫だよ。あつでもブレザーは駄目になったけど……」

「良かったわ。」

結衣子は卓の頭を軽く撫でた。

「ちよつと濡れたからお風呂入ってくるね。」

卓はリビングにバッグを置いてそのまま風呂場に向った。

「卓帰ってきたのか？」



2階から降りてきた卓の兄、城根竜が結衣子に聞いた。

「ええ。今はお風呂に入ってるけど。」

結衣子はそう言つて夕飯作りのためにキッチンに戻った。

竜はそのまま卓のいる風呂場に向つた。

「卓、大丈夫だったか？」

竜は脱衣所から風呂場にいる卓に話しかけた。

「兄さん？ うん、大丈夫だよ。」

卓はシャワーで身体に着いていた泡を洗い流して湯船に浸かった。

「そうか、お前が無事でなによりだ。」

竜の声は少し弾んでいた。

竜の容姿は卓とあまり似ていないが、2人はかなり仲のいい兄弟だ。

「日本に帰つてきても卓の元気がないし、その上、今回学校が火事なんてな。心配したよ全く。」

扉越しに聞こえる竜の声は明らかに安堵が混じっていた。

「心配しないで、兄さん。」

「そうか、あまり自分を責めすぎるんじゃないぞ？」

竜はそう言い残して脱衣所から出て行った。

「ありがとう、兄さん。」

出て行ったのを確認して卓は風呂からあがった。

風呂から出て着替え終わった卓はリビングに向つた。

「母さん、今日は父さん帰ってくるの？」

結衣子はお玉で鍋に入つたクリームシチューをかき混ぜながら答えた。

「今日、卓の中学の火事があったでしょ？ そっちの捜査があつて帰れないんですって。」

結衣子は呆れたような声だった。

「捜査つて事故じゃないの？」

「さあ、よく分からないけど不自然なことが多いらしいのよ。」

「そうなんだ……」

卓はそれ以上は何も聞かずにリビングのソファに座ってテレビを見ている竜の隣に座った。

「卓、今日の火事の時何かおかしいことなかったか？」

テレビを見てみると突然竜が真面目な顔で尋ねてきた。

「おかしいことって？」

「いや、なんでもいいんだけどな、不自然に思ったこととか。」

「うーん……」

卓は今日の火事のことを思い出した。

「不自然といえば発火元の理科室って同じ階にある保健室と結構距離があるんだけど、あまりに火の回りが早すぎる気はしたかな。

それに保健室より理科室に近い被服室はそれほど被害はなかったように見えたけど。」

「……なるほどな。」

竜は何回か頷いて納得したような表情をした。

「兄さんもこの火事は事故じゃないって思うの？」

「えっ？ あ、いや多分事故なんじゃないか？」

竜はそう言っ卓の頭にぼんと手を乗せて笑顔を見せた。

「……」

卓はそんな竜の様子を疑うこともせずまたテレビを見始めた。

「そっいえばあの時の火事の原因って何だったんだっけ……」

卓はお湯を両手ですくってそこに映った自分の顔を見ていた。

目がうつろになっていた。

「やっべ、このままじゃ寝ちまいそうだ。あがるう。」

卓は風呂のお湯を抜いて脱衣所に出た。

ジャージに着替えた卓はキッチンで牛乳を一杯飲んで誰もいないリビングを見つめた。

「静かだな。真理が来る前はこれが当たり前だったのに。」

卓は少し寂しげな表情を浮かべた。

ピンポン。卓が感傷に浸っていると呼び鈴が鳴り卓を現実に取り戻した。

「真理かな。」

卓はコップを置いて玄関に向った。

「はいはい。」

卓が玄関を開けると蓮華の服を借りた真理と蓮華がいた。

「お風呂入ってきたよ〜！」

真理は元気よく卓の家に上がりこんだ。

真理の姿がリビングに消えてから蓮華も卓の家に上がった。

「お邪魔します。」

「真理をありがとうな。」

「ううん、私もいろいろお話出来たし。」

蓮華は柔らかな笑顔を見せた。

「そっか。」

卓は蓮華をリビングに通した。

「ところでたっくん、来週からの期末試験の勉強はかどってる？」

蓮華は真理と一緒にソファに座って卓の方に振り返った。

「昨日と今日は忙しかったから勉強してないけど、いつもの蓮華

の必勝ノートのおかげで結構はかどってるよ。」

「ホント？ なら良かった！」

蓮華は両手を合わせて嬉しそうにほほ笑んだ。

ちなみに必勝ノートというのは成績優秀な蓮華がテストに臨む上で必要不可欠な重要点をまとめたノートで、いつも定期試験のときは卓のために自作している。

卓ももともと成績は優秀な方だがこのノートのおかげでさらに上位をキープしている。

「そういえば昨日聞きそびれちゃったんだけど真理ちゃんは高校どこに行ってるの？」

「明日から聖徳高校に転入するよ？」

真理はテレビを見ながらするっと答えた。

「「えっ？」」

卓と蓮華の反応が重なった。

「だから明日から卓と蓮華のいる聖徳高校に転入するの。」

真理は2回目を強く強調するように言った。

「でも、ウチの高校はこの町一番の進学校で転入するにはそれなりのテストを受けなくちゃいけないって聞いたけど。」

蓮華は不思議そうに真理に聞いた。

「うん、テストなら受けたよ。簡単過ぎね。」

「……」

卓は呆然としていた。

「真理、お前頭良かったのか？」

「失礼ね！ これでも偏差値は78なんだから！」

真理は腰に手を当てえへんという態度をとった。

「めちやくちや頭いいじゃねえか。」

「すごい……」

卓も蓮華もただただ素直に驚いた。

ちなみに聖徳高校の平均偏差値は64で卓が偏差値69・蓮華は偏差値72とどちらも普通で考えれば抜けて頭は良かった。

「なら、真理は来週の試験も問題なさそうだな。」

「当然！」

真理はにっこり笑って見せた。

それからの時間は真理はテレビを見ていて、ダイニングテーブルで卓と蓮華はテスト勉強をしていた。

「ん〜！ 疲れた〜」

卓はペンを置いて座りながら伸びをした。

「お疲れ様。」

蓮華はそんな卓の様子を微笑ましく思っていた。

時計はちょうど7時を回っていた。

「じゃあ私はそろそろ帰るね。お母さんたちもそろそろ帰ってくるし。」

蓮華はそう言って立ちあがった。

「おう、今日はいろいろありがとうな。」

「どういたしまして。」

蓮華はそう言って玄関に向った。

「じゃあまた明日。」

「うん！ おやすみたつくん、真理ちゃん。」

さつきまでテレビを見ていた真理も玄関まで見送った。

蓮華が出て行った玄関の扉が閉まると卓がその場で口を開いた。

「さて、夕飯はカップ麺しかないわけだが……」

卓はおそろおそろ横目で隣に立つ真理を見た。案の定真理は頬を膨らませてじとーっと卓を見つめていた。

「贈与の石で豪華な夕飯は出せないものかね？」

「出せるか！」

真理は卓の腹を小突いた。

「けほっ！ けほっ！ 今日はカップ麺で我慢してくれ……」

「分かったわよ！」

真理はすたすたとリビングに姿を消した。

それからカップ麺で夕飯を済ませた2人はそのあと真理はテレビを見て、卓はテスト勉強を再開して11時を回ったところで2人もそれぞれの部屋で眠りに就いた。

同日午後11時半、鳴咲市北西の廃工場。

「我、この世界との断絶を命ずる！」

廃工場に響く青年の声の後にはその廃工場には完全な沈黙が訪れた。

「どう？ 謙介。」

「ああ、予想通り魂玉の痕跡が残っている。」

謙介は廃工場の床の焦げ跡を指でなぞった。

「あまり時間は残されてないかもな。要はどう思う？」

「私もそう思うわね。スイスの討伐者襲撃のことを踏まえると日

本の討伐者配置もある程度筒抜けになっていると考えるのが妥当かしら。」

要は少し堅い表情だった。

「ああ、討伐者本部、つまり総帥との連絡は欠かさない方がいいのかもな。」

「そうかしら？ 本部もどれだけ信用に値するか分かったもんじゃないわよ？ 何しろ本部はあの九鬼くきを討伐者として採用するくらいだし。」

「確かにアイツは異常だがな。それでも一応だ。」

「作戦会議ですか？ よろしければ私も混ぜていただきたい。」

廃工場に感情が見えないような声が響いた。

「「！！！？？」」

謙介と要は瞬時に反応した。

すると廃工場の天井に黒い霧もやが集まり段々と人の形を作り始めた。

「はじめまして、私魂の傀儡子と申します。」

黒い霧が晴れ空中に長身で膝まで掛かる黒い上着を着た男の姿が現れた。

「魂の傀儡子！」

謙介はその男を睨みつけた。

「そんな恐ろしい顔をなさらないでください。」

「なんで……いくらなんでも早すぎる！」

要もかなり動揺していた。

「私に国と国との距離なんて関係ありませんから。」

魂の傀儡子は腕に掛けていた杖を手を取った。

「まあいい。ならここで決着を着けるのはどうだ？」

謙介は挑発するように言った。だが、謙介の額からは汗が滴り落ちた。

「決着ですか。いいでしょう。私はついている。2日連続で最強の討伐者と手合わせできるのだから。」

「具現せよ！ 我が聖剣せいけん！」

謙介がそう叫ぶと首から下げていた紫の贈与の石が光って謙介の手に西洋の剣の形をした剣を生み出した。

「私も！ 具現せよ！ 我が鎖くさり！」

要の詠唱をきっかけにイヤリングになっている緑の贈与の石が光って先端部分が刃物になっている10メートル近くの長い鎖が生み出された。

「素晴らしい！ それがあなた方の武器ですか。」

魂の傀儡子は興奮気味に拍手した。

「ほざいてなさい！ 連鎖れんさい一貫いつかん！」

要は長い鎖を魂の傀儡子に向けて勢いよく投げつけた。

先端の刃物は魂の傀儡子めがけてものすごいスピードで飛んだ。

「なんとというキレの良さ。」

魂の傀儡子はその攻撃を杖で対応した。

「すごいのはキレだけじゃなくってよ！」

鎖は杖と直撃し、そのまま魂の傀儡子を杖ごと弾き飛ばした。

「ぐはっ!？」

魂の傀儡子は勢い余って廃工場の壁にぶつかり崩れた壁の下敷きとなった。

「どうせまだなんだろう？」

がれきの上空に跳んだ謙介は西洋風の剣を大きく構えた。

「はあああああ！」

そして頭の後ろから大きく振り下ろした剣からは見えない斬撃が放たれがれきの山に直撃した。

その場は大きな爆発による砂ぼこりで充満した。

「やったか？」

謙介は砂ぼこりの中心となっているがれきの山を見据えた。

「……今のは効きました。」

がれきの下から上着を汚した魂の傀儡子が出てきた。

「今ので傷がほとんどない!？」

要は驚いて目を見開いた。

「……」

謙介は黙って再び剣をにぎる手に力を込めた。

「昨日殺したヴァーグナーとイザイよりも遥かに強い。これが聖者・篠崎謙介、鎖牢の女帝・東条要ですか。」

魂の傀儡子は今までとは違い少し鋭い目つきに変わった。

「あなたがドイツから日本のこの町に移ったのは私の目的を知ったからですかね？」

「さあな。」

謙介は魂の傀儡子から視線を外すことなくその動きをじっくり観察している。

「そうですね、ですが一つだけ言っておきます。あなたたち人間ではどうにもできないことがあるのですよ。それをわきまえなさい。」

魂の傀儡子はそう言ってパチンと指を鳴らした。

すると次の瞬間、廃工場の中に数えきれない無数の魂玉が姿を現した。

「これは!？」

要は周りをざっと見回した。魂玉の大きさはまちまちだが共通して人型をしていた。

「自分で戦うことはしないのか魂の傀儡子？」

謙介は魂の傀儡子に剣を向けた。

「お楽しみは最後まで取っておきたい性分ですね。私はここで見物させてもらいます。」

そう言って魂の傀儡子は杖を自分の腕に引っかけた。

「ならすぐにお楽しみを味あわせてやる!」

謙介は勢いよく魂玉の群れに突っ込んだ。

「邪魔だああああ!」

謙介は大振りで剣を振るった。剣から放出された斬撃は魂玉の群れに直撃して大量の魂玉が消滅した。

「ほう。」



その様子を空中で魂の傀儡子は楽しげに見ていた。

「竜鎖砲！」

要の鎖は竜のごとくうねり端から魂玉を一体一体確実に串刺しにしてこちらにも一度に大量の魂玉を消滅させた。

「さすがは名高い討伐者ですね、さしずめ正義の従者と言ったところでしょうか？」

空中で観戦していた魂の傀儡子はくすりと笑った。

「皮肉のつもりか？」

謙介は剣で魂玉を薙ぎ払いながら魂の傀儡子を睨みつけた。

「いえ。しかし、あなたと私とは正義の定義が少し違うのではないのでしょうか？」

「さあな。」

謙介と要はそれからも無数の魂玉を次々と消滅させるがそのたびにまた新たな魂玉が生まれていた。

「謙介！ これじゃキリが無いわ。」

少し息を乱した要は休めることなく鎖を投げ続けた。

「やはり魂の傀儡子本人を仕留めるしかないな。」

謙介は片足を軸にその場で一回転して周りにいた魂玉を一掃した。

「これだけの数の魂玉相手にお見事。」

魂の傀儡子は小さく拍手した。

「ならここらで舞台の垂れ幕を降ろすでしょう！」

謙介は勢いよく廃工場の床を蹴って魂の傀儡子の目線の先まで跳び上がった。謙介はそのまま剣を頭の上に振り上げた。

「慌てないでください、クライマックスはこれからでしょう？」

魂の傀儡子も杖を構えた。

空中で謙介の剣と魂の傀儡子の杖が交わった。謙介は剣を握る手に力を込めて杖を少し押し戻しその勢いで廃工場の床に着地した。

「ずいぶんと私の杖を警戒しているんですね。」

魂の傀儡子は空中に浮いたままにやりと笑った。

「お前の字の所以はその杖にあるんだろ？」

謙介も口元を緩めながら魂の傀儡子を見上げた。

「さすがです。その通り、もう隠す必要ありませんね。私はこの杖で傷を負わせた者の魂を操ることができるのです。しかしこれは裏を返せばそうでなければ他者の魂を操ることができないということでもあるのです。」

「ずいぶん自分のことを話すのが好きみたいね。」

その話を聞いた要は鎖を魂の傀儡子に向けて放った。

「ええ。しかしこの程度のことを知られても私の勝利は揺るぎませんから。」

魂の傀儡子は手から炎の球を放った。それは要の鎖に直撃し爆風と共に鎖は弾かれた。要は弾かれた鎖を素早く自分の元に手繰り寄せた。

「では、ここらで私からのプレゼントをお渡ししましょう。」

魂の傀儡子はパチンと指を鳴らした。すると廃工場の中にいた無数の魂玉は一カ所に集まり出し合体していった。

「何!?!」

要はその様子を驚いて見ていた。謙介は黙って剣を構えなおした。

「出来ればファイナルまでお付き合いましたかったです、私も冷静になって考えてみればここでむやみに争うメリットがありませんでした。ですから私の代わりに彼にお相手を務めていただきます。」

魂の傀儡子は再び黒い靄に包まれた。

「待て!」

要は黒い靄に向って鎖を放ったが靄を貫通しただけでそこには既に魂の傀儡子の姿はなかった。

「要! 今はこつちに集中するんだ!」

その間に無数の魂玉は全て一カ所に集まっていた。一カ所に集まった巨大な球体の魂玉は次第に人の形を成していった。

「ぐもおおおおおお!」

魂玉は30メートル近くの巨人となってドスの利いたうめき声を

あげた。巨人の身体は廃工場に入るわけもなく工場は巨人が動くたびに崩れ落ちて行った。

「でかい！」

要は巨人を見上げて冷や汗を流した。

「くそっ！ 魂の傀儡子を逃がしたうえにコイツを相手にするの  
か。」

謙介は剣の矛先を向けた巨人を鋭い眼で睨みつけた。

「ぐもおおおおおお！」

巨人は10メートル近くある巨大な腕を振り下ろした。

「要！ 来るぞ！」

「ええ！」

謙介と要はそれぞれ左右に跳び退いた。巨人の腕は廃工場に直撃し、半壊させた。

「なんて威力！」

巨人の一撃を避けた要はその攻撃で起きた爆風で少し体勢を崩した。

「要！ あいつの動きを封じられるか!？」

「こんな巨体相手にしたことないから分からないけど。やってみる！」

要は廃工場の床を勢いよく蹴りあげ巨人の腹部の高さまで跳び上がった。

「契約の翠！ 我に無限の連鎖を与えよ！」

要の詠唱と共にイヤリングが光ってその光は鎖を包み込んだ。

「無限鎖縛！」

要は光を纏った鎖をくねらせながら投げつけた。鎖はどこまでも伸び続けそのまま巨人の身体に巻きついた。

「どうかしら？ これが贈与の石の力で武器そのものの形を変える奥義！」

「ぐもおおおおおお！」

鎖に巻きつかれて動きずらそうにもがく巨人を見て要はふんつと

鼻で笑った。

「よくやった要！」

謙介はすでに巨人の頭上まで跳び上がっていた。

「ぐもおおおおおおお！」

巨人は両腕で巻きついた鎖を少しずつ緩めていった。

「！？　なんて力！」

鎖の片方を持っていた要はその力に身体を空に放り投げだされた。

「はあああああ！」

謙介は剣を完全に振り切った。剣からは黄金に光る斬撃が放たれ

巨人に直撃した。

「きゃあ！」

巨人に直撃した斬撃は爆発を起こしその際に巻きついた鎖は解けて要はそのまま床に飛ばされた。

「大丈夫か要！？」

着地した謙介はそのまま要のところに駆け寄った。

「ええ。ところであいつは？」

爆煙は月明かりに照らされて怪しく光っていた。その中から青白い巨人が姿を現した。

「ぐもおおおおおおお！」

巨人の雄たけびは夜空に低く響き渡った。

「駄目だったか！」

謙介はすぐにまた剣を構える。それに対して巨人もまた腕を振り上げる。

「見た目通りタフな奴だ！　契約の紫！　我に躍進の力を与えよ！」

健介の贈与の石が光って健介をその光で包みこんだ。

「ぐもおおおおお！」

勢いよく腕を振り下ろした巨人の一撃を最低限の左右の動きで避けそのまま腕の上を駆けだした。

「切り刻んでやるよ。」

健介は走りながら一定の間隔で腕を剣で切り落としていった。巨大な腕はダルマ落としのように崩れ落ちていった。

「要は足だ！」

「……了解！」

一瞬で健介の意図を読み取った要は巨人の両足に鎖をくりつけた。両足が鎖によって縛られた巨人はバランスを崩して廃工場にしかかるような形で倒れた。

「支える腕も無ければ立ちあがることもできないだろ！」

健介は倒れた巨人の体の上にとんと着地した。巨人は必死に起き上がるようにするが両足、片腕が使えない状態では起き上がることはままならなかった。

「終幕だ。」

健介はそう言って剣を巨人の腹にずぶりと刺した。その直後剣から巨大な斬撃が放たれ切り口から斬撃は広がり巨人の体を粉々に切り刻んだ。ばらばらになった巨人の欠片は小さな青い炎となって月明かりに消えた。

「結局逃げられちゃったわね。」

要は自分の手元に手繰り寄せた鎖を贈与の石の中に消した。

「まあな。」

健介の剣も光とともに石に消えた。

「でも魂の傀儡子の目的がこの町にあることは明白。出来ればそれを知りたかったが。」

健介は話しながら自分の贈与の石を握りしめた。すると廃工場に周りの車の走行音などが響き渡り始め、崩れていた廃工場も元に戻っていた。

「確かに他の国や町に比べてここはあまりに魂玉の出現率が高すぎるわね。魂の傀儡子の仕業だろうけど。」

「この町に何かあるのかはまだ分からないままだしな。昔はそんなにこの町は多くなかったそうなんだが。50年ほど前まではこの町には1組の討伐者しか配置されていなかったらしい。」

「ずいぶん警戒が薄かったのね。今ではこの町は異常と言えるほど警戒されているのに。」

要の表情は月明かりに照らされ少し悲しげに見えた。

「まあ理由はどうあれ奴は早めに討伐するほかない。」

「……同意見よ。」

翌日、聖徳高校朝のホームルーム。

卓と蓮華のクラスである1年5組の教室はにぎわっていた。自分の机で黙々と勉強しているものもいれば、数人で集まってテストの話題で嘆いているものもいた。

「真理ちゃん今日から転入してくるんだよね？」

「そうなんだよな。今は職員室に行ってる。」

卓ははあつと溜息をついた。それもそのはず、今日早朝から真理に叩き起こされ、転入するためにいち早く学校に行って制服の調達を済ませて今に至る。当然朝食なんて食べる暇もなく今の卓の腹の虫は鳴きやむことを知らなかった。

「蓮華！ 城根！ おはよう！」

教室の後ろのドアから元気よく入ってきたのはクラスメイトの風下春菜だ。ちなみに席は一番窓際が一番後ろが卓、その前が蓮華、卓の横が春菜となっている。もともと春菜の席はくじ引きの結果同じクラスメイトである伊勢陽介だったのだが春菜が力押しでその席を略奪したのだ。

「おはよう春菜！」

「おつす風下。」

春菜は鞆を机の横に引っかけて自分の席に着いた。

「もう2人はテスト勉強ばっちり？」

春菜はあからさまにはあつと大きなため息をついた。

「まあいつも通りかな。」

卓は目線を蓮華に向けた。蓮華も私も、と軽くうなずいた。

「そつか〜。そうだよ〜2人とも頭いいもんね……」  
春菜はぐでーっと自分の机に突っ伏した。

「風下だつて成績はいいほうだろ？」

「そりゃ悪くはないけど今回は部活が忙しくてなかなか勉強時間取れなかつたんだよね。」

春菜は苦笑いを見せた。ちなみに春菜は聖徳高校空手部レギュラーを1年生で務めているわけで聖徳高校空手部は全国的にも有名なのでかなり忙しいのである。

「春菜は偉いよね。部活も勉強も頑張ってるんだもん。」

蓮華はよしよしと春菜の頭を撫でた。

「蓮華〜」

春菜も嬉しそうに蓮華に抱きついた。

そんなやりとりの中教室の後ろのドアが勢いよく開いて男子生徒が勢いよく卓たちのところに駆けつけてきた。

「卓！ 今日うちのクラスに転校生が来るらしいぐべっ！」  
ものすごいスピードで近寄ってきた男子生徒、伊勢陽介は春菜の上段前蹴りの餌食となつてその場にうずくまった。

「これ以上私たちに近づくな！」

「ひ、ひどくない……？」

腹を押さえた陽介は潤んだ目で卓に同意を求めた。

「……」

卓は無言で陽介から目を逸らした。

「そんな！ 俺たち友達じゃげばふっ！？」

立ちあがるうとした陽介に再び春菜の蹴りが決まった。地面に這いつくばった陽介はそのまましばらく動くことはなかった。

そんなやりとりをしていると前のドアから女性教師が入ってきた。手にはクラス名簿とチョークの入ったプラスチックケースが握られている。

「はい。みんな着席！」

女性教師がクラス名簿を教壇に置くと立っていた生徒たちも次々

に自分の席に座った。

「今日は転校生を紹介します！」

女性教師はテンション高めでにこやかに話している。

「じゃあ入ってきていいわよ！」

女性教師のその言葉を合図に教室の前から聖徳高校の制服に身を包んだ真理が入ってきた。ちなみに聖徳高校の制服は男女ともにブレザーでチェック柄のズボンとセットになっている。

「「「おおお!!」「」」

真理の登場とともにクラスの主に男子の歓声が沸き起こった。

「じゃあ篠崎さん自己紹介よろしく。」

女性教師はにっこりほほ笑みながら真理にチヨークを手渡した。

真理は受け取ったチヨークで黒板に大きく自分の名前を書き出した。名前を書き終えるとチヨークを女性教師に返して生徒たちに向き直った。

「今日からこのクラスに転入してきました篠崎真理です。よろしくお願いします。」

真理がぺこりと頭を下げるとクラス中に拍手が巻き起こった。まともなあいさつをした真理に卓もほっと一息をついた。

「それでは質問タイム！」

女性教師は元氣よく手を挙げて言い放った。すると教室の男子生徒が次々と挙手した。

「はい！ はい！ はい！」

椅子から立ち上がって目ざといまでに挙手をする陽介を女性教師は指名した。

「篠崎さんって彼氏とかいるんですか!？」

陽介のそんな質問に卓はアホか、と呟いた。

「いない。」

真理は少しむすつとした表情で答えた。陽介はそんなことお構いなしに次の質問を続けた。

「じゃあどこらへんに住んでるんですか!？」



陽介のその質問に卓はいち早く反応して顔を上げた。

（真理！間違っても一緒に住んでるなんて言うなよ！？）

卓は教壇の前に立つ真理をじっと見据えて目で訴えようとした。

真理は卓が自分のことを見ていることにすぐに気がついた。

（卓がこつちをじっと見ている。やっぱり一緒に住んでることは公にしないほうがいいのかな？でもあの真剣な眼差しは嘘なんてつく必要はないぞって感じだし……）

真理はしばらく卓の目を見て考え、すうつと一呼吸してから口を開いた。

「今はこのクラスの城根卓と一緒に住んでいます。」

真理のその発言にクラスの空気は一瞬にして凍りついた。クラスの男子に限らずほぼ全員の視線が卓に集まった。

（……まあそうなるよな……）

卓は心の中で大きなため息をついた。そんな卓の様子を蓮華は心配そうに見ていた。

それから1時限目の授業が始まる前や授業と授業の間の休み時間に卓は真理との関係についての質問攻めに遭っていた。卓が一息つけたのは学校の中庭で真理と蓮華と春菜の4人で昼食をとっているときだった。

「へー真理ちゃんは城根の親戚なんだ！」

春菜は購買で買ったパンを頬張りながら納得したようにうなずいた。

「そ、そうなんだよ！急な引越して仕方なくうちで泊めてるんだよ。」

卓は真理のことを親戚ということと春菜に弁解した。

「まあともあれこれから仲良く行こうね！」

春菜は真理に手を差し出して握手した。

「よろしく。えつと春菜……？」

「うん！」

この瞬間を持って卓、蓮華、春菜の3人組に真理も加わることに

なった。

「ところで、みんな今日の放課後って時間あるかな？」

さつきまで満面の笑顔だった春菜は少しおずおずと尋ねた。

「まあとくに用事はないけど？」

卓の返答に真理と蓮華もうなずいた。それを見て春菜は再び顔を輝かせた。

「じゃあさ！ 今日の放課後みんなテスト勉強しない？ 私今日から部活は無いし。どうかな？」

「俺は構わないよ。蓮華と真理はどうする？」

「私も大丈夫！」

蓮華も春菜の提案を受け入れた。真理もそれにうなずく。

そして放課後の教室に卓、真理、蓮華そして春奈の4人は残って勉強していた。それぞれの机を4つくっつけて卓の横に真理、その向い側に蓮華と春奈が座っている。

他の生徒たちはテスト前ということもあり全部活が一時的に活動停止中なので速やかに帰宅するものがほとんどだった。実際卓たちを除いてこの教室には誰もいなかった。さつきまで陽介も春奈に懇願して勉強をしようとしていたが春奈に追いつ返されるとぼとぼ教室を後にしていた。

「蓮華、ここの問題が分からないんだけど……」

数学の問題集とノートを開いてしばらく思いつめていたようにそれらを眺めていた春奈が蓮華に問題集を差し出した。

「どれどれ？」

蓮華は差し出されて春奈がシャーペンでしるしをつけた問題をつくり見始めた。

「春奈、この問題はね今までの解き方じゃ出来ないの。こここの公式を使って、この式をこういうふうに変形して、ここに代入。これで解けるはず。」

蓮華は丁寧に問題の解き方の過程を春奈のノートに書きだして春奈に渡した。

「本当だ！　すごい！　やっぱり蓮華は天才だ〜」  
蓮華の書いた式を見て春奈は目を輝かせそのまま隣の蓮華に抱きついた。

「そんなことないよ〜」

蓮華は照れ臭そうにされるがままだった。

「でもまあ蓮華は確かに頭いいもんな。」

その様子を見ていた卓も春奈の意見に賛同した。

「もおたつくんまで……」

蓮華の顔は少し赤く染まっていた。

「ところで真理調子はどう……」

卓は隣でさつきから黙々とシャーペンをノートの上に走らせる真理を見て固まった。

「嘘……」

春奈も真理のノート見て口をぽかんと開けたまま固まった。

「すごい……」

蓮華も目を丸くして素直に驚いている。

「ん？　どうしたのみんな？」

真理は他の3人が動かなくなったのに気付いて顔を上げた。

「いや、どうしたのって……」

卓は真理のノートを凝視した。そこにはページいっぱい数学の計算式が書き綴られていた。それもさつきまで新品で何も書かれていない綺麗なノートがここ1時間ちよつとで残りあと5ページほどしか残っていないかった。

「いくらなんでも早すぎだろ……」

卓はそつと真理のノートを手にとってパラパラと前のページを見た。とても綺麗に書かれた計算式は途中に一切の無駄もなく完璧なまでに理想の答えを導き出している。

「真理ちゃん天才……？」

春奈も真理のノートを見て愕然とした。

「そんなことないよ。だって学校で教わる数学なんて所詮基礎か

ら少し発足した程度の問題だし、基礎の公式を完全に覚えてそれを適宜必要なところで組み合わせさせて使えばどの問題もすぐに解けるわけだし。」

真理は口ではそう言うものの表情を少し得意げだった。

「偏差値78は本当だったのか。」

「当たり前でしょ！」

「真理ちゃんの式本当に無駄がない。」

真理のノートをじっくり見ていた蓮華が感心するように言った。

「へっへん！」

3人に褒められた真理は気を良くしたのか立ちあがって腰に手を当てて威張ったようにした。

「調子に乗らない。」

すかさず卓は丸めたノートで真理の頭をポンと軽く叩いた。

それから4人は1時間ほど教室で勉強をしていた。時計は6時を回ったところで教室には夕方のオレンジ色の光が差し込んでいた。

「ん〜！」

春奈はシャーペンを置いてその場で大きく伸びをした。

「春奈、お疲れ。今日はこの辺にしよっか。」

蓮華もパタンとノートを閉じてカバンにしまった。

「そうだな。もうこんな時間だし。」

卓と真理もそれぞれ教科書やノートをカバンにしまった。

「今日はありがとうね！」

満足げな表情で春奈は3人にお礼を言う。

「どういたしまして。」

それに蓮華はにこやかに答えた。

「俺達も勉強出来たしお互い様だよ。」

「うん！」

春奈も上機嫌で教科書類をカバンにつめた。するとその時教室の外の廊下からガシャンとガラスの割れる音が聞こえてきた。

「えっ？ 何？」

春奈と蓮華は顔を見合わせて困惑していた。

「ちよつと見てくる。」

そう言つて真理はすぐさま教室の外に出た。

「俺も行くぞ。蓮華と風下はちよつと待つててくれ。」

卓は2人が頷くのを見てから真理の後を追つた。

真理と卓は全速力で廊下を駆け抜け音のした方に迷わず向つた。

そして同じ階にある家庭科室の扉の前で2人は立ち止つた。

「はあ……はあ……ここか……？」

卓はその場で息を整えながら真理に尋ねた。真理は無言で頷いて家庭科室の中を扉を少し開けて覗いた。

「！？ 魂玉……？」

真理はすぐさま扉から一步下がつた。

「えつ？ 魂玉だつて？」

卓は真理が覗いた隙間から家庭科室の中を覗き込んだ。すると中には大蛇のような形をした魂玉が暴れていた。家庭科室の窓は2、3枚割れていた。

「とりあえず隔絶を！ 我、この世界との断絶を命ずる！」

真理が詠唱を唱えるとぐおんつと風の吹いたような音の後に魂玉の暴れる音以外の音は校舎から消え去つた。

「なんでこんなところに魂玉が！？」

あまりの急な事態に卓は少し混乱気味だった。

「分からないわよ。でも戦うしかないわよ？」

真理はそう言つてすつと息を吸つた。

「……みただな。」

それを見た卓も軽く息を吸つた。

「「具現せよ！ 我が剣！」」

卓と真理の詠唱は完全に重なつた。そして同時に2人の贈与の石が光り出し、卓の手には長刀を、真理の手には日本刀をそれぞれ具現させた。

真理はそのまま勢いよく家庭科室の扉を開けた。その音に気がつ

いた魂玉はぎろりと顔にある赤いラインで2人を見据えた。形は人型ではなかったが顔部分のラインは今までのと酷似していた。

「ここにいる理由は分からないけど、私たちに見つかったのが運の尽きよ。」

真理と卓はそれぞれ武器を構えた。

するとそれを見た大蛇の魂玉が大きな口を開けながらニヨロニヨロと2人に跳びかかった。

「遅い！」

真理と卓は大蛇の突進を余裕で避けてそのまま背後に回り込もうとした。だが次の瞬間大蛇は自分の尻尾を大きく振りまわし左右に避けた2人の腹部に直撃した。

「ぐはっ！」

「くっ！」

卓と真理はそれぞれ反対側に飛ばされ家庭科室に設置されている机に身体を強打した。

「尻尾のリーチを読み切れなかった……」

真理は打ち付けた身体をよろよろと起こし立ちあがった。

「いつてえ……」

卓も剣で身体を支えて立ちあがった。

「卓、コイツ今までのとは違う。油断しないで。」

「ああ。肝に銘じておくよ。」

卓と真理は大蛇を挟み撃ちにするような形で向い側でそれぞれ剣を構えた。

「契約の紅、我の刃となって具現せよ！」

「契約の蒼、我の刃となって具現せよ！」

2人の詠唱の後、それぞれの剣は贈与の石から発した光を纏った。それに対して青白く光る大蛇は口から舌をチロチロと出して威嚇している。

「私たちがそんな爬虫類の成り損ないなんかに負けるわけないでしょー！」

真理は大蛇の後ろから日本刀を上段に構えて回り込んだ。

「はあああああ！」

そしてそのまま真理は光を纏った日本刀を大蛇に突き刺した。かのように見えたが大蛇は日本刀の切先が触れる寸前に体をくねらせその一撃を見事にかわした。そして真理の日本刀はそのまま勢い余って家庭科室の床に突き刺さった。

「しまった！」

真理が状況を把握したときには既に遅く、真理の身体は大蛇に巻きつけられ身動きが取れない状態に陥っていた。

「真理！」

卓はすぐさま真理を助け出そうと長刀を構えて大蛇に近づこうとするが、大蛇はその長い尻尾をぶんぶん振りまわして卓を完全に遠ざけていた。

「くそっ！」

卓は真理を救え出せない自分の弱さに苛立ちを覚え、唇を噛んだ。そんな卓の様子を見ていた大蛇は無情にも真理を締め付ける力を増した。

「くはっ！」

息をすることさえ困難な真理は明らかに苦しそうな表情を浮かべていた。

「真理！」

卓は無鉄砲に大蛇に突っ込んだ。それを待ってましたといわんばかりに大蛇は大きな尻尾を卓に振り下ろした。

「うわあ！」

卓は思わず足を止めて目を強く瞑った。だが大蛇の尻尾が卓に当ることは無くそれどころか卓が目を開けると尻尾を斬り落とされた大蛇が真理を解放してのたうちまわっていた。

「えっ？」

その状況が理解できなかつた卓はぐったりと大蛇の傍で座りこんでいる真理を見つけすぐさま駆け寄った。

「大丈夫か!？」

「けほっけほっ。……うん。」

真理はよろよると立ちあがって大蛇から距離を取った。

「なんで尻尾が……」

卓が周りを見回すと大蛇の後ろに一人の青年が剣を持って立っていた。

「久しぶりだね、城根の弟くん。」

青年はにっこりと卓にほほ笑んだ。



## 出合いの交錯（後書き）

「約束の蒼紅石」第3話いかがでしたでしょうか？今回は過去の話や魂の傀儡子との対決、そして日常といろいろ盛りだくさんの回になりました（笑）実は今回の話はこの魂の傀儡子編の重要なキーポイントとなるので、一度といわず何度も読んでみてください！それとこの話は基本的にシリアスなバトルシーンは多いので作者的にこれからも時々平穏な日常シーンも織り込んでいきたいと思っています（笑）もちろんバトルシーンもどんどん入れていきますよ！

最後に前書きにも書きました通り、次回の更新は少し遅れると思います。繰り返しになりますが大ごと承ください。

## 平穩と序章の終止符（前書き）

こんにちは！夢宝<sup>むほう</sup>です！ 予告通りなんとか今日に掲載することが出来ました！正直テストが終わってから3日間での執筆だったのだから大変でした……（笑）まあでも話自体はだいぶ前から練りこんでいたのでそれに修正を入れつつの執筆だったので何とかなりました！読者の皆様には長いことお待たせしてしまったことに対しての申し訳ない気持ちでいっぱいです。またこれからも読んでいただけるように頑張っていきたいと思えます！では「約束の蒼紅石」第4話お楽しみください！

## 平穩と序章の終止符

「……お兄ちゃん!？」

「謙介さん……」

卓と真理は驚いた様子で青年、篠崎謙介を見た。

「2人とも下がっていいよ。」

謙介は蛇の魂玉へびに完全に背を向けて2人に向いあった。すると蛇の魂玉は謙介の頭上に大きな頭から飛びかかった。

「お兄ちゃん! 後ろ!」

「心配ご無用。」

謙介は魂玉を振り返ることなく手に持った西洋の剣で真つ二つに切り裂いた。

二つに切り裂かれた魂玉はその場で切られても少し暴れた後、動かなくなり消滅した。

「……すごい。」

その様子を見ていた卓はただ呆然としていた。

「謙介! 外にいた魂玉は討伐したよ。」

突然家庭科室の窓からスレンダーな女性が飛びこんできた。

「要、こつちも今終わったよ。」

謙介は要にふつと笑顔を見せた。

「お兄ちゃん、どうして鳴咲市に……?」

「ん? ああ。一時的にこの町に配置されたんだ。実はもうすで

にこの町に魂の傀儡子くわいごはいる。」

「「えっ!?!???」」

卓と真理は同時に反応した。

「昨日、俺と要は直接魂の傀儡子と剣を交えた。」

「やっぱり強かったけどね。」

要ははあつとため息をついて苦笑いした。

「やつの目的を知ることが出来なかつたけどこの町が大きく関係

していることは間違いないという本部の考えでね。俺達は魂の傀儡子殲滅までこの町に配置されることになったというわけだ。それに俺たちが配置されたからといって勝率はせいぜい数パーセントしか上がらないだろうけど。実は先日、スイスであのイザイとヴァーグアーがやつに殺された。」

「えっ？ あのヨーロッパ支部式○騎士てんきしの2人が!？」

真理は驚きを隠せなかった。だがそれも当然である。ヨーロッパ支部式○騎士とは2人一組みで行動する討伐者計10組のことを指し、ヨーロッパの討伐者のトップ10というわけである。

「ああ。本部はこの事態を深刻に受け止めていてな。しかも魂の傀儡子はやたらと魂玉をこの町に配置している。まるで何かを探させているかのように。それに対してこの町は討伐者の配置が少し足りなかったんだ。だから俺達も今回特別にここに配置された。」

謙介は話しながら手に持っている剣を石の中にしまった。

「あの、謙介さん……」

「ん？ 何だい弟くん？」

謙介はさつきまで少し堅かった表情を崩してにっこりほほ笑んだ。「真理はともかくその、俺なんかがこの戦いに参加するのはかえって迷惑になるんじゃない……」

卓は唇を噛みしめて少し俯いた。

「……確かに今のままでは戦力として数えることは難しいかもね。」

謙介は笑顔のまま卓に言い放った。

「……」

卓はそれを聞いて無言でそのまま立っていた。内心自分の無力さに苛立ちすら感じていた。

「でも、だからこそ今日2人に会いに来たんだよ。」

「えっ……?」

その言葉に卓はぱつと顔を上げた。

「謙介もあなたには期待しているのよ？ だから今日は提案があ

ってあなたたちに会いに来たわけ。」

謙介の後ろに立っていた要が前に出てきてにつきりと笑った。

「提案？」

真理も謙介の言葉に聞き返した。

「そう。この町の北に海岸があつてそこに灯台があるんだけどね。実はその地下は本部の所有しているある施設があるんだ。」

「施設……？」

卓は灯台を思い起こして施設の存在が自分の記憶にないことを確認した。

「うん、まあいわゆる特訓用の施設なんだけど、そこなら通常の何十倍の速さで贈与の石の力を引き出すための経験値が積めるわけなんだ。もうすでに魂の傀儡子はこの町に来ているわけだからあまり時間がないのも事実。ならもう急激な戦力アップにはこの方法しかないと思つてね。」

「やります！」

謙介が話し終わると同時に卓はさすがのように言い放った。それを見て謙介と要は少しきよとんとしたがすぐに表情を戻した。

「でもこれは想像以上にきついよ？ なんせ通常1年以上かかることを1週間でやるんだから。」

「大丈夫です！ それに俺決めたんです。これからは俺が真理を守るつて。」

「卓……」

それを聞いた真理は少し頬を赤らめて嬉しそうな表情をした。

「はは。真理もいい男に好かれたもんだ。」

謙介がからかうように言うと真理は慌てたようにそんなんじゃないわよと否定した。

「じゃあ弟くん、君たちは来週からテストがあるんだろ？ だったらテスト後にでも灯台に来てくれ。」

「え、あ、はい。」

「待つてお兄ちゃん。私もその施設で訓練する。」

真理は卓より一步前に出た。

「そう言うと思つてたよ。いや、そうでなくては困る。今回の相手は強敵だからね。真理も強くなる必要がある。」

「うん。」

真理は謙介の言葉に強く頷いた。

「じゃあ俺達はそろそろお邪魔するよ。伝えたいことは全部伝えたらからね。」

「じゃあまた会いましょう。」

そう言い残して謙介と要は家庭科室の窓から外に出た。

そのあとに真理は断絶を解いた。ぐちゃぐちゃになった家庭科室は元に戻つたが一部の窓は壊れたままだつた。

「相変わらず謙介さんはかっこいいな。」

「そう？ 討伐者としての実力は認めざるを得ないけどね。」

真理ははあつと小さくため息をついた。

「そういえばあの要さんって謙介さんとはどういう関係なの？」

「私も詳しくは知らないんだけどなんかお兄ちゃんの2番目のパートナーらしいよ？」

「2番目？」

「うん、なんか最初のパートナーは1年ちよつと前に亡くなつたらしいの。」

「そうか……」

卓と真理は家庭科室を後にして蓮華と春奈が待つている教室に戻つた。

「たつくん！ 真理ちゃん！」

二人が教室に戻ると蓮華が心配そうな表情で駆け寄ってきた。

「何で2人ともそんなぼろぼろなわけ？」

春奈も卓と真理の制服が汚れているのに疑問を持って近づいてきた。

「いや、まあなんだちよつと転んじやつて……」

卓は乾いた笑いでごまかそうとした。

「……まあ怪我也大したことないなら別にいいんだけど？」

最初は目を細めていた春奈もすぐに卓と真理の無事に安堵した。

「もしかして、また魂玉？」

横にいる春奈に聞こえないように蓮華は卓の耳元で聞いた。

「まあな。蓮華は心配しなくていいよ。」

卓は蓮華の頭にポンと手を置いた。蓮華も本当に？と上目遣いで聞いた。卓はそれに力強く頷いた。

「じゃあ今日はそろそろ帰ろうか！」

春奈の言葉に他の3人も頷き学校を後にした。3人は寄り道もすることなくそれぞれの家に真つすぐ帰った。

同日、午後7時。聖徳高校家庭科室。

日は完全に沈んだ家庭科室に差し込む月明かりは2人の男女のシルエットを映し出していた。

「危うく壊れた窓の修復を忘れていたよ。」

月明かりに照らされた謙介は掌に自らの贈与の石を乗せそれを光輝かせていた。

その光を浴びた壊れた窓の破片は光を纏いみるみる元通りに戻っていった。

「謙介もまめよね。これくらいの破損ならほっておけばいいのに。  
トラッキング・コントロールその時空調整つてそれだけでもかなりの力を使わなくちゃいけない  
んでしょ？」

「まあな。でもあまり弟くんに迷惑かけられないだろ？」

「弟くん？」

要はいたずらな笑みを浮かべて謙介の顔を覗き込んだ。謙介はそのクールな顔を少し赤らめて要から目を反らした。

「本当は妹さんのためなんでしょ？ 可愛い妹に迷惑かけて嫌われたくないから。」

「うるさいぞ。」

窓の修復が終わると謙介はネックレスにしてある贈与の石を首か

らかけた。

「はいはい、怒らないの。」

要は子供をあやす様な口調でクスクスと笑った。

「ちよつと年上だからっていつもいつも……」

謙介ははあつとため息をついた。

「謙介はまだ19歳なのに大人すぎるのよ。もつと可愛げがあつてもいいのに。」

要は少し頬を膨らませた。

「要だつてまだ20じゃないか。」

「それでも年上なんだから敬語くらい使いなさいよ。」

「うるさい。」

謙介は体を揺さぶってくる要をため息混じりであしらった。

「もお〜！」

要は拗ねたようにそっぽを向いた。

「ところで、今週と来週はこの辺一帯の魂玉は俺達で討伐する」とにしたいんだが。」

「妹さんのため？」

「……」

謙介は口を閉じて要から目を反らした。月明かりに照らされた彼の頬をまだ赤らんでいた。

「ホント、シスコンなんだから。」

要は呆れたように言い放った。

「悪いか？」

「……はいはい。」

要も観念したように頷いた。

「ところで、話しは変わるんだけど。」

要は少し真面目な表情をして謙介に向き直った。

「あの2人を今回の戦いに巻き込むのは止めた方がいいんじゃない？ それ可愛い妹さんならなおさらよ。」

「……俺だつて出来るならそうしたい。でもそれは出来ないんだ。」



本部からの命令でもあるし、何よりアイツ自身討伐者であることに誇りを持っている。」

謙介の目には何かを決断するときのような力強さが垣間見えていた。

「でも、5年前妹さんは奇跡的に助かった。でも今回もそんなことが起こるなんて限らない。むしろそんなこと起こるわけがないのよ？ 私は謙介との付き合いは最近だけど、一度だけ見たあなたのあの悲しげな表情は忘れられないの。もうあんな顔見たくないわ。」

「……俺にどうしろと？」

「私たちだけで倒すのよ。この一週間で。」

「本気で言っているのか？ つい昨日戦ったばかりで分かっているだろう。俺達2人じゃ万が一でも勝つことはない。」

謙介はそう言っただけで家庭科室から出ようとしたが、謙介の腕を要はがしつと掴んだ。

「でも私たちがやるしかないじゃない！ 彼らはまだ未熟過ぎる！」

謙介は腕を掴まれた手をゆっくり振り払って要に向き直った。

「要、勘違いするな。俺は真理と同じくらいお前も大事なんだ。そんな無理をしてまた俺にあのときの表情をさせないでくれ。もう大事な人を失うのはごめんだ。」

「えっ……」

要は意表を突いた謙介の言葉にポフツと顔を赤らめた。

「魂の傀儡子は、みんな倒そう……」

謙介はそう言っただけで家庭科室から出た。要も謙介が家庭科室を出た後で潤んだ口元を手で隠すようにしてついて行った。

十日後、聖徳高校。

「期末試験も終わった〜！ ウチの高校って期末試験の時期早い

からこれから夏休みまで気楽でいいわよね！」

最後のテストを回収し終えたクラスには緊張の糸が切れたような安堵感とテストが出来なかった者の絶望感が入り混じった独特と雰囲気醸し出していった。そんな中で春奈は意気揚々とテスト終了の一瞬を満喫していた。

「春奈は今回大丈夫だった？」

蓮華が春奈に尋ねると春奈はブイサインをして蓮華に抱きついた。

「蓮華のおかげでもうばっちり！　ありがとう！」

「あはは。どういたしまして。」

蓮華も少し照れくさそうに春奈に抱かれた。

「真理はどうせ余裕なんだろう？」

卓が真理に悪戯っぽく聞いてみた。

「当然！　こんな簡単なテストなんてテストとしての意味を成さないくらいよ。」

真理は得意げな表情で答えた。

「まあ今回も俺は蓮華のおかげで結構上出来だったな。」

「良かった。」

蓮華は卓に優しく微笑んだ。

「……でアイツは……」

卓は恐る恐る少し離れた席でうつ伏せになっている悪友の陽介に視線をやった。

「ふん！　あんな馬鹿はほっとけばいいのよ！」

春奈は軽蔑するような眼差しで死にかけている陽介を睨みつけた。

「……ひどいじゃないか。」

春奈の言葉にピクリと耳を動かした陽介はそのりと起き上がってゾンビのように近づいてきた。

「来るなあああ！」

春奈は容赦なく陽介を蹴り飛ばした。陽介はそのまま蹴り飛ばされ壁に激突して力なく倒れ込んだ。

「ありゃ重症だな。」

卓の一言に蓮華も真理も苦笑いを浮かべていた。

「ところでさ、今日から1週間試験休みじゃん？　これからみんなプールにでも遊びに行かない？」

陽介とのやりとりをなかつたかのように振り払った春奈は目を輝かせて3人に訊ねた。

「プール？　でも俺達水着なんか持つてきてないぞ？」

真理と蓮華も顔を見合わせて頷いていた。

「大丈夫！　この前出来た大型のプール施設でね、水着もそこで貸出してくれるの！　種類もサイズも豊富で人気なんだよ？」

話しながら春奈はカバンからそのプール施設のチラシを出して見せた。

ちなみにこのプール施設は聖徳高校から北にバスで13分ほどのところにある。

「まあ水着を貸してくれるってんなら行ってみるか？」

卓が真理と蓮華に聞くと二人ともうん！と満面の笑みを見せた。

「決まりね！」

4人は今だにノックアウトしている陽介を置いて教室を後にした。

4人がバスに乗ってから15分後、4人ともプール施設の入り口で驚愕していた。

「チラシで見てたより大きい……」

「最近のプール施設は発展してるんだな……」

「……」

真理と蓮華は言葉すら出てこなかった。

ここ鳴咲ウォーターランドは日本でも有数の超大型プール施設で、温水プールや流れるプール、波が起こるプールなど全20種類のプールに超巨大ウォータースライダーなどのアトラクションも7種類もあるという大規模なものだ。平日にも関わらず、その規模の大きさから他県からの客や地元民なども大勢来ていた。

「さ、さあ早く行きましょー！」

春奈が先陣を切って入り口のチケット売り場に向った。

「一人1500円か。これだけの施設でこの値段は安いんだろうな。」

卓の一言に春奈はえへんと得意げに胸を張った。

「そうなのよ！ このプール施設は他に比べても引けを取らない、むしろ勝っているくらいなのにこの安さ！ 鳴咲市のシンボルと言っても過言じゃないわ！」

「シンボルって……最近出来たばかりなんだろ。」

春奈のテンションに蓮華も苦笑いを見せている。真理はほへなどと感動のあまり入り口から中の様子をキョロキョロ見回していた。

「はい、これみんなの分。」

春奈はそう言って3人にチケットを配った。

「城根は男子だからあつちからの入場ね。」

そう言って春奈は今いる場所から10メートルほど離れたもう一つの入り口を指さした。

「おう。じゃあまたあとでな。」

卓は男子用の入り口から、他の3人は女子用の入り口へと姿を消した。

鳴咲市ウォーターランド女子フロア。

「うっわあ〜！ 素敵な水着！」

春奈は目をキラキラさせて大きな部屋に張ってあるレールから掛かっている無数の水着を次から次へと手に取って行く。

「本当にこんなにあるんだ！」

蓮華もビキニやワンピース型の水着などを手にとって見比べていた。

「卓ならどんなのが好きかな。」

真理は真理でぶつぶつ呟きながら真剣に選んでいる。

「真理ちゃんにはこのワンピース型の水着が似合うと思うよ？」

蓮華は自分が手に持っていた薄いピンクで少しフリルの着いた水

着を差し出した。

「私もそれ真理ちゃんに似合うと思う！」

春奈もその水着を推奨した。

「そ、そうかな？」

真理は少し照れくさそうにその水着を受け取った。

「で蓮華はこれだと思っな〜」

春奈はニヤニヤしながらオレンジのビキニを差し出した。

「ええ！？ こんなの恥ずかしいよ〜」

「大丈夫大丈夫！ 絶対似合うから！」

「そういう春奈はどれにしたの？」

「私はこれ！」

春奈は背中に隠していたパープルの水着をバンと前に出した。

「どお？ 大人っぽいでしょ！？」

「う、うん。」

蓮華も観念したように春奈の手からオレンジの水着を受け取った。

124

同時刻、ウォーターランド、プールサイド。

トランクスタイプの水着を着用した卓はプールサイドで辺りを見回した。

「やつぱ中もすっげー広いな。あんなでっかいウォータースライ

ダーもあんのかよ。」

プールはざっと見回しただけでも7種類は見えてそのどれも来客でいっぱいだった。

「卓〜！」

そんなことをしていると背後から真理の声が耳に届いた。

「お〜遅かったな。」

「女の子は時間がかかるものよ？」

春奈は悪戯っぽく微笑んだ。

「ごめんねたっくん。」

「……………！？」

小走りで近づいてきた水着姿の蓮華を見て卓は少し心臓が高鳴った。

「あ、今蓮華にときめいたでしょ？」

そんな少しの変化も春奈は見逃すことなく探求してきた。

「ばっ！ そんなことねーよ。」

卓はすかさず春奈から目を反らした。

「卓！ 私の水着はどう？」

ぱっと卓の目の前に真理が立ち塞がった。

「あ、ああ。似合ってるよ。」

「……………」

真理はじっと目を細めて卓の様子をうかがった。

「…………可愛いわ。」

観念した卓のその一言に真理の表情はぱあっと明るくなった。

「じゃあ早速プールに入ろう！」

春奈は真理と蓮華の手を引っ張って流れるプールに向った。

「ほら城根も早く！」

「お、おう！」

卓も3人の後に着いて行って流れるプールの近くまで行った。

「意外と流れが速いな…………蓮華大丈夫か？」

「ううん…………どうかな……………」

蓮華は少し不安そうな表情をしていた。というのも蓮華は水泳は苦手な種目だからだ。まるつきり泳げないわけではないのだが、それでも50メートル泳げるくらいのレベルだ。それも普通のプールでの話だ。

「だから城根が蓮華を支えなさい！」

春奈はバンと卓の背中を叩いた。

「いつて！ 何するんだ！」

卓の声が春奈に届くことは無く既に真理と2人でプールに流されていた。

「あ、あの私はここで見てるからたつくんも……………」

「……ほら。」

卓は少し気恥ずかしそうに手を差し出した。

「えっ？」

突然のことに蓮華も少し戸惑った。

「せつかく来たんだからいっしょに楽しまないと損だろ？」

「……うん！」

蓮華は満面の笑顔で卓の手を取って二人でゆっくり流れるプールに入った。

「流れが速いからな。俺の手を放すんじゃないぞ。」

「うん！」

蓮華は卓の手をしっかりと握りながらプールに入った。

「お似合いのカップル発見！」

既に一周流されてきた春奈が茶化すようにニヤついていた。そしてそのあとに流れてきた真理は面白くなさそうにぶすーっとした表情で流れてきた。

「お前な！」

卓と蓮華は顔を赤らめて思わず手を放してしまった。

「あっ！」

次の瞬間蓮華が水の流れに乗って卓の少し前に流されてしまった。

「蓮華！」

慌てて卓はバタ足と水の流れに乗って蓮華の前に出て体を抱き押えた。

「大丈夫か！？」

「う、うん。」

蓮華は少しびびくりした表情だったがすぐに笑顔に戻った。

「そっか、よかった……！？」

卓は自分の身体が蓮華に密着しているのに気付き手を握ったまま少し離れた。

「あ。悪い……」

「……ううん。別に嫌じゃなかったから。」

「えっ？」

「……」

二人はゆっくり水に流されながらどことなく気まずい空気が流れていた。

「お二人さん遅いよ！」

またまた流されてきた春奈と真理が近づいてきた。

「仕方ないだろ蓮華は泳ぎが苦手なんだから！」

「ごめんね……」

「あ、いやそういう意味じゃなくて！」

卓が少しあたふたしたのを見て春奈はニヤリと笑った。

「お熱いことで。」

春奈が2人を追い抜く瞬間にポツリと笑いをこらえながら呟いた。

「ったくあいつは……ごふっ!？」

蓮華を掴んでいた卓の背中に真理が激突した。

「当っちゃった。わざとじゃないのよ？」

あからさまに悪意に満ちていた真理の表情は卓に一切の反論も認めさせてはくれなかった。

「分かったから離れる。動きづらিদろ？」

「蓮華はくつついてる。」

「蓮華は泳げないんだ。」

卓と手をつなぐ蓮華と卓の背中にくつつく真理というなんともシユールな光景で3人は水の流れに乗って流れていた。

「蓮華ばかり……」

「真理ちゃん……」

少し寂しそうな真理の表情に蓮華も少し心配した。

「はあ……分かったよ。そのままでもいいよもう。」

「本当!？」

「ああ。」

卓の言葉を聞いて真理はもっと卓の背中にくつついた。周りの客はその光景をちらちらと見る者が多かったが卓はあまり気にしない



ようにした。しかしすれ違つたびに冷やかしを飛ばしてくる春奈だけは気になつて仕方なかつた。

それからしばらく流れるプールで遊んだ後で4人はプールサイドに置いてあるパラソルの下で売店で買ったやきそばやフランクフルトなどを食べていた。

「次はどのプールで遊ぼうか？」

春奈はやきそばを頬に頬張りながら提案した。

「だったらあの巨大なウォータースライダーなんかはどうだ？」

「ふ〜ん」

卓の一言に春奈はニヤニヤした。

「な、なんだよ!？」

「い〜や、城根も策士よのお〜。ウォータースライダーなら自然と蓮華に密着できるもんね。」

「ばっ!？　んなこと考えてねーよ!」

卓は焦つてその場で立ちあがつた。横に座っている蓮華も目をパチクリさせて卓を見上げていた。

「あはは。冗談、冗談。」

ケラケラ笑つ春奈の横でジュースを飲みながらつまんなそうな顔で真理が目を細めている。

「お前が言つと冗談に聞こえないんだよ……」

卓は呼吸を整えて座りなおした。

「ごめんつてば。まあそれは冗談だけど、確かにウォータースライダーは楽しそうね。」

「私も興味ある。」

ジュースの飲みほした真理は立ちあがつてウォータースライダーの方を見た。

「じゃあみんなで行つてみるか。」

やきそばの空き容器を捨ててから4人でウォータースライダーに向つた。

「きゃははははああああ!」

春奈は両手を上げて叫びながら巨大なウォーターライダーを滑った。その後から真理も同じように叫びながら滑った。そして最後は勢いよく下にあるプールに頭からドボンと落ちた。

卓と蓮華はまだウォーターライダーの上で立ちつくしていた。

「やっぱ蓮華は無理しなくていいんじゃないか？」

「ううん、私もこれやりたいから。」

蓮華は首を横に振ってから恐る恐る下を見下した。

「……」

蓮華の肩は小刻みに少し震えていた。卓はそれに築いて蓮華の手をそつと握った。

「えっ？」

突然のことに驚いた蓮華が卓を見上げると卓はにっこり笑っていた。

「蓮華は意外と強情なところあるからな。一緒に滑ろう。」

「……うん！」

卓の後ろに抱きつくように蓮華が座ってウォーターライダーを滑った。

「うおお！ 意外とスリルあるな！」

「きゃあああああああ！」

蓮華の叫びはもはや絶叫と呼べるものだった。蓮華は結局下のプールに落ちるまで絶叫し続けていた。

「大丈夫か？」

卓はすぐに蓮華の身体を支えてプールの端まで泳いで連れて行った。

「う、うん。でもあんなに叫んじゃって恥ずかしい……」

蓮華の顔はみるみる赤くなった。

「ははは。確かにあんなに叫ぶ蓮華あまり見たことないもんな！」

卓は蓮華をからかうように頭をポンポンと叩いた。

「もお意地悪！」

蓮華はブクーと頬を膨らませてプールサイドに上がった。

「蓮華〜！ 城根〜！」

先に滑り終わった春奈と真理がプールサイドに上がった蓮華に駆け寄ってきた。

「どうしたの？」

「あつちでこれからイベントがあるらしいの！ 行こうよ！」

春奈は興奮気味に反対側の大型プールを指差した。そこにはすでに大勢の客が集まっていた。

「イベント？」

プールサイドに上がった卓が春奈に訊ねた。

「なんか誰でも参加出来るらしいよ！ 優勝すれば懸賞もあるらしいの！」

春奈の目は輝いていた。というものの春奈は人一倍勝負事が好きな性格でその上負けず嫌いでもあるのだ。

「まあ行くだけいってみるか。」

卓もそこまで嫌ではなく蓮華と真理が頷くのを確認してから春奈の後からイベントのあるプールに向った。プールに着くと周りのプールサイドには人の壁が出来ていて、その上には天井から吊るされた巨大で色鮮やかに装飾されたプレートがあった。プレートには水球大会と書かれていた。

「イベントって水球大会のことだったのか。」

卓は少し離れたところからプレートを見上げて納得していた。

「そうらしいわね！ でもこの大会は3人1組らしいから私たちでも参加できるのよ！」

春奈はさつきより増して興奮していた。

「3人1組か。なら蓮華は無理しないで見ていてくれよ。」

「うん。私もこれはちよつと無理そうだし……」

蓮華ははあつとため息交じりに苦笑いした。

「じゃあ俺と真理と風下で参加するか！」

卓は気合いの入れながら腕や首を回したりした。

「いえーい！ やっぱ優勝あるのみ！」

風下も片腕を天井に向けて上げると勝利のポーズをとった。

「私は水球初めてなんだけど。」

真理も一応やる気はあるらしいが、春奈に比べると相当ローテーションに見えた。

3人は出場エントリーを終えると、係員からルールの説明や注意事項を聞いた。そのとき蓮華は大勢の客をかき分けてやつと一番最前列まで辿り着いていた。

そんな騒がしさに包まれながら時間は10分ほど経過し、その後プール施設全体に響くくらいの声がマイク越しで響いた。

「さあ！ 今年も始まりました！ 毎年恒例の夏の水中競技大会！ 今年の種目は水球となります！」

司会のテンションの高さに釣られて観客のボルテージも早くも最高潮を迎えた。

「今年もたくさんさんのチャレンジャーが集まったぞ！ 3人1組の今大会で出場グループは前18組！ 9組ずつ分かれてのトーナメントで進行するぞ！ それでは出場者に入場してもらおう！」

司会の言葉を合図にプール施設内に闘志が燃え上がるような力強い音楽が流れ出し、それに伴って観客がいないプールサイドから全54人の出場者が出てきた。

「すでにトーナメントのくじ引きはしてもらっているぞ！ 戦いの舞台はこの巨大プール！ しかし時間の都合上2つのトーナメントを同時に行うためこのプールで同時進行するぞ！ ではスタンバイ！」

司会が大きく片手を振り上げると巨大プールの下からプールを半分仕切る巨大なプラスチック板が現れた。巨大なプラスチック板は水面上だけでも2メートルはあるもので暑さも50センチ以上ある大型のものだった。

「このプール名物の一つでもあるこの仕切りいかがでしょうか！ さあ戦いの舞台は出来あがった。あとは熱きチャレンジャーたちによる熱い戦いだけだ！ ではいざ勝負！」

司会の退場と観客の歓声がイベントの開始合図となった。

まず第一フィールドで卓、真理、春奈のチームとその相手はたま遊びに来ていた女子高生3人組のチームが顔を突き合わせていた。

「さあ！ 勝つわよ！」

春奈は水の中でピョンピョン跳ねていた。

「水球ならまあ男のいる俺らの方が有利かな。」

「ところで城根、水球って何？」

春奈の頭上にははてなマークがいくつも出てきているような表情をしていた。

「……お前、何の知らないのか。水球ってのはまあ水の中でやるハンドボールみたいなものだ。本来は7人で1チームなんだけど、今回は3人のミニ水球みただけだな。それからボールをあの黄色いラインのゴールに入れば得点になるんだ。」

そう言っただ卓が指差した先には黄色い紐で作られたゴールがあった。

「なるほどね。いいじゃない分かりやすくて。」

「卓は水球やったことあるの？」

真理は卓の前に回り込んで訊ねた。

「前に一度だけ陽介達とやったことがあるんだ。結構水の中で動き回るのはつらいんだけどな。」

「へえ〜。やったことある人がいるなら私たちの方が有利よね。」

真理は少し口元を緩めて相手チームを見た。相手チームの女子高生3人は何やら楽しげに世間話をしていた。

「では第一線早速始めます！」

プール施設に響くホイッスルと同時にプールの真ん中にボールが投げ込まれた。それと同時にさっきまで世間話をしていた女子高生3人は綺麗なフォームのクロールでボールを取りに行った。

「早い！」

それを見た春奈も少し遅れてボールに向かって泳ぎ出した。

「真理！ お前も取りに行ってくれ！」

「分かった！」

卓の指令に従って真理もボールに向って突っ込んだ。合計5人の女子高生が一つのボールに辿り着いてボールの奪い合いが始まった。それと同時に観客、主に男性の声が上がった。

「もらった！」

ボールを手にしたのは相手チームのショートヘアの女子高生だった。それを合図に他の2人はショートヘアの女子高生の両サイドを泳いでガードを固めた。

「ボールに触れない！」

2人のガードが邪魔して春奈も真理もボールに触れることさえできなかった。

「これでまず先取！」

そう言ってショートヘアの女子高生はボールをゴールライン向けて投げた。

「卓！ 止めてってあれ？ 卓はどこ！？」

真理はさっきまでゴールライン前にいた卓の姿を探した。

「あれは入ったわね。」

相手チームの女子高生3人はゴールを確信してハイタッチをした。

「城根〜！」

春奈の叫び声の次の瞬間、プールの中から卓が思いっきり飛び出た。大きくジャンプした卓は腕を上には伸ばし、ゴールライン前を飛んでいたボールを弾いた。

「言つたる、男がいる俺らが有利だつて。」

ボールを弾かれた相手チームの女子高生たちは驚愕の表情を見せていた。

「卓！」

「よくやった城根！」

真理と春奈もガッツポーズをとった。

「男の俺の方が身長も高いし、腕も長いからな。ここのプールの

水深は2メートル50センチある。身長がある分もぐるのも楽し、地面を蹴ってジャンプする高さも身長の方が有利になるからな。」

「よしっ！ 今度はこっちが攻める番よ！」

春奈はそう言っつて相手側のゴール前まで泳いでいった。

「すぐにゴール前をカバーするわよ！」

女子高生チームも春奈を追って自分たちのゴール前まで移動した。

「真理、行くぞ！」

女子高生チームと卓の間にいた真理に卓はボールをパスした。

「オツケー！」

真理は小さくジャンプして頭上に落ちてきたボールを上手くキャッチした。

「あそこからシュートするつもり！？」

女子高生チームに焦りが生まれた。そのうちの一人が急いで真理の元まで戻った。

「はああああ！」

真理はまた小さくジャンプして相手ゴール目がけてボールを投げた。ボールは真理の元に戻ってきた女子高生の手が届かないぎりぎりの高さを平行飛行しながら飛んで行った。

「あんなところからシュートなんて！」

春奈の近くにいた2人の女子高生はジャンプして腕を上にした。そのうちの一人の指先がボールをかすめてボールの軌道がゴールラインから大きくずれてしまった。

「ヤバい！」

卓は焦った表情を見せた。

「大丈夫！」

ゴール前にいた春奈が一度プールに潜って床を蹴って勢いをつけてから水面から飛び出た。そしてそのまま空手の突きの構えをとった。

「いつけええええ！」

春奈はボールを突きでゴールラインにボールを飛ばした。ボール

はそのままゴールラインに一直線で入った。

「な、なんとおおおお！ 見事なファインプレーです！ 素晴らしい先取点！」

春奈のゴールに司会も観客からも盛大な歓声が沸き起こった。

「よっしゃ！」

春奈のガッツポーズに真理と卓も親指を立てた。

「すごい！ 春奈！」

観客側で見ていた蓮華も何度も拍手していた。

それから春奈チームの猛攻は止まらず、その試合の結果は8対3で春奈チームの勝利となった。

「初戦大勝利！」

試合が終わって観客側にいた蓮華と合流した3人は4人でハイタッチした。

プールでは既に第2戦が始まっていた。

「なあ真理……」

試合が行われているプールを見た卓はポンポンと真理の肩を叩いた。

「何？」

真理が卓の顔を見上げると卓は無言で試合をやっているプールを指差した。真理は卓の指さす方を見ると硬直した。

「え、な、何で……」

そこには真理の実の兄、篠崎謙介が試合を行っていた。

「さつきは気がつかなかったけど、やっぱりあれ謙介さんだよな……」

「……？」

卓の質問に真理は小さく頷いた。

謙介はプールの中を華麗に動き回ってボールをさばっていた。その謙介の動きに合わせて動き回るのは謙介の討伐者としてのパートナーである要と、卓も真理も見たことのないたくましい体つきの男だった。

「ん？ どうした2人とも。」



卓と真理の様子が変わったことに気がついた春奈は顔を覗き込んだ。その横で蓮華も少し心配そうな表情をしていた。

「あ、あのチーム上手いわよね。でも私たちなら大丈夫よ！」  
卓と真理の様子が変わった理由を勘違いした春奈は小さくガッツポーズを作ってウィンクした。

「ははは。まあそうだな。」

卓の口からは乾いた笑いしか出てこなかった。真理にいたっては今だに口をパクパク動かしている。

そんなやりとりをしている間も試合は休むことなく進んでいた。

「要！ 今がチャンスだ！」

「分かってるわよ！」

ビキニ姿の要はその引き締まった綺麗な肢体をさらに際立てていた。そんな要は謙介からボールを受け取ると華麗に水面から飛び出てそのままゴールラインにボールを投げ入れた。

「よっし！」

それを確認した謙介は少年のような無邪気な笑顔で拳をぐっと天井にかざした。

「ほう、なかなかのテクニクだ。」

謙介チームの見ず知らずの男も腕を組んで何度も力強く頷いていた。

その試合は一方的で14対0で圧勝となった。

「謙介さんたち、強かったね……」

試合を見終えた卓は真理に呟いた。

「……そうね。」

真理も棒読みのような言い方で返事をした。

「さあ第2試合も気合い入れて行くわよ！」

事情を知らない春奈は変わらずハイテンションでまたプールに入った。蓮華もまた一人観客席に戻って行った。

「まあ、謙介さん達とはトーナメントが違うから、お互い決勝行かない限りは直接対決はないだろうしな。」

「でも私たちが負けたら春奈怒るわよ？」

「……だよな。」

卓と真理は重いため息をつきながらプールに入った。

それから卓達は次々と試合を勝ち抜き遂に決勝進出が決まった。

「よつつつつつつつっしや！」

決勝進出を決めた春奈はプールサイドで大きくガッツポーズをとった。

「おめでとう！」

蓮華も心から3人の決勝進出を祝った。

「あはは！」

唯一事情を知る卓と真理は苦笑いしか出来なかった。

4人はもう片方のトーナメントの試合状況を見に行くと案の定謙介チームが決勝進出を決める最終試合を行っている最中だった。

謙介チームの相手は巨体と凝縮された筋肉を持つ男3人組だった。これはなかなか強敵だったらしく点数も8対7で僅差でリードしているだけだった。

「謙介！ あと2分何としても逃げ切るわよ！」

ゴール前を守っている要が攻めに出ていた謙介に叫んだ。

「分かってるよ！ おじさん！ 二人でパスを回しながら進みま  
すよ！」

「おう！ 了解だ青年！」

謙介と体格のいい男はフィールドの両サイドに分かれて高めのパスを回しながら少しずつ前に進み始めた。

「3人で両方とも潰すぞ！」

筋肉の男たちは謙介を一人、もう一人の男を2人がかりで潰しかかった。

「ふっ、俺達2人に気を取られ過ぎだよ。俺達は2人チームじゃないんだぜ？」

そう言っただけ謙介は迫りくる男に目もくれずゴール前にポンとボールを投げた。

「馬鹿が！ そんな飛距離じゃゴールにならん！」  
すかさず筋肉の男はそのボールを取りに行った。

「だから、俺達も3人1組なんだって。」  
ゴール直前に落下し始めるボールの下から潜水して自分のゴール前から相手のゴール前まで来た要が現れた。

「なっ！？」 馬鹿な！ この距離をずっと潜水で進んできたというのか！？」

「これで終わりよ？」

要は筋肉の男にウイנקを一つ飛ばすと落下してきたボールをキヤッチしてそのままポンとゴールラインに入れた。そこで試合終了のホイッスルが鳴り響いた。

「決勝進出を決めたのはこの2チームです！」

結局、決勝は春奈チームと謙介チームに決定した。

「真理、実の妹とはいえ手加減はしないぞ？」

「はいはい……」

やたらと絡んでくる謙介を真理は面倒くさそうに適当にあしらった。

「あの、謙介さん、その男の人は誰なんですか？ 初めて見るんですけど。」

「ああ。それも当然だろう。なんせこの人は試合に出るためにそこらへんを歩いていたおじさんを適当にチームに入れたのだから。」

謙介はそんなセリフを爽やかな笑顔で言い放った。それには真理や卓だけでなく要ですらため息をこぼしていた。

「まあせつかくお互い決勝まで来たんだ。全力を尽くそう。」

そう言っつて謙介は卓に握手を求めた。卓もそれに応じた。

「ねえ城根！ このかつこいい人誰！？」

さつきから黙っていた春奈は目をこれまで見たことないほどにキラキラ輝かせて質問してきた。

「あ、ああ。この人は篠崎謙介さん。真理のお兄さんなんだよ。」

「え！？ 真理ちゃんの！？」

「う、うん。」

真理は少し気まずそうに肯定した。

「真理ちゃんにお兄さんがいたんだ〜」

蓮華も謙介とは初対面なのでへえ〜などとはぼしていた。

「君たちは真理の友達かい？ これからも真理と仲良くしてやってね。」

謙介の爽やかな笑顔に魅せられた春奈はもちろんです、と何度も頷いた。

「じゃあ後ほど決勝で会おう。」

そう言って謙介チームは反対側のプールサイドに向った。

「はう〜。すごいかっこいいじゃない……」

春奈は謙介の後ろ姿をまだ眼で追っていた。

「やめといた方がいいよ？ 見た目だけじゃ分からないことなんていっぱいあるし。」

妹目線からしか謙介を見たことが無い真理は単調な言い方で春奈に言い放った。

「そんなことないよ〜。きっと中身もかっこいいって!」

春奈は完全に謙介のことを目線から外すことはなくなっていた。

「はあ……」

真理は今日だけで何回目になるかも分からないため息をついた。

「まあでも確かに謙介さんはかっこいいと思うぞ?」

卓はため息をついた真理の頭にポンと手を置いた。

「確かに優しいし、討伐者としての実力もトップクラスなんだけどね。でも、どこか抜けてるところがあるっていうか。」

「はは、まあそれも謙介さんの魅力なんじゃないか?」

「だといいんだけど。」

そんな話をしていると水球の決勝戦が始まるアナウンスが施設内に流れた。

「じゃあ私たちも準備しますか!」

蓮華と春奈はハイタッチを済ますと蓮華は観客席に、春奈、卓、

真理の3人はプールサイドでスタンバイした。

「さあ！ 水球大会もいよいよ大詰め！ 決勝戦がついに開幕だ  
あああ！」

相変わらずハイテンションな司会の声はこれでもかと言うほどに  
響いた。

「ここまで残った両チームは一体どんな白熱した試合を見せてく  
れるのか！？ 観客のみんなも期待の眼差しをみせているぞ！ で  
は両チームプールに入ってスタンバイしてくれ！」

司会の言葉を合図に両チームとも計6人が同時にプールに飛び込  
んだ。

「熱き戦いをここで繰り広げてくれ！」

司会の言葉の後にホイッスルが鳴り、プールの真ん中にボールが  
投げ込まれた。

「妹がいるからといって手を抜くつもりはないよ！」

まず最初に謙介が勢いよくボールを取りに行った。

「男なら男の俺が行くぜ！」

そう言っただも負けじとボールの元へクロールで泳いで行った。

だが、ボールに先に辿り着いたのは数秒の差で謙介だった。

「よしっ！」

ボールを片手でがっちりホールドした謙介はゴールまでの距離と  
後ろにいる他の2人との距離を確認した。

「よそ見してる場合ですか？」

その際に卓はジャンプして謙介の手からボールを弾いた。

「しまった！」

謙介はすぐに水面に落ちて揺れるボールを再び取りにかかった。

「今度は渡さない！」

卓は水面からジャンプして勢いよくボールに飛びついた。そして  
両手でボールをしっかりとキャッチすると謙介に背中を向けて春奈に  
バックパスした。

「よしこのままゴールを決めちゃうわよ！」

ボールを受け取った春奈はそれを落ちないようにがっちり掴んで泳ぎ始めた。すると正面から綺麗で無駄のないフォームで泳ぎ迫る要の姿が春奈の視界に入った。

「そんなボールの持ち方だとすぐに取られちゃうよ?」

要はクスリと余裕の笑みを見せてするりと春奈の持つボールのところに自分の腕を潜り込ませてすれ違うその一瞬で見事にボールを奪取した。

「なっ!?!」

要の流れるような美技に春奈は驚きを隠しきれなかった。

「ごめんなさいね、あまり大人げないとか思わないでね?」

要はそのまま春奈チームのゴール前まで泳ぎ切った。そしてゴール前で止まるとボールを投げるフォームをとった。

「まずは先制点!」

しかし、要が前方に腕を振り切ってもボールはゴールには入らなかった。それ以前にボールはどこにもなかった。

「私のこと忘れないでよ。」

ボールは投げるフォームに入った要の後ろにいた真理の腕の中にあつた。

「いつの間に!?!」

「投げるときに一番隙が出来るからそのときにひょいっとボールを奪っただけよ。」

真理は得意げな表情を見せてから中間地点にいる春奈にボールをパスした。

「真理ちゃんナイスプレー!」

ボールを受け取った春奈はすぐに泳ぎ出そうとして体の向きを変えたがその先には謙介が立ち塞がっていた。

「真理の友達でも勝負事では手加減しないからね?」

「はうわっ!」

謙介の笑顔に赤面した春奈は思わずボールを適当な場所に投げて、謙介チームのおじさんの前に落下した。

「おじさん！ チャンスだ！」

春奈チームのゴール付近にいたおじさんはボールを掴んで投げた体制に入った。その次の瞬間、少し離れたプールでドバアというすさまじい轟音が鳴り響いた。

「何だ！？」

水球をしていた6人はもちろん、司会や観客もみんなしんと静まり返った。その後、轟音のした方向から水着姿の客が大勢走ってきて施設内はパニックに陥った。

「卓！ あれ！」

真理は轟音のしたプールを指差すとそこには全長7メートルはあるであろう巨大な水の竜がいた。水の竜の中心部分は青白く光っていて、むしろ光が大量の水を纏って竜の形を作り出しているようにも見えた。

「魂玉が水を纏っているのか！」

謙介と要はすぐさまプールサイドにあがった。

「何何？ なんなのあれ？」

事態が飲み込めない春奈は卓の身体を揺さぶって訊いた。

「分からない！ とりあえずお前は蓮華と避難しろ！ 真理！」

「分かってる！ 我、この世界との……あつ！ 石更衣室に置いてきたんだ！」

「なつ！ て俺もだ！」

2人が焦っている間に施設内はいつの間にかしんと静まり返っていた。聞こえるのは水の竜の雄たけびのみだった。

「断絶された……？」

卓は急に断絶されたことに戸惑いを隠せなかった。

「討伐者は石を常に身につけている者よ？」

卓と真理の元に来た要は自身が付けているイヤリングをピンと指で弾いた。イヤリングの先には翠の贈与の石がぶら下がっていた。

「じゃあこれは要さんが？」

「当り！」

要は卓にウイंकを飛ばした。

「私としたことがこんなミスをするなんて……。」

真理は悔しそうに拳に力を込めた。

「あれ？ でもなんで石を持っていない俺達が断絶された世界にいられるんだ？」

「あなたたちは石の力を一度直接体内に受けているのよ。それがきつと影響しているのね。もともと石の力は所有者の心と共鳴して発動するものだから。」

「なるほど……。」

卓は自分の胸に静かに手を当てた。

「つてこんなに悠長に話している場合じゃなかったわね！」

水の竜は卓たちに気がついて雄たけびを上げたあとで大量の水を飛ばしてきた。

「ヤバい！」

すぐさまその場を逃げようとした卓は足がもつれてその場に転んだ。

「連鎖防壁！」  
れんさぼうへき

転んだ卓とその後にはいた真理に遅いくる大量の水は要の武器である先端が刃物になっている長い鎖を高速で円状に回転させて弾いた。

「大丈夫か！？」

水の竜付近で戦っていた謙介が一度卓たちのところに戻ってきた。謙介の首からはネックレスになっている贈与の石があった。

「ええ。今は私が防いだけど。でもこの子たち石を更衣室に置いてきたみたいで。」

4人が集まったところに水の竜は再び大量の水を吐き出した。

「ふんっ！」

謙介は背中を向けたまま大量の水を剣一本で切り裂いた。

「なら俺達が相手している間にさっさと取りに行くんだ！ アイッ程度なら俺と要だけでも勝てると思うが、圧勝といわけにもいかないかもしれない。せめて石させあれば真理と弟くんも自分の身く



「らいは守れるだろ。」

「……分かりました、行くぞ真理！」

「うん。」

卓と真理は謙介たちに背を向けて急いで更衣室への入り口のほうに駆け出した。

「さーで、せっかくの決勝戦を台無しにしてくれた責任はちゃんと取ってもらうぞ？」

謙介はにやりと笑って水の竜に向き直った。

「でも、謙介。今までこんな見たことある？ 魂玉が別の物体を身にまとうなんて……」

要は少し考え込むように奢に手を当てた。

「確かにこんなことは今までではなかった。だけど、それは今までやってこなかったただけであって、魂玉自体には元からこのような能力はあったのかもしれないな。つい先日だって魂玉同士が集まって巨人になったりしていたわけだし。」

「確かに。それともう一つ分かるのが魂玉は何かを纏ったりすることでその物体を自在に操ることが出来るということね。それは物体を武器にすることはもちろんだけど、生成することすらも可能なのかもしれない。」

「どういう意味だ？」

謙介の質問に要はこちらを向いて威嚇するようにうめき声を上げる水の竜を指差した。

「さつきアイツは大量の水を2回も放出したのに、竜自体の大きさは全く変化していないの。普通自分の身に纏った水をあれだけ吐き出したら一回りくらい小さくなるはずなのよ。なのにアイツにはそれが無い。ってことは身に纏った水とは別に水を生成していることになるはず。」

要の表情は段々と深刻になっていた。

「なるほどな。そう考えた方が自然かもしれない。なら水の中に光っている魂玉本体を直接攻撃するしかないな。」

謙介がそう言つて剣を構えた後に水の竜は施設内に響くほどの大きな咆哮を飛ばした。すると施設内のプールから水の竜巻が幾つも現れた。

「なんて力!？」

要はすぐさま竜巻から一定の距離を取つて鎖を自分の元に手繰り寄せた。

「要は周りの竜巻を頼む! 契約の紫、我に躍進の力を与えよ!」

謙介の詠唱に共鳴したペンダントに着いた贈与の石が光り輝いてその光が謙介の身体に纏つた。

「連鎖一貫!」

要の鎖は大きな円を描くように空中浮遊して一つ一つの竜巻を確実に貫いて行つた。だが一度貫いて消滅した竜巻はすぐにまた同じところから現れて行く。

「これじゃキリがない!」

要は悔しそくに歯ぎしりした。

「うおおおお!」

贈与の石で身体能力を跳躍的に伸ばした謙介は剣を構えたまま水の竜の懐まで飛んでいた。

「きしゃああああ!」

謙介を確認した水の竜は雄たけびと共に自らの身体に纏っていた水を何本もの槍のように変形させて謙介目がけて飛ばした。

「ふんっ!」

謙介は剣を横に大振りで振つた。すると剣からゴオンと風を切る音と共に巨大な斬撃が放たれ水の槍を次々と破壊していった。

謙介は一旦そのままプールサイドに着地してからすぐにまたプールサイドを蹴りあげ水の竜に突っ込んだ。

「謙介! 後ろ!」

再び跳び上がった謙介の背後から他のプールから発生した竜巻が襲いかかってきていた。

「しまった!」

謙介が防御の構えを取ったときにはすでに遅く、巨大な竜巻は謙介を完全に飲みこみそのまま流れるプールに直撃した。

「謙介！」

すぐに流れるプールに駆けつけようと要が一步を踏み出した瞬間、流れるプールからすさまじい量の水しぶきが出た。水しぶきの中から輝かしい黄金の光を纏った剣を手にした謙介が現れた。

「謙介……」

再び現れた謙介はさっきとは比べ物にならないほどの威圧感を帯びていてそれを感じ取った水の竜は全部の竜巻を謙介に向けて放った。

「散れ……」

謙介は一言そう呟いて黄金の剣を軽く一振りした。剣から放たれた黄金の斬撃は竜巻を物の見事に粉碎した。だがその後にはやはり途絶えることなく新たな竜巻が生み出された。

「要、アイツの動きを鎖で止めてく……」

謙介の言葉は途中で途絶えた。いや、謙介の視界に入った3頭の水の竜が言葉を途絶えさせたという方が正しい。

「えっ!?!」

謙介の様子が変わったことに気がついた要もすぐに振り返るとそこにはさっきまでの竜の他に2頭増えて、合計3頭の水の竜が威風堂々と君臨していた。

「一体いつの間に……」

謙介の額からはやけに冷たく感じる汗が滴り落ちた。

「一体でも厄介なのにそれが3体なんて……」

要は鎖を握る手に力を込めた。

(急いでくれ、真理、弟くん)

そのころ更衣室に向った卓と真理はあまりに広すぎるこのプール施設で道に迷っていた。

「卓、更衣室ってどっち!?!」

「何!?! 俺はてっきり真理が知ってるもんだと思って着いてき

たのに。」

背後で謙介と要と水の竜の激しい戦闘が行われている中二人は口論で争っていた。

「人のせいにするわけ!？」

「誰もそんなこと言っていないだろう!」

「だったらどこに更衣室があるか教えなさいよ!」

「だからさつきから案内とか探してるんだろ!」

卓は断絶のせいで施設の係員がいなかったため辺りを見回して更衣室の案内を探した。

「さつきどこからプールに出てきたんだっけな……」

卓は更衣室の案内が見つからず焦り始めて頭をクシャクシャとした。

「卓、あっちじゃない!？」

真理はそう言って無人のやきそばの屋台の方を指差した。

「やきそば屋? そういえばさつきやきそば買ったときに更衣室の入り口が近くにあったような……行くぞ!」

卓は真理より先にやきそば屋の方に駆け出した。

「あつ! 待ってよ!」

真理もすぐに卓の後から走り出した。

「おつ! 本当だ! 更衣室の入り口あったぞ!」

先に辿り着いた卓が更衣室と書かれたプレートを発見して真理を手招きした。

「やつぱり私って天才!」

真理は小さくガツポーズを取って卓の元まで着いた。次の瞬間二人の目の前に黒い霧が突然現れた。

「えっ? 何!？」

黒い霧を発見した真理はすぐに一步下がった。

「なんだこの霧!」

卓も真理と同じところまで下がって霧を警戒した。

「くふふ。お久しぶりですねお二方。」

黒い靄が晴れるとそこから夏という季節感を完全に無視した膝までかかる黒のロングコートを来て腕に杖をぶら下げた長身の男、魂の傀儡子が現れた。

「「！！！！？？？」」

真理も卓も突然現れた男を見ても声が出なかった。

「5年ぶりくらいですか？　そこまで再会に感動していただけたとは思っていませんでした。光栄ですよ。」

魂の傀儡子はくすりと悪戯にほほ笑んだ。

「た、魂の傀儡子……」

真理は拳をぎゅっと握って魂の傀儡子を睨みつけた。

「コイツ……」

卓も魂の傀儡子から視線を反らさなかった。同時に卓の脳裏には5年前に炎の中で魂の傀儡子に殺されかけたときのことを鮮明に思い出した。卓の額からは嫌な汗がどんどんにじみ出していた。

「おや？　どうかされましたか殿方さん？　顔色がとても悪いですよ？」

卓の様子が変わった理由など分かりきったうえで魂の傀儡子は目を細めて口元を緩めた。

「今度こそ俺達を殺すのか……？」

「はい。」

魂の傀儡子は間を開けることなく返事した。

「「……」」

魂の傀儡子の返事に卓も真理も黙りこくった。

「ふふ、冗談ですよ？　今日はまだ殺したりなんかしませんよ。私の目的の人も蚊帳の外に追い出されてしまったようですよ。」

「目的の人……？」

真理が聞き返すと魂の傀儡子は人差し指を立てて自分の唇にそっとう当たった。

「私のような紳士的な男には秘密の一つや二つあるものですよ。それをわざわざ言いふらすほど私は駄目な男でもありません。」

「わざわざ俺達を生かす理由は何だ……?」

「別に生かすというわけではありませんよ。結果的にそうになってしまうだけです。今ここであなたたちと争ってもすぐに彼らが駆けつけてくるでしょう?」

そう言つて魂の傀儡子は杖で水の竜と謙介たちの戦闘が行われている場所を指した。

「さすがに4対1では分が悪すぎますので。それに私でなくてもあの竜たちが十分楽しませてくれますよ。ただ今日は久しぶりにあなたたちの顔を見に來ただけですので私はこれで失礼します。」

魂の傀儡子は再び黒い霧に包まれて、霧が晴れたときにはその姿はどこにもなかった。

「卓! あれ!」

真理は水の竜が3体になっていることに気付いて指差した。

「なっ!? 3体!？」

「さすがにお兄ちゃんでもあれはきついかも……」

真理は不安そうな表情で戦闘を見ていた。

「真理! とりあえず今は一刻も早く石を取りに行くぞ!」

「……うん!」

卓と真理は再び駆け出し、それぞれ男子用、女子用の更衣室に入つて行った。

## 平穩と序章の終止符（後書き）

「約束の蒼紅石」第4話いかがでしたでしょうか？今回は季節外れもいいとこのプール回になってしまいました（笑）まあその辺は今年の夏なんかの思い出を思い返しながら自分の夏と照らし合わせながら読んでいただけると少しは暑くなるのではないのでしょうか？  
ってそんなんで暑くなったら冬は苦労しませんよね〜 作者もこの寒い中かじかむ手で執筆しているわけなんですけれどもそろそろさすがにマフラーなんかがほしくなる時期ですよ！少し時間が空いたときにもいい感じのマフラーを探しに行きたいと思います！  
では、次回の話も楽しみに待っていたけると幸いです！

## 二人の決意（前書き）

こんにちは夢宝<sup>むほう</sup>です。いよいよ寒さも本格的になりましたね。なんと実は今日、作者の住んでいるところでこの冬初雪が降りました！もおびつくりですよ！ちょっと今日は朝からそんな調子でテンションが上がっております（笑）

さて、ここで余談なのですが、この作品「約束の蒼紅石」は一話一話長いと感じている読者が多いと思うのですが、実は毎回、文字の大きさは10.5でワードで25ページ分ずつ書いているのです！そりゃ長くもなりますよね（笑）ただこれも結構毎回書いていくのが大変なのですが、実際に読んでみると結構すぐ読み終わってしまっんですよね。だから！できればゆっくり味わって読んでいただけると嬉しいな。というのが作者の希望でございます（笑）そんなわけで「約束の蒼紅石」第5話「ゆっくりどうぞ」



## 二人の決意

卓は一人無人の男子更衣室まで来て、手首に下げていたロッカーのカギで扉を開けた。

「あつた！」

卓は脱いだズボンのベルトに結んであつた贈与の石を手を取った。

「急いで戻らないと！ うわっ！」

すぐにプールの方に戻ろうと振り返った卓の目の前に一人の女性が立っていた。女性は細身で長い漆黒の髪だった。

「驚かせてしまいましたか？ 私のこと覚えていますか？」

女性は柔らかな笑顔を見せた。

「えつと、すみません……」

卓は少し気まずそうに女性から視線を反らした。

「先日、シヨップिंगモールでお会いしたと思いますが。」

女性はくすりと笑った。

「シヨップिंगモール……？」

卓は少し考え込んでこの前シヨップिंगモールに行った時のことを思い出していた。

「……あつ！」

「思い出していただけたようですね。」

女性は満足そうにほほ笑んだ。この女性は卓と蓮華と一緒にシヨップिंगモールに行ったときに服屋で卓とぶつかった女性である。

「は、はい。……あれ、なんで動ける……」

卓は断絶された中で普通に動いている女性に疑念を抱いた。

「ふふ、それはいずれ分かりますよ。それより今はあの暴れん坊の竜を何とかしなくてはいけないのですよね？」

女性は卓の目の前で人差し指をピツと立てて得意げな表情をした。

「えつ、ま、まあ。」

「ですが、今のままでは勝てませんよ？」

「なっ!?!」

卓は女性の全てを見透かしたような瞳に瞬時に一步距離を取った。今の女性に以前に会った時のような頼りなさは全くと言っていいほど見当たらなかった。

「でも安心してください。私はあなたに力を与えに来たのですから。」

女性はそこで話しを一旦止めて卓の手から贈与の石をひょいと持ち上げて軽く口づけした。

「何を……」

卓はすぐに手に戻された石と女性を見比べた。

「いつまでもというわけにはいきませんが今回の戦いくらいなら力を与えてくれるはずですよ。これは私からのお礼です。」

「お礼……?」

「ええ。近いうちにあなたは私の願いを叶えてくれるはずですよ。」

だからこれはその前払いです。」

「それってどういう意味……」

卓が次に女性の方に視線をやるとすでに女性はいなくなった。卓は更衣室を探し回ったがどこにも女性は見当たらなかった。

「一体どこに……って今はそれどころじゃなかった!」

プール側から聞こえてきた戦闘音に我を取り戻した卓は全速力で更衣室の出口からプールサイドに出た。そこで丁度女子更衣室から出てきた真理と鉢合わせした。

「卓! 石はある?」

「ああ!」

そう言って卓と真理はお互いに石を確認した。その後目と目でアイコンタクトを取って頷いた。

「具現せよ! 我が剣!」

2人の声は完全に重なり、石はそれぞれ蒼と紅に光り出し、卓の手には長刀を、真理の手には日本刀が現れた。

「卓、それ……」

真理は具現された卓の長刀の異変にすぐ気がついた。

「えっ……」

卓は自分の長刀を見るとそれは薄い白桃色の光で包まれていた。

「どうしたのそれ……?」

(もしかして、さっきの人が言っていた力なのか?)

卓はさっきのやりとりを思い出しながら自分の長刀を眺めた。

「真理! 弟くん! まだか!？」

すると奥の方のプールから3体の水の竜を相手にしている謙介の  
声が聞こえてきた。

「卓! とにかく急ごう!」

「ああ!」

真理と卓はそれぞれ刀を構えて水の竜に近づいた。水の竜はすぐ  
に2人に気がついて3体のうち2体が囲むように構えた。

「真理は右のやつを頼む!」

「分かった!」

真理と卓は背中合わせにそれぞれ竜に向いあった。

「気をつけてね二人とも! そいつら想像以上に強いわよ!」

謙介と2人がかりで残りの一体を相手にしていた要の忠告が飛ん  
できた。要も謙介もさっきまで3体の竜を同時に相手にしていたた  
め息が切れてとても援護に入れるような余裕はなかった。

「分かっていますよ!」

卓は腰を少し降ろして脚にふんばる力を込めて、自分の身体の正  
面に白桃の光を纏った長刀を構えた。

「きしゃああああ!」

卓と向き合っていた水の竜は咆哮と共に口から巨大な水鉄砲と放  
った。

「卓!」

背中合わせに立っていた真理はすかさず振りかえった。

「うおおおお!」

卓は水鉄砲に勢いよく飛び込んで長刀でそれを切り裂いた。する

と次の瞬間に水鉄砲は歪な形で崩れ始め、卓の長刀に吸い込まれていった。最後は水の一滴も残さず長刀に吸い込まれた。

「「えっ!?!」」

真理はおるか、卓自身も驚きを隠せなかった。その様子を横目で見ていた謙介と要も一瞬の間動きを止めて驚愕した。

「今のつて……」

卓は水を吸い込んででも全く変化のない光に包まれた日本刀を見た。

「謙介、あれつて……」

「ああ。間違いない。贈与の石でも最高峰の力の一つ、ホーリー聖なる加プロテ護だ。クター」

謙介はそれを見て勝ちを確信したように口元を緩めた。

「弟くん! その刀で竜自身を切りつけるんだ!」

卓からは30メートルくらい離れた場所から謙介は施設内に響き渡るほどの声で叫んだ。

「……分かりました!」

卓は大きく頷いて再び竜に向き直って長刀を構え直した。

「契約の蒼! 我に躍進の力を与えよ!」

卓の詠唱と共に贈与の石は輝きだし、卓の全身を蒼の光で包んだ。その後卓はプールサイドを力強く蹴りあげ、そのまま勢いに乗って竜の半分ほどの高さまで跳んだ。

「これで最後だ!」

卓はそのまま落下の勢いを利用して長刀を水の竜に突き刺した。

水の竜は長刀の突き刺さったところの纏っていた水から吸い込まれ始めすぐに青白く光る魂玉本体が剥き出しで宙に浮いていた。

「要!」

その瞬間を見逃すことなく見ていた謙介の合図と同時に要は先端が刃物になっている鎖を投げ、それは見事に剥き出しで宙に浮いていた魂玉を貫通した。魂玉は鎖に突き刺さったままプールサイドに墮ちて静かに炎上して消滅した。

「卓、すごい……」

真理も自分の相手の竜のことを一瞬忘れてしまつほど卓の攻撃に見とれていた。

「真理！ 次行くぞ！」

一度プールサイドに着地した卓はそのまま真理の方に体の向きを変えてそのまま勢いをつけて真理と対峙していた水の竜に突っ込んだ。

「魂玉本体は任せて！」

跳び上がった卓の下で真理も日本刀を構えた。

「契約の紅！ 我に躍進の力を与えよ！」

真理も卓と同様、光に包まれた。

「2体目！」

卓はさつきよりスムーズな手つきで2体目の竜にも長刀を突き刺した。やはりさつきと同じく、白桃の光に包まれた長刀に水はみるみる吸い込まれ水に包まれていた球体の魂玉は剥き出しになった。

「はああああ！」

卓が下に着地するのと入れ違いで卓が跳んだ高さと同じくらいの高さに今度は真理が跳んで空中で魂玉に向けて日本刀を構えた。

「いつけええ真理！」

卓の叫び声と真理の振り下ろした日本刀のタイミングは見事なまでに重なり、宙に浮いていた魂玉は真理の振り下ろした日本刀の刃で一刀両断された。

「よっし！」

卓は下でガッツポーズを取り、真理もプールサイドに着地すると静かに炎上していく魂玉を背に卓と軽くハイタッチをした。

「あらあら、あんなルーキーが2体も倒しているのに私たちはまだなんていいのかしらね？」

卓と真理の勝利の様子を竜と戦いながらチラ見していた要が謙介を煽るように言った。

「いいわけないだろ。」

謙介は水の竜の攻撃をかわし続けるために動き回っていたが急に

動きを止めて黄金の光を纏った剣を前方に構え、目を閉じた。

「はああああああ！」

謙介は目を閉じたまま剣に精神力を注ぎこむように力を込めた。すると黄金の光は次第に剣と同じ刃の形となっていていつて刃の部分のみに纏った。その大きさはもとの剣の約3倍ほどにまでなった。

「聖なる加護ほどではないけどな。1対ならこれで十分だ！」

謙介はそう言い放って光で巨大化した西洋風の剣を勢いよく振り切った。すると黄金の光は刃の形のまま放たれ、ものすごい暴風と共に水の竜に直撃した。あまりの暴風に周りのプールの水もほとんどあちこちに飛び散って、直撃を受けた水の竜が纏っていた水も一瞬だけ魂玉が剥き出し状態となった。

「はあはあ……要！」

巨大な一撃を放った後の謙介の息は上がっていた。

「了解！ 連鎖一貫！」

要はその一瞬を見逃すこともなく華麗な鎖裁きで魂玉に向けて鎖を投げた。鎖は一寸のずれもなく球体の魂玉のど真ん中をすぱっと貫通し、そのまま魂玉は鎖に貫かれたまま炎上して消滅した。

最後の竜の消滅に伴って、周りのプールで発生していた竜巻もいつの間にか消えていた。

「……苦戦したな。」

謙介はあからさまに疲れ切った表情をしていた。

「あら？ 最強の討伐者ももう引退かしら？」

そんな謙介の様子を見て鎖を石に隠匿した要がいたずらっぽく笑った。

「馬鹿を言うな。まだまだ現役だ！」

からかわれた謙介も負けじと剣を振り回し、一通り終わったところで剣をしまった。

「謙介さん！」

謙介と要の元に卓と真理も駆け寄ってきた。

「真理、弟くん。いや、助かったよ。ありがとう。」

謙介はさつきまでの疲れきった表情を完全に隠して、笑顔で卓に手を指し伸ばした。

「いえ、こちらこそ。」

卓も握手に応じた。

「ところで弟くん、さつきの力は一体どこで手に入れたんだ？」

この前会った時にはなかったと思うんだが？」

謙介の質問に真理も要も卓の答えを気になっているようで興味の眼差しで見ている。

「あの、俺もよくわからないんですけど、さつき更衣室で女の人に会って、その人が少しだけ力を与えてくれるって言うてくれて、それで……」

「女の人？ この断絶の中でかい？」

卓の言葉に謙介と真理、そして要も怪訝そうな表情を浮かべていた。

「はい……なんかこう黒髪で大和撫子風の人でした。もしかして討伐者なんですかね。」

謙介は手を顎にあてて少し考え込んだ。

「どうだろうな。ただ、断絶の中で動けるということは石の力が何かしら関与しているか、もしくは冥府の住民か。」

「でももし冥府の住民なら彼に力を与えたりするかしら？」

今まで黙って話を聞いていた要が口を開いた。

「まあ普通はそんなことしないだろうな。だが、冥府の住民についての情報はあまりに少なすぎる現状では断定もできないだろう？ あくまで可能性の一つとしてだ。そういうこともありえるということを考えに入れておいて損はないだろ。」

「ねえ卓、その人他に何か言っただの？」

「うん。他には特には言っただの？」

「そう。やっぱり手掛かりが少ないわね。」

4人は行き詰ったようにその場で考え込んだ。

「弟くん、実は君のさつきの力は贈与の石が与える力でも最強ク

ラスのものでね、名は聖なる加護。その実態はその光に触れた冥府の力を吸収するというものだ。つまりさつき冥府の力で操られていた水は光を纏ったその長刀に吸い込まれたというわけだ。」

謙介の言葉に卓は自らの長刀を見た。

「あれ？ 光が消えている……」

卓が長刀を見たときにはすでに白桃の光は消えていた。それに謙介と要も興味深そうに卓の長刀を見つめた。

「一時的に発動したのか。弟くんの意思で発動できるわけではないんだね？」

「たぶん……」

「そうか、いやそれが当然だ。俺でさえ未だに聖なる加護は発動できないんだからね。まだルーキーの君が本来使える力でもないんだ。だからこそ他人から力の受け渡しが可能ということを証明してしまった今回の件は思いのほか深刻な事態だね。」

「深刻？」

卓はなぜだろうという表情で首を傾げた。

「真理から聞いているとは思うが、贈与の石はその所有者の得た経験値に比例してそれに見合っただけの力を与えてくれるものだ。けれど、さっきの聖なる加護は100年以上戦い続けても得られるかどうか分からないという代物だ。それをここ数日戦っただけの弟くんが使うなんてことは深刻というには十分すぎる。」

「ホント、何者なのかしらねその女の人。」

要は少し楽しげに言った。基本的に不思議な怪奇などを好む要はこう言った類の話は好きなのだ。

「その女が何者のもてもあまり時間はないな。もう今日から始めるしかないか。」

「始めるって、訓練を？」

真理が謙介の前に出て聞いた。

「もちろんだ。もう時間が無い。今日から1週間は掛かるんだ。それでも間に合うかどうか保障は出来ない。」



「……そう。」

真理はすぐに謙介から卓の顔に目線を変えた。真理は確かに卓の瞳に覚悟が見えたのを確信した。

「じゃあ断絶を解くぞ、二人とも武器はしまうんだ。」

謙介の命令に卓と真理もすぐに刀を隠匿した。その後謙介は目を閉じて首から下げていた贈与の石を握るとプール施設内に再び騒音が戻った。

「あれ？ さっきの水の塊は!？」

断絶される前まで蓮華の近くまで避難していた春奈がさっきの水の竜を探してキョロキョロしていた。他の客も逃げるのを止めて事態が治まったのを確認してパニックはなんとか治まった。

「たつくん！ 真理ちゃん!」

少し離れたところから蓮華と春奈が駆け寄ってきた。

「2人とも大丈夫だったか？」

卓の質問に2人とも元気よく頷いた。

「なら良かった。あ、それでこの後なんだけど俺と真理はちょっと用事が出来て帰らなくちゃいけないんだ。」

「え〜!？ 何よそれ。」

卓の言葉に春奈は不満そうな表情を浮かべた。

「何かあったの？」

蓮華の質問に卓はああ、とだけ答えた。それでも蓮華は大体のことを悟った。その上で静かに、それでも深く頷いた。

「じゃあ春奈、私たちも帰ろうか。」

蓮華はそれだけ言い残して春奈の手を握ってそそくさと更衣室に向った。春奈だけは状況が分からずに戸惑いながら蓮華に引っ張られて行った。

(悪いな蓮華……)

卓は心の中で蓮華に感謝しつつ謙介たちに向き直った。

「じゃあ俺達もこれから北にある灯台に向おう。」

謙介の言葉に要と真理は頷いて女子更衣室に行った。プールサイ

ドに残った謙介は動かなかつたので卓も様子を見ていた。

「弟くん、もしこの戦いが終わっても君は真理のパートナーとして討伐者であり続けるのかい？」

「えっ？」

卓は突然の質問に呆気に取られた表情をした。

「別に強制はしないよ。君が討伐者でなくなったとしても俺は君を責めたりはしない。むしろ君だって普通の高校生なんだ。こちら側にいつまでもいる義理は無いと思うしね。」

「……………」

卓は考え込むように黙り込んだ。

「この戦いだって本来なら君は参加しなくてもいいんだ。言っておくが命の保証はないよ？ これからやる特訓だって生半可なものでもない。引き返すなら真理のいない今がチャンスだと思うけどね。」

謙介の口調は段々子供を諭す様なものになっていた。

「謙介さん……………」

「何だい？」

「俺は5年前に真理にこの命を救われたんです。あの魂の傀儡子から。既に討伐者だったとしても小学生だった真理は俺と同じくらい怖かったはずなんです。それでも俺の命だけは助けてくれた。それからの5年間、俺は自分の無力さに悔しさを感じながら生きてきました。今だって真理を守るほど強くなつたなんて言えませんけど、それでも5年前よりは強くなつたと思います。」

謙介は卓の言葉に静かに耳を傾けていた。卓はそれを確認して続けた。

「そして、この前真理と再会出来た。今度はもう離れ離れになんてなりたくないんです。だからこそ一緒に強くなつていきたいんですよ。真理の後ろで守られてばかりじゃなく、今度は俺が真理の前でアイツを守つてやりたい。それが俺の願いですから。」

卓はそこで口を閉じた。卓が顔を上げて謙介を見ると、彼は嬉し

そうに何度も頷いていた。

「いや、素晴らしいよ。真理はとてもいいパートナーに巡り合えた。君になら安心して妹を任せられる。頑張ってくれ、これからの1週間、君と真理なら耐え抜けるはずだ。」

「はい！」

卓は拳に力を込め、謙介の目をしつかり見て返事をした。話しを終えた2人も真理たちと同様に男子更衣室に入って行った。

それから数十分後、卓、真理、謙介、要の4人は灯台近くのバス停にいた。

「この町はこんな外れにある灯台までバスが通っていて便利だね。」

謙介はふむふむと顎に手を添えながら満足げな表情を浮かべていた。

「まあこの灯台の周りにはちよつと前までは自然公園があったんですよ。その名残ですかね。」

卓は謙介の隣まで歩いて来て説明した。そんな話をしている間にすぐに灯台まで着いた。

「この地下に訓練用施設があるんだよ。」

謙介はズボンのポケットからカードキーを取り出し、灯台の入り口である高さ3メートル以上の鉄の扉の横にある機械にスライドさせた。すると機械に埋め込まれた液晶パネルに黄色い文字で《ロック解除》と表示され、ピツという電子音の後に重い鉄の扉がギギと音を立ててゆっくり開いた。

「さ、入って。」

先に謙介と要が入ってその後から真理と卓が入った。4人が入ると鉄の扉は勝手に閉まって最後はガチャンとロックの掛かった音が灯台の中に響き渡った。

「要、照明を。」

「はいはい。」

要がパチンと指を鳴らすと、暗闇だった灯台の中に一瞬にして蛍

光灯のような明るい光で包まれた。

「まぶしっ！」

急に明るくなったので真理は手で顔の部分に陰を作った。

光に照らされてよく分かるが、灯台の中は意外と広く、円柱型の灯台の中は真ん中にエレベーターが埋め込まれた太い柱が一本と、周りには上の階へと続く幅の広い螺旋階段が取り付けてあった。最上階には一応巨大なライトが取り付けてあった。それ以外はこれといって何の変哲もない灯台だった。

「この中央のエレベーターから地下に降りられるんだ。」

謙介はそう言って灯台の中心にあるエレベーターの扉の前まで歩いた。

「あの、でもこのエレベーターにはボタンが無いんですけど……」  
卓はエレベーターの周りを確認したが、確かにボタンもなく、それどころか階の表示パネルすらなかった。代わりに扉の近くに卓の背丈の半分ほどの高さの台の上に0から9までの数字が書かれた液晶パネルがあった。

「このエレベーターは地下のみの直通でね、ここの数字パネルに決められたパスワードを入力しないと作動しないんだ。」

謙介は喋りながらぱつと素早い手つきで10桁の数字を入力した。するとピピという電子音の後にエレベーターの扉が開いた。

「真理、弟くん。あとはこのエレベーターに乗るだけなんだが、もう一度聞く。覚悟は出来ているのかい？ 言うておくが本当にこの訓練は辛いものだ。でも2人とも強制されているわけじゃないんだ。エレベーターに乗ったらいよいよ引き返せないよ？」

謙介の質問に卓と真理は一瞬目を合わせてから再び謙介に向いあって頷いた。

「……覚悟は出来ている見たいだね。分かった。ならこのエレベーターに乗るといい。」

「卓。」

「ああ。」

卓と真理は同時にエレベーターの中に足を踏み入れた。

「頑張つてね、2人とも。」

要は片手で小さくガッツポーズを取った。卓と真理も振り返って同じポーズを取るとエレベーターの扉は静かに閉まって、それから間もなく下に動き出した。

「行ってしまったわね。いいの？ 妹さんのこと心配なんですよ？」

灯台の一階に残された要は隣の謙介に訊ねた。

「心配じゃないわけないだろ。けど、止めたところなのであの2人は聞かないだろ。それにもし覚悟が足りないならすぐにここに戻されるだろうさ。」

「見定め扉だったかしら。」

要は何かを思い出すように頭を指でちょんちょんと叩いた。

「ああ、少しでも自らの覚悟に疑念を抱いたら訓練を受けることすら出来ないからな。」

「謙介はすぐに戻ってきてほしいの？」

「……さあな。」

謙介は一言だけそう言つて螺旋階段の一番下の段に座りこんだ。

「素直じゃないんだから。」

要はクスリと笑つて灯台の壁にもたれかかった。

同時刻、エレベーター内部。

「卓」

卓はそのまましばらく待ったが真理は何も言わなかったので逆に質問した。

「何だ？」

「絶対……」

真理が言いたいことをなんとなく察した卓はふうつと息を吐いて言った。

「大丈夫だ。絶対に強くなるから。死んでも諦めたりなんて死ね

「よ。」

「……………うん。」

真理は卓の言葉に頬を赤らめて顔を地面に向けた。そんなやりとりの中、エレベーターの稼働音は止まった。

「いよいよね。」

「ああ。」

エレベーターの扉が開くと同時に卓と真理は同時に一步を踏み出した。

「これって……………」

エレベーターから降りるや否や真理が口を開いた。卓も口をあぐり開けていた。2人の目の前には灯台と同じ円状のフロアの壁に合計10個の扉が埋め込まれていた。エレベーターの扉が閉じると扉に張られていた張り紙が現れた。

「何か書いてあるぞ。」

その張り紙を見つけた卓は顔を近づけてそこに書いてある文字を読み上げた。

「えーっと。これらの扉からそれぞれ一つ選べ。苦難の道、安楽の道、選ぶのはおのれ自身、だってよ。」

「ここからは別行動になるってわけね。」

真理はすぐに10個のうちの一つの扉の前に立った。それを見た卓はフツと笑った。

「だな、迷うことなんかねえよな。俺達は強くなりに来たんだから。」

卓も真理の選らんだ扉の3つ隣の扉の前に立った。

「じゃあ、次会うときは強くなってからね。」

「ああ、次会うときには真理を守るくらい強くなってやるぜ！」  
卓と真理はぐつと拳を突き出して、それを確認してから同時にそれぞれの選んだ扉の中に入って行った。

そのころ灯台一階にいた謙介と要はさっきから一步も動いていなかった。

「もう一〇秒以上経ったわね。あの子たちなんなくクリアしたみたいよ?」

要はいたすらッぱく笑って見せた。

「みたいだな。あの扉はエレベーターの扉が閉じてから一〇秒以上経つとどれも開かなくなる仕組みだからな。それにどの扉を選んでも楽な道なんてのはない。あれはただ挑戦者の覚悟を確かめるための物だから。あの2人の言葉に偽りはなかった。それだけのことだ。」

「本当に素直じゃないわね、嬉しいくせに。」

「うるせ〜。」

謙介はブイと要から顔を背けた。

同じ時、地下で一つの扉を選んだ卓はある一定の間隔で小さな灯りが灯った薄暗くて長い廊下を歩いていた。

「こんな長い廊下、どうやって作ったんだよ。てかこの道合ってるのか?」

卓は廊下をキョロキョロ見渡しながら歩き続けていた。

「真理もこんな道だったのかな。」

卓がぶつぶつ呟きながら歩いていると突然大きく開いた広間に出た。その広間も廊下と同じく、周りに灯りがポツポツとあるだけで決して明るいとは言えなかった。ただ他にも今までの部屋とは違って円状ではなく正方形だった。

「あれ、行き止まりなのか?」

卓は広間を見渡したがどこにも先に続く道は無かった。

「いいや、ここで合っているよ。」

「えっ?」

突然広間に男の声が響き渡り、卓は瞬間的に一步跳び退いた。

「はは、そんなに警戒することはないよ。」

弾むような声はまたしても広間に響いた次の瞬間、広間の灯りが強くなり、すごく明るく照らされた。するとさっきまでオレンジ色に染まっていた広間は一転純白色に変わった。

「はじめまして、僕は三浦小鉄と申します。」

いつの間にか広間にいた少年は深深とお辞儀をした。少年は見た目は一五歳から一七歳くらいでカジュアルな感じの黒髪で、制服のような格好に身を包んでいた。

「あ、こちらこそはじめまして。」

卓も反射的に頭を下げた。

「僕はあなたの選んだ扉の第一関門を担当するものです。短いお時間になると思いますがなにとぞよろしく願いますね。」

小鉄はにこりと笑った。

「担当……？」

「はい、僕をここで見事倒すことが出来ればこの先の道が開かれるのです。」

「……なるほどね。で普通に戦えばいいのか？」

卓は挑発するように言い放った。

「そう慌てないでください。今回の内容はこれです。」

小鉄は悠長な喋り方ですつと水風船を取りだした。

「……」

卓は水風船を出した意味が分からず口を紡いだ。

「これから僕の持つこの水風船を制限時間内に割ることができればあなたの勝ちです。割れなかった場合は負けとなりますのですぐに地上に戻っていただきます。どうです？ 簡単でしょう？」

小鉄の問いに卓は口元を緩めた。

「なんだ、それだけきつい特訓かと思ったら案外楽じゃねーか。いいね分かりやすくて。」

「気に入ってもらえたようでなによりです。制限時間内ならどんな手を使っても大丈夫です。もちろん持ち前の刀を使っていたとしても構いませんよ。ああ、安心してください、僕は決して武器を使ったりしませんから。」

小鉄は余裕に満ち溢れた笑顔を見せた。

「なめられたもんだな。まあいいや。でも俺もお前が武器を使っ



ても何も言わないからキツイときは遠慮なく使ってくれていいぜ。」  
「そうですね？　ならもしそんなときが来たときには考えさせていただきます。」

「じゃあ行くぜ！　具現せよ！　我が剣！」

卓の勢いある詠唱と共にベルトに括り付けられた蒼の贈与の石が輝き、広間はその光に包まれた。

「綺麗ですね。」

蒼の光に小鉄は完全に見とれていたが、卓の手に長刀が握られたのを確認すると長めの紐を通した水風船を首から下げた。

「行くぜ！」

「いざ！」

卓と小鉄はそれぞれ力強く広間の床を蹴りあげ距離を詰めた。

時刻は少し戻り、卓が薄暗い廊下を歩き続けている同時刻。真理は卓とは違った、金網で出来た、一歩歩きたびに軋む橋を渡っていた。橋の下はそれほど深くなく10メートルくらいだった。

「卓はどんな道を進んでるかな。」

真理は卓のことを考えながらただひたすら金網の橋を渡り続けた。すると卓同様開けた場所に出た。

「ここって……」

真理が出た場所は壁にたくさんの機械類がはびこっていて時々機械音が響く空間だった。

「先に続く道は無いのね。」

機械に囲まれた空間にはその先へと続く道は見当たらなかった。

そんなとき、真理の正面にあつた巨大なスクリーンに突然文字が映し出された。そこには『己の石をここへ封印せよ』と書かれていた。  
「なるほどね。石の力を使わずに私自身の能力向上を目的とした訓練といったところかしらね。」

真理は納得したように頷いてスクリーンの下にちょうど贈与の石がはまるくらいの溝が掘られた台に自分の石を置いた。すると次の瞬間、台から小さなドーム型のプラスチックが現れて贈与の石を力

バーした。

「そんなことしなくても取らないわよ。」

真理は鼻で笑うように言った。

「で私の相手はこれなわけ？」

真理が振り返るとそこには2メートル程の高さの人間型のロボットが立ちかまえていた。

「アナタノアイテヨツトメサセテイタダク《ミニア》トモウシマス。イゴヨシナニ。」

ミニアという名のロボットはぎこちない動きで頷いた。

「このロボットは壊しても問題ないのかしら？」

真理は勝ちを確信したように笑みを浮かべた。

「ハイ。ワタシノヨビハイクラデモアリマスノデ。タダソウカンタンナコトデハアリマセンヨ。」

「どうかしら？」

真理はそう言うて勢いよくロボットとの距離を縮めた。

「デハ、ワタシモマイリマス。」

ミニアはさつきまでのぎこちないお辞儀からは想像も出来ないほどスムーズな動きで突っ込んでくる真理に自分から近づいた。

「はああああ！」

真理は一瞬止まって地面を力強く蹴りあげ、ミニアの目線の高さまで跳んだ。そしてそのまま空中でミニアに向かって回し蹴りを繰り返した。

「アナタノソノウゴキハヨソウズミデス。」

ミニアは機械音のような声でそう言うと、顔面部分のパネルに顔文字を表示させた。そして上半身を後ろに垂直になるように倒し、真理の回し蹴りは空振りに終わった。体制を崩した真理はそのまま床に尻持ちをついた。

「いったああ。」

真理はすぐに立ちあがってぶつけた部分をさすった。

「ソノテイドデハワタシハタオセマセンヨ？」

ミニアは倒した上半身を勢いよく起こし、その勢いを利用して真理に体当たりした。

「かはっ！」

ミニアは真理に直撃し、一瞬呼吸すら出来なかった真理はそのま  
ま機械だらけの壁に激突した。

「けほっ！ けほっ！」

真理は咳込みながらよるよると起き上がった。

「コレハヨダンニナリマスガ、ツウジョウイシノシヨユウシャガ  
ソレヲテバナストセンリヨクハ100ブンノ1マデテイカスルトイ  
ワレテイマス。」

「……」

真理はまだ苦しそうに、しかしミニアを完全に睨みつけていた。

「マダツツケマスカ？」

「当たり前でしょ！」

返事と共に真理は再びミニアに突っ込んで行った。さつきよりも  
早い速度でミニアとの間合いを詰めると、ぶつかる直前に片足を軸  
にして体を回転させて一瞬にしてミニアの後ろに回り込んだ。

「これならどう!？」

後ろに回り込んだ真理は片足でしっかり体を支えて、もう片方の  
足をミニアの頭部まで上げ回し蹴りのモーションに入った。

「カンガエハワルクアリマセン。デスガ……」

ミニアは首から下の部分だけを一八〇度回転させて、体だけ真理  
の方を向くという人間なら間違いなく死に至る状態となつて真理の  
蹴りを両手で受け止めた。

「なっ!?!? ロボットならなんでもありってわけ!?!」

真理はすぐに足を引っ込めミニアから少し距離を取って構えなお  
した。

「イッタデシヨウ? ワタシヲオスノハカンタンデハナイノデ  
スヨ。」

ミニアの顔部分のパネルには勝ち誇つたような表情の顔文字が映

し出された。

「むかつくわね、その顔文字。」

真理の握った拳には一層力が込められた。

「サアエンリヨナクキテクダサイ」

ミニアは真理を挑発するように金属で出来た指をくいくいと動かした。

「ぶっ壊す！」

真理は勢いよくミニアに突っ込むと今度はミニアがいつの間にか真理の後ろに回り込んでいた。

「……!？」

気がついて真理が振り返った時にはすでに真理の腹部にミニアの拳が入っていて、真理は再び壁に打ち付けられた。

「かつはっ！」

真理は一瞬意識が飛びそうになったがなんとか持ちこたえ、床に膝をついた。

「……全く、どこの科学技術が生み出したのよ、この生意気な口ポット……」

真理は悔しそうに立ちあがった。

「キギヨウヒミツデス」

「あつそ！」

苛立ちを隠しきれずに真理は拳が入った腹部をさすりながらミニアを見据えていた。

同時刻、純白色の広間では卓と小鉄が激しい攻防を繰り返していった。

「はあ……はあ……」

風船割りが始まって三〇分が経過したところで卓の息は完全に上がっていた。

「意外と難しいでしょう？ 水風船割るの。」

小鉄は卓とは正反対に余裕の表情を見せていた。

「ああ……正直なめてたよ。」

卓は乱れた呼吸を整えながら長刀を構えなおした。

「制限時間は三時間ですからあと二時間半くらいですよ？」

「まだまだ！」

卓は長刀を構えたまま小鉄に向って駆けだした。

「いいですね、そういう一生懸命な人嫌いじゃないです。」

小鉄は笑顔のまま卓の一撃をひよいつと後ろに軽く跳び退いて完全に避けた。

「追撃！」

卓はそのまま地面を短く、それでいて力強く蹴り、跳び退いた小鉄との距離を長刀が届くまで縮めて、再び横から長刀を振り抜いた。

「おっと！」

小鉄は言葉とは裏腹に余裕の表情は崩さないまま瞬時に逆立ちの格好を取り、靴の裏側で卓の長刀の一撃を止めた。

「なんつー動きしやがるんだ！」

卓はそのまま長刀を振り抜いて小鉄を無理矢理後退させた。

「あはは、あなたこそなかなかの力じゃないですか。」

小鉄は楽しげに笑って両腕で床をポンと弾いて空中で一回転した後に見事に着地した。

「時間はどんどん減っていますよ〜？」

「言われなくても分かっているよ！」

小鉄が着地すると同時に卓はすでに小鉄の懐まで潜り込んでいた。

「はああああ！」

卓は長刀の攻撃範囲に入った小鉄に向けて本気で刀を振り抜いた。

小鉄はそのまま卓とは反対側の白い壁まで飛ばされた。

「はあ……はあ……。……やったか？」

卓は呼吸を整えながら小鉄が飛んで行った方に顔を上げた。

「今のはちよつと危なかったです。つい石の力を使ってしまいました。」

吹っ飛ばされた小鉄はけろつとした表情で壁の前に立っていた。

小鉄は薄い水色の球体の膜のようなものに包まれていた。

「な、なんだそれ……」

「ルール違反ではないですよ？ 武器は使わないと言いましたけど、石の力を使わないとは言っていないから。」

小鉄はくすりと笑った。

「……石の力？」

アプス・スファイア

「はい。これは吸収球体というものです。外部からの攻撃などを無力化する球体なんです。」

「……なるほど、だから今でも水風船が割れなかったのか。」

「そういうことです。」

小鉄は笑みを絶やすことなく、その場で軽く何度も跳ねはじめた。

「じゃあ次はこっちからいきます。」

「！？」

小鉄の言葉が聞こえたときにはすでに目の前に小鉄の姿は無かった。

「ぐはっ！？」

気がついたときには卓はすでに壁に激突していた。卓の鳩尾に意識が飛んでしまいそうなほど強烈な一撃が入っていた。

「反応が遅すぎます。」

卓が崩れ落ちて行くのと反対に卓から少し離れたところにすたと小鉄が着地した。

「全然……見えなかった。」

卓は腹部を押さえながらなんとかその場に立ちあがった。

「石の力を纏っただけですよ。あなたもこれくらいならすでに出来ているんでしょう？」

（確かに、石の力で肉体を強化させることは出来るけど、あそこまで変わるものなのか……？）

卓が考え込んでいると、それに気がついた小鉄がまたしてもくすりと笑った。

「まあ同じ力でもやはり経験値の差で変わってくるものです。こ

れが今あなたが求めていた答えじゃないですか？」

「なっ……！？」

卓は自分の心の中を完全に読みとられたことに同様に隠し切れなかった。

「さて、おしゃべりが過ぎましたね。もうあと2時間10分しかありません。……！？」

「もらった……！」

小鉄が喋っている間に後ろに回り込んでいた卓はすでに長刀を構えていた。

「不意打ち、ですか。」

小鉄は卓の方を振り返ることなく再び吸収球体を発動させた。卓の一撃はまたしても吸収球体に弾かれ、今度は小鉄を動かすことすらできなかった。

「くっそ！」

卓は吸収球体を勢いよく蹴って後ろに跳び退いた。

「吸収球体を発動させればたとえ後ろからでも上からでも下からでも、360度どこからの攻撃でも防ぐことが出来るんです。」

小鉄はようやく振り返って得意げな表情を浮かべた。

「外部からの攻撃が効かない……。……。外部から……。？」

卓は何かを確かめるように小鉄を見据えた。

「おや？　どうかしましたか？」

（……試してみるか。）

卓はまたしても長刀を構えたが、それと同時にこっさりポケットに手を入れた。

「契約の蒼、我の刃となって具現せよ！」

詠唱に呼応したベルトに括り付けられた贈与の石が光り出し、その光は卓の手に握られた長刀の刃の部分を纏った。

「本気になったようですね。」

小鉄も少し腰を落として迎え撃つように構えた。

「これで決める！」

卓は蒼の光を纏った長刀を構えながら一直線に突っ込んだ。そしてある程度の距離を詰めると長刀を勢いよく振り抜いた。すると長刀から巨大な蒼の斬撃が放たれた。

「ふふ、確かに斬撃なら威力は高まりますが、それも同じことです。吸収球体発動。」

小鉄の言葉のすぐ後に小鉄を覆い尽くす薄い水色の球体が現れた。  
「ああ。だろうな、だからこそ俺はこの斬撃を囷にしたかったんだ。」

「囷……？ いたっ！」

斬撃は吸収球体にぶつかった瞬間に消滅したが、球体に包まれた小鉄に何かがあった。

「何ですか!？」

小鉄は急いで吸収球体を解除すると、小鉄にぶつかった何かの勢いよく飛び出た。

「……あれは、スーパーボール……？」

小鉄を襲った正体は掌に治まるくらいのサイズのただのスーパーボールだった。

「やっぱりな。」

その様子を見ていた卓はどこか勝ち誇った表情を浮かべた。小鉄はそれとは反対にスーパーボールの当たった腕をさすっていた。

「確かにその吸収球体は外部からの攻撃は全く効かないみたいだな。でも逆に内部からの攻撃はちゃんと受けるんだ。」

「まさか、それを確かめるために今の斬撃を？」

「ああ。でも、普通の攻撃なら間違いなくスーパーボールに気付かれるだろ？ だから見栄えの派手な斬撃ならそっちに目がいくだろ？ 俺は斬撃のちよつと前にスーパーボールをお前に向けて投げたんだ。」

「……今のは一本取られました。ですが、なら話は簡単です。常に吸収球体を発動させるまでです。」

小鉄は再び余裕の笑みを浮かべ吸収球体を発動させた。



「まあそうなるだろうな。けど、今でもう一つ分かったことがある。」

「と、言うこと？」

「球体の中に入ったスーパーボールは外に飛び出すことなく球体の中で弾んでいた。つまり、球体の中からの攻撃は外に出ることは無いんだ。それってお前も俺には攻撃が出来ないってことなんだろう？」

「……驚きました。まさかあれだけでそこまで観察しているとはですが、結局現状は変わらないですよ？　なぜなら私は残り2時間この水風船を守るだけでいいんですから。あなたを倒す必要は全くないんですから。」

小鉄は首から下げていた水風船を手に取ってコロコロと掌の上で転がし始めた。

「そうなんだよな。そこが問題なんだよ。」

卓は頭をポリポリと掻いて困ったような表情を見せた。

「おや？　てっきり解決策を用意してあると思っていたのですが。」

「はは、ないよそんなもの。ただその球体の性質を知りたかっただけだからな。」

「何を考えているんですか？」

小鉄は開き直ったような卓の態度に納得いかずに怪訝そうな表情を浮かべた。

「だから、何も考えてないって。だってもう俺の勝ちなんだから。」

「えっ……？」

卓はニツと笑って手首に巻き付けてあったタコ糸をくいと引って張った。それと同時に小鉄の掌の上で転がっていた水風船はパンツという音を響かせて割れた。

「なっ……！？」

小鉄は驚愕して、割れた水風船と卓を見比べた。小鉄の掌の上に

は水風船の代わりにタコ糸に括りつけられていた裁縫用の針があった。

「これは……」

「へへ、さつきスーパーボールだけじゃなくてその針も水風船に投げつけておいたんだよ。ただ、針が勢いよく風船の中に入っちゃうと風船は割れないから、いつでも引き出せるように糸を括りつけておいたんだ。」

「なぜ、こんなものを持っていたんですか……?」

小鉄は本当に不思議そうな表情をしていた。

「あゝ。それは、俺って裁縫が本当に苦手でさ、実はこの服一度破れちゃって自分で縫ったことがあるんだけど、糸が無かったから代わりにタコ糸を使ったんだけど、針を抜き忘れてたみたいなんだよね。それがそのままになっているのさつきお前に飛ばされたときに気がついて、これならいけるんじゃないかって思ったわけ。」

卓は自分の苦手なことを暴露することに少し恥ずかしさを感じて小鉄から顔を背けた。

「……ふふ。あなたは本当に面白い人だ。」

最初は目を丸くして驚いていた小鉄もついに笑い出し、吸収球体を解除した。

「うるせ〜。っでこれは俺の勝ちなんだろ?」

「ええ。もちろんです。」

小鉄は清々しいほどの笑顔を浮かべた。

「次の訓練への道を示しましょう。」

小鉄の指鳴らしと共に、卓の向い側の壁が重い音を立てながら持ちあがって大きな扉が現れた。

「こんなところに扉が?」

「ええ。ここから下の階に行けます。」

「おう、サンキューな。」

卓は何のためらいもなくその扉を潜りぬけようとした。

「ちよっと待ってください。」

「ん？ 何だ？」

卓は小鉄の方に振り返った。そこにはさつきまでの悠長な雰囲気の小鉄ではなくどこか重々しい感じの小鉄がいた。

「次の階は正直言っただけいいですよ。内容は言えませんが、この階なんて比べ物にならないくらい辛い、いえ命の保証すら出来ませんですよ？ ここからでも引き返せます。考え直す気はありませんか？」

「……忠告サンキューな。でも引き返す気はないよ。俺の連れも絶対にそんなことしないでだろうし。だから俺だけ逃げ出すわけには行かないんだよね、困ったことに。」

卓はニツと笑顔を見せた。

「……そうですか。野暮なことを言ってしまったようですね。」  
「いいよ。じゃあな。」

卓はすぐに小鉄に背を向けて扉の奥に姿をくらました。

（本当に面白い人だ。全然困ったような表情してませんよ？）  
卓の背中が見えなくなるまで小鉄はその姿を見届けた。

一方、別の部屋でミアと戦っていた真理も息絶え絶えになっていた。

「こんなロボットにも勝てないなんて……」

「ワタシハツヨイデスカラ、アマリキニシナクテモイイノデスヨ？」

「なめるな！」

真理はプチンと聞こえるほどに頭に血が上ってミアに単調に突っ込んだ。

「ソナウゴキデハダメダトオモイマスヨ」

ミアの顔部分のパネルにまたしても顔文字を表示させ鉄の塊の両腕を振り上げ、真理の両肩を押さえつけた。

「！？ 動かない！」

真理の背より高い位置から押さえつけられたために体を全く動かすことが出来なかった。

「ウエカラオサエツケルトツウジヨウヨリイリヨクヲハツキスルモノデス」

「だからなんだっていうのよ！」

真理は勢いよくその場に屈みこんで、肩からミニアの手を振り払うとミニアの腹部に蹴りを一発入れて後退しながら距離を取った。

「こんなところでぐずぐずしてる時間はないのよ！ 卓だって待ってるかもしれないだから！」

しかし、真理の身体はすでにボロボロでもうあと何発かミニアの攻撃をまともに受ければ立ち上がることにすら困難な状態だった。

「タク？ シロネタクノコトデスカ？」

「えっ？」

ミニアから卓の名前が聞こえてきて真理はぱっと顔を上げた。

「カレナラスデニダイ1カンモンヲクリアシタヨウデスヨ。」

「…… 卓が第1関門を突破した……」

真理はそう呟きながら嬉しそうに口元を緩めた。

「だったら私もさっさとクリアしないとね。」

「テカゲンハシマセンヨ？」

「余計なお世話よ！」

真理は残りの体力を振り絞ってミニアとの距離をどんどん縮めた。

「デスカラソノウゴキデハワタシハタオセマセンヨ」

「どうかしらね！」

勢いに乗った真理はミニアの足と足の間にスライディングで潜り込んだ。

「はあああ！」

ミニアの股の下に潜り込んだ真理はそのまま勢いよく下からミニアを蹴りあげた。

「ヨソクフノウウゴキデス！」

真理に蹴りあげられたミニアは空中に放り出された。

「…… 案外重いのね、でも私だって基礎トレーニングは嫌気がさすほど積んできてるのよ！」

真理はミニアを蹴りあげた状態からすぐに立ちあがって金網の床を思いつきり蹴りあげ空中に放り出されたミニアより高く跳び上がった。

「ロボットにここまで苦戦するとは思ってなかったわよ。」

真理はニツと笑って、そのまま空中でミニアに強烈なかかと落としを決めた。かかと落としを顔面に受けたミニアのパネルは割れてそのまま床に叩きつけられた。金網の床に叩きつけられた音はその部屋中に響き渡ったが、床が突き抜けることは無かった。

「ゲギギギ……サイキドウフカノウ……」

それからミニアが言葉を発することは無く、それつきり動かなくなつた。

「はあ……はあ……。やっと倒した。」

ミニアの後から床に着地した真理は息を整えていると、突然ガチャンという大きな音が響いた。

「えっ？ 何!？」

真理が驚いてフロアを見渡していると、急に床がエレベーターのように下に降り始めた。

「えっ？ えっ？」

事態を飲み込めない真理を無視して床は止まることなく下に下降し続け、しばらく下に向ってから再びガチャンという音とともに停止した。

「止まった……」

真理が床がまた動きださないか確認するために見回していると降りてきたところの壁に一つの大きな扉があった。

「……第1関門クリアってことね。」

真理はようやく事態を把握し、台の上に置いてあった自分の贈与の石を手を取った後でゆっくり扉を開いて、そのままその中へと入って行った。

そのころ、灯台1階では謙介と要の他にさつきまで卓と対峙していた小鉄も交えていた。

「小鉄、お疲れ。」

エレベーターで地上まで戻ってきた小鉄の肩に謙介はポンと手を置いた。

「いえいえ。僕もいい経験が出来ましたから。」

「どうだった、弟くんは？」

謙介の質問に小鉄はくすりと笑った。

「実にユニークな人でした。あんな同業者もいるんだなと思いましたね。」

「同感ね。私も初めて見たときはそんな印象だったわ。」

要も初めて卓と会った時のことを思い出して笑った。

「小鉄がそこまで褒めるなんて珍しいな。」

「ええ、だからこそ僕に勝った時点で引き返してもらいたかったのですが。」

小鉄はため息交じりに笑った。

「本当に弟くんのことを気に入ったんだな。まあ確かに小鉄ではないけど、俺も次の訓練は少し不安なんだがな。」

「僕が言うのもなんなんですけど、アレは訓練というより拷問に近いですよね。」

「確かにね。謙介、大丈夫？」

要も小鉄と同じく不安そうな表情を浮かべた。

「それでもあの2人ならやってくれと信じている。」

謙介は目を閉じて何かを祈るように言った。

同時刻、日本の東京、討伐者総本部。

天井に巨大なシャンデリアが吊るされ、床は赤い絨毯で、漆が光る木製の机とそれとセットとなっている肘掛付きの椅子に一人の老人が座っていた。老人の横には秘書のような格好でスーツがその細身をより一層引き立てるような美人系のショートヘアの女性が立っていた。

「今日からだったかな、鳴咲市の訓練施設の使用開始日は。」

老人は自分の長い顎鬚を手で撫でながら隣にいた秘書に訊ねた。

「はい、本日からでございます。総帥殿。」

「ほっほっほ。その呼び方はどこかよそよそしいから止めてほしいのだがね、冬音くん。」

「善処します。」

この老人はこの日本討伐者総本部の最高責任者兼総帥である。そしてその隣の女性は総帥専属の秘書である榎本冬音<sup>えのもとふゆね</sup>。

「君がそう言うときはいつも改善されたことがないような気がするが。まあよいわ。」

「はい。」

「しかし、今日からということは一日後からかの。アレが始まるのは。」

「……そうですね。」

冬音は少し険しい顔つきで答えた。

「冬音くんが気にすることはない。そうじゃろ？」

「はい。」

「ふむ、君はどう思うかね？」

総帥は部屋の出口付近の壁に腕を組みながらもたれかかっていた青年に問うた。

「……あん？ そいつらザコなんだろう？ だったら死ぬんじゃないか？」

青年は不敵に笑いながら答えた。

「これ、そのような言い方はよさんか。彼らもお主の仲間なのじゃからな。」

「仲間あ？ 笑えない冗談は止めておいた方がいいぜ、爺さん。」

青年は急に不快そうな表情に一変した。

「そう機嫌を損ねるでない、九鬼くんよ。」

総帥が九鬼と呼んだ青年はあからさまにつまらなそうな表情を浮かべて無言でその部屋を出て行った。

「総帥、お言葉ですがなぜあの男を討伐者として迎え入れたのですか？」

冬音は九鬼が出て行ったことを確認すると耳打ちをするように総帥に問いかけた。

「奴は確かに他の討伐者にはない狂気に満ちておる。しかし、今の我々には何より力があるのじゃよ。奴にはそれがある。性格には難ありじゃが実力は間違いなく討伐者の中で一番じゃ。」

「……」  
冬音が黙っていると総帥は静かに笑って続けた。

「冬音くん、世の中には納得できないことでも受け入れなくてはいけないときがあるのじゃ。」

「ええ。全くそうですね。」

「ありやま、冬音くんが拗ねてしまった。」

「拗ねてません。」

冬音も九鬼と同じようにその部屋から立ち去った。

総帥の部屋から出ると、そこは総帥の部屋と同様に一定間隔で天井にシャンデリアが吊るされた長い廊下になっていた。総帥室から出て来た冬音は廊下で先に出た九鬼と再び顔を合わせた。

「あれ？ 美人秘書さんじゃねーか。爺さんに何かやられたのかよ？」

九鬼は挑発するように冬音に向かって言い放った。

「言っておきますが、私はあなたを討伐者として認めてはいませんよ？」

冬音は調子を変えることなく狂気に満ちた九鬼を見据えた。

「俺に喧嘩売ってるのか？ かつての最強討伐者だかんだか知らねーが、今の最強は俺なんだよ！」

「誰が最強かなど興味ありませんよ。ただあなたには討伐者としての資格がないということです。」

「……黙れ。殺すぞ。」

九鬼はチェーンのネックレスにしてある漆黒の贈与の石を光らせ



た。

「あなたは異常です。」

「……ちつ。」

冬音が動じることなく言葉を続けたのに納得のいかなかった九鬼は贈与の石を光らせるのを止めた。

「あんたみたいな生真面目な最強にはなりたくないもんだね。」

九鬼はそのまま冬音に背を向けて、長い廊下を歩き始めた。

(やはり、あの男はまずいですね。)

冬音も九鬼の姿が見えなくなるまで視線を反らすことは無かった。

一方、灯台の地下にある訓練室で第1関門を突破した卓と真理はそれぞれの道を進んでいた。

「相変わらず長い廊下だな。てかどういう造りになってるんだ？」

小鉄の関門をクリアした卓は疲れきった体を引きずるようにして廊下を歩いていた。

「真理も第1関門クリアしたのかな。まあ俺がクリア出来たんだもん。あいつなら問題なくクリアしたはずだよな。」

しばらく廊下を歩いていると一つの扉が卓の目に飛び込んできた。さつき通った廊下とは違ってしっかりと灯りが確保されていたこの廊下ではその扉がはつきり見えた。卓はその扉に近づくと張り紙が貼ってあるのに気がついた。

「休息の間……？」

卓はポツリと張り紙に書いてあった文字を読み上げた。

「休息の間ってなんだ？ 休めるのかな？」

卓はこの訓練施設にあまりに似合わない部屋の名前に疑念を抱きつつもその扉をゆっくり開けた。

「なっ！？ これは……」

扉を開くと同時に卓の視界に入ってきた光景は信じられないものだった。卓の目の前にはさつきと同様に開いた部屋だったが、そこにはオープンキッチンやシャワー室、テレビにシングルベッドが2

つと生活する上で十分すぎるほどのものが揃っていた。

「なんだよこれ……」

卓はより一層警戒心を強めて部屋を見回しながらゆっくりと入って行った。

「卓……?」

卓が部屋に入るとほぼ同時に卓の入ってきたのと反対側のドアから真理が入ってきた。

「真理!」

卓も突然目の前に現れた真理を見て目を見開いた。

「やっぱり第1関門をクリアしたか!」

「当たり前でしょ!」

真理は得意げに腰に手を当てて言った。

「だな。ところでこの部屋は……」

卓はまたしても訓練室に似つかわしくないこの部屋を見回した。

「休憩室みたいね。どうやら次の訓練が始まるのは二日後みたい。」

「

真理は入ってきた扉の横に張ってあった張り紙を見て答えた。

「二日後!」

「ええ。でもそれはありがたいわよ。認めたくないけど、私も卓ももう体はぼろぼろだし、このまま続けて訓練しても意味が無いわ。」

「よ。」

「……確かにな。」

卓はため息交じりにベッドに腰掛けた。

「とりあえず今は体を休めることだけを考えないと。」

真理も卓と同じようにもう一つのベッドに腰掛けた。

「でも二日も一緒に部屋のいるのはいろいろまずいよな。」  
「気まずそうに卓は真理に背を向けた。」

「……何で?」

「何でって年頃の男女が同じ部屋で一緒に過ごすなんて……」

「何をいまさら。同じ家に住んでるのに。」

真理はきよとんとした顔で卓を見た。

「お前が気にしないならいいけど……」

卓は決して真理に向いあわずに赤面した顔を隠した。

「とりあえずお腹空いたから何か食べたいわね。」

「……」

卓は背中に真理の視線を感じつつも黙っていた。

「卓。」

真理の一言に観念した卓はため息をついた。

「分かったよ。何か冷蔵庫に入ってるもので作ってやるよ。」

そう言っただけで重い体を起き上がらせてオープンキッチンに入った。

「へえ、意外と材料は揃ってるんだな。」

冷蔵庫を開けると中には豚肉、牛肉、鶏肉の他に多数の魚介類や野菜、そして何種類もの飲み物も入っていた。

「何作れそう？」

ベッドに寝転んでテレビを見ていた真理が聞いた。

「スタミナ定食みたいなものでいいか？」

卓は冷蔵庫から肉や野菜を取り出しながら答えた。

「うん！」

卓の質問に真理は元気よく返事した。

「じゃあちよつと待ってる。」

それから卓がスタミナ定食を作るのにそれほどの時間はかからなかった。30分もするとテーブルの上には2人分の定食が並べられた。

「いただきます！」

卓と真理は声を合わせて挨拶をすると2人ともすぐに料理にありついた。

「ところで、真理はどんな関門だったんだ？」

卓が聞くと真理は肉と野菜の炒め物をつまみながら答えた。

「今は終わったことより次の関門を気にしないと。」

「……そうだな。」

卓は一言そう言つと再び料理を口に運んだ。

「私は信じてたよ。卓なら絶対にクリアするって。」

真理の言葉に一瞬きよとんとした卓だったがすぐにふつと笑った。

「俺も真理のことは心配してなかったよ。まあ俺が心配するのも失礼かな。」

「そんなことないよ。ありがとう。」

真理は少し頬を赤らめて嬉しそうにほほ笑んだ。

「次も2人で頑張ろうな。」

「もちろん。」

それから卓は食べ終わった食器を洗い、真理は先にシャワーを浴びていた。

「絶対に強くなるんだ。」

食器を洗い終わった卓はタオルで手を拭きながら自分に言い聞かせるように呟いた。

## 二人の決意（後書き）

「約束の蒼紅石」第5話いかがでしたでしょうか？ちょっと今回は新しい登場人物？として ミニア というのが出てきたと思うのですが、多くの読者はきっとこのミニアのセリフがすべてカタカナなのに読みずらさを感じたのではないのでしょうか？（笑）実は作者も読み直してみte思ったことなんです、なぜ訂正しなかったかという、別に面倒だったからとかではないですよ？（汗）ミニアはあまりに少ない出番だったので、これくらいの癖があってもいいかなという作者なりの愛情なわけですよ。なので読者の皆様も読みずらいなと思っても、ミニアに対する愛情でカバーしていただけると幸いです！

では次の第6話も楽しみに待っててくださいね！

## 囚われの蓮華（前書き）

こんばんは！夢宝<sup>むほう</sup>です！　まず最初に更新が遅れてしまったことを読者のみなさまにこの場を借りて謝罪しようと思えます。本当に申し訳ありませんでした。えっとですね、今回、更新が遅れてしまったのにはそれなりの理由がありましてm原稿自体は3日ほど前に完成していたのですが、が！　なぜかインターネットが繋がらないという事態が発生いたしましたして、ここ数日はインターネットを繋げるために試行錯誤していたらこれだけ遅れてしまったという結果になつてしまいました……

きつと理解ある読者だということでのこの場の謝罪で勘弁していただけるものすごく助かります！

では、まえがきが謝罪文だけとなつてしまいましたが、気を取り直して「約束の蒼紅石」第6話をお楽しみください！

## 囚われの蓮華

(もう二度と真理に涙は流させない。)  
卓の心には静かに燃え上がる何か熱い炎のようなものが灯っていた。

「卓、次シャワーいいわよ！」

シャワー室からバスローブを着た真理が出てきた。

「ああ、つてうおあ!？」

ふいに振り返ってバスローブ姿の真理が視線に飛び込んできた卓は慌てて顔を反らした。

「なにうるたえているのよ？」

「何って……」

卓は真理の顔を見ることなく答えた。卓のその反応の理由を理解した真理はニヤリと笑ってゆっくり卓に近づいた。

「私のバスローブ姿に発情しちゃった？」

「ばっ!?! ふざけんな！」

真理は卓の背中に密着した。卓は背中に当たった少しふっくらした真理の胸の感触に心臓の鼓動を早めた。

「心臓の音、聞こえるよ？」

卓の背中に耳を当てながら真理が呟いた。

「……」

当の本人はあまりの緊張に言葉すら出なかった。それを真理は気にした様子もなくふつと息を吐いて続けた。

「私ね、嬉しかったんだよ？」

「……えっ?」

背中に真理の体温を感じ続けていた卓はたった一言それだけを返すので精いっぱいだった。

「また卓と一緒にいられるようになって嬉しかったの。まあ戦わなくちゃいけないんだけど、それでも卓と一緒に頑張れるから。」

真理が喋るたびに背中当たる吐息に卓はどんどん心臓の鼓動を早めた。

「卓は私との約束守ってくれたし、満足してるわよ。」

「……まだだ。」

「えっ？」

卓は振り返ることなく言葉を続けた。真理はその言葉を一文字たりとも聞き逃すまいと耳を傾けた。

「俺はまだ真理を守るほど強くなっていない。だからこそこの訓練でもっともつと強くなる。だからまだ俺はお前との約束を守っていないんだ。」

「……卓。」

「もう少し待たせちゃうけど、まだ待っていてくれるか？」

「うん。」

卓は背中から真理の声しか聞こえなかったが、それでもはつきり真理が笑っただけは感じ取ることができた。

「さて、シャワー浴びてくるよ。」

「うん。」

真理は卓の背中から離れて、卓も赤面した顔を真理に向けることなく真つすぐシャワー室に入ってしまった。

（卓、たくましくなったね。）

シャワー室に入って行く卓の背中を見て真理は心の中でそんなことを思いながらほほ笑んだ。

（第2 関門、何が何でもクリアしないと……）

真理はそのままベッドにうつ伏せで飛び乗った。

それから十数分後、真理と同様にバスローブに身を包んだ卓が出てきた。

「あれ、真理寝ちまったのか？」

真理はベッドでバスローブのまま小さな寝息を立てていた。

（お疲れ様、真理。）

卓はそんな真理の様子を微笑ましく思いながらそっと掛け布団を



掛けた。卓もその後バスローブで体を拭いてから用意されていた寝巻に着替えてそのまま眠りについた。

「さて、俺達もそろそろ帰るとするか。」

灯台の一階にいた謙介が要と小鉄に提案した。

「そうね、ここならそう簡単に見つかる心配もないし、そうしましようか。」

「はい。」

要と小鉄もそれを承諾した。

「あ、そうだ小鉄。」

「はい？」

灯台から出て行こうとした小鉄を謙介は背後から呼びとめた。

「一つ頼みがある。」

「なんででしょう？」

小鉄だけでなく要も興味に満ちた表情で謙介を見ていた。

「赤桐蓮華という人物をしばらく見守っていてほしい。」

「赤桐蓮華？」

小鉄は謙介の口から出た一人の女の名前を復唱した。要は少し驚いた表情に変わっていた。

「ああ。彼女は討伐者ではない。だからこそこの戦いに巻き込むわけにはいかない。」

「分かりました。ですがなぜその方なのですか？何か巻き込まれるような要素があるのですか？」

「いや、俺も直感でこのことを言っている部分が多くてな。はっきりこれという例は挙げられない。だからこそ俺の最も信頼している小鉄に頼みたい。」

「あなたらしいですね。分かりました。」

小鉄はそれ以上突っ込んだことを聞かずに頭を下げて謙介の依頼を受諾した。だがその隣で要は少しいぶかしげな表情を浮かべていた。

「では、私はこれで失礼します。」

「ああ。お疲れ。」

小鉄は謙介と要に一礼してから灯台を出た。

「……謙介、本当に直感なの？」

灯台に残された要は同じく残った謙介に訊ねた。

「どういう意味だ？」

謙介は振り返って要の瞳を見据えた。

「何か確信があつてあんなこと言つたんじゃないの？」

「……確信か。本当にそんなものがあつたのなら俺自身がそうしているよ。ただ直感というものの語弊があつたのかもな。」

謙介はふつと笑つたがその顔は難しかった。

「教えてよ。どうしてあの子なの？」

「……気がつかなかったか？ 今日、プールで断絶したときにあの蓮華という少女は一瞬だったが断絶を跳ね返した。まあ本当に一瞬だったからすぐに断絶された世界から追い出されたんだけどな。」

「嘘でしょ……？」

要は謙介の言葉の意味を理解出来てはいたが、その事実を理解は出来ずに動揺していた。

「俺もあの時は驚いたよ。彼女は贈与の石を持つていなければ、あの時その力の影響を受けていたわけでもない。それなのに断絶の力を受けないというのはいかがなものかってね。」

「じゃあ彼女は一体……」

「それは分からない。だから小鉄に頼んだ。小鉄には見守れと言つたが、実質監視だな。」

「……そう。」

要は謙介に告げられた納得いかない事実寂しげな表情を浮かべ謙介と共に灯台から出た。

二日後、謙介と要は再び灯台の一階に集まっていた。小鉄は謙介の頼みによって蓮華の監視のため不在だった。

「いよいよだな。」

「謙介がそんなに力んでどうするのよ？」

要の言葉に謙介は握っていた拳をほどいた。

「はは、そうだな。」

謙介の笑いはどこかぎこちなさが見え隠れしていた。そしてそれを見逃す要ではなかった。

「あの2人なら大丈夫だと思うよ？ 理屈じゃないけど、そんな気がするの。」

「不思議なものだな。お前が言うとな本当に大丈夫な気がするよ。」

「あら、私の言葉の魔術も馬鹿にしたものじゃないでしょ？」

「……だな。」

灯台地下、休憩室。

二日間しつかり休んだ卓と真理の身体の痛みはすっかり消え万全の状態となっていた。

「いよいよね。」

寝巻から洗濯した訓練時に来ていた私服に着替えた真理は紅の石をぎゅっと握りしめながら言った。

「ああ。」

真理と同様に着替えた卓の瞳にはどこか力強さが秘められていた。

「絶対に2人でクリアしよう。」

「うん。」

卓の言葉に真理は深く頷いた。その時の真理の表情はこれから厳しい試練が待ち受けていると分かっている人間の表情ではなく、むしろ何が起こるのか分からず、期待に胸を膨らませた無邪気な子供のような表情だった。

卓と真理がお互いの気合いを確認し合っているところで、休憩室の壁の一部がゆっくりと静かに音をたてながら左右に開き、新しい扉が現れた。

「……今度は2人一緒なのか？」

「うん。みたいね。」

卓と真理は他に扉がないかあたりを見回して確認したが見つからなかったため、二人で同じ扉を開けた。

「行こう。」

卓は一言それだけを真理に言っつて、真理も無言で、けれどしつかり頷いて同時に一步、扉の向こう側に踏み出した。扉を超えるとそこには先に小さく次の部屋へと続く扉が見える40メートルほどの真つすぐな廊下があった。

「ねえ、卓……」

卓の一步後ろで廊下を歩いていた真理が小声で言った。

「……何だ？」

卓は歩く足を止めることなく聞き返した。それに少し間を開けて真理は再び口を開いた。

「卓は私がパートナーで良かった？」

「えっ？」

「ねえ、どうなの？」

卓は別に真理に振り返ることはなかったが、それでもはつきりと真理は不安そうな表情を浮かべているのだということだけは声だけではつきり分かった。

「……俺は真理以外のやつとパートナーと組んだことないからよく分からないな。」

「……」

卓の言葉に真理は沈黙を続けた。その後で卓はふつと息を漏らし言葉を続けた。

「でも、俺は真理とパートナーだったからこの訓練も受けようって思えたんだと思う。」

「えっ!？」

真理は卓のその一言にぱつと顔を上げ、卓の背中を見た。

「真理は一度俺の命を救ってくれた恩人だからな。だからこそ俺は真理のパートナーでいたいと思う。そうすれば次は俺が真理を守

れるからな。まあ真理は俺がパートナーだと頼りないかもしれないけど。」

卓は正面を向いたまま少し頬を赤らめた。

「ううん。そんなことない。私も卓とパートナーで良かったよ。」  
真理の言葉が卓の耳に届いたそのときにちょうど次の部屋への扉の前に辿り着いた。

「なら次も二人でクリアするしかないな！」

「だね！」

卓と真理はそれぞれ片手を扉に押しつけて同時に奥に扉を押しした。すると木製の扉はギギギと軋んだ音をたてながら開いた。

「これって……」

「……嘘でしょ……」

扉を開いたところで卓と真理は目を見開いて唾然とした。

二人の目の前には地下都市が広がっていた。それも小規模なものではなく半径10キロメートルはあるであろう巨大なドームのような中に広がっている都市で、高層ビルなどが立ち並んだ都会のような風景だった。そして天井には大型の蛍光灯が無数に設置されていて明るい空間となっていた。

「ここ、灯台の地下だよな……？」

「多分……」

あまりの規模の大きさに卓と真理の二人は一瞬自分が今どこにいるのかさえ分からなくなるほど動揺していた。そんな時、二人の目の前にそびえ立っていた巨大なビルの一つにあったスクリーンに映像が流れた。

「何だ!？」

突然ビルのスクリーンが映ったことに警戒心を奮い立たせた卓と真理はすぐさま贈与の石を握った。

「ようこそ、灯台地下第2訓練室にして最終訓練室へ。」

スクリーンの中に一人のスーツ姿の女性が映ってスクリーンの中で一礼した。

「申し遅れました、私、榎本冬音と申します。」

「冬音……」

スクリーンの中で自己紹介した冬音の名前を聞いた真理が何か記憶を探るように考え込んだ。

「どうした、真理？」

「思い出した。この人総帥の直属の秘書よ。」

「総帥？」

「よく御存じなのですね。」

卓と真理の会話に割って入るようにスクリーンの中の冬音はクスリと笑った。

「では、早速ですが、最終訓練の内容をお伝えしたいと思います。」

冬音の言葉を合図にスクリーンの画面が切り替わって冬音の代わりにスクリーンにはこの地下都市の見取り図が映し出された。

「今から4日間、あなたたち2人はこの地下都市で過ごしてもらいます。この町は無人ですが宿泊するには十分な施設が至る所に設置してあります。」

「なんだ、それだけなのか。」

卓の一言に冬音がすぐに反応した。

「端的に言えばそうです。しかし、この地下都市には説明が終わった直後から10分後に全部で五〇〇〇体ヒューマノイド・アームズの人間型兵器を放ちます。あなた方2人のこの訓練のクリア条件はそれら全ての人間型兵器と殲滅、および4日間生き延びることです。」

「5000……」

真理はそのすさまじい数字に圧巻されていた。

「ちなみにこの訓練での負傷、および死についてはこちら側では責任を取りかねますのであしからず。最後に、この訓練に他にルールはありません。この地下都市にある物を利用していただいても構いませんし、地形を利用することも構いません。もちろん石の力を使うことも許可します。質問は？」

スクリーンの中から質疑応答の場を設けた冬音に対して真理と卓は顔を見合わせるだけで何も質問しなかった。

「では、質問は無しということ。ではお気をつけてください。」  
冬音の言葉の後にすぐにスクリーンは切れた。

「真理、大丈夫か？」

「ええ。だって今度は卓と一緒にだし。」

真理は卓の顔を見て笑顔を見せた。卓もそれを見て真理の頭の上にポンと手を置いた。

「2人で頑張ろうな。」

「うん！」

「具現せよ！ 我が剣！」

卓と真理の詠唱は完全に重なり、地下都市に紅と蒼の光が輝きそれぞれが具現した。

「人間型兵器だかなんだか知らないが、全部ぶった斬る！」

「そうね。」

卓と真理が刀を構えるのとはほぼ同時に地下都市のあちこしにそびえ立っていた高層ビルのモニターに大きく《5000》という数字が表示された。

「今、人間型兵器が放たれたってことかしら。」

「みたいだな。」

卓は少し口元を緩めると二人の目の前に3機の人間型兵器が飛び降りてきた。その衝撃でその場の床に亀裂が生じて勢いのある風が卓と真理を直撃した。

「早速おでましか。」

「行くわよ！」

3機の人間型兵器はそれぞれ少し型が違っていた。まず先頭で構えるのは片手が短刀になっていて、後ろに構える2機はそれぞれ機関銃と小型の大砲を装備していた。

「契約の蒼、我の刃となって具現せよ！」

卓の詠唱に反応した贈与の石が再び光輝き、その蒼の光は卓の手

に握られた長刀の刀身に纏わりついた。

「契約の紅、秘めたるその境地への扉を開門せよ！」

真理は今までに唱えたことのない詠唱を唱えた。すると真理の腰にあつた紅の石は今までに見せたことのないほどの輝きを纏い、深紅の光は激しく渦巻くように荒れ狂い、そのまま真理と真理の手に握られた日本刀を包み込むように移動した。

「真理……それって。」

「今までは私自身の力が足りなくて発動出来なかつただけで、第一関門をクリアしたことによって発動できるようになつたみたい。」

真理と卓は敵の人間型兵器から目を反らすことなく会話をした。

「俺も負けてられねーな！」

卓は3機の人間型兵器に向けて蒼の光を纏つた長刀を構えた。それに即座に反応したに後ろに構えていた人間型兵器2機はとも機械とは思えないほど俊敏な動きで左右に分かれてそれぞれ機関銃と大砲を発砲した。機関銃から放たれた無数の銃弾と砲弾一発は真つすぐ卓と真理を目がけて飛んできた。

「はあああああ！」

真理は飛んでくる銃弾と砲弾には目もくれず全身に力を込めた。すると真理の周りで渦巻いていた深紅の光は突如巨大化して、渦巻く範囲が広くなった。

「うおつと！」

危うくそれに巻き込まれそうになつた卓は急いで避け、避けながら短刀を構える人間型兵器との距離を詰めた。

「一気に決めさせてもらうぜ！」

卓は避けたときの勢いそのまま短刀を持った人間型兵器に向けて蒼の光を纏つた長刀を振り抜いた。いや振り抜こうとしたが、それは人間型兵器の短刀によって止められてしまった。

「なつ!? 動かない……」

卓は止められてもなお力を込めて無理矢理振り抜こうとしたが、



人間型兵器の短刀に止められた長刀はピクリとも動かなかつた。信じられないというような表情とは裏腹に人間型兵器はただ無言で機械の間接音だけを立てながら卓の一撃を止めていた。

「ちっ！」

これ以上振り抜くことは出来ないと思つた卓は長刀を一旦引いて、自身も一歩後退し距離を取つてから長刀を槍のように突き出してもう一度人間型兵器に突っ込んだ。それに対して人間型兵器は右手に握っていた短刀とは別に瞬時に左手からも同じ短刀を出現させ、その2本の短刀をクロスさせ、突き出してきた卓の一撃をまたしても完全に止めた。

「そんな……」

少しながらも自信のあつた一撃を止められた卓は動揺を隠しきれなかつた。そんな卓に向つて人間型兵器は無情に手に持った短刀2本を投げつけた。

（俺は真理を守るくらい強くならなくちゃいけないのに……！）

卓は顔を上げ、自分に向つて飛んでくる短刀を見据えて長刀を握る手に力を込めなおした。

「お前なんかには負けられねえんだよ！」

卓は十分な気迫を纏いつつ、蒼の光で包まれた長刀を振り抜いて飛んできた短刀を2本とも弾き飛ばした。だが人間型兵器もそれで引き下がるわけもなく、再び両手に新しい短刀を出現させ、またしても機械とは思えないほどの速い動きで卓に突っ込んできた。

「……」

突っ込んでくる短刀の人間型兵器に構わず、卓は一回深呼吸をして長刀を頭上で縦に構えた。

「……俺は負けない！」

卓は鋭い目つきで突っ込んでくる人間型兵器を見据えたまま長刀を勢いよく振り切つた。すると蒼く光輝く斬撃が放たれ、その斬撃は人間型兵器をスパツと真っ二つに切り裂いた。

「……勝つた。」

卓はふつと長刀を握っていた手から力を抜いた。

一方で、卓とは10メートルほど距離を取ったところで真理は機関銃と大砲を持った2機の人間型兵器の相手をしていた。真理の周りには相変わらず巨大な深紅の光が渦巻いていて、全ての銃弾と砲弾を完全に打ち落としていた。

「さつさと終わらせるわよ！」

真理の一言に光りの渦は反応するようにさらに巨大化し、そのまま2機の人間型兵器を飲み込んだ。機関銃を持った1機はすぐさま崩壊したが、大砲をもったもう1機は自身が崩壊する寸前に一発だけ砲弾を発射した。砲弾は渦に流され、渦から飛び出たときには卓のほうへ向かっていた。

「卓！ 危ない！」

真理は卓に叫んで忠告した。

「大丈夫だよ。」

卓は飛んでくる砲弾に眉ひとつ動かさず、蒼の光を纏った長刀を振り抜き、放たれた蒼の斬撃は飛んで来る砲弾を一刀両断し、砲弾は卓の元に届く前に爆発した。

「真理の方も終わったみたいだな。」

「ええ。」

卓と真理は近づいて軽くハイタッチを決めた。すると地下都市のあちこちあったスクリーンに映し出されていた数字が《5000》から《4997》に変わった。

「やっぱりあれは敵の数だったのか。」

「あと、4997機も。こんな調子だったら間違いなく持たないわね。」

卓と真理は体に直接的なダメージこそ受けていないものの、2人とも最初から全開の力を出してしまったためすでに肩で呼吸をしていた。

「もつと最小限の力で勝てるようにならないとな。」

「うん、でも一つだけ分かったことがあるわ。この訓練は1機の

敵を倒すことに確実に力が増してくるのよ。その証拠に卓は2機目の攻撃は安定した斬撃で対抗することができた。」

「確かに。」

真理の言葉に卓は納得したように握っていた長刀を見た。だが、その長刀にはすでに蒼の光は纏っていないかった。それは真理も同様で、敵を倒したのと同時に深紅の光の渦は消えていた。

「石の力は無限に使い続けられるわけじゃないから、これからはよく考えて使わないと。」

「確かにそうだけど、相手の機械も相当強かったぜ？ 正直手加減しながら戦ってたらあと4997機なんてとてもじゃないけど相手ができないと思うんだが。」

「うん。それもそうなんだけど。私のさっきの力って今初めて使ったんだけど、予想以上に力の消費が激しくってもうあと何回も使えないし……」

卓と真理は困り果て二人して悩みこんだ。

「じゃあこういうのはどうだ？ 真理の力が回復するまで俺が一人で戦う。そして真理の力が回復したらさっきの力で一気に敵を減らすんだ。この繰り返しで進んでいくのはどうかな？」

卓の提案にぱつと顔を上げた真理は首を横に振った。

「それは駄目。そんなことしたら卓にはっかかり負担がかかるし、そんなところを敵に突かれたら卓の安全の保証だってないんだから。」

真理の表情は不安で満ち溢れていた。

「……」

卓はでも、と続けようとしたが、真理のその表情を見てしまい言葉に詰まった。

同時刻、鳴咲市極北部灯台前。

「あの2人うまくやってるかしらね。」

要は日差しを手で影を作りながら遮る風にしながら隣にいた謙介

に訊ねた。

「うまくやっていなければ困るな。何せ第2訓練、いや最終訓練は一人一人の実力を向上させるのはもちろんだが、2人一組みというこのシステムを最大限活用し、その力を大幅にアップさせるためのものだ。その2人がうまくやれないのなら残された道は敗北。ただそれだけになってしまふからな。」

淡々と答える謙介の横顔を見ていた要はプツと笑った。

「本当に素直じゃないわね。そうやって冷静を装ってても不安でしょうがないって顔に出てるわよ？」

「なっ!？」

要の一言に顔を赤らめた謙介はすぐに要とは反対に顔を背けた。

「でも、謙介じゃないけど私も不安なのよね。だって本来あの子たちにこの訓練は早すぎるもの。いくら時間が無いからって本来この方法だけは使っちゃいけないような気がするのよね。それは謙介も分かってるでしょ？」

「分かっている。」

謙介は要に背を向けたまま答えた。

「なら、どうしてあの子たちをこの戦いから外さなかったの？あの子たちの覚悟を尊重したかったの？ そんなことして死んでしまったら元も子もないじゃない！」

要は少し興奮気味に声を荒げた。謙介はそれに対して無言だったので要は続けた。

「もし死んじやっても覚悟があつてのことだって諦められるの！？ またあなたの前で戦いの犠牲者を出してもいいの!？」

「要!」

要の最後の言葉にピクリと体を反応させた謙介は大声で怒鳴った。

「……ごめんなさい。」

はっと我に返った要は少し俯いて頭を下げた。

「……俺だつて本当はこんな戦いにあの2人を参加させたくはなかった！ なんの皮肉かは分からないが、アイツの意思を継いだ男

をまた俺の目の前で危険な戦場に送りださないといけないなんてな。

謙介はぎゅっと自分の唇を噛みしめた。

「謙介……」

そんな謙介の背中に要はふつと体を密着させた。

「でも、本部が動いてくれないんだ。九鬼とかを動員してくれればいいのに、そうすればあの2人をこんな目に合わせなくて済んだのに！」

「分かったわ。ごめんなさい。一番辛いのは謙介だったのにな。」  
要は謙介の背中に密着したまま後ろから優しく謙介の頭を撫でた。

灯台地下でも地上と同じく、深刻な状況に包まれていた。

とりあえず考えがまとまらなかった卓と真理は地下都市で安全を確保できそうな場所を探すために奥へと進んでいたが、二人の目の前にはまたしても5体の人間型兵器が立ち塞がっていた。武器はそれぞれ銃や剣など持っていて、陣を取っていた。

「どうする真理？　ここでまた本気出したりしたらいよいよ体力が持たない気もするけど。」

長刀を構えた卓は自分の一歩後ろで日本刀を構えていた真理に訊いた。

「まずいわね……どうしてこう次から次へと……」

これと言っていい案が浮かび上がってこないもどかしさに真理は歯ぎしりした。

「じゃあ今回は俺が本気で瞬殺するってことで。」

「えっ!?!」

真理の反応を完全に無視して卓は詠唱を唱えた。

「契約の蒼、我の刃となって具現せよ！」

「ちよつと！」

真理の言葉は虚しく、石から出現した蒼の光は再び卓の長刀を纏った。

「はあああああ！」

光を纏った長刀を卓は大振りで振ると大きな斬撃がビルとビル  
の間の道路に陣を取っていた5機の人間型兵器に直撃した。すると  
人間型兵器がいたところは爆風に包まれ、中の様子は外からは見え  
なかった。

「……やつたか？」

卓が気を抜いて長刀を降ろすと、爆風の中から拳ほどの大きさの  
鉄球が卓目がけて飛んできた。

「うおっ!？」

即座に卓はその鉄球を長刀で弾いたが、勢いのある鉄球に卓は  
少し後ろに飛ばされた。

「卓！」

真理はすぐに飛ばされた卓を起こしに近寄った。しかし卓を気に  
しつつも爆風の方から視線は外さなかった。すると爆風が晴れてく  
るとたった1機、卓に鉄球を投げつけた人間型兵器が立っていたがそ  
れもすぐにその場に崩れ去った。

地下都市のスクリーンの数字は《4992》を表示していた。

「へへ、どうだ。」

卓はよろよろと起き上がった。真理は起き上がった卓の頬に一発  
ピンタを浴びせた。

「!？」

突然の出来事に卓はただただ驚くだけだった。けれども、ピンタ  
した真理の目には少し涙が溜まっていた。

「どうしてそんな無茶するのよ……」

「……真理。」

卓は涙目の真理になんて言葉をかけていいのか分からず、その後  
の言葉は全く出てこなかった。

「お願いだからもうこんな無茶は止めて……もし卓の身に何かあ  
ったら……」

「……ごめん。」

今にも泣きだしそうな真理を見て卓は一言それだけが口から出てきた。

「もう私を一人にしないで……」

卓はこんな弱弱しい真理の声を久しぶりに聞いた気がした。そう、5年前に炎越しに聞いた真理の声とどこか似ていた。

「!？」

そんな真理を見ていた卓は無言でそつと真理を抱いた。急に抱きしめられた真理は動揺したがしばらくして自分の身体を卓に委ねた。「ごめんな真理。もう無茶はしないよ。許してくれるか？」

卓は抱き寄せた真理を少し体から離れた。

「……うん。」

真理も目に溜まっていた涙を手で拭ってから卓に笑顔を見せた。

「とえあえずこれから残りのやつをどう倒して行くかが問題だな。」

「ええ。あつ……」

何かを考え込んでいた真理はふと顔を上げ地下都市のあちこちに聳え立っているビルを見渡した。

「どうした真理？」

真理の様子が変わったことに気がついた卓は真理と同じように辺りを見回した。

「ねえ卓、もしかしたらいけるかもしれないよ。」

「本当か!？」

「うん、気がつかない？ この地下都市にある高層ビルってビルとビルの間隔が狭いと思うの。」

「……確かに。」

真理に言われて卓は実際に見たが、確かに間隔はとても狭かった。人が一人通つたら横からは通れないほどの間隔だった。

「これって実際に人が住んでいない訓練室だからこういう設計になっっていると思うの。」

「どういう意味だ？」

「だってこんな地上の人が住んでいる街で造ったら住みづらくてしょうがないでしょ？ でもここは戦うためだけの街なの。つまり戦いに生かすためにわざとこういう設計に造られてると思うんだけど。」

「戦いに生かす……」

卓は今まで真理が言ったことを頭の中で整理し、街の構造を最大限生かす戦い方を模索した。

「……あつ！ もしかして！」

考え込んだ卓は何かひらめいたように顔をぱつと上げた。それに対して真理も卓の顔を見てにっと笑った。

「そう、昔日本で実際に戦のときに使われた戦術で一人が通れるくらいの狭い場所で戦う戦法よ。」

「確かにそれなら相手が何体だろうと実際に戦えるのは一番前の1体だけでもんな。」

「そういうこと！」

「ならすぐに陣とる場所をすぐに探さないと！」

「ええ！」

卓と真理は周りを警戒しつつあまり音を立てないように、それでも走りながらいい具合の間隔のビルを探した。

「ここなんてどう？」

真理はオフィスビルと思いき二つのビルとビルの間を指差した。

「いいな！ ここなら人間型兵器でも1機しか通れないだろうし。」

「

「じゃあここで決まりね！」

真理が先にビルとビルの間に入った。横に並んで入ることは出来なかった。そこで真理の後に卓も入った。

「しばらくここで待とう。」

そう言っただけで真理はふつと構えていた日本刀を降ろした。

それから数十分真理と卓はその場を動かさずに待ったが一向に人間型兵器は来なかった。



「なあ、あまりに来なすぎじゃないか？」

さすがに待ちきれなくなった卓は後ろにいた真理に顔を正面に向けたまま訊ねた。

「確かに……時間も限られているわけだし、これはまずいかも。」

「……だったら」

「駄目よ。」

「えっ？」

卓がまだ言い終えていないときに卓の言葉を遮るように真理は言葉を重ねた。

「どうせ自分が敵をここまで誘導してくるなんて言つつもりだったんでしょ？」

「うっ……」

真理に凶星を突かれた卓は言葉に詰まってその後の言葉が出てこなかった。

「もう卓ばかりに危険な目は遭わせられないの。」

「でも……」

それでも反論しようと卓が口を開くと真理ははあっとため息をついた。

「じゃあ私とその役をやるわ。」

「駄目だ！」

真理の一言に卓は強く言い放った。

「私ならある程度戦えるし、卓より成功率は高いわ！」

真理も負けずと言い返した。

「成功率とかそういう問題じゃねえよ。もう俺の目の前で真理を危険な状況にさらしたくねえんだ。」

「卓……」

真理はそれ以上何も言わなかった。いや言えなかった。自分のことをここまで考えていてくれるということに嬉しさを感じていた。

「だからやつぱり俺が行く。」

「えっ？ だからそれは駄目だって」

卓は真理の言葉を遮るように後ろにいた真理に振り返って真剣なまなざしで真理の目を見た。

「大丈夫、絶対に無茶はしない。真理にこれ以上心配をかけたくないしな。まだ5年前の約束はまだ果たせてないけど、この約束はすぐに果たすよ。」

卓はそう言っただけで真理に向けて小指を立てて突きだした。

「……本当に頑固なんだから。絶対に約束守ってよね。」

真理は口ではそう言うものの表情は柔らかく、卓の突き出した小指に自分の小指を絡めた。

「「指きつた!」」

卓と真理の声が重なり、絡まっていた指を離した。

「じゃあ行ってくる。」

すぐにまた正面を向いた卓はそのまま駆け足でビルとビルの間から出て地下都市の表通りに出た。

(気をつけてね……)

去ってゆく卓の背中を見て真理はぎゅっと胸の前で両手を握りしめた。

地下都市の表通りに出た卓は右と左を交互に見渡して、人間型兵器がいそうな右の繁華街のような場所へ向かった。

「たつく、こっちから探してるときに限ってなかなか見つからないな。」

長刀を持ったままで走りながら卓は呟いた。しかし、卓の言うとおり、目の前には人間型兵器が1機も見当たらなかった。すると突然卓の前方空中から突然小型ミサイルが飛んできた。

「何!?!」

卓が反応したときにはすでにほぼ目の前までミサイルは接近していた。そしてそのミサイルはそのまま卓の足元の地面に直撃し、そこで爆発した。

「ぐああああ!」

卓はその爆風をもろに直撃し、その勢いで5メートルほど飛ばさ

れた。

「くっそ！」

卓は額から流れる血を手で拭いとりながらよろよろと立ち上がった。

「どこから……」

卓が前方を見回しているとまたしてもミサイルが飛んできた。

「あそこか！」

今度はミサイルを早く発見した卓はそのミサイルが飛んできた場所を確定することができ、前方の高層ビルの屋上に1機の人間型兵器がいることを確認した。

「契約の蒼、私の刃となって具現せよ！」

卓の詠唱の後に瞬時に蒼の光が卓の手に握られていた長刀を纏った。

「うおおおおお！」

卓は蒼の光を纏った長刀を思いっきりミサイルに向けて振り抜くと、長刀から大き目の蒼の斬撃が放たれ、ミサイルに直撃し、ミサイルは卓に当るずいぶん手前で爆発した。斬撃はそれだけでは止まることなく、そのままビルの屋上にいた人間型兵器に直撃した。

「はあ……はあ……」

今日だけで何回も斬撃を連発した卓の息は上がっていた。

地下都市のあちこちのスクリーンに映し出されていたカウンター数字がまた一つ減った。

「また力を使っちゃったな。こりゃ戻ったら真理に怒られそうだ……」

卓は呼吸を整えながらため息をついた。

「とにかく、少しでも多くの敵を誘導しないとな。」

そう言っただけで卓がまた走り出そうとした瞬間、空中から数十機の人間型兵器が円を描くようにして卓を囲んだ。

「なっに!?!」

予想だにできなかった事態が起きた卓の手は震えていた。

「……こりやさすがにまずいな……」

卓は強がつて笑って見せたが、顔からは嫌な汗と額から流れる血が混じって地面に滴り落ちた。

「こういう状況になったら逃げられないってこと考えてなかったぜ……」

卓が長刀を構えると、人間型兵器もそれぞれの持つ武器を卓に向けて構えた。

（俺、また真理との約束守れないのかよ……）

卓は自分の無力さに唇を強く噛んだ。すると卓の頭の中にふと5年前の真理の言葉が過った。

『もつと強くなつて』

卓の頭をよぎったこの言葉に半ば諦めていた卓ははっと我に返った。

「そうだよな。男が約束を守るって言ったら絶対に守らないとな。」

卓の表情に力強さが現れ、長刀を強く握りしめた。

「はあああああ！」

卓は両手で長刀を握ると、相手にそれを向けるわけでもなく地面に刃を向けた。そしてそのまま地面に長刀を突き刺すと、長刀に纏っていた蒼の光はその場で激しく光輝き、その光は卓と数十機の人間型兵器を包み込んだ。その光は卓を狙う敵の目くらましとなり、卓はその光の中で詠唱を唱えた。

「契約の蒼、我に躍進の力を与えよ！」

すると目くらましの役割をしていたのとは別の光が卓の腰に括りつけられていた贈与の石から卓を包み込んだ。

「続いて！ 我が命が下るまでその刃隠匿せよ！」

卓は走りやすくなるために長刀を石の中にしまつと、目くらましの光も次第に消えていった。

「うおりゃああ！」

卓は少し助走をつけて走り出し、卓は自分を囲んでいた敵の頭上

を飛び越えて行った。そしてそのまま止まることなく真理の待つビルとビルの間を目指して石の力を借りて肉体強化したまま全速力で走りだした。それに気がついた人間型兵器も陣形を崩して逃げて行く卓を追った。遠距離武器である銃などをもった人間型兵器は走りながら逃げて行く卓に発砲した。

「うおっと！ 危ねー！」

長刀をしまつて逃げることに専念した卓に飛んでくる銃弾に立ち向かう術もなく、ただ石の力で肉体を人間離れしたほどに強化した運動神経で避けて行った。それでも人間型兵器も攻撃を止めることなく打ち続けた。

「はあ、はあ！ あと少し！」

卓は息を切らしながらも決して速度を落とすことなく走り続けた。そして卓の視界に真理の待つ隙間が飛びこんできた。

「卓！ 飛んで！」

数十機の人間型兵器を引きつれて走ってきた卓を見つけた真理は叫んだ。

「！！！ 分かった！」

真理の考えていることを一瞬で理解した卓は助走をつけて隙間に入るよう高く跳ねあがった。

「捉えた！」

卓が飛び上がったことで真理の構える日本刀の刃の先には2列ほどで向ってくる人間型兵器の軍勢が現れた。

「紅蓮槍風！！！」

真理がそう言って日本刀を突きだすと、それまで真理の周りを渦巻いていた紅の竜巻は巨大な槍の形となって人間型兵器に向って飛んで行った。そして人間型兵器の軍勢に直撃すると大爆発を起こし、敵は一瞬のうちに全滅した。

「すげっ！」

卓はその一部始終を見終えて真理の後ろに着地した。

「卓、その血！？」

着地した卓に振り返った真理は卓の額から流れる血を見て駆け寄った。

「あ、ああ。ちょっと油断しちゃって。」

卓はすぐに真理に余計な心配をかけまいと手の甲で血を拭いた。

「無茶はしないでって言ったのに。」

真理はそれ以上に卓を咎めることもなく、ポケットから取り出したハンカチで卓の血を拭きとった。

「あ、ありがとう。」

卓は自分の目の前に真理の顔が接近してきて顔を赤らめ、すぐに顔を真理から背けた。

「やっぱりこの作戦は囹役に負担が掛かり過ぎるわね。」

「……」

真理の言葉に卓は何も言い返せなかった。事実、卓は数十機連れでくるだけでも相当なダメージを受けていたためこれから何度も同じことを繰り返すのは不可能だった。

「卓が出て行ってる間にこの裏から寢床の役割を果たしてくれそうな場所を見つけたの。すぐ近くにコンビニもあったわ。だからここを私たちの拠点にしよう。」

「そっか。助かるよ。」

「でもまだ休むわけにはいかないわよ？ 何せ敵は5000もいるんだから。4日間しかないから一日に約1300機倒さないと駄目だからね。」

「1300機か……。いや、分かっていたんだけどな。実際に数字を聞くと辛いな。」

「なら諦める？」

真理の一言に卓はすぐに首を横に振った。

「やり遂げるさ。これで強くなれるんだっつたらな。」

「うん。そう言っと思ってた。」

卓の返答に真理はにっこり笑った。そしてそのまま卓の手を引いて地下都市の大通りに勢いよく出た。

「来るよ！」

真理の掛け声で卓は即座に長刀を構えた。真理も卓の手を離して日本刀を構えた。するとその後、卓と真理の周りに無数の人間型兵器の軍勢が姿を現した。

「なっ!? どこからこんな数!？」

卓は予想外の敵の数の大きさに目を見開いた。真理も同様に驚きを露わにしていた。

「そんな……!?!? これ1000機以上は確実にいるわよ!?!？」

「……今からでも戻るか?」

「無理よ。完全に囲まれてる。」

「……分かってる。」

卓と真理はいつ攻撃を仕掛けられるかもしれない状況に神経を研ぎ澄ました。

「どうする? 卓。」

「悔しいが、本気で行くしかないんじゃないか? まあそれで勝てる保証もないんだけどな。」

卓は場違いのように笑って答えた。それに一瞬真理は驚いたが、すぐに表情を戻し真理も笑って答えた。

「そうね。ここをなんとかしても生き伸びないと先はないもんね。」

「そういうこと!」

卓と真理は自分の胸の高さまでそれぞれ刀を構えた。

「はああああああ!?!?!?!」

卓と真理は背中合わせに敵の軍勢に突っ込んだ。

3日後、卓と真理の訓練の最終日となったこの日は暑さも厳しくなり、今にもセミの鳴き声が聞こえてきそうな日だった。

「今日はたつくんと真理ちゃんの特訓最終日よね。きつと疲れてるだろうからお弁当くらい持って行っても変じゃないよね……?」

蓮華は自分の家のキッチンでぶつぶつ呟きながら卓と真理、2人の弁当箱にお手製のおかずを綺麗に敷き詰めていた。

「2人とも強くなったのかな。なんかこういうときって2人が遠くに感じちゃうな。」

蓮華は最後に卵焼きを弁当箱に入れながら少し寂しそうな表情を浮かべた。

蓮華の家の向い側の民家の屋根に謙介から蓮華の監視の命を受けた小鉄がコンビニのおにぎりを頬張りながら構えていた。

（ここ3日間見てたけど、これといって何かあったわけじゃないんですけどね。謙介さんは何を知ってたのでしょうか？）

小鉄は直接自分に振りかかる直射日光を手で遮りながらおにぎりを続けて食べた。

「んっ？」

小鉄がおにぎりを食べていると蓮華が家から弁当を2つ手提げかばんに入れて出てきた。灯台に向かうためにバス停の方に歩き出した蓮華を小鉄は後ろから気付かれないようについて行った。

（これってやっぱり傍からみたらストーカーに見えるんでしょうね……）

小鉄は自分の行動に少し恥じらいを感じつつ、蓮華の後についた。

「きゃっ！」

「えっ？」

不意に蓮華の小さな悲鳴が聞こえた小鉄はすぐに物影から顔を出して、蓮華の方をしっかりと見た。すると蓮華の前に黒い霧が存在していた。

（あれは……）

少し離れてその様子を見ていた小鉄はすぐにズボンのポケットから小さなスイッチを取り出した。このスイッチは緊急連絡用のもので、このスイッチを押せばすぐに謙介のケータイ電話に連絡が行く仕組みになっていた。

小鉄は迷いなく、取り出したスイッチを押した。



灯台の前にいた謙介のケータイ電話は小鉄がスイッチを押した後すぐに鳴った。

「!？」

「どうしたの謙介？」

「緊急事態だ。すぐに小鉄の元に向かうぞ！」

「分かったわ！」

要は謙介の雰囲気から事情を聞く時間すらないのだと悟るとただ卓の言葉に頷いてすぐに駆け出した。

所変わって蓮華の卓の住む住宅街。

「あの、どちらさま……ですか？」

突然目の前に現れた黒い霧の中から姿を見せたいつもと同じ姿の魂の傀儡子に蓮華はひどく動揺していた。

「ようやく見つけましたよ。」

魂の傀儡子は特に蓮華の質問に答えることもせず、ただ不敵に笑っていた。

「あの、それじゃ私はこれで失礼します……」

蓮華は魂の傀儡子と目を合わせないように顔を下に向けながらその場を立ち去ろうとしたが魂の傀儡子は蓮華の腕を掴んだ。

「!？」

突然腕を掴まれた蓮華は手から弁当が入ったカバンをその場に落としました。

「何するんですか！」

蓮華は魂の傀儡子の腕を振りほどくためにじたばたしたがその腕を振り払うことは出来なかった。

「やつとの思いで見つけたんですから、そう簡単に逃がしはしませんよ？」

魂の傀儡子は笑顔を崩さないまま言い放った。

「私はあなたみたいな人知りません！ 誰なんで……」

蓮華は言葉を言い切る前に意識を失った。

(!?)

物影から様子を見ていた小鉄は何が起きたのか理解できずに困惑していた。

「ふふ、すみませんね。あまり女性に乱暴はしたくないので催眠術を少々施させていただけましたよ。」

意識を失った蓮華は体を魂の傀儡子に預けるような形でもたれかかった。

(まずい！ このままだと彼女は連れて行かれる！)

とつさに蓮華の危険を感じ取った小鉄は物影から飛び出た。

「おや？ こんなところにネズミが潜り込んでいましたか。」

背後から出てきた小鉄に気がついた魂の傀儡子はそれでも表情を変えないで向き合った。

「その子をどうするつもりですか!？」

小鉄の問いに魂の傀儡子はふつと笑ってから口を開いた。

「この人間は私の計画に必要不可欠なのですよ。それ以上はここで死ぬあなたに言っても無駄だと思えますがね？」

「僕も一人で貴様に勝とうなんて無謀なこととは思っていませんよ。ただ少し時間は稼がせてもらいますよ！」

「いいでしょう。少しだけお遊びにお付き合いいたしましょう。」

魂の傀儡子は道路の脇に意識を失った蓮華を寝かせ、上着の内側から先端が刃物になった杖を取り出した。

「我、この世界との断絶を命ずる！」

小鉄の詠唱の後に辺りの雑音は消え、小鉄と魂の傀儡子は静寂に包まれた。

「人間はわざわざこの世界を壊すまいと面倒なことをしますね。」

魂の傀儡子は断絶された世界を見渡してふつと笑った。

「慣れればそれほど苦にもなりませんかね。具現せよ！ 我が双剣！」

断絶された世界に小鉄の声が響くと、腕のブレスレッドにしてあ

った水色の贈与の石が光って、小鉄の両手に2本の対になる短刀が現れた。

「双剣ですか。少しくらいは楽しませてくださいね。」

「はあああああ！」

小鉄はその場で双剣を何度も振りまわした。すると無数の斬撃が魂の傀儡子に向って飛んだ。無数の斬撃は魂の傀儡子を直撃し、魂の傀儡子が立っていた場所は爆風と爆煙に包まれた。

「双剣の特徴はその攻撃数の多さですかね。全てを見切るのとは不可能でしたよ。」

爆煙の中から魂の傀儡子のどこか冷たさを感じさせる声が聞こえ、その後小鉄に向って炎の球が飛んできた。

「!?!」

ものすごい速さで飛んできた炎の球は小鉄のいるところで爆発した。すると小鉄の放った斬撃が起こした爆煙の中から無傷の魂の傀儡子が現れた。

「全てを見切るのとは不可能でしたから、いくつかは私の攻撃で落ち落とさせていただきました。まああなたはそんなことをせずとも私の攻撃をかわせたようですが。」

魂の傀儡子は自分の向い側の爆煙に向って不敵な笑みを浮かべた。爆煙が晴れてくると、薄い水色の球に包まれた小鉄が姿を現した。

「アプス・スライア吸収球体……」

「お見事です。」

魂の傀儡子はわざとらしく驚いたような表情を見せてパチパチと手を叩いた。

「契約の薄蒼、我が対となる意思に希望の光を与えよ！」

小鉄の詠唱に反応した贈与の石は銀色と金色の光をそれぞれの短刀に纏わせた。

「なんと……」

その神秘的な光景に魂の傀儡子は感嘆の息を漏らした。

「神器、フライン王の即座!ハロン！」

小鉄は銀と金の光を纏い、刀身が元々の3倍ほどになった双剣を魂の傀儡子に向けて構えた。

「神器。面白いじゃないですか！」

魂の傀儡子は取り乱したような笑顔をを見せて、自分も杖の刃を構えた。

「うおおおおお！」

小鉄はそれぞれ神々しく輝く刀を大きく一度だけ自分の前で交差させるように振り抜いた。すると銀と金の斬撃は途中で合わさり、目を開けられないほど明るい光を放ちながら、魂の傀儡子へと向かって行った。

「クール  
フレイム冷徹の獄炎！」

魂の傀儡子は向ってくる斬撃に対して、杖の先の刃で空に円を描き、そこから放出された巨大な青い炎の球で太刀打ちした。しかし、小鉄の放った斬撃を撃ち落とすことはできず、勢いが減少しない斬撃はそのまま魂の傀儡子に向かって一直線に迫る。

「やはり神器の力にこの程度の力じゃ敵うはずありませんか。」

魂の傀儡子は迫りくる斬撃を空中に高く跳び上がることですれで回避した。

「口で言う割にずいぶんと余裕そうですね。」

小鉄は自分の攻撃が当らなかつたことに少しむきになって再び眩い光を纏った二本の双剣を振った。さっきと同様に金と銀の斬撃が放たれ、空中に跳んで身動きが取れない魂の傀儡子に向かって行った。

「これは……」

魂の傀儡子は言葉を言い終える前に小鉄の放った斬撃に直撃した。空中で爆音と共に煙が立ち登り、煙とは逆に魂の傀儡子は下に落下した。

「やったのですかね……？」

小鉄は恐る恐る地面に倒れ込んだ魂の傀儡子に近づいた。するとあと5歩というところで見えた目が少しボロボロになった魂の傀儡子

がよろよると起き上がった。

「何……？ これでも倒れないのですか！？」

最大出力の斬撃を受けてもまだなお起き上がる魂の傀儡子に小鉄は驚愕した。

「何が、時間稼ぎですか……。決着着ける気満々じゃないですか……」

魂の傀儡子は咳込みながら苦しそうに小鉄を睨みつけた。

「人間とはつくづく欲深いものですよ。自己嫌悪に陥りそうですよ。ですが、ここは素直に自分の欲望に従っておきたいところですね。出来れば謙介さんたちの手を煩わせるまでもなく済ませたいのですよ。」

小鉄は顔の輪郭に沿って汗を垂らしながらそれでも笑顔を作り続け、双剣を構えた。

「なめられたものです。私はこれでもイザイとヴァーグナーを同時にお相手して殺したのですよ？ それなのに彼らの足元にも及ばない実力のあなたがどうやって私を倒すのです？」

「じゃあ、やってみましょうか。」

小鉄はそう言って、魂の傀儡子の反応を見ることもせず、地面を軽く蹴って、跳び上がり、そのまま空中から2本の斬撃を放った。

「何度も馬鹿の一つ覚えの技では勝てませんよ！」

上空から迫りくる金と銀の斬撃を魂の傀儡子は睨みつけるように見て、右手の掌を前に差し出した。

「虚無セロノースの失力！」

魂の傀儡子がそう呟くと、前に差し出した掌から、黒く、どこかに繋がっているような空気を吸い込みながら渦巻く小さな穴が現れた。

「ついに虚無界の技ぎを使いましたね。」

「ええ。少しは本気を出さないと失礼でしょう？」

魂の傀儡子は悠長に会話を続けながら、迫りくる斬撃を迎え撃った。すると目の前まできた斬撃は掌から出た黒い穴に吸い込まれた。

斬撃を完全に吸い込むと穴は段々と小さくなって次第には消えた。

「これが虚無の技……」

「いかがですか？」

呆気に取られていた小鉄を見た魂の傀儡子は得意げな表情を浮かべた。

「確かに、神器の奥義をもともせず消滅させるその力はさすがです。……が、私の武器は何も神器だけではないですよ？」

「！？」

小鉄がにっこりほほ笑んで魂の傀儡子の方を指差すと、魂の傀儡子は自身の身体を見た。

すると、魂の傀儡子の身体は地面から飛び出た水色の光の縄で縛られていた。

「いつの間に！？」

「さっきの神器の一撃は囷に使わせていただきました。まあ何度も通用するとも思っていませんでしたし。そっちに気を取られている間に地面から石の力、捕縛ほくわくの光縄ひかりなわを発動したのですよ。」

魂の傀儡子を括りつけていた光の縄は彼が少し動こうとしたところでビクともせず、完全に動きを封じ込めていた。

「……一つ聞いても？」

縄が解けないと確信した魂の傀儡子は足掻くのを止めて、小鉄を見据えた。

「……」

魂の傀儡子の態度が急変したことに小鉄は無言で見据え返した。それを確認した魂の傀儡子は再び口を開いた。

「あなた、本当にイザイとヴァーグナーより弱いのですか？ 私  
が実際に相手してみているに、あなたの方が、彼らより断然強いと思っ  
つのですか……」

魂の傀儡子の質問に小鉄はふつと笑った。

「いつですかね、僕が最後に公式記録を登録したのは。」

小鉄のその一言に魂の傀儡子は質問を重ねた。

「公式記録……？」

「討伐者は自分の実力を知るために一般的には定期的には本部にて公式記録を残すのですよ。ただ、僕はそんなこと面倒なのでほとんど公式記録を取っていないんですよ。」

小鉄がクスリと笑うと、魂の傀儡子も納得したように口元を緩めた。

「なるほど、私が知っていた情報は古すぎたといことですか……」  
「そういうことです。」

小鉄はそのまま笑顔を崩さないまま、金と銀の光を纏った双剣を上段に構えた。

「命乞いしたら助けられます？」

「結果から言えばノーです。」

小鉄の笑顔に魂の傀儡子の顔からは汗が一滴地面に落ちた。

「ファイナーレです。」

そう言つて小鉄は上から双剣を振り下ろすと、今までよりもさらに大きな斬撃が放たれた。

斬撃はみるみる魂の傀儡子に迫って行き、それにつれ、魂の傀儡子の顔も斬撃の光を浴びて、明るく光った。

最終的に斬撃は魂の傀儡子に直撃し、彼が立っていた道周辺は爆煙に包まれた。

「言い忘れていましたが、今の僕はヴァーグナーさんとイザイさんを同時に相手出来るくらいには強いですよ？」

小鉄は爆煙に包まれた魂の傀儡子に向かって言った。

自分の勝利を信じて疑わなかった小鉄の表情には余裕が現れていたが、それはすぐに崩された。

「くくく。猿芝居が過ぎたかと思いましたが、案外騙せるものですね。」

爆煙の中から聞こえたこの声は小鉄を希望から絶望に叩き落とすのには十分過ぎるほどだった。

「な……」

煙の中から現れた魂の傀儡子を見て、小鉄は言葉を失った。

「確かに、あなたはイザイとヴァーグナーより遙かに強い。それは認めましょう。しかし、ただ力を得ただけの人間風情が一人で私を倒すなど、思い上がりも甚だしい。」

立場が完全に逆となった今、額から汗を流すのは小鉄で、余裕の笑みを見せているのは魂の傀儡子だった。

「どうしました？ さっきまでの自信に満ち満ちた表情をまた見せてくださいよ。」

魂の傀儡子は出来るだけ皮肉を込めるように言った。

しかし、今の小鉄にはこんな皮肉にすら言い返すほどの余裕は残されていなかった。

先ほど巨大な斬撃を放った後の双剣からはすでに金と銀の光は消え去り、元に戻っていた。

「いいですね、その絶望に満ちた顔。そそりますよ。」

魂の傀儡子は悪戯っぽく微笑んで、舌舐めずりした。そしてその後で先端が刃になっている杖を構えた。

「あの世で自分の無力さを悔みなさい。」

魂の傀儡子のその一言に小鉄は唇を噛みしめ、そして同時に双剣から手を離れた。

(謙介さん……。すみません。お役に立てませんでした。)

小鉄は迫りくる魂の傀儡子の刃を最後に視界に入れ、目をゆつくりと閉じた。

すると、目を閉じた直後にすぐ前方で大きな爆発音が聞こえた。

「!？」

「無事か、小鉄？」

驚いた小鉄が目を開くと、そこには迫り来ていた魂の傀儡子をたつた一撃で後退させた謙介が、黄金に輝く西洋風の剣を構えて立っていた。そしてそのすぐ隣に鎖を持った要も魂の傀儡子と対峙していた。

「謙介さん……。要さん……。」



小鉄は力なく、けれど2人にははつきりと聞こえるように言った。  
「遅れてすまなかつた。よく耐えてくれた。」

「……はい。」

小鉄は謙介の力強い言葉に危うく涙を零すところだったが、首を横にブンブン振って、涙を流すことに耐え、地面に落した双剣を拾い上げ、再び構えた。

「形勢は逆転だな、魂の傀儡子！」

謙介を筆頭に陣を構える要と小鉄に対して、魂の傀儡子はため息にも似た息を吐いた。

「さすがにこの3人を同時に相手するのは骨が折れそうです。私も本来の目的を手早く済ませる必要がありますので、これにて失礼させていただきますとしましょう。」

魂の傀儡子はそう言って、道路の脇で意識を失っている蓮華を片腕で抱き上げた。

「待て！ その子連れて行かせるわけにはいかない！」

謙介は間を開けることもなく、黄金の光を纏った剣を振るった。

そこから放たれた眩いほどの斬撃は地面を抉りながら、蓮華を抱きかかえた魂の傀儡子に向った。

「私も、彼女を取り返されるわけにもいかないのですよ。」

斬撃に対して、特に焦りを見せることもしない魂の傀儡子は蓮華を抱きかかえているのとは反対の手を前に差し出した。

すると、さつき小鉄の時に使用したのと同じ、黒い穴が現れ、謙介の放った黄金の斬撃もみるみる穴に吸い込まれて行った。

「虚無の技！？」

瞬時の出来事に驚きを隠しきれなかった謙介を見て、魂の傀儡子はクスリと笑って、口を開いた。

「では、私はこれにて失礼させていただきます。」

蓮華を抱きかかえたまま魂の傀儡子は黒い靄に包まれ、姿は見えなくなつた。

「あ、それともう一つ言っておきますね。」

黒い靄に包まれ、姿が見えなくなった魂の傀儡子だったが、彼の声だけが、道路に響き渡った。

「あなたたちでは私を葬ることは不可能ですよ。冥府の使者と人間とではそもそも同じ戦場で剣を交えることすら不可能なほど実力差があるのですから。」

魂の傀儡子のこの言葉を最後に、黒い靄も完全に消え、断絶されたこの空間には再び静寂が訪れた。

「そんな……」

蓮華が連れて行かれた様子を目の当たりにした要は両手で口元を押さえていた。

「すみません謙介さん……。言いつけられたこともできませんでした。」

蓮華を連れて行かれたことに対して罪悪感を覚えた小鉄は視線を地面に伏せた。

「小鉄のせいじゃないだろ？ それより今はどうやって彼女を助け出すかが大切なんじゃないか？」

謙介が小鉄の肩にポンと手を奥と、視線を伏せていた小鉄の顔はぱっと上がった。

「そうですね！ なんとしても蓮華さんを救出しましょう！」

「ああ、その意気だ。」

謙介はそう言って小鉄から顔を背けた。小鉄を励ました謙介だったが、このときの彼の表情も不安で満ちていた。

## 囚われの蓮華（後書き）

「約束の蒼紅石」第6話いかがでしたでしょうか？この「魂の傀儡子編」も折り返し地点を突破し、いよいよクライマックスに向けて話も進んできています！第6話でもう折り返し地点？と思う方もいると思いますが、この作品は1話1話が比較的長めなので第6話でもう折り返し地点なのです（笑）もともとこの「魂の傀儡子編」はこれくらいの長さで考案していたので、順調な執筆状況かと思えます！ですので、これからラストパートに向けての話も楽しんで読んでいただけると幸いです。

では、今回はこの辺で。寒さに負けずに頑張りましょう！

## 月光の臨場（前書き）

こんばんは！ 夢宝<sup>むほう</sup>です！ さて、クリスマスの更新となりましたが、みなさんはどのようなクリスマスをお過ごしになるのでしょうか？ ちなみに私はこれといった予定はありません（泣）一年に一度のクリスマスに、もしこの作品を読んだけただけたのなら光栄です！ そして、みなさんのクリスマスに、この作品で少しでも楽しいひと時を送れたのなら幸いです。

では、「約束の蒼紅石」第7話お楽しみください！ そして、メリークリスマス！！

## 月光の臨場

一方、蓮華が魂の傀儡子に拉致されたのとほぼ同時刻。  
灯台の地下に広がる都市で卓と蓮華は息も絶え絶えに人間型兵器ヒューマノイド・アームズに囲まれながら、それぞれの刀を構えていた。

「はあ……はあ……。ここ3日間は敵を警戒しながらだったから  
まともに睡眠も取れてないし辛いわね……」

真理は背中合わせに立っていた後ろにいる卓に話しかけた。

「確かに……でも今日でそれも終わりだろ……？」

卓はそう言いながら、自分たちを囲む人間型兵器から出来るだけ警戒しつつ、横目でビルに映し出されたスクリーンを見た。

スクリーンには《348》という数字が堂々と映し出されている。

「敵さんの数もあと少しだ。初日の無数の軍勢に比べたら可愛いものだな。」

「最後まで油断しないの。」

「はいはい。」

卓と真理はそれぞれ自分たちの目の前にいる敵を睨みつけるようにして、上段に刀を構えた。

「卓、ここまで頑張ってくれてありがとうね。」

突然、真理がさっきまでよりは小さな声でそう言った。

それを聞いた卓は少しの間、呆気にとられたように口をぽかんと開けているだけだったが、すぐにくすりと息を漏らすように笑って続けた。

「どうして真理がお礼を言うんだ？ これは俺のためでもあるんだから。それに本当にお礼を言うのは、魂の傀儡子を倒してからだろ？ お礼はそれからだ。俺も、真理もな。」

「……そだね。」

真理は卓の言葉にほほ笑んだ。背中合わせに立っているから卓にその表情は見えなかったが、確かに真理がほほ笑んだのを卓は感じ

取っていた。

「「はあああああ！」」

卓と真理は同時に刀を握る手に力を込めた。

すると、それまで刀に渦巻くように纏っていた蒼と紅の光は次第に形を整え、刃の形を成していった。

「まさか本当に4日でここまで石の力を使えるようになるなんてな。」

卓は蒼く輝く光の刃を見てそう呟いた。

「一年以上かかることをたったの1週間でやるって言ってたしね。まあその分私たちもボロボロなんだけど。」

真理も紅の刃を構えながら答えた。

卓と真理の光の刃は静かに、それでもひしひしと伝わる力強さを醸し出していた。

そんな2人に、1機の人間型兵器の発砲を皮切りに数百の軍勢が同時に攻撃をしかけてきた。

「うおおおおお！」

それに対して、卓は蒼の刃を勢いよく振り切ると、目の前の敵の軍勢は蒼い光の波に吞まれ、その場に崩れ去った。

「蒼波滅陣……」

卓は呟くようにそう言って刀を一旦引いた。

一方真理も人間型兵器の軍勢に向けて紅の刃を突き出していた。

「紅蓮槍風！」

真理が叫びながら、紅の光の刃を突くと、そこから巨大な光の槍が放出された。槍は勢いを殺すことなくそのまま軍勢に直撃し、周りにいた人間型兵器も爆発に巻き込まれ、かなりの数が消滅した。

「はあ……はあ……。こんな大技何発も使えたもんじゃねーな。」

卓は顔の輪郭に沿って流れてくる汗を手の甲で拭いながら、それでも口元は緩めながら言った。

「全くよ……。でも、それでも日に日にこの一撃を放てる数は多くなってきた。毎日疲労は蓄積されているはずなのに。」

真理は紅く光輝く自分の贈与の石に目をやった。

卓の贈与の石も同様に、訓練を始めた日に比べると明らかに光の量は増していた。

「あと何機だ……？」

卓が高層ビルのスクリーンに視線を送ると、そこには《236》と書かれていた。

「あと少しね。」

それを見た真理は口元を緩めたが、決して敵から視線を外すことは無かった。

「気を抜かずに行くぞ！」

「卓に言われるまでもないわよ。」

再び、真理と卓は多数の人間型兵器と対峙した。

そして、時は数時間後に飛び、午後5時を回ったころ。

鳴咲市のあちこちを謙介、要、小鉄の3人は蓮華を連れ去った魂の傀儡子を搜索していた。

「くそ、見つからない……。せめて彼女をさらった理由だけでも分かればもう少し探しようがあるのに。」

謙介が悔しそうに舌打ちした。謙介を含む3人は鳴咲市の中心街を探していた。

「どうして蓮華ちゃんだったのかしらね。」

要も何かを考え込むように顎を手に当てた。

「あの、謙介さん。ここ数日、彼女を見ていたのですが、僕には全く見当がつかないので。何度か石の力に反応するか試したりしたのですが、一向に気がつく様子もありませんでした。完全な一般人なのではないのでしょうか？」

小鉄の問いに謙介はむくと言った。

「そうなんだが。確かにプールの一件だけでは断定は出来ないのもまた事実。そう、小鉄にはだからこそその確証を掴んでもらいたかった。仮に彼女が石とは無関係だったとして、プールの一件は単

なる偶然だとしてもそれはそれで良かったからな。いや、むしろそうであつてもらいたかつた。」

謙介の言葉に要も小鉄も真剣そのものの表情で耳を傾けていた。謙介は続けて口を開いた。

「だが、先刻、魂の傀儡子が彼女を拉致したことで疑念は確信に変わってしまった。間違ひなく彼女は石の力、あるいは奴らの目的に必要ななんらかの要素を持ち合わせているという確信に。」

「じゃあ、最近鳴咲市で魂玉がやけに多く出現してたのって……」  
要がそこで言葉を切つたので小鉄がその後続いた。

「おそらく、魂玉によつて赤桐蓮華の搜索を行つてた、ということもあるでしょうね。」

小鉄の言葉に謙介は無言で頷いた。

「そもそも魂の傀儡子の目的が何なのか分からない以上、蓮華ちゃんの安全も保障出来ないわよ。」

「だから急ぐ必要があるんだけどな。しかし、それでも全く見当がつかないのも事実。」

「……だったら網線結界はどうでしょう？」

行き詰つたような表情をしていた謙介は小鉄の一言に目を見張つた。

「出来るのか？」

「長時間はまだ力が持ちませんが、多少であれば、あるいは。しかし僕もこのような結界を実践にて使つたことはありませんが、このまま闇雲に探し回るよりは効率的かと。」

「……頼む。」

「承知いたしました。」

小鉄は軽くお辞儀をするとその場で目を閉じ、ゆっくりと口を開いた。

「我、この世界との断絶を命ずる！」

小鉄の詠唱のすぐ後に、街に静寂が訪れ、さっきまで街を行き交つていた人々は一瞬のうちに消えた。



小鉄はそのまま再び詠唱を唱えた。

「契約の薄蒼、我、探索の念をここに投じる。」

すると、小鉄の腕にあった水色の贈与の石から、無数の細い糸のような光が、断絶された鳴咲市に一瞬にして張り巡らされた。

「断絶は鳴咲市のほぼ全域に発動させました。さすがに最北部の灯台までには至っていませんが。」

「十分だ。ありがとうな。」

謙介はそう言っつて小鉄の肩にポンと手を乗せた。小鉄はそれに対して、嬉しそうにほほ笑んだ。

「すごいわね、小鉄君。こんな高度な結界術まで使えるなんて。」

「いえ、本当に軽く齧った程度のもので、あまり期待されすぎるとそれに見合った結果は出せないかもしれません。」

小鉄は申し訳なさそうに頭を掻いた。

「いや、小鉄は十分過ぎる活躍をしてきているよ。ただこの結界はかなりの力を消耗するのだから？」

「はい。この結界は断絶との2重発動でなければ効果を発揮しませんので、どうしても精神的な力の浪費は抑えられないのが欠点です。本来軍勢で陣を編成するときには結界は結界術師という専門の役職の人がやるのが一般的です。それくらいこの術はそれだけで力を使う必要があるということなんです。」

小鉄の説明を聞いた謙介はすぐに口を開いた。

「なら、お前は今回の戦線からは外れてもらった方がいいな。」

「えっ？」

謙介の言葉に小鉄はピクリと体を動かした。

その隣では要も謙介に賛同するように頷いていた。

「僕なら大丈夫ですよ！ それに謙介さんと要さんだけでは」

謙介は小鉄の言葉を人差し指をピツと立てて制した。

「駄目だ。お前はこの結界で魂の傀儡子を探し出してくれればそれで仕事は全うした。それ以上の戦線に加わることはお前の安否に関わることだ。」

「ですが！」

それでもなお反論しようとする小鉄に対して、今度は要がなだめるように言った。

「小鉄君はさっきも一人で戦ってくれたでしょう？ これ以上無理したら本当に危険なの。もつと自分を大切にしないと駄目よ？ それに、もう少ししたら訓練を終えた卓君と真理ちゃんも戦いに加わってくれる。だから心配しないで。」

要の言葉を聞いて、ようやく小鉄は口を紡いだ。しかし、表情はまだ納得しきれていなかった。

「!？」

小鉄が謙介と要の2人とそんなやりとりをしていると、小鉄の触角に何かが触れたような感じが走った。

「どうした小鉄？」

それにいち早く気がついた謙介が小鉄の顔を覗き込むように、様子を見た。

「……。謙介さん、かかったみたいですよ。」

小鉄の表情は硬いものだったが、どこか勝ち誇ったようにも見て取れた。

「魂の傀儡子か!？」

「ええ、おそらくは。この結界の歪み、人間のものではないのは明白ですからね。」

「場所は？」

謙介の代わりに要が一步小鉄に近づいて訊ねた。

「ここから北東付近にある、廃工場ですかね？」

小鉄は網線結界の歪みから、場所の特定をするために目を閉じて、集中力を高めた。

「廃工場……」

小鉄が示した場所を謙介は何か心当たりがあるような素振りを見せて復唱した。

「この間調査に行ったところじゃないかしら？」

「ああ、間違いないだろうな。でも、あそこにはこの前調査したときには何も見つからなかったはずだ。一体あそこに何かがあるんだ。」

謙介は必至に頭を回転させ、あらゆる可能性を考えてはみたが、結局、これといった具体性の高い考えは思い浮かび上がらなかった。

「とりあえず、いつてみましょうよ。」

「そうだな。小鉄、助かった。引き続きここで奴が移動しないか確認していてくれ。」

「……はい。」

小鉄はどこか寂しそう、いや納得のいかない、大胆に言えば不服さえ見て取れる表情で謙介を見送った。

そんな小鉄の表情を見ることのなかった謙介と要は一目散に廃工場へと駆け出した。

(僕にももつと力があれば……)

戦いの戦線に加われなかった小鉄は遠ざかって行く謙介と要をそんな思いを抱えながら見た。

同時刻、謙介と要が目指していた廃工場は夕日が差し込み、怪しく、しかし神秘的に紅に染まっていた。

そんな廃工場の中心部に魂の傀儡子が意識を失った蓮華を片腕で抱きかかえながら立っていた。

「ようやく、材料が揃いました。長かったです。」

魂の傀儡子は意識の無い蓮華をそつと廃工場の床に寝かせると、膝までかかるくらい長い漆黒のロングコートのサイドポケットから薄い赤、白桃色の贈与の石を取り出した。

「もう少しですからね。スミレさん。」

魂の傀儡子はそつと白桃色の石に口づけをした。

そのときの、そんなささいな音さえ、断絶されたこの廃工場には響き渡った。

「迂闊にも先ほど結界に感知されてしまったみたいですからね、

そう時間も経たないうちに彼らが来てもおかしくはないでしょうしね。」

意識を失った蓮華に話しかけるように呟いた魂の傀儡子は石を再びポケットにしまいこんで、それからパチンと指を一回鳴らした。

魂の傀儡子が指を鳴らした直後に、夕日に染められた廃工場の中に次々と数えきれないほどの魂玉がゆらゆらと焰ほむのごとく揺れながら具現した。

形は様々で、人型のもいれば、動物の形をしているものもいた。実に多種多様。

しかし、どれにも一つだけ共通して、顔の部分、あるいは体の一部に赤いライン模様が刻まれていた。

「これからここに来るであろう来客のおもてなしはあなたたちに任せるとしましょう。私は少し奥で彼女との準備がありますので。」

魂の傀儡子はそれだけ言い残すと、床に寝かせていた蓮華をお嬢様抱っこで持ち上げると、そのまま廃工場の更に奥へと姿をくらました。

残された魂玉たちはそれぞれに吠えてみたり、腕を変形させて、刃を造ってみたりと戦いに向けての気合いを表現するかのような行動を取り始めた。

廃工場の奥に蓮華を連れてきた魂の傀儡子は少し開けた場所へと辿り着いた。

「ふむ、ここなら大丈夫でしょうか。広さも完璧、とは言い難いまでも準備をする上では支障を来さない程度には申し分ありませんし。」

魂の傀儡子は一人で納得するようにほほ笑み、そして、再び蓮華を床にそつと寝かせた。

「おや？」

すると、魂の傀儡子が来ていた黒のロングコートのサイドポケットから白い光が漏れていた。

光の光源は先ほど魂の傀儡子がポケットに戻した、白桃色の贈与

の石だった。

それを取り出した魂の傀儡子は、心臓の鼓動のように、一定間隔で光が脈打っている石を見ると感嘆の息を漏らした。

「ほお。やはり私の目に狂いはありませんでしたか。ふふ、そうでしょう。やはりこの石の覚醒には赤桐蓮華、あなたが必要だったのですよ。」

魂の傀儡子はしゃがみこみ、目を閉じたまま起きない蓮華の顔を人差し指でなぞった。

「この感触、久方ぶりです。本当にここまで苦労しましたよ。」  
嬉しそうに呟いた魂の傀儡子は自身の指を蓮華の顔から離し、その場に立ちあがった。

「これより、石の完全覚醒の儀を行います。」  
魂の傀儡子はそう言って両手をぱつと広げた。

すると、床に寝ていた蓮華の全身はぼわつと青白い光に包まれ、そのまま宙に身を委ねたように浮き始めた。

「クフフフ、この瞬間を実際に目の当たりにするところも気持ちが高ぶるものなのですな。」

魂の傀儡子は堪え切れない笑いを零しながら、広げた手と手をパッと合わせた。

その甲高い音が廃工場の中に響き渡ると、青白い光に包まれ、宙に浮いていた蓮華のすぐ後ろに蒼い炎で出来た十字架が宙に現れた。

「少々、身動きを封じさせていただきます。どうかお許しを。」

魂の傀儡子は意識のない蓮華に一礼すると、手を宙で振り、蓮華もその手に合わせて動き始めた。そして最終的には炎の十字架に張り付けにされた。

それでもなお蓮華は意識を取り戻すことが無く、炎が蓮華に燃え移ることもなかった。

「さて、」

魂の傀儡子が儀式の次の工程に入ろうとすると、廃工場を中心部から轟音が聞こえてきた。

「……来ましたか。思ったより早かったですね。」

魂の傀儡子は轟音の音源である中心部の方に目をやった。

「それに、この感じ……、あの2人では魂玉ごときでは時間稼ぎにもなりそうにありませんね。ふう、私も少し、息抜きを兼ねて出向くとうしましょう。」

そう言つて、十字架に張り付けにされていた蓮華を一瞥すると、すぐに轟音の方へと歩き出した。

そして、問題の中心部では、黄金の光を纏った剣を構えた謙介と先端が刃になっている長い鎖を持った要が魂玉の軍勢と対峙していた。

「こんなところにこれだけの数の魂玉を配置しているところを見るとピンゴみたいだな。」

「ええ。」

謙介と要は互いに顔を見合わせると、同時に口元を緩めた。

そんな2人に、今まで、攻撃を警戒してか、距離を取っていた魂玉たちが一斉に飛びかかってきた。

「連鎖一貫！」

自分たちに飛びかかってきた魂玉に向けて、要は勢いよく鎖を投げつけた。

空を切り裂きながら飛んでいく鎖は次々と魂玉を貫通していき、鎖が勢いを失ったときには数えきれないほどの魂玉が貫通していて、それらは例外なく、静かに炎上し、消滅した。

「はあああ！」

謙介は負け時と剣を振るうと、それに合わせて黄金の巨大な斬撃が放たれ、これもまた同時に何体も魂玉を消滅させていった。

だが、謙介と要の猛攻をあざ笑うかのようには、魂玉が消滅した場所からまた新たな魂玉が現れた。

「相変わらずしつこいな……。いや、こうでもしないと自分を守れないほど不抜けなのか、魂の傀儡子は。」

謙介が何の気もなく呟いたその言葉に少し離れた場所から返事が

返ってきた。

「不抜けとはずいぶんな言われようですね。まあ確かにそう思われ続けるのもあまりいい気はしませんからね。少し出向かせていただきますよ。」

「?!?!?!?!」

廃工場の奥から、次第に姿もはっきり見えてきた。謙介と要はその姿を見て、すぐさま警戒を強めた。

「……魂の傀儡子……」

謙介がそう呟くと、魂の傀儡子はクスリと笑った。

「やはり、それだけ警戒していただと素直に嬉しいものです。」

「悠長に喋ってる場合?」

余裕の態度を崩さなかった魂の傀儡子の背後に回り込んでいた要が鎖を構えていた。

「早い……が、それは裏を返せば、悠長に話していても無問題とということでもあるのですよ。」

後ろに回り込まれても、視線を変えることもなく、要に背を向けたまま一回だけ指をパチンと鳴らした。

すると、一瞬のうちにして一体の魂玉が要と魂の傀儡子の間に割り込んだ。

「邪魔よ!」

そんなことを気にも留めなかった要は魂玉もろとも魂の傀儡子を串刺しにしようと鎖を投げた。

まずは抵抗もなく鎖は綺麗に魂玉を貫いた。そして、そのまま魂の傀儡子を貫くだけだった。が、鎖は魂の傀儡子に届くことは無かった。いや、届かなかったというよりは要が遠ざかったというほうが適切である。

「きゃあああ!」

「要!」

要は貫通した直後、突然爆発を起こした魂玉と至近距離にいたため、その爆風に巻き込まれ、体ごと飛ばされた。

「初めてご覧になりましたか？ 魂玉にはこんな使い方もあるのですよ。」

爆風をものともせず、余裕の表情でその場を一步も動かなかった魂の傀儡子は、飛ばされて体を地面に強打した要と、要に駆け寄る謙介を悪戯つぽく笑いながら見ていた。

「魂玉が爆発……」

謙介は要を両手でなんとか立ち上がらせると、自分たちの周りにいる数えきれない魂玉を見渡した。

「なかなか恐ろしいものでしょう？ いわば魂玉は動く爆弾。いまここには無数の爆弾があなたたち2人に襲いかかるうとしているのですから。」

魂の傀儡子の言葉に謙介は、苦虫を噛み潰したような表情をした。と同時に思考を張り巡らせた。

（なぜ、急に爆発した……。さっきまでは爆発など一度もしなかったというのに。そもそも爆発なんて出来るのなら、最初からそうすれば良かったんだ。それなら自滅ではあるが、少なくとも俺達も倒すことは出来たのに。なぜそうしなかった？ いや、出来なかったのか？ 魂玉が自爆するには何か条件があるのか。だとすればそれは何だ？ さっき一瞬の出来事の中で奴がやったことと言えば、指を鳴らすくらい。だとすればそれが爆発のきっかけ……）

謙介は短い時間に次から次へといろんな可能性を模索した。

黙りこくった謙介を見ていた魂の傀儡子はふつと口を開いた。

「そんなに必死に考えなくても、教えてほしいのであれば答えをお教えいたしますが？」

「なっ!?!?」

魂の傀儡子のその一言に我に返った謙介は疑いとある種の期待が混じり合った瞳で魂の傀儡子を見据えた。

「爆発のきつかけは、私の指鳴らしです。まあそこまでは大かた予想の範疇でしょうが。しかし、魂玉はそれ単体では爆発することなど出来ませんよ。いえ、本来、魂玉が爆発することなどありえな



い。」

「なら、なぜ……」

そこで、魂の傀儡子は人差し指を左右に何回か振って続けた。

「私の指鳴らしで、魂玉を一瞬のうち何兆回も振動させたのです。するとどうなると思います？」

魂の傀儡子がわざとらしく問いを投げかけてきた。

それに答えたのは謙介ではなく、要だった。

「なるほど、急にそれだけの回数振動した物体は内部のエネルギーが暴発し、結果、爆発を起こす……ということでもいいのかしら？」

「ご名答。」

魂の傀儡子は片手に握られた杖を腕に引っかけて拍手した。

「しかし、解せんな。なぜそんなネタばらしをする……」

謙介は魂の傀儡子の意図が読めずに歯ぎしりした。

「理由などありませんよ？ では逆に問いますが、あなたたちは実際に爆発の仕組みが分かったところで、対処の仕方があるのですか？」

「……」

魂の傀儡子の問いに2人は答えることができなかった。

それは魂の傀儡子の言うことを肯定しているということにほかならない。

「でしょう？ なら、そんな情報をあなたたちにお教えしたところで私には何の痛手にもなりえないのですよ。」

魂の傀儡子のどこか得意げな表情は、何も出来ずに手をこまねいていた謙介にさらに不快感を与えた。

「では、ここにいる魂玉を全て爆発させてみるとしましょうか。」  
魂の傀儡子はにたりと笑った。

それに対して、謙介と要の額からは冷や汗がにじみ出ている。

（まずい……。実際あの爆発をどうにかする手立てが見つからない。一瞬にして全ての魂玉を一掃するか？ いや！ 間に合うわけがない。奴は零コンマ数秒あれば指鳴らしを行うことができる。そ

れより早く、これだけの魂玉を消滅させるなんて不可能！)

謙介が焦りながら打開策を考えていると、魂の傀儡子は冷酷にもすうつと片腕を上げ、中指と親指をひっ付けて、指鳴らしのモーシヨンに入った。

「駄目！」

それを見た要がすかさず叫んだが、魂の傀儡子は止めるどころか、指に力を込めた。

(くそっ！ くそっ！ 何も思い浮かばない！)

謙介が完全に行き詰ると、ついに魂の傀儡子の指が磨り合わさるうとした。そして、その刹那。

「蒼波滅陣！」

突如、廃工場の中に蒼い光の波が包みこみ、中にいた魂玉をあっと言つ間に全滅させた。

「！？ なんですか！？」

いきなりの出来事に動揺を隠しきれなかった魂の傀儡子は腕を上げたまま固まっていた。

「遅くなつてすみません。」

「「！！！！？」」

背後から聞こえた声に謙介と要はすぐさま振り返った。

「お兄ちゃん、お待ちせ。」

そこには、蒼の光の刃を構えた卓と、紅の光の刃を構えた真理が、堂々と立ち構えていた。

「2人とも……」

まず最初に感嘆の声を漏らしたのは要だった。そしてすぐその後謙介も口を開いた。

「よくあの関門をクリアした。」

「ええ。まあかなり苦戦しましたがね。命の保証がないという言葉通りでしたよ。」

「全くよ、何度死にかけたことやら。」

卓と真理も口ではそう言ったものの、顔には何かを成し遂げたよ

うな後の満足げな表情が浮かんでいた。

「それにしても、驚きました。灯台から出たら鳴咲市が断絶されていたからね。小鉄さんにこの場所を聞いてきたんですけど。」

「まさか、もう魂の傀儡子と戦ってたなんてね。」

卓と真理はするどい目つきで魂の傀儡子を睨んだ。

「ここですぐに俺らに倒されてくれるなら苦労はしないんだけどな。」

卓の問いに、それまで呆気に取られていた魂の傀儡子もようやく我に戻って、再び悠長に笑った。

「実に面白いことを言うのですね。ですが、それは確かにシュールな絵図羅になるでしょうね。しかし、私はあまりそう言った美術品には感嘆しないのですよ。」

「なら、力づくでお前に敗北の絵を見せてやる!」

「5年前の借りをきっちり返すわよ。」

卓と真理はそう言ってそれぞれ刀を構えた。

「たくましくなったわね、あの2人。」

卓と真理の一步後ろで見ていた謙介に要は耳打ちするように言った。

「ああ。クリアするとは思っていたけど、まさかあそこまで強くなってくれるとは。想いの力ってやつかな。」

「あら、珍しい。そんな理屈に合わないこと言うなんて。要が少し茶化すように言うと、謙介は口調を変えずに続けた。

「成長していく彼らを見ると、理屈だけで構成された世の中間、無意味で無価値なものはないのだと思ひ知らされるよ。そんな世界に生きている者は本当の自由、そして幸せなんかを手にするこゝとさえてできないのだったこともね。」

「良かったじゃない。今それに気が着けた謙介もきつと幸せ者よ?」

「だといいいけどな。」

そして、謙介と要も卓と真理と同じところまで前進して、それぞ  
れの武器を構えた。

「さあ、これで最終決戦としよう!」

謙介の言葉に4人は顔を見合わせ、そして力強く頷く。

「ふふふ、これで最終決戦というのには賛同いたします。しかし、  
結果はあなたがた4人の敗北。これは揺るぎない未来です。」

魂の傀儡子の言葉に刀を構えていた卓は、一度、鼻で笑ってから、  
そして口を開き、続けた。

「揺るぎない未来? お前はそんな世界に生きていて楽しいかよ。  
少なくとも、俺はまっぴら御免被るけどな。お前が勝つことが揺る  
ぎない未来ってんなら、俺達がその未来を揺るがしてやるよ!」

そう言いきってから卓は隣にいた真理と顔を合わせると、真理も  
にっこりほほ笑んで、頷いた。

「人間風情が、未来を変えるなどと吠えるものではありませんよ。  
この時間軸の決定事項を変える力など人間ごときにあるわけがあり  
ません。」

魂の傀儡子は腕に引っかけていた杖をすつと構え、その先端の刃  
は卓達4人を目の前に、光輝いた。

気がつくと、夕日はすっかり沈み、いつしか断絶されたこの廃工  
場の中には月明かりが灯されていた。

「しかし4対1ではさすがに、多勢に無勢……。少し、役者を増  
やすこととしましょう。」

魂の傀儡子はまたしても指を鳴らすと、先ほどと同様に、唯一違  
うのはさつきは夕日に染まっていた廃工場の中だったが、今は月明  
かりに照らされた廃工場に無数の魂玉が呼び出された。

「さて、これで数はこちらが有利。とはいえ、この程度の戦力で  
はせいぜい少しの足どめにしかならないでしょうが。」

しかし、言葉とは裏腹に、魂の傀儡子のその表情はどこか優優し  
ささえ感じ取ることができた。

「それは間違いね。」

そんな魂の傀儡子の言葉を真理は真つ向から否定した。

自分の言葉を否定された魂の傀儡子は苛立ちを感じることもなく、むしろ、真理の言葉の真意を理解しきれぬといった表情を浮かべていた。

「私がおか、間違ったことを言ったのであれば、よろしければその訂正のほどをお教えいただきたいのですが？」

魂の傀儡子の問いに真理はすぐに口を開いた。

「だから、足どめにすらならないのよ。この程度の敵じゃあね。」  
真理は返答すると同時に、口元を緩めた。

「!？」

魂の傀儡子が真理の言葉の意味を理解したときには、すでに魂の傀儡子の頭上に、蒼き光の刃を構えた卓が陣取っていた。

「いつの間に!？」

「早いな……」

魂の傀儡子は当然のことだが、味方である謙介さえも、卓のその動きの速さは驚嘆させた。

「5年前、まだ子供だった俺達を仕留められなかったのは痛手だな。」

卓はそう言つて、まだ魂の傀儡子との距離は少しあったが、頭上で刀を振り抜いた。

刀からは綺麗な蒼白の斬撃が放たれ、それは魂の傀儡子が立っていた場所に落ち、辺りは爆風と爆煙に包まれた。

卓は地面に着地するや否や、すぐにバックステップを何回か踏んで、魂の傀儡子のいた場所からある程度の距離をとった。

「……」

4人は固唾を飲んで、魂の傀儡子の様子を伺った。

爆発音の反響が止むと、廃工場には再び、異常なほどの静寂が訪れた。そんな静寂な工場には誰かがごくりと唾を飲み込む、そんなささいな音でさえはつきりと聞き取れた。

だからこそ、爆煙の中から聞こえた足音は騒音のようにはつきり、

4人の耳に届いた。

「……驚きました。いえ、素直な感想です。まさか、こんなにもすぐに私が血を流すことになるとは。」

足音の主は当然、魂の傀儡子。しかし、さっきまでとは違い、魂の傀儡子の額からは血が流れ出ていた。

「すごいわね、謙介。」

そんな一部始終を見ていた要が、謙介の耳元で呟いた。

「ああ、あの訓練はやって正解だった。正直、俺だってあんな訓練やったことないから実際にどれだけ危険なのかは明確には把握していなかった部分もあったが、あの強さを見ると、相当鍛えられてきたみたいだな。」

謙介も決して、敵から目を反らすことはしなかったが、それでも幾分か、さっきよりは表情に余裕が見て取れた。

「私たちも後れをとるわけにはいかないわよね？」

要が悪戯っぽく笑うと、謙介も口元を緩め、一言、当然だ、とだけ言った。

「魂の傀儡子、これでもなお、お前が勝つことが揺るぎない未来だとしても言つつもりか？」

魂の傀儡子と一定の距離を取っていた卓は、再び長刀を構えながら問う。

「……ええ。揺るぎない未来ですよ。私の勝ちはこの程度では揺るぐはずもない。そしてようやく彼女を見つけ、儀式の準備も整えたのです。邪魔されるわけにもいかないのですよ。」

魂の傀儡子は額から口元まで流れてきた血をペロリと舐めると、杖を卓に向けて構えた。

「ああ、そうかい。言うのは自由だもんな。」

「有言実行が私のモットーですがね……!?!」

悠長に話していた魂の傀儡子はふと自分に近づいてくる攻撃に気が付き、とっさに杖で応戦した。

「紅蓮槍風！」

真理の放った、巨大な槍の形をした紅い斬撃は、魂の傀儡子の構えた杖の刃と衝突し、その場で爆発した。

「くっ！」

今度はすぐに爆風の中から姿を現した魂の傀儡子だったが、その先には黄金の光を纏った剣を構えていた謙介がいた。

「しまった！」

魂の傀儡子とはつさに指を鳴らし、無数にいた魂玉のうち何体かを謙介の周りに呼び出した。

「連鎖一貫！」

しかし、そんな魂玉すらも要の素早いフォローで一掃された。要の投げた鎖は見事に謙介の周りにいた魂玉を全て消滅させた。

「甘かったな、傀儡子！」

魂玉を一瞬のうちに殲滅された魂の傀儡子の表情からは完全に余裕というものが失われていて、そして、そんな相手に謙介は容赦なく、黄金の斬撃による一撃を放った。

「……！」

魂の傀儡子も応戦し、空中で体を捻り、杖で斬撃を弾こうとしたが、直撃こそ避けられたものの、魂の傀儡子の身体は空中を勢いよく飛び、そして、廃工場の腐敗した壁に衝突した。

「……まあ、これくらいで倒せる程度の奴ならこんなに苦労はないんだがな。」

すぐに謙介は剣を構えなおす。その少し後ろで卓と真理も周りの魂玉を倒しつつ、魂の傀儡子を警戒していた。

「要！」

「ええ。」

謙介の呼びかけの意図を瞬時に理解した要は自身の武器である鎖を、壁に激突し、床に這いつくばる魂の傀儡子に向けて投げた。

鎖はなんの躊躇もなく、そして、直線状に魂の傀儡子に襲いかかる。

が、残り、数センチというところで、要の鎖は魂の傀儡子の杖に

よって弾かれた。正確な状況説明をすると、這いつくばっていた魂の傀儡子が、勢いよく、起き上がり、そして、瞬時に自分に迫りくる鎖を杖の先の刃で弾いたというのがふさわしい。

「やはり、これでは分が悪いのですかね……。今のダメージは痛いですよ。」

立ちあがった魂の傀儡子はパンパンと自分のコートの埃を手で払いつつ、険しい表情で、謙介を見た。

「このままではまずいですね。早めにあの赤桐蓮華を儀式に使わなければ……」

魂の傀儡子のそんな一言に卓は強く反応した。

「蓮華！？ 蓮華が来ているのか！？」

卓のそんな反応を見て、謙介は苦汁を舐めたような表情をした。

（しまった。案の定ではあるが、彼女のことを聞いたら、弟くんは間違いなく、動揺する……。最悪、それで戦いにまで大きく支障が出る可能性があったから黙っていたが。あの様子だと小鉄も俺と同じ考えで言わなかったんだろうしな。）

謙介の考えとほぼ同じ考えを抱いた、魂の傀儡子はニヤリと笑い、そして口を開いた。

「ええ、私が彼女をここまでさらったのですよ。そして、その2人は私を追ってここまで来たのですよ。」

そう言っただけで魂の傀儡子は杖で謙介と要を指示した。

「蓮華が……」

卓はするどい目つきから一変、脱力した表情になった。

「卓！ だったら助ければいいでしょ！ そのために力をつけてきたんでしょ！？」

そんな卓の変化をいち早く読みとった真理が叱咤するように言い放った。

「！？」

真理のその一言で、卓は再び、長刀を握る手に力を込めた。

「……そうだったな。悪かった、動揺しちゃって。」



「うん。アイツを倒して、蓮華も助け出そう。」  
再び、目に闘志を宿した卓は、真理と共に、一步魂の傀儡子との距離を詰めた。

「おや、立ち直りが早いですね。ではこれなんかはどうですか？  
2008年に城根卓、あなたの中学で起きた、火事。あれが私の  
仕業だとすれば、また動揺しますか？」

「……卓」  
卓は一瞬、眉をピクリと動かしたが、必死に開きそうな口を紡ぎ、  
そして魂の傀儡子を睨み続けた。

「あのときに赤桐蓮華を奪取しようとしたんですが、あなたに邪  
魔されてしまいましたね。」

「……卓」  
真理は卓の握る長刀が震えていたのに気がついて、卓の顔を心配  
そうに見上げた。

「大丈夫だ、真理。」  
卓は真理の顔を見ることもせず、魂の傀儡子を見据えたまま返答  
した。

そんなやりとりをしている間も襲ってくる魂玉を、謙介と要は魂の  
傀儡子の言葉に耳を傾けつつ、だが確実に捌さばいていた。

「ですが、勘違いはしないでくださいね。なにも赤桐蓮華の命を  
奪うつもりはなかったのですから。大事な儀式の材料をそうやすや  
す壊すわけにもいかないでしょう？」

その一言、それが卓の最後の制御線を完全に断ち切った。

卓はものすごい速さで、魂の傀儡子の後ろに回り込み、そして、  
間を開けることなく、蒼の斬撃をゼロ距離で放った。

「卓！」

当然、魂の傀儡子だけでなく、卓自身も爆風に巻き込まれ、魂の  
傀儡子とは反対の方向に飛び退いた。

「蓮華を今すぐ返してもらおう！ お前みたいなやつに蓮華を好き  
にさせるわけにはいかねえ！」

卓の咆哮にも近い叫びは断絶された廃工場の中にこれでもかというほど響き渡った。

「……暴走ですか……」

卓の怒りに満ちた顔を見た魂の傀儡子は脇腹が少し抉れ、流れ出す血を見て、それでもなお、口元は緩んでいた。

「卓、落ち着いて！」

真理が卓に近寄って、宥めようとなだした。

「……もう、大丈夫だ。」

そんな真理の言葉に、卓はゆっくり荒れた呼吸を整え、真理の頭にポンと手を置いた。そして、再び、魂の傀儡子に向き合った。

「蓮華に危険な目に遭わせたなら、俺はお前を絶対に許さない。」

卓の言葉に、魂の傀儡子は鼻で笑うように返した。

「人間風情の許しなど、なぜ私が欲さねばならないのです？ それに私の目的を完遂する上で人間の犠牲は必要不可欠。このことに罪悪感を覚えるというのは、すなわち、人間が肉を食すことに対して、牛、豚など、その他さまざまな動物に対して罪悪感を感じるのと同じことと思いませんか？ あなたたちはいちいち、そんなことに罪悪感を覚えているのですか？」

「……」

魂の傀儡子の言葉に卓はおろか、真理、謙介、要すらも何も言い返すことはできなかった。

それは、魂の傀儡子が言うことを肯定する、いや肯定せざるを得ないからだった。

「ふふ、私の言うことを肯定した、あなたたち自身を責めることはありませんよ。なにせ、私たちは神ではないのですから。不完全な存在である私たちの考えもまた、不完全と言うほかないのです。だからこそ、この世には矛盾が満ちている。動物を食すことは生きるために必要だという。なら、人間を食すものが人間を殺すことも同じ理由で筋は通るのではないでしょうか？ しかし、人間はそれを悪、あるいは罪と定義する。これだって十分な矛盾と言えると思

います。」

魂の傀儡子の言葉は4人にずっしりと重くのしかかってきた。しかし、それでも、卓は魂の傀儡子に対して、言葉を放った。

「それでも、この世が矛盾に満ちていても、俺が蓮華を助けたいという思いに矛盾はない！」

言葉と同時に卓は魂の傀儡子に向って、蒼い光の斬撃を放った。

卓の強い想いに共鳴したかのように、斬撃もまた、強い意思を持っているかのごとく、魂の傀儡子に向って、躊躇なく迫って行った。

「虚無ゼロ・ノースの失力。」

魂の傀儡子が、片腕を前に差し出すと、そこに黒い、小さなブラックホールのような穴が現れ、それは卓の放った斬撃をみるみる取り込んでいった。

「……!?!?!」

その一部始終を目の当たりにした卓と真理は驚きを隠せずに、そして言葉を失った。

「虚無界の術……。厄介だな。」

魂の傀儡子の行った術を冷静に、しかし、その事態を深刻に受け止めた謙介の表情は険しかった。

「私でもこの程度の術は使えるものです。そして、これが石の力を使わなければ無力の人間と、私たち、冥府の使者との決して埋めることのできない、実力の差というものです。」

魂の傀儡子の勝ち誇ったような表情は単なる威勢ではなく、確証を含むものだった。

「……確かに、俺達人間が、お前達みたいな奴らに真っ向から挑んでも勝てないのかもしれない。」

卓は握った拳にさらに力を込め、そして一瞬だけ真理と顔を合わせる、再び、魂の傀儡子に向き直り、口を開く。

「でも、だからこそ、俺達はパートナーなんだ。一人じゃ勝てないから、一人ではどうしようもないときがあるからこそ、力を合わせる！ そして、俺達は力を合わせて、絶対にお前に勝つ！」

卓の言葉に反応したかのように、その瞬間、長刀に纏っていた蒼の光が少し大きく輝いた。

「戯言を。いいでしょう。確かに言うのは自由ですからね。ですが、すぐに大切な人を救えず、泣き崩れることとなるでしょう。」

魂の傀儡子は笑みを絶やさず、指をパチンと鳴らすと、廃工場の中に更に、魂玉の群れが姿を現し、そして、卓と魂の傀儡子との間に壁を作るかのように割って入った。

「では、せいぜい足掻いて見せてください。」

魂の傀儡子は卓達4人に軽く一礼すると、蓮華のいる奥へと姿を消した。

「待て！ つ！？」

卓と真理がすぐに魂の傀儡子を追いかけようとしたが、それは先ほど召喚された魂玉達によって阻止されてしまった。

「どけええ！」

卓が雄たけびを上げながら刀を振るうと、その場で卓の前にいた魂玉たちは一瞬のうちにして、斬撃もろとも消滅した。

しかし、それもほんの一瞬のことで、卓が再び一步を踏み出そうとすれば、そこにはまたしても魂玉が再生されたかのように姿を現す。

「卓、これじゃ力の無駄遣いよ。」

また同じことをしても、永遠にこのループが繰り返されると悟った真理は、焦る卓の肩に手を置いて、制した。

「分かってるけど……」

現実を突き付けられた卓はもどかしさと口惜しさから、唇をぎゅつと噛んだ。

「弟くん！ 真理！」

そんな2人の元に、魂玉と対峙し続けていた謙介と要が駆け寄ってきた。

「2人はアイツを追うんだ。」

謙介のその言葉に卓と真理は驚いたような表情を見せた。

「えつ。でも」

「いいから、ここは俺と要に任せて。それとも、俺達がアイツを追ってもいいが？」

謙介は卓の言葉に被せるように言い、そして卓の答えなど分かりきったうえで、悪戯にほほ笑んだ。

そして、それに続いて要も口を開く。

「大切な人を助けたいんでしょう？　なら、それは自分で助けに行きたいのが男の子つてもんじゃない？」

「……でも、いいんですか？」

卓はそれでも申し訳なさそうに訊ねた。

「いいもなにも、君たちがアイツを倒せば、こいつらも自然に消滅するだろ？　そうでなくても、無限に出現することはなくなる。でも、それまでは誰かがここに残らなければアイツの元にまで行けない。」

「卓、行こう。」

そこまで謙介の言葉を聞いて、真理が卓の手を取った。

「自信がないなら、俺達が行くぞ？」

謙介の言葉に卓は無言で首を横に振ってから、力強い瞳を向け、口を開いた。

「俺達が、必ず倒します！」

「おう、行ってこい。」

そして、卓と真理は要が一瞬だけ鎖の一撃で作ってくれた道をすかさず走り抜け、魂の傀儡子が消えた廃工場の奥へと進んだ。

「こういうことに関して、勝率がなんだとかうるさい謙介の割には、今回は随分分の悪い賭けに出たんじゃない？」

その場に残った要が、鎖で魂玉を倒しつつ、同じく、剣で応戦していた謙介に訊ねた。

「分の悪い賭けか……。確かにそうかもな。でも賭けの面白いところなのは、1が100に化けたり、逆にその反対で100が1に成り下がったりするからじゃないのか？」

「分かりにくい例えね……」

謙介の言葉に対して、要はあからさまに呆れたようにため息をついた。

「だから、実力では俺達の方が明らかに上だけど、実力だけじゃ勝てない勝負つてもあるんじゃないかってこと。それになんとなくだけど、俺達じゃこの賭けに勝つのは無理な気がしてな。」

そんな謙介の一言に要はふっと息を漏らして、そして、茶化すように言った。

「そういうのはいつも賭けごとで勝ってる人間が言うから説得力があるもんだと思うけど？」

「!? うるせー！」

さして賭けが強いわけでもない謙介は赤面し、誤魔化すようにひたすら魂玉を倒して行った。

「でも、私も今回は謙介と同じ意見よ。なんとなくそんな気がするの。」

その要の言葉は謙介には届いてはいなかった。それを確認した要は優しい笑みを浮かべ、そして再び魂玉の群れと対峙した。

一方、魂の傀儡子を追って、廃工場の奥へと進んだ卓と真理は、向っていた。

少し走つてくると、二人は開けた場所へと辿り着いた。

「……蓮華!?」

着いたばかりの卓と真理の視界にはすぐに光の十字架に張り付けにされてていた蓮華の姿が飛び込んできた。

「おや? まかさこここまで辿り着いたのですか？」

十字架に張り付けにされていた蓮華を美しいものを見るような目をしていた魂の傀儡子もすぐに卓と真理に気がついたが、別段焦った素振りを見せるわけでもなく、優雅に振り向き合った。

「蓮華を今すぐ降ろせ。」

卓は怒鳴るわけでもなく、しかし、ドスの効いた声で言った。

「無理な相談ですね。」

「蓮華を連れ去った目的は何？」

卓とは裏腹にいつもの口調で真理は訊ねた。

「そうですね。ここまで辿り着いた御褒美ということで教えて差し上げましょうか。」

樂しげに魂の傀儡子はロングコートのサイドポケットから淡いピンク、または白桃色の石を取り出した。

「私の目的はこの石の覚醒。まあ目的というのも私の計画の全貌というわけではありません。少なくとも、この彼女を連れさらった目的という意味ですがね。」

「それって、贈与の石……」

真理は、魂の傀儡子を取り出した石をじっくり見て、確信を得ると、口を開いた。

「ええ、あなた方討伐者の持つものと何も違わぬ石です。しかし、残念ながら、この石は私に力を与えてはくれないですよ。」

魂の傀儡子はわざとらしく、やれやれと肩をすくめた。

「当たり前よ。贈与の石が、虚無界の住人に力を与えるなんて聞いたこともないわ！」

「やはりそうなんですか。」

「だが、それと蓮華はどう関係してるんだ！」

今にも斬りかけられそうな体勢をとっていた卓が興奮気味に口を開いた。

「ええ。ですから、私にはこの石の力が必要だったんですよ。そして、数年前に偶然でしょうかね、私がつけていたこの石が突如、光輝き、反応したのです。そしてその後何度か同じ現象が起きました。しかし、それは不定期で、これといった原因が分からなかったのですが、あるとき気がつきました。この石が反応したときにはある一定の距離の中に共通した人物がいたということに。」

魂の傀儡子が嬉しそうに話すその言葉は、廃工場の中を何度もこだましていた。

「そして、時間をかけ、とうとう割り出したのですよ。この少女

こそが、この石を反応させている根源だということに！」

魂の傀儡子は高々と両腕を広げ、そして豪語した。

「どうして蓮華が……」

卓の手は小刻みに震えていて、その震えは卓の手を伝って、その手に握られていた長刀にも伝導していた。

「その石を覚醒させて、お前は何をするつもりなの？」

魂の傀儡子の話しを聞いてもなお、平静を保っていた真理は冷静に問いを続けた。

「……この世界を救います。」

少し間を置いたあとに放った魂の傀儡子のその言葉に、卓も真理もしばらくの間言葉を失った。

廃工場の中に一時の静寂が訪れたが、真理の言葉がその静寂を打ち破った。

「それもお得意の冗談？」

真理の質問に、魂の傀儡子は首を横に振って、言葉を紡いだ。

「これは冗談ではありませんよ。この世界を救う、これこそが私の目的そのものなのですから。」

「なら、何で人の命を奪ったりする!？」

真理に続いて、卓も質問を投げかけた。

「言っただでしょう？ 私が救うのはこの世界です。この世界に巣食う生命まで助けるなどとは言っていませんよ?」

「………………。どうやら話しはここまでのようね。ここからは剣を交えて、決着を着けましょう。」

今まで、冷静に言葉を交わしていた真理も、ついに自分の日本刀を魂の傀儡子に向けて構えた。

「最初から話し合いでどうにかなる相手じゃなかったようだな。」

真理に続いて卓も武器を構える。

魂の傀儡子はそんな2人を見て、なお、笑みを崩さず、しかし、杖を構えた。

「もう、生かしては帰しませんよ?」



3人の刃はどれも、月明かりに照らされ、神々しく光っていた。

「卓、落ち着いて戦うのよ？」

「ああ、分かっている。」

真理に返事を返すも、卓は魂の傀儡子から一瞬たりとも視線を外すことは無かった。

「私たちは強くなった。だから、自信を持って行こう。」

「絶対に勝つさ。」

卓はこの廃工場に来て、初めて口元を緩めた。

そして、それを見た真理はどこか安心感を感じていた。

（ふう、ここで魂玉を召喚しては、下手をすれば儀式の妨げになりかねませんね。分かかってやってやっているのか、分かかってないでやっているのか。全く、どちらにせよ、私が直接相手をしなければいけないなんて、厄介な子供たちです。）

魂の傀儡子は杖を構えながら、ふわっと宙に浮いた。

「では、5年前に仕留め損ねたその命、ここで仕留めることとしましうか。」

「はああああ！」

宙に浮きながら喋る魂の傀儡子に向けて、卓は間髪いれずに3発の蒼い斬撃を放った。

「お遊戯なら、ここは少々場違いですよ？」

魂の傀儡子は、自分に迫りくる3発の斬撃に対して、優雅な剣さばきで、それらを全て受け流した。

「紅蓮槍風！」

その間に、魂の傀儡子の真下に潜り込んでいた真理は、真上に向けて、槍のように日本刀を突きだすと、巨大な紅い槍の形をした斬撃が、魂の傀儡子を捉えた。

「真下！？」

意表を突かれた魂の傀儡子はすぐさま回避するために横移動しようとしたが、真理の一撃の予想以上の速さに、体の一部が飲み込まれ、そのまま天井へと激突した。

「くはっ！」

そのまま落下する魂の傀儡子だったが、なんとか体勢を整え、また宙に浮いた。

「……今のは驚きまし」

魂の傀儡子の言葉が最後まで続かないうちに、彼は蒼い斬撃の追撃を受けた。

廃工場の宙には斬撃による爆煙が広がっていたが、魂の傀儡子はそこから姿を現すことは無かった。

「卓、次に構えて。」

「分かつてるって。」

爆煙が晴れて行く中、二人はそれぞれ光輝く刀を構える。

「人が話しているのに、ひどいじゃないですか。」

煙の中から聞こえたその言葉に、卓と真理は一層、刀を握る手に力を込めた。

「最近の子供は礼儀もわきまえていないようですね。これは少々きつめのお仕置が必要とお見受けします。」

再び、空中に姿を現した魂の傀儡子の手に握られていた杖は全体的に、暗い紫のオーラを纏っていた。

「虚無の具、邪蛇の綻ほころびなるものです。」

そう言つて、魂の傀儡子は自らの杖の刃に指をなぞらせた。

「卓、気をつけて。虚無の具はそれ単体で、私たちの石の力と同様な力を発揮することのできるものなの。」

「ああ、空気がピリピリするのを感じるしな。……でも、俺と真理ならきつと勝てる。」

その言葉に真理は柔らかな笑みを浮かべた。そして、一言。

「ええ。」

再び、邪蛇の綻を構えて、宙に浮かぶ魂の傀儡子に向き合った卓と真理の瞳には動揺などではなく、確かな決意が満ちていた。

「邪蛇の綻アレスリテイーの能力は、自信の血を喰らうことオによって発動する自立型攻撃装甲にあります。」

「……………」

卓と真理が黙っているのを見て、魂の傀儡子はくすりと笑った。

「百聞は一見に如かず、実際にご覧いただきましょう。」

すると、魂の傀儡子は自分に杖の先端の刃を向けると、そのままぐさりと自分の腹部に刃をのめり込ませた。

「ぐはっ！」

「……!?」

魂の傀儡子のその自殺行為とも見れる行動に卓と真理は眼を見開いた。

「ぐぼっ！」

さらに魂の傀儡子が刃を刺し込むと、ついには口から多量の血が吐かれ、廃工場の床にべちゃっという音を立てて垂れ落ちた、

「一体何を……………」

真理がそんな一言を呟くと、苦しそうな表情をした魂の傀儡子は自身の腹部に刺さった杖を勢いよく抜き出し、卓と真理を一瞥した。

「はあ……………はあ……………。お見苦しいところをお見せして、失礼しました。」

当然、引き抜いた刃は血で赤く染まっっていて、魂の傀儡子の腹部からも血が流れ出していた。

「先ほども申した通り、私の虚無の具は、私自身の血を与えなければ発動しない代物でしてね。少々発動するとき痛みを伴うのが欠点です。」

さつきまで苦しそうだった魂の傀儡子は何事もなかったかのように、再び笑みを浮かべ、血の噴き出していた腹部をさすっていた。

「なんて奴だ……………」

卓は、宙に浮かぶ魂の傀儡子の言動を信じられないといった表情で見据えていた。

「しかし、これで私の邪蛇の綻は力を発揮します。」

魂の傀儡子が自分でつけた腹部の傷は次第になくなり、流れ出ていた血も完全に止まった。

そして、刃を染め上げていた血は、杖全体を纏っていた紫の光と混同し、赤い血と紫の光は、杖だけでなく、魂の傀儡子の周りを、まるで生きた蛇のようにうねり始めた。

「これが、邪蛇の綻でございます。」

「なんだよこれ……。気持ち悪いな。」

卓は邪蛇の綻が動く様子を見て、身震いした。

紫の光と魂の傀儡子の血が入り混じった邪蛇の綻は、あたかも威嚇をするように、頭部とおぼしき先端部分を卓と真理に向けていた。

「敵の正体が何であれ、全力で倒すだけよ！ 紅蓮槍風！」

間髪いれずに、真理は大きな槍型の斬撃を放った。

しかし、魂の傀儡子はそれをほほ笑むように見ているだけで、避けるための予備動作一つ体を動かさなかった。

「言っただでしょう？ これは自らの血を飲ませる代わりに、自立型攻撃装甲となると。」

魂の傀儡子の言葉とほぼ同時に、邪蛇の綻は一瞬のうちに、魂の傀儡子の目の前で大きな盾のような形を映し出し、そして、真理の放った一撃を完全に打ち消した。

「そんなんっ！」

その一瞬の出来事、ただの刹那だったが、真理と卓はとんでもないものを引き出してしまったことを理解した。

「私の血を混ぜたことによる、意思伝達機能です。私が脳で一瞬のうちに思い描いたことを実現することができる、云わば意思を持った武器、とでもいいましようか。」

真理の一撃を止めた邪蛇の綻は、再び蛇のような形に戻っていて、宙をうねっていた。

「脳で考えたことを実現するって、そんなの防ぎようがないじゃない……。」

真理は万策尽きたような表情で、刀を握る手を震わせた。

「……。」

何かを考え込むように、刀を持っていない方の手を顎に当ててい

た卓が、真理に耳打ちするように言った。

「あの蛇みたいなヤツつて攻撃と防御、2つ同時に出来るのかな？」

「えっ？」

真理は意表を突かれたように、すかさず卓の方を向いた。

「いや、いくら脳で考えても、現実的に不可能なことは出来ないんじゃないかなと思って。」

「……確かに。やってみる価値はあるかも。」

そんな2人のやりとりを魂の傀儡子は不思議そうに、しかし笑顔はあくまで維持しつつ見ていた。

「じゃあ、2手に分かれよう。」

「うん。」

「せーの！」

卓の合図をきっかけに、卓と真理はそれぞれ左右に分かれて、魂の傀儡子の真下へと近づいた。

「ふふふ、そう何度も同じ攻撃は受けませんよ。」

邪蛇の綻はまず卓に目掛けて、突っ込んだ。

「おっあつと！」

すかさず、卓は走っていた足を止め、その場でブレーキをかけた後、半歩ほど後ろに飛び退いた。

邪蛇の綻は、勢い余って、そのまま廃工場の地面に激突した。

「真理！ 行くぞ！」

「ええ！」

反対側から距離を詰めた真理はすでに魂の傀儡子の真下に潜り込んでいて、卓も、真下からはそれほど距離のない位置まで詰め寄っていた。

「蒼波滅陣！」

「紅蓮槍風！」

卓と真理が放ったそれぞれの大技は、邪蛇の綻を身の回りに置いていない、無防備な魂の傀儡子へと向かっていた。

卓の放った、まるで渦潮のように広範囲に広がった蒼の斬撃と、その中心に真理の放った、紅く光輝く、槍の形をした斬撃が美しく折り重なり、魂の傀儡子へと迫る。

「確かに狙いは悪くありません。が、それも子供の考える茶番にしかかなりえないのですよ。脳の伝達速度というものを完全に考慮から外している、その時点であなたが私に傷を負わせることは不可能。私がこうして話している間にも、すでに脳から伝達済みなのですよ。」

魂の傀儡子の言葉通りに、さっきまで地面と顔合わせしていた邪蛇の綻は、いつの間にか魂の傀儡子と卓と真理の放った斬撃の間で、盾として君臨していた。

そして、蒼と紅の色鮮やかな斬撃は散るも虚しく、邪蛇の綻の盾に防がれてしまった。

まるで、花火のように大きな爆発音を響かせ、上空には多量の爆煙が空気を濁していた。

「……あまり、自分だけが頭脳派だと思わない方がいいと思うぜ。なんせ、俺のパートナーは偏差値78の天才なんだからな！」

あまりにあっさり攻撃を止められたにもかかわらず、卓は口元を緩め、そして挑発ぶりな口調で言った。

「言っている意味がよく分かりませんが……。ッ!?」

魂の傀儡子は言葉の途中で、背後からの斬撃の気配を察知したが、時は少々遅く、邪蛇の綻が瞬間的に間に割って入るも、完全に防ぎきることは成せず、魂の傀儡子は上空で滑るように飛ばされた。

「なっ!?!」

あまりに一瞬の出来事に理解が及ばなかった魂の傀儡子は、上空でよろめいた自分の身体を立て直し、再び邪蛇の綻を自分の周りに陣取らせた。

「紅蓮槍風・又撃。またげき」

背後からの攻撃だったにも関わらず、真理は魂の傀儡子の前方で、卓と並んで刀を構えていた。

「一体何が……」

動揺を隠しきれなかった魂の傀儡子に、真理は勝ち誇ったような表情で口を開いた。

「あなたが脳の伝達によって、その武器を動かしているっていうのなら、話は簡単よね。脳ってのは視覚、聴覚、触角、嗅覚、味覚、これらから送られてくる刺激を受信、そしてそれに対して情報を送信する役割がある。なら、これらの五感を死角をついていけば、脳の伝達は少し遅らせることができるでしょ？」

真理が悠長に話すその言葉を、魂の傀儡子は目つきを鋭くしながら、聞いていた。そして、重々しく口を開く。

「……確かに、理論的に言えばその通りです。まさか、この短時間でそこまで考えていらっしやっただとは感服するばかりです。が、しかし、今の攻撃に関して言えば、あなたは私の視覚をコントロール、あるいはそれに準ずる行為で、制御したというのですか？ 確かにあなたは今のその位置から一歩も動いていなかったはず……。それなのに私の背後から、私を襲撃するというのはいささか疑念を抱くには十分過ぎるものだと思いますがね。」

魂の傀儡子の問いに対して真理はふんつと鼻で笑ってから再び続けた。

「それは視覚のコントロールでもなんでもないわよ。私の紅蓮槍風の進化形態。といってもブーメランのように、ある程度ターンして戻ってくるっていうだけの単純な攻撃なんだけどね。それでも、背後からの攻撃は視覚をはじめとする五感からの情報はほとんど入らない。だから、その武器を脳で制御している以上、完全に防ぎきることはできないと思ったのよ。結果は……。言うまでもないわよね。」

「なるほど。確かに聞けば聞くほどに私の落ち度が目立つようですね。まさか、人間に自らの弱点を教えていただくことになるうとは。人間を蔑み、馬鹿にしてきた私に対して、これ以上の皮肉はないでしょう。」

そして、魂の傀儡子はそこで一旦言葉切って、邪蛇の綻を自分の背後に盾の形として配置し、再び言葉を続けた。

「ですが、それもこうすれば、ある程度は防げるといっもの。そして、今度は背後にも気を配る必要がありますね。」

そんな様子を見て、真理は別段焦ったようにも見えず、むしろ、余裕の表情はそのままにして、口元を緩めた。

「人に言われたことをするなんて、幼稚園児でも出来るわよ？」

何も、死角は背後だけなんて言っていないじゃない。」

「!？」

魂の傀儡子は、真理に言われ、すぐさま背後など自分の周りを見渡したが、そこには何もなかった。

「うおおおお！」

すると、魂の傀儡子の頭上に、蒼の光を纏った長刀を構える卓がいた。

「いつの間に!？」

「蒼波滅陣！」

「邪蛇の綻！」

卓と魂の傀儡子の叫びが廃工場の中に響き渡り、直後、轟音が月明かりの中に続いた。

「卓！」

見事に地面に着地した卓に真理は駆け寄った。

「……当たったのか……？」

すぐに卓と真理は頭上を見上げると、そこにはまだ爆煙が立ち込めていた。

「……なるほど。死角とは頭上を含め、真下もあつたのですね。」

「!?!?!」

真理と卓はその声に瞬時に反応して、とっさに数歩後ろに飛び退いた。

「肉体的な力の差は頭脳で克服しようとするその姿勢には敬礼の意を示さざるを得ないでしょう。が。しよせんは猿知恵。視覚に捉



えることさえできれば、そのあとは瞬間的にもまだ遅いと言えるほどの速さで、この邪蛇の綻は私を守ってくださいなのですよ。」

空中の爆煙から姿を現したのはさっきより一回り大きくなった邪蛇の綻に身の回りの陣を取らせた魂の傀儡子が姿を現した。

「さて、これほど優秀な方たちの血はさぞ美味しいんでしょうね。」

魂の傀儡子は舌舐めずりをして、邪蛇の綻の頭部のような部分を撫でた。

「美味しくいただきましたしょう。」

卓と真理にさきほどまでの余裕はなく、ただただ、いつ動き出すか分からない敵をじっと見据えていた。

## 月光の臨場（後書き）

「約束の蒼紅石」第7話いかげだっただでしょうか？ この魂の傀儡子編もラストパートに向けて、より一層内容が激しくなってきたと思います。ここまで読んでくださったみなさん！ この章も残りあとわずかなので、残りも全部読んでくださるとうれいす！ それでは、短めになってしまいましたが、また第8話でお会いしましょう！

## 「愛」が故に（前書き）

こんばんは！ 夢宝<sup>むほう</sup>です！ クリスマスも終り、次は新年に向けて忙しい毎日をお過ごしかと思えます。そんなときに、ちよつと休憩がてら、この小説はいかがでしょうか？（宣伝です 笑）さて、冗談はさておき（少しは本気）、この更新が今年最後の更新となります。そして、今回が、「魂の傀儡子編」最終話となってしまうました！ 全8話となった魂の傀儡子編、もし、お時間があるのであれば、第1話から読み直していただけるときつともつと楽しめるのではないのかな？なんて思ってみたり（笑） ここまで読んでくださった読者の皆様、どうか、これからも応援よろしく願いますね！ では、「魂の傀儡子編」最終話、「約束の蒼紅石」第8話、お楽しみください！

## 「愛」が故に

一方、同時刻にて、鳴咲市の南部に位置する住宅街に広がる路上で、小鉄は目を瞑り、神経を結界に注ぎ込んでいた。

（謙介さんたち、大丈夫でしょうか？ いや、さつき城根君たちも向って、すでに廃工場に到着はしているから、そこまで心配する必要もないのですが、しかし、それでも自分だけ離れたところで手をこまねくというのはなんとも歯痒いものです。）

網線結界を張り巡らせていた小鉄は、線の一本一本に触れた感触を感知することができ、それはつまり、線に触れた場所に誰がいるのかが分かるという仕組みである。

（鳴咲市にこれ以上の敵はいないでしょうし、やはり今からでも僕も加勢にいったほうがいいんじゃないでしょうかね。）

小鉄は少しうつすらと目を開け、少し考え込むように立ちつくした。

（！？）

そんなとき、張り巡らせた線の何本かに何かが触れる感触が小鉄の神経を刺激した。

（今の感じは……。廃工場へと向かっている？ 何だこの感触。討伐者でもなければ、冥府の使者でもない、今まで感じたことのないタイプ……）

突然の予期せぬ事態に、小鉄は焦りと疑念の表情を浮かべ、そして、再び結界に意識を集中させ、対象物の動きを注意深く追った。

（このどこか掴みきれない感覚、敵か味方さえ分からない現状で廃工場に近づけるのはいささか危険なのでは……）

目に見えないものを前にしたときに感じる恐怖に似たものを感じていた小鉄は、その場を動こうか、否かを何度も頭の中で考えた。

（……。そろそろ僕も自分の意思で行動しなければいけないときが来たということですかね。）

小鉄は何かの決意を秘めたような目を見ると、すかさず、廃工場の方へと駆け出した。

廃工場で激闘を繰り広げる卓と真理は今だに邪蛇の綻に苦戦を強いられていた。

「駄目、あれから全部の攻撃がごとごとく防がれる……」

真理は歯ぎしりして、そして魂の傀儡子を睨みつける。

「ああも、全方位完全に防御されたら、どうしようもねえよ。」

卓も苛立ちを感じ、眉間に眉を寄せた。

「邪蛇の綻の威力、ご覧にいただけただけですよね。」

そんな2人の様子を満足げに見ていた魂の傀儡子はくすりと笑った。

「!？」

が、魂の傀儡子はすぐさま表情を険しくし、ロングコートのポケットから光輝く白桃の贈与の石を取り出した。

「石が反応している……？」

魂の傀儡子は真っ先に囚われた蓮華に目をやるが、蓮華はさつきからずつと意識を失っていて、ピクリとも動かなかった。

「何？」

その様子を真理も怪訝そうに見つめている。その横で卓は何が起きているのかいまいち把握しきれずに刀を構える。

「……覚醒の時は近いのかもしれないね。」

魂の傀儡子はそう呟くと、険しい表情のまま卓と真理を見下す。

「では、しばらくあなたたちにはおとなしくしてもらおう必要があるようですね。」

少し低めの声は廃工場によく響き、魂の傀儡子が片腕を前に差し出すと、それまで魂の傀儡子の周りで威嚇していた邪蛇の綻は、素早く卓と真理に襲いかかった。

「ぶった斬る！」

真っ向から突っ込んできた邪蛇の綻に向って、卓は蒼い斬撃を放つ。

しかし、そんな攻撃を、邪蛇の綻は体を少しよじって見事にかわし、そのまま勢いを殺すことなく、卓と真理を締め付けた。

「くそっ！」

「きやあ！」

卓と真理はかなりの力で締め付けられてしまい、握っていた刀を振りまわすことすら余儀なくされてしまった。

2人の動きが完全に封じられたことを確認して、魂の傀儡子はゆつくりと地面に着地し、そして、張り付けにされた蓮華へと近づいた。

「てめー！ 蓮華に何をするつもりだ！」

邪蛇の綻に締め付けられた卓が茂垣もがきながら叫んだ。

「そこで見ていれば分かりますよ。」

とくに振り返るわけでもなく、蓮華に向き合ったまま魂の傀儡子は返答した。

「……」

卓と同様に締め付けられていた真理は、特に口を開くこともなかったが、じつと魂の傀儡子を見据えた。

「さて、この娘の魂、操らせていただきますよ。」

そう言って、魂の傀儡子は意識を失った蓮華の頬に杖に取り付けられた刃の先端を触れさせた。

「…… やめるおお！」

一瞬にして蓮華の危険を感知した卓はとにかく思いっきり叫ぶも虚しく、魂の傀儡子はそのまま刃を蓮華の頬に触れさせたままそつと引いた。

すると、蓮華の頬から少量の血が流れ出し、杖の刃へと伝う。

「くくく、ははははは！」

魂の傀儡子は流れ出す蓮華の血を見ると、壊れたように笑いだした。



放った。

「ええ。その通りです。この十字架は、使用する魂を万全の状態に保つための術でしてね。それには少々時間が必要だったので、もう十分です。そして、私の字の由来通り、この少女の魂あたまを操り、この石を完全覚醒させるのです。」

「どういう意味だ!？」

卓の問いに答えたのは魂の傀儡子ではなく、真理だった。

「卓、贈与の石は持ち主の経験値で力を発揮するのが普通なの。けれど、もう一つ、完全覚醒するために持ち主の命を捧げることも出来るの。でもこれは持ち主の同意が無ければ成しえないこと。でも、魂を操ることのできるアイツはそれすらも成し得るのよ。」

真理は出来るだけ落ち着いて説明しようとしていたが、その声は完全に震えていた。

「そんな……」

無情な現実を突き付けられた卓は刀を握る手から力さえ失い、絶望に伏した表情へと豹変した。

「愛する者を失う、それがどれだけ辛いのかは私もよくわかります。しかし、生物とは本来、私利私欲のためだけに行動するのが自然の摂理。私としても例外ではないのです。ですから、私は私の愛のためにあなたの愛する者を奪う。」

魂の傀儡子が吐き捨てたその言葉に応じるように、蓮華を張り付けにしていた十字架の光はその形を変え、束縛器具のように蓮華の両腕、両足を空中で縛り上げた。

そして、それを確認すると、魂の傀儡子は白桃の贈与の石を掌に乗せ、蓮華へと差し出した。

「魂の共鳴、完了。」

魂の傀儡子がそう言うと、とたんに蓮華の口が、魂の傀儡子に合わせて動き出した。

「我、自らの魂を臓物として、汝に授けることをここに宣言する。」



魂の傀儡子の声と、蓮華の声は完全に重なり、操られていた蓮華が詠唱を唱え始めた。

「卓！ あれは魂の売って覚醒させるための詠唱よ！」  
すかさず真理が叫んで、何度も体を束縛から解こうと試みたが、いずれも失敗した。

「くそっ！ 何とかならねーのか！」

卓も頭で考えうより先に体を動かし、しかし、抜け出せずに唇を思いつきり噛んだ。

すると、卓の口から血が流れ出した。

「卓、血が！」

「こんなもの……。蓮華を何とかしないと！ ……血？」

流れ出す血を気にも留めず暴れていた卓は、一旦動きを止め、そして刹那に考えを張り巡らせた。

「卓？」

急に黙り込んだ卓を真理は心配そうに見つめていた。

「真理！ ここから抜け出せるかもしれない！」

「えっ!？」

空中で身動きを完全に封じられた卓と真理を放置したまま、魂の傀儡子は蓮華を操って詠唱を続けた。

「「汝、我との契約をここに解約することを提示する。」」

詠唱を唱えるたびに、白桃の贈与の石の輝きは増していき、今では月明かりに照らされていた廃工場を太陽のごとく照らしていた。

「うごあつ！」

邪蛇の綻に締め付けられていた卓は、顔を腕のところまで近づけ、そして、腕を思いつきり噛んだ。

「卓!？」

突然、妙なことを始めた卓に動揺を隠しきれなかった真理は卓に身を寄せようとしたが、邪蛇の綻の束縛によって阻止された。

「はあ……はあ……。大丈夫だ。」

自分の腕を少し噛みちぎった卓の顔は所々血で赤く染まっ

そして、当然腕からも血がどくどくと流れ出していた。

「何してんの!？」

卓の行動の真意が分からない真理は叱咤するよりほかにやることはなかった。

「多分、これで抜け出せる。」

そう言っただけ卓は、自分の腕にちらりと視線をやると、真理もそれを追って、卓の腕を見た。

「えっ?」

すると、卓の腕から流れ出していた血が、邪蛇の綻に流れていた魂の傀儡子の血と混じり合わさっていた。

「血を介して意思伝達するなら、俺も血を介して意思伝達するまでだ。」

卓は痛みから流れる汗を少し気にしつつ、笑顔を作った。

「また無茶なことを……」

だが、真理の表情は柔らかな笑顔となっていた。

「いくぞ……」

卓は何かを念じるように、目を瞑った。

(束縛を解け……!)

卓が心の中でそう呟くと、邪蛇の綻は締め付けていた体から力を抜き、真理と卓は邪蛇の綻の束縛から解放された。

「やった!」

卓が満足げな表情を浮かべ、着地すると、真理が駆け寄ってきた。

「卓、腕大丈夫?」

「ああ、これくらいなんともないよ。」

腕からは未だに血が流れていたが、特に気にした様子もなく、卓は魂の傀儡子へと視線を移した。

「詠唱に気を配っているせいか、まだ気が付いていないみたいね。」

「急いごう!」

そう言っただけ卓は魂の傀儡子の背後に近づき、そして、そのまま背

中を切りつけた。

「かつはっ!?!」

いきなり背後からの攻撃を受けた魂の傀儡子とはつさに魂の共鳴を解除して、そのまま前屈みに倒れ込んだ。

「はあ……はあ……。……蓮華を解放しろ!」

切りつけたままの体勢で、卓は見下ろすように怒鳴った。

「どうやって、あの束縛を……!?!」

解せないという表情で、魂の傀儡子のはらりの立ち上がった。

背中から流れ出す血が地面に滴り落ちる音は、断絶された廃工場の中に意外と響いた。

「!?!」

魂の傀儡子は、卓が答えるまでもなく、自分のつけた覚えのない腕の傷を見て理解した。

「自分の血を織り交ぜたのですか。」

出来るだけ平静を保とうとした魂の傀儡子だったが、その声色にはどこかどす黒さが垣間見えていた。

頭上では、動こうとせず、じっと待機し続ける邪蛇の綻がいて、

それを一瞥した魂の傀儡子は舌打ちした。

「まさか、こんな形で邪蛇の綻を攻略するものがいるとは……!」

「お前が散々罵ってきた人間に攻略された気分はどうだ?」

卓は挑発するように言い放つと、魂の傀儡子は不敵な笑みを見せ、返答した。

「ええ、最悪の気分ですよ。吐き気がするほどにね。」

魂の傀儡子の表情は笑顔だったが、卓と真理にはどこか憎悪を醸し出しているように映っていた。

「そっちの目的が分かった以上、余計な時間はかけられない。」

日本刀を構える真理を、魂の傀儡子は笑顔から一変、険しい目つきで睨むように一瞥した。

「ふざけるのも大概にしてください。私がこの計画を実行するのに、一体どれだけの時間を労したか。あなたがたのような子供に邪

魔などさせません！」

魂の傀儡子は大声でそう叫ぶと、上空で待機していた邪蛇の綻を指鳴らして消滅させると、一瞬だけ、蓮華を一瞥し、再び卓と真理へと向き直る。

「目的のためにならいくらでも自分の血くらい流してさしあげますよ！」

再び、魂の傀儡子は杖の先端部分の刃を自分の腹部へと向ける。

「卓。」

「ああ。」

そんな様子に、焦り一つ見せなかつた卓と真理の腰からぶら下がる紅と蒼の贈与の石は、二人の心臓の鼓動に合わせて、光を脈打っていた。

「愛する者を失う痛み、そんなのはもう経験しているんだよ。」

卓は目を瞑り、そして、自分の母親である結衣子の笑顔を脳裏に浮かべ、そして、目を開く。

「だからこそ、愛する人を守る力が必要なんだ。」

卓は隣に並ぶ真理の顔を見ると、真理もにっこりほほ笑んでいた。

「戯言を！」

魂の傀儡子は何の躊躇もなく、自分の腹部に刃を突き刺すと、当然、そこから大量の血が噴き出した。

「ぐはあっ！」

苦しそうにもがく魂の傀儡子と対峙していた卓と真理はそつと手をつないだ。

「魂の傀儡子、その苦しみから今解放してあげる。」

真理は、そう言って卓の握る手と日本刀を握る手に力を込めた。

卓も真理に応じて、両手に力を込める。

そして、同時にすつと口を開く。

「「契約の蒼紅、<sup>そつく</sup>我らの絆を具現せよ！」」

卓と真理が同時に、同じ詠唱を唱えると、とたんに、光を脈打っていた紅と蒼の贈与の石が、今までにないほどに、目を開くことさ

えままならないほどの強い光を放った。

「なっ!?!」

そんな光に魂の傀儡子は目を瞑り、そして、再びゆっくりと目を開けると、目の前には刀の代わりに、深紅と蒼の光が織り混ざって出来た巨大な一本の剣を2人で構える卓と真理の姿が視界に飛び込んできた。

「!!! それは……」

その光景は魂の傀儡子に敗北感を与えるには十分で、卓と真理には勝利への確証を与えていた。

「終わりだ。お前は馬鹿にしてきた人間の、絆の力の前に朽ち果てるんだ。」

「強さの本当の意味を知り得なかったあなたに、私たちは強さの真意を教えてもらった。感謝するわ。」

そして、二人は口を紡ぎ、同時に一本の紅と蒼の光の剣を握る手に力を込める。

「世迷言を! 邪蛇の綻!」

魂の傀儡子の血を媒介に具現した邪蛇の綻が魂の傀儡子の周りに陣取った。

「卓、今度こそ、ありがとう。」

「俺の方こそ、真理がパートナーで良かった。……ありがとう。」

邪蛇の綻など気にも留めず、廃工場を包み込む光の中で卓と真理は顔を向いあわせて、笑顔を見せると、魂の傀儡子に向き直って、光の剣を振り下ろした。

「これで終わりなど認めぬ!」

光の剣に向って邪蛇の綻は勢いよく突っ込むも、虚しく、一瞬間のうちに、燃やしつくされたように消滅した。

「!!! くそっ! くそっ! くそっ!!!!」

魂の傀儡子は迫りくる剣の前に、一步も動けずに、ただ最後はその叫びが廃工場の中を悲しくこだました。

そして、最後は魂の傀儡子も光の剣の一撃に飲み込まれた。それ

と同時にすさまじい爆風が巻き起り、卓と真理の髪は激しく靡いていた。

紅と蒼の光は廃工場に留まることを知らず、ところどころ朽ちて穴が空いた天井から漏れ、闇夜を明るく照らしていた。

「謙介！ あの光って！」

その光に気がついた、廃工場の中心部で魂玉と対峙していた要が興奮気味に言った。

「……ああ。あの2人に間違いない。ついに倒したんだ。」

謙介もふいにその光を見上げ、ふっと表情を和らげて剣を降ろした。

それまで要と謙介の周りにいた多数の魂玉も次々に炎上していき、あっという間にその場には謙介と要だけになった。

「良かった……。本当に良かった。」

要は笑いながら涙ぐんでいた。それを見た謙介も優しく微笑んで、紅と蒼に照らされた夜空を見上げた。

（本当によくやった、真理、弟くん。）

「謙介さん！ 要さん！」

謙介と要が勝利の余韻に浸っていると、突然、廃工場に2人を呼ぶ声が響いた。

「小鉄！？」

「どうしたの？ こんなところまで来て。」

本来、別の場所で結界を張っているはずの小鉄の登場に、不意打ちを突かれた二人は驚きを露わにしていた。

「はあ、はあ。すみません、勝手に行動してしまって……」

走ってきたのか、小鉄は乱れた呼吸を整えながら謝罪した。

「いや、それは別にいいんだが、どうしたそんなに慌てて？ 魂

の傀儡子ならもうあの2人が倒したぞ。」

「えっ？ もう倒したんですか！？」

「ええ。」

驚いていた小鉄に対して、要が満足そうな笑顔で肯定し、謙介も

無言で、力強く頷いた。

「それは良かったです！」

素直に喜んだ小鉄だったが、すぐに神妙な面持ちに戻って、言葉が続けた。

「あ、それで、報告にきたんですけど、僕の結界に討伐者とも冥府の使者とも違う何かが入ったのですが。」

「何!？」

小鉄のその言葉にさっきまで表情が和らんでいた謙介と要もさすがに表情が硬くなった。

「それで、その対象はここに向ってきたと思うんですけど。」

「……私たちは見てないわね。」

「ああ。」

「……そうですか。」

そして、廃工場には再び緊張の空気が充満した。

断絶されたその空間にその雰囲気はあまりに重々しかった。

「とりあえず、俺達もあの2人を追おう！」

その静寂を破ったのは謙介で、要と小鉄もそれを承諾し、さらに廃工場の奥へと駆け出した。

「はあ……はあ……。やっと決着が着いた……」

「……5年間の因縁もこれで終わりね。」

卓と真理は、自分たちの目の前で魂の傀儡子が地面にボロボロになつて倒れ込んでいるのを確認して、そして拳と拳を合わせて、笑みを浮かべた。

そして、宙に浮いて蓮華を拘束していた光は消え、蓮華の身体はゆっくり落下し始めた。

「! おっと。」

それに気がついた卓が、すかさず蓮華の下で両腕を構え、蓮華はお姫様だつこの格好で、卓の両手に身体を授ける風になった。

「う、う……ん。……えっ? たつくん!？」

瞳に光が戻った蓮華は自分の目の前に卓の顔があったことに驚き、

赤面した。

「ああ。」

卓も少し距離が近かったことに照れ、顔を反らした。

「えっ？ えっ！？ 何この格好！？」

蓮華は自分が卓にお姫様だっこされていることに気が付き、卓の腕の中でじたばたした。

「お、おい！ 暴れるなよ！」

卓も焦って、急いで蓮華を降ろした。

「何、早速いちゃついているのよ。」

そんな2人の様子を、真理が目を細めて見ていた。

「ばっ！ いちゃついてなんて！」

「そ、そうよ真理ちゃん！」

卓と蓮華はそれぞれ赤面して、真理に反論した。

「ふん。まあ別にいいけど？」

真理は拗ねたように唇を尖らせてそっぽを向いた。

「な……何故だ……」

そんな3人のやりとりが行われている中、廃工場に息絶えそうな

魂の傀儡子の声が混じった。

「……」

それに、3人と口を閉じ、じっと魂の傀儡子を見据えた。

「何故……私が人間ごときに敗北する……」

魂の傀儡子は決して身体を動かすことが出来ず、涙交じりのような声で続けた。

「何故だろうな。そんなのは俺にも分からない。けど、俺には信頼できる仲間がいる。もし、俺とお前に決定的な違いがあるとするならそこなんじゃないか？」

卓はゆっくり魂の傀儡子に歩み寄って答えた。

「……」

卓の答えに対して沈黙を取った魂の傀儡子に対して、真理が問いを投げかけた。



「ねえ、聞かせて。さつき言った世界を救うって言葉。あれは本気なの？ それともやつぱり嘘？」

「……」  
真理の問いに一瞬眉をピクリと動かした魂の傀儡子は少しの間を開けて、そして口を開いた。

「本気です。……私の目的は贈与の石を覚醒し、この世界を救うことでした。けほっ！  
けほっ！  
けほっ！」

少し苦しそうに咳込みながら魂の傀儡子は続ける。

「私がこの世界を救いたいという気持ちに一切の嘘偽りはありません……」  
「……」  
魂の傀儡子の言葉に真理が黙って聞いていると、背後から謙介、要、小鉄の3人が追いついてきた。

「真理、弟くん、よくやった。」  
倒れる魂の傀儡子と、助け出された蓮華を見て、謙介は満足げな表情を再び浮かべた。

「ところで、何か話していたみたいだけど？」  
話の内容が気になった要が問う。それに対して、魂の傀儡子が倒れたまま、弱弱しい口調で言った。

「みなさんがお揃いになった今、私が消える前に少し昔話にお付き合いたいだけですと嬉しいのですが。いえ、私がこの世界を救えなかったのは必然だったと知らしめられた気がします……」

魂の傀儡子は悔しそうに、しかし、どこか清々しい表情をしていた。

「お願い、話して。どうして蓮華をさらったのかも。」  
「……」。これは、今から70年程前、私がこの世界に来たばかりのころの話になります。」

魂の傀儡子は、ボロボロになって、咳込みながら、それでも決して口を動かすことを止めずに、目を瞑った。

77年前、鳴咲市。

このころの鳴咲市にレジャー施設や、大型ショッピングモールなんてものは当然存在せず、それどころか、町の規模すらも断然小さかった。

鳴咲市は周りが山に囲まれていて、その町には個人経営している八百屋や、酒屋、駄菓子屋などが立ち並ぶ田舎の町という感じだった。

そんな店の軒下に吊るされた風鈴が奏でる清涼感ある音が鳴り響く蒸し暑い夏のある日、鳴咲市の上空に突如、大きな黒い穴が現れた。

「あれって……」

田舎の空に似合わないその穴を発見した一人の女性は、甘味処と大きな看板が掲げられた店先で一本のみたらし団子を頬張りながら、空を見上げていた。

「大変！ 急がないと！」

女性は黒い長髪で、身長は150センチあるかないかと小柄で、その顔はどこか幼さが残る可愛い人だった。

そんな女性は慌てた様子で、残りの団子を口の中に放り込むと、薄手の浴衣の内側から紐で結ばれた皮財布を取り出し、数枚の小銭を座っていたベンチに置いた。

「おばちゃん！ お代はここに置いておくね！」

そう言い残して、女性は慌ただしく下駄を鳴らしながら駆け出した。

上空に現れた穴から、突然何か光ったものが放出され、その光は町から少し外れた山へと落下した。

「ちよっ！ あんなところに落ちちゃったよ！」

少女のような女性は落下する光を目で追いながら、走り続けた。

鳴咲の町には、女性が走るたびに鳴る下駄の音がリズムを刻んで

いた。その音に気がついた店主や、町を歩く町民たちは女性が通ると必ずと言っていいほど声をかけ、そして、女性もそれら全員に愛想よく、それでも走る足を止めることなく挨拶をした。

そんな調子で、光が落下した山の中に辿り着いた女性は乱れた呼吸を整えながら、そして着崩れした浴衣を直し、光の落下地点に近づいた。

「うわー、派手に着地したものねー」

女性は周りの木々が倒れているのを見て、呟いた。

「おやおや？ 誰かいるのかな？」

そして、大きく地面が凹んだ中心に人影を発見すると、女性は駆け足で近付いた。

「……」

クレーターのように凹んだ中心で立ちつくしていた男は180センチは超える長身で、この暑い夏にはふさわしくない、膝までかかるロングコートに身を包んでいた。

言うまでもなく、その男は昔も今もその姿は変わることのない魂の傀儡子だった。

「……」

女性は黙りこくった魂の傀儡子をじっと珍しいものでも見るように見据え、少しの間の後に口を開いた。

「暑くないですか？」

女性は小さく首を傾げて訊ねた。

「……。子供ですか……」

魂の傀儡子は特に質問に答えるわけでもなくそう呟くと、女性はむっとして、反論した。

「誰が子供かー！ 私はこれでも二一歳なんだよ！？ それなの

に！ それなのに、子供なんてひどい！」

「……」

まるで子供が駄々をこねるような感じで反論する女性を魂の傀儡子は冷ややかな目で見ていた。

「むっ！ 信じてないでしょ！ 大体初対面なのに、その態度は失礼だと思うな！ あなたは気が付いていないかもしれないけど、私はあなたが異世界の住人だってことくらい知ってるんだからね！」

「なっ!?!」

女性の言葉に驚きを露わにした魂の傀儡子を見て、女性はにんまりと笑って続けた。

「ふふん！ 子供だと馬鹿にしてたら駄目なんだから！ 私はこれでも討伐者なのだからね！」

そう言って、女性は浴衣を着ていても分かるくらい慎ましいペツタンコな胸を張って得意げにした。

「討伐者……」

魂の傀儡子とはたんに警戒の眼差しを女性に向ける。

「びっくりした？ 私は討伐者の小田切スミレって言うの。よろしく！」

そう言ってスミレと名乗った女性は、その小さな手を魂の傀儡子に指し伸ばした。

「……何ですか？ その手は。」

対して、手を差し出すどころか、スミレを睨んだ魂の傀儡子は言った。

「え？ もしかして握手知らないの？」

スミレはきよとんとした表情で魂の傀儡子を見て、首を傾げた。

「……いえ、そういうわけじゃなくてですね。なぜ、敵である私にそのような行為を求めるのですかと訊いているのです。」

そんな魂の傀儡子の言葉にスミレはきよとんとしたまま、そしてしばらくして笑いだした。

「きやはは、私とあなたが敵？ 何で？ だってあなたは私に何もしてないでしょ？」

「……」

スミレの邪気のないその笑顔を見て、魂の傀儡子は戸惑っていた。そして、言葉を探し出すように、何度も口を開いては閉じ、開いて

は閉じを繰り返し、やっと言葉を出した。

「私はこの世界に偵察に来たのですよ？」

「偵察？ 何の？」

ただ純粹に興味の眼差しを向けてくるスマレに魂の傀儡子は一瞬たじろぐもこほんと咳払いを一つして、話を続けた。

「あなたが本当に討伐者なら分かるでしょう？ 私たちがどのような存在なのかを。そして、私たちの世界がどのようなところかも。」

「うん、知ってるよ？」

「私たちはこの世界を手に入れたいのですよ。この住みよい世界を。」

魂の傀儡子の言葉を聞いたスマレは一瞬考え込んだように顔を伏せ、そして、顔を上げると満面の笑みを見せた。

「じゃあ住めばいいよ！」

「……はい？」

魂の傀儡子は呆気に取られた表情で訊き返した。

「だから、ここに住みたいんでしょ？ なら住めばいいんじゃない？」

「あなたは何も分かっていない。私たちは魂を喰らう者なのです。もしそんな我々がこの世界に住めば、あなたたち人間は絶滅することになるのですよ？」

「……優しいんだね、あなた。」

スマレはその幼い顔とは打って変わって、全てを抱擁するような柔らかな笑顔を向けると、魂の傀儡子は少し顔を赤らめて視線を外した。

「……何を言っているんですか。私は優しくなどありません。今回、この世界に来たのも世界移転計画ゼロ・フォースの遂行のためですから。」

「世界移転計画？」

魂の傀儡子の口から放たれたその単語をスマレは訊き返した。

「この世界と虚無界を入れ替える計画です。我々、虚無界の住人

はこの計画を実行する予定なのですよ。どうです？ これでもまだ私を優しいなどと言うおつもりですか？」

その質問にスミレは笑顔を崩すことなく頷いた。

「なっ!？」

予想外の反応に魂の傀儡子は動揺を隠せずにいた。

「だってあなた、まだそんなことしていないじゃない。それに、本当に心からそんなことを望んでいる人は、わざわざ自分の計画なんて明かさないよ？」

スミレの無垢な笑顔に魂の傀儡子はどう反応していいか分からず、ただ声を荒げた。

「よくもそんなことが言えますね！ あなたたち討伐者は我々を殲滅するために存在するのでしょうか！ それなのに、私に対してそんな言い草……」

魂の傀儡子の反論に対してスミレは首を横に振ってから、口を開いた。

「討伐者と、異界の住人が必ずしも敵だなんて私は思いたくないの。だってそんなの悲しすぎるでしょう？ あなたが私に何の危害も加えていないうちから嫌うなんて、それこそ人間らしさが失われていると思わない？」

「……………」

スミレの問いに魂の傀儡子は沈黙を決め込んでいると、スミレはふっと笑って続けた。

「もし、あなたが何か悪いことをしでかそうものなら、その時は私が怒ってあげる。その代わりに私が何か悪いことしようとしたときはあなたが怒ってね？」

「……………あなたは理解し難い人間です。私が人間の言うことを素直に聞くと思っっているなんて……………」

魂の傀儡子のその言葉にスミレは細く、綺麗な指をぴつと立てて可愛らしい声で言った。

「あなた、なんて他人行儀はよくないよ？ 私のことはスミレっ

て呼んで。」

「……はい？」

「だから、友達なら名前呼び合つのが普通でしょ？ だからスミレって呼ぶの！ あなたの名前は？」

本人は剣幕を張っているつもりなのだが、如何せんその小さな身体で声を張っても、微笑ましくはあっても、威厳などは微塵もなかった。

「名前……。私たちにそのような概念はないのですよ。しかし、字は魂の傀儡子。せつかく会えたのです、これだけは教えといてあげますよ。」

魂の傀儡子がそう言い終えると、自身は黒い靄に包まれた。

「どっか行っちゃうの？」

その様子をスミレは不思議そうに見ていた。

そして、魂の傀儡子を完全に包みこんだ黒い靄の中から声が聞こえた。

「当然です。私は子供の茶番にお付き合ひする時間などないのですから。」

「……って！ 誰が子供かー！！！」

スミレの叫びも山に虚しく反響するだけで、黒い靄は次第に消えて行った。

「もう！ あっ！ 私の家は山のふもとにある和服屋だからね！」

誰もいない山の中でおもスミレは叫んだ。その可愛らしい、透き通るような声は、夏の虫の声と混じって山の中に響く。

スミレはふうつとため息をついてから山を下山した。

その夜、山に囲まれた鳴咲市に、虫の涼しげな鳴き声が響き渡るころ、町はところどころに設置されたオレンジ色の街灯が灯り、道には人影もほとんど見当たらなくなっていた。

そんな鳴咲市のほぼ中心部にあった無人の工場に魂の傀儡子を壁に身を寄せ座り込み、瞼を閉じていた。

(小田切スミレ……。なぜでしょうか、あれから彼女の笑顔が頭から離れない……)

夜の無人となった工場は静寂で、物思いに老けるにはことのほか絶好の場所であった。

だが、そんな静寂もすぐさま破られてしまう。

「貴様、異世界の住人だな。」

無人だったはずの工場で、魂の傀儡子がつつすらと開けた視界には、誰かの爪先が飛び込んできた。

「……。いかにも。」

魂の傀儡子は特に動きを見せるわけでもなく、返答する。

「そうか、なら。」

声は低いトーンで、お世辞にも聞き心地が良いとは言えなかった。そんな声の主は突然、魂の傀儡子に向かって腰刺しを抜刀し、振り下ろした。

「!？」

魂の傀儡子とはつさにその場を回避し、声の主である男の背後に回り込んだ。

「我は討伐者、剛腕こわでんの豪主ごうしゅ！ 異世界の住人よ、ここで我に討伐されるがよい！」

そう言つて、剛腕の豪主の二つ名を持つ男は再び腰刺しを振りかぶった。

「剛腕の豪主……。その名、覚えておきましょう。」

魂の傀儡子は余裕の表情で、杖を手にとり、目にもとまらぬ速さで剛腕の豪主を斬りつけた。

「なっ……」

剛腕の豪主は腰刺しを振り上げたまま、硬直したように、ただ視線を斬りつけられ血が溢れだす腹部に移した。

「ですが、すみません。もう忘れしました。」

魂の傀儡子は剛腕の豪主に向き直り、そして、杖の先端部分の刃に付着した血を舐めながら笑みを浮かべた。



「くつそ……」

剛腕の豪主はその場で崩れ去り、だが、その直前に魂の傀儡子に向けて、安全ピンを引き抜いた手榴弾を投げ込んだ。

「えっ!?!」

魂の傀儡子が反応すると同時に手榴弾は爆発し、工場内は赤い炎で炎上した。

すぐさま町から消防車のサイレンが聞こえ、魂の傀儡子は爆発に巻き込まれ、負傷した身体を引きずりながら工場を後にした。

「はあ……はあ……」

身体を床に強く打ち付け、爆発のせいで飛んできた工場の破片で身体を傷つけた魂の傀儡子は《小田切和服店》と書かれた一軒家の玄関先にいた。

（全く……。なぜ私はこんなところに来ているのでしょうか……）  
そんなことを思いつつ、魂の傀儡子はその場にはたと倒れ込んだ。

一方、魂の傀儡子が倒れている玄関先の家の中ではスミレが卓袱ちゃぶ台に並べられた夕食を次から次へと口の中に放り込んでいた。

「全く！ 今日初めて会った人にお子様だつて馬鹿にされたんだよ!?! 酷いと思わない!?!」

喋りながら愚痴をこぼすスミレを、向い側に座っていたスミレの母は適当に相槌を打ちながらあしらっていた。

「大体！ なんでいつもこんなにご飯食べてるのに大きくならないのよ〜」

スミレは一旦箸の動きを止めて、はあつとため息をついた。  
「いつか、きっと大きくなるわよ。」

スミレの母親はにっこりほほ笑むと、空いた食器から順に台所へ運んで、洗い出した。

「だと、いいんだけど。」

少し声のトーンが低くなったスミレを見て、母親は、エプロンで

濡れた手を拭くと、数枚の小銭をスミレの前に差し出した。

「これでアイスでも買ってきなさい。」

「えっ！？ でも……」

スミレは最初は嬉しそうな表情をしたが、すぐにその表情は曇った。

というのも、スミレの家は母が一人で子供を育てる、いわば母子家庭で、お世辞にも裕福な家庭とは言い難かった。

「今日だけ特別よ。あなたももう二十歳過ぎたんだから、そろそろアイスも卒業しないとね。」

「ありがとう！ あつても、アイスは卒業するつもりないもん！」

スミレはそう言って勢いよく玄関のほうへ駆け出した。

下駄を履いて玄関を飛び出ると、スミレはすぐに倒れ込んだ魂の傀儡子を発見した。

「あつ！ 昼間の！ ちょっとちよつと！ 大丈夫！？」

スミレがボロボロになった魂の傀儡子の身体を揺すってみるが、微動だにせず、スミレは仕方なく、魂の傀儡子の腕を引っ張り、引きずりながら家の中へと連れ込んだ。

「スミレ？ どうしたの？」

あまりに早すぎる帰宅に、母親が台所から顔を覗かせた。

「お母さん、今日知り合った人が家の前で倒れてて……」

スミレは何かを訴えようとする眼差しで母親を見つめた。それに気がついた母親は、ほほ笑んで口を開いた。

「おうちに上げてあげなさい。」

「……うん！」

その言葉にスミレは満面の笑みを浮かべ、そして、居間に魂の傀儡子を寝かせた。

「この人、こんな夏にこの格好……。暑くないのかしら？」

スミレの母親は、冷水に浸した手ぬぐいを4等分に掘り畳んで、寝かされた魂の傀儡子の額にそつと乗せた。

「うん、多分この人は大丈夫なんだと思うよ。」

スミレは母親の疑問に自身が魂の傀儡子に同じ疑問を投げかけた  
ときのことを思い浮かべ、くすりと笑った。

「そう、じゃあ私は少し冷たいお水でも汲んでくるわね。」  
そう言っつて母親は玄関から外へ出た。

スミレの実家には家の横に、私物として所有している井戸があり、  
そこからわき上がる天然水はまさに絶品だという。

「う……。」

スミレの母親が玄関を出るとすれ違いに、魂の傀儡子は意識を  
取り戻した。

真つ先に視界に、天井から吊るされた電気が飛び込み、とつさに  
手で影を作る魂の傀儡子。

「あ、気がついた!？」

そんな魂の傀儡子の顔をスミレは無邪気な笑顔で覗きこんだ。

「なっ!？」

スミレの姿を認識するなり、魂の傀儡子はとつさに上体を起こし、  
後退した。

その際に、額に寄せられた手ぬぐいは床に落ちた。

「そんなに驚かなくても。」

魂の傀儡子の反応に不服を抱いたスミレは頬を膨らまし、唇を尖  
らせた。

「なぜ、あなたがここに……。」

「なぜって、それはここが私の家だからなんだけど。」

スミレはきよとんとした表情で淡々と答える。

そして、スミレの返答を聞いた魂の傀儡子は居間を見回した。

「たまちゃん、私の家の玄関先で倒れてたんだよ?」

「そうですか……。……って、えっ? たまちゃん?」

あまりに自然すぎる流れでスミレがそう呼んだ名前に魂の傀儡子  
は怪訝そうな表情を浮かべた。

「言っただでしょ? 友達なら名前で呼ぶのが普通だって。魂の傀  
儡子だから、略してたまちゃん! どお? 可愛いでしょ?」

スミレはえへへとはにかむ。

「……。呆れて何も言えません。」

魂の傀儡子にはあつとあからさまに呆れて見せると、玄関の引き戸がガラガラと音を立て、水を小柄な桶に汲んで来た母親が戻ってきた。

「あら？ お目ざめになりましたか？」

母親は、上体を起こし、スミレと話していた魂の傀儡子を見ると、にっこりとほほ笑んだ。

「……では、私はこれで。」

魂の傀儡子はスミレとスミレの母親を一瞥すると、すくつと立ち上がったが、身体がふらついて居間の柱に体重を預けた。

「ほら！ あんまり無理しないの！」

そう言つてスミレは魂の傀儡子の身体を両腕で支え、ゆっくりと居間に座らせた。

「……」

魂の傀儡子は無言でされるがままにしていたが、その表情は困惑と疑いを浮かべていた。

「今、何か食べるものをお作りしますね。」

母親は、水の入った桶を魂の傀儡子の近くに置くと、キッチンに立ち、冷蔵庫からいくつか食材を取り出した。

「目的が読めません……。なぜここまで親切を貫くのです？」

母親がキッチンに姿を消すのを確認すると、魂の傀儡子はスミレにポツリと呟いた。

「もお！ だから！ 友達だからって何度も言ってるじゃない！」

「……だから、こちらは何度も言っていますが、あなたとは友達ではないのです！」

魂の傀儡子も張り合つかのように返答する。

「スミレって呼んでよ！ あなたってのは金輪際禁止！」

「くっ！」

スミレの小さな身体なりの剣幕に、魂の傀儡子は一瞬たじろいだ。

「なら、スミレさん！ 私は友達になどならないと言っているのです！ そもそも、敵同士なのですから、こんな慣れ合いは」

魂の傀儡子の言葉を遮り、スミレはなおも言葉の応酬を続ける。

「敵じゃないもん！ 友達って言ってるでしょ。そんなに私と友達になるの嫌？」

スミレの瞳は先ほどまでになく、潤んでいて、それを見た魂の傀儡子は言葉に詰まった。

「……だから、そういうことではなく。」

「じゃあ友達でいいでしょ!？」

その一言が止めを刺し、魂の傀儡子は開きかけていた口を閉じ、大きなため息を一つ漏らした。

「はいはい、スミレその辺にしておきなさい。すみませんね、我がままな娘で。」

スミレの母親が、お盆にお粥と冷水の入ったグラスを乗せて、居間に入ってきた。

「……」

魂の傀儡子が口をつぐんでいると母親は、にっこりほほ笑み、お盆を魂の傀儡子の前に差し出した。

「あまり、ちゃんとしたものは出せませんが、よかつたらどうぞ。」

そのお粥を見て、魂の傀儡子はスミレを一瞥し、言った。

「私の食とするのは生物の魂です。このようなものでは命を保つことはできないのですよ。」

「いいから、食べなさいって。お母さんのお粥美味しいんだから！」

えへんと胸を張るスミレをはあつとため息交じりに見てから、魂の傀儡子はレンジでお粥を少量すくうと、口に入れた。

「!?!? ……美味。」

魂の傀儡子の反応に、スミレと母親は満足げな表情を浮かべる。

「まだまだたくさんありますので、どうぞ遠慮なく食べてください」

いね。」

そう言い残して、母親はまたキッチンの方へ姿を消した。

「ほーら、言ったじゃない。お母さんのお粥は絶品なんだから！」

「……確かに、このお粥というものは絶賛するに値します。ですが、やはりこれでは私の命は取り留められないのです。」

「生物の命なら何でも大丈夫なの？」

スミレは顔を覗かせるように訊くと、魂の傀儡子は顔を少し反らし、答えた。

「ええ、基本的には。ですが、小動物などの魂なら数でカバーするしかないですね。」

「……そっか。」

スミレは手を顎に当てて何かを考え込むように唸った。

「……、スミレさん、私のことをそこまで気にしてくれる人間はあなただけです。ですが、私のことは気にかけてくれる方が賢明ですよ？」

「何で？」

あまりに人を疑うとういうことを知らないスミレの表情はいつも裏表がなかった。だからこそ、その瞳を魂の傀儡子は直視することはできなかった。

「私はいずれ、あなたと敵対することになるからです。」

「……そのときは、そのときで考えよう？　今からそんなこと考えるのは悲しすぎるよ。」

スミレのその言葉に、魂の傀儡子は何も言い返すことはできなかった。

それから、11カ月の月日が流れた。

魂の傀儡子はスミレとスミレの母親に心を開き始め、今では和服店の手伝いをするほどにまでになった。

肝心の食だが、鳴咲市を囲む山々に住む動物の魂を定期的に食ら

うことで命にも問題が無く、充実した日々を送っていた。

「ところで、スミレさん、気になっていたのですが、言ってもいいですか？」

突然、居間で夕食後のみたらし団子を頬張るスミレの横で魂の傀儡子がそんなことを言った。

「どうかしたの、たまちゃん？」

「ええ。」

そこで、一旦魂の傀儡子は一呼吸置いて、そして言い放った。

「最近、太りました？」

それを言い終えるのとほぼ同時に、魂の傀儡子の頭にスミレの鉄拳が下された。

魂の傀儡子は思いつきり殴られた頭を両手で押さえて、居間にのたうちまわった。

「女性に向ってなんてこと言うのよ！」

スミレは目つきを鋭くして、のたうちまわる魂の傀儡子を見下ろすように立ちあがった。

「で、ですが、そのお腹……」

そう言って魂の傀儡子は人差し指でスミレの腹部を指差した。確かに、11カ月前よりお腹は膨らんでいるのは確かだった。

「だ、だから！……これは妊娠したのよ……」

一旦大声を張り上げるも、最後はぼつりと小さな声で咳くように言った。

「妊娠！？」

「うん。」

恥ずかしそうに、しかし、嬉しそうにスミレは頷いた。

「そんな、私たちがいつの間に。」

それに対し、魂の傀儡子はわざとらしく、自分で自分の身体を抱きしめ、一歩後ずさりした。

「ちよっ！ 何言ってるのよ！？ たまちゃんの子供じゃないわよ！？」

「はは、分かっていますよ。しかし、驚きました。スミレさんに夫がいたのですね。しかし、夫はどこにいかれているのですか？一度もお会いしたことがないのですが。」

魂の傀儡子の質問にスミレの表情は一瞬、けれど明らかにくぐもった。

「ちよつと前に死んじゃったんだ……」

「!？」

自分の問いのせいで傷ついたスミレを見て、魂の傀儡子は後悔の念にさいなまれた。

「たまちゃんが気にすることじゃないよ！それに、私の夫も討伐者で、仕事で亡くなったんだし、仕方ないよね……」

平穩、それはいつ訪れるのかも、そして、いつ去って行くのかも分からないもの。だからこそ、生物はその一瞬一瞬を本気で生きて行くしかない。

ただ、魂の傀儡子はこのとき、この瞬間、自分とスミレが築き上げた平穩が段々と、しかし確実に崩れかけていることに気がついた。

「あの……スミレさん、その、旦那さんが亡くなったのは」

「11か月前って聞いたけど……」

魂の傀儡子が言い終える前に、スミレは答えた。

そして、その答えを聞き、魂の傀儡子は確かに聞いた。いや、聞こえてしまった。

平穩が完全に崩れ去る音を。

「……………スミレさん、長い間、お世話になりました。」

突如、魂の傀儡子は居間で立ち上がり、スミレに背中を向けるように、身体を反転させた。

「えっ!？ どうしたの、たまちゃん？」

突然の、予想だにできなかった反応にスミレは戸惑っていた。

「……………」

魂の傀儡子は返事をすることなく、無言で玄関に向った。

「ちよつと! どこに行」



魂の傀儡子が玄関に向かっていると、背後からボタンという音が聞こえ、すぐに振り返った。

そこには、廊下に倒れ込んだスマイレがいた。

「スマイレさん！……」

すぐに駆け寄ってスマイレを抱き起そうとしたが、魂の傀儡子の身体は動かなかった。

そんな中、スマイレの母親がキッチンから顔を出し、倒れ込んだスマイレを発見すると、すぐに抱き起しに駆け寄った。

（……すみません、スマイレさん）

魂の傀儡子はスマイレがちゃんと母親に運ばれて行くのを見届けると、ゆっくりと玄関の引き戸を開け、そして挨拶もなしに出て行った。

外に出ると、夏の蒸し暑い夜風が、魂の傀儡子を襲う。

「……やはり、人間と我々では共存することなどできないのですかね……」

魂の傀儡子は誰に言うでもなく、スマイレの家を見て、呟いた。

そして、行くあてのない魂の傀儡子はただ、足を動かし、スマイレの家を後にした。

一方、魂の傀儡子が出て行ってから十数分後、スマイレの家では、スマイレが居間に敷かれた布団の上で尋常ではないほどの多量の汗を流し、苦しそうにしていた。

「スマイレ！ お医者さんが来たわよ！」

玄関から慌ただしく居間に入ってきた母親とその後に入ってきた医者も額からも汗がにじみ出していた。

「スマイレさん！ 力を抜いてください！」

医者はすぐに布団の上で苦しそうにするスマイレの手を握った。

「んう！！ くあ！」

しかし、スマイレの全身に走る、気を失いそうなほどの激痛が止むことはなかった。

「お母さん！ お湯を用意して下さい！」

「！？ はい！」

医者と言つとおり、スミレの母親はキッチンで樽たるにお湯を注ぎ始めた。

「もう、病院に運ぶ時間はありません！ 自宅出産ということになります。」

医者の確認に、母親はスミレを心配そうに見つめ、その後頷いた。「では、スミレさん、一緒に頑張らしましょう！」

医者に手を握られたスミレは苦しそうに、それでも笑顔を浮かべ頷いた。

「ゆっくり息を吐いてください。ひ、ひ、ふー。ひ、ひ、ふー。」「ひ、ひ、ふー……くはあー！」

医者と同じように息を吐こうとするも、そのたびに無情にも、激痛はスミレを襲った。

そんな様子に母親は、とっさに両手で目を覆いたくなくなったが、何度でも自分の手を押さえつけ、スミレの片手を手に取った。

「頑張るのよ、スミレ。」

母親は、目を瞑り、神に祈るような想いで、両手でスミレの手を握った。

「んう！ う、ん。」

痛みに耐えながら、スミレは母親に返事を返した。

そんな姿を見て、母親の目には涙が溜まっていた。

「お母さん、血を拭くものを用意してください！」

「はい！」

医者の指示を受け、母親は急いで洗面所から、数枚のタオルを持ってきた。

それから、スミレは何度も気を失いそうな痛みと戦いながら、それでも何度も気を失っては、激痛に現実を引き戻されるといふ、残酷な光景が居間にあった。

スミレが出産に苦しんでいるころ、魂の傀儡子は以前に剛腕の豪主と戦い、その際火災が起きてから、使われなくなった工場にいた。蒸し暑い工場の中で、魂の傀儡子はコンクリートの壁に身を寄せていた。

「……私が、スミレさんの旦那を殺した……。スミレさんの幸せを奪ってしまったのですね……」

魂の傀儡子の腕にポタポタと涙が零れおちた。それは、何度も手で拭っても溢れだし、次第には涙を拭うことさえ止めた。

「くっ、んく。」

魂の傀儡子はまるで子供のように泣きじゃくった。

そんな中でも、魂の傀儡子の頭の中にはこれまでのスミレとの思い出が次から次へと思い浮かび、そのたびに涙があふれ出した。

「魂の傀儡子、いずれここに来ると思っていたよ。」

悲しみに浸っていた魂の傀儡子はいつの間にか6人の男女に囲まれていた。

「!?!」

そして、有無を言わず、そのうちの一人が放った弓矢が魂の傀儡子の身体を突き刺した。

魂の傀儡子はその場で倒れ込んだ。

（ああ、私には神の御加護なんてものは与えられなかったのですね。）

魂の傀儡子は、工場の天井を見上げて、流れ出す血なんて気にも留めず、思った。

「まだまだ！ アイツはこの程度じゃ死なない！ 構える！」

男の言葉を合図に6人はそれぞれ弓を構えた。

（もう、ここで死んでしまうのもいいかもしれませんね……）

それに対して、魂の傀儡子は動くこともせず、ただ無防備に倒れ込んだまま、静かに目を閉じた。

すると、その瞬間、脳裏にスミレの言葉が過った。

『私たち、友達でしょ!』

その言葉に、魂の傀儡子のはつと我に返ったように目を開けた。

(……友達。そうだ、私はスミレさんと友達になることを受け入れた。なのに、私は友達を見捨てて、なぜこんなところに……。罪はしっかりと償わなければならない。でも、それはこんなところで死ぬことではない!)

「撃てえええ!」

男の言葉を合図に、魂の傀儡子は六本の矢に捉えられた。

魂の傀儡子は無言で、向ってくる矢など恐れずに立ちあがった。

そして、ぽつりと呟いた。

「スミレさんのところに戻らなくては。そして、真実を話し、その上で謝らなければ!」

魂の傀儡子はそう言って、片手の上に青い炎を出現させ、自分の周りにその炎を蒔いた。

「なっ!?!」

青い炎は一瞬のうちに飛んでくる矢を全て飲み込み、さらに、魂の傀儡子を囲んでいた6人の男女も焼きつくした。

青い炎の中心で堂々と君臨していた魂の傀儡子の目には確かな決意が込められていた。

そして、夏の夜空の下で、工場は青い炎に燃やしつくされて行った。

出産作業を開始してから、3時間ほど経過した小田切和服店からは未だにスミレの苦しむ声が聞こえていた。

急いで戻った魂の傀儡子も、最初はその状況に慣れず、スミレの苦しむ姿に何度も胸を痛め、血が出てきそうなほど強く唇を噛みしめ、けれど、絶対に握ったスミレの手を離すことはなかった。

「スミレさん!」

スミレが痛みで暴れようとするれば、魂の傀儡子は何度も名前を呼

び、医者と一緒にスマレを押さえつけた。

魂の傀儡子にとってこの数時間は何年にも思えるほど長く、そして、これほど残酷な光景は見たことがなかった。

だからこそ、自分で自分の存在を恨めしくさえ思ってしまった。命を生み出すということはこれだけの苦しみを伴い、そして、たくさんの血と汗を流してようやく成し得るこの世の、これ以上ないほどの奇跡なのだ知った。

魂の傀儡子は、そんな奇跡が生み出した物を喰らう。だからこそ、その心境は複雑という言葉程度では言い表せないほど、いろいろな感情が渦巻いていた。

「はあ……はあ……た、まちゃん……、ごめん……ね……。夫のこと、たまちゃんに……。……辛かったよね……ごめんね……」  
気を失うほどの痛みの中で、スマレは弱弱しく、それでもいつもの笑顔を作ろうと必死で、ほほ笑み、握られた魂の傀儡子の手を握り返した。

「……!??? なぜ、スマレさんが謝るのです!? 私を怨んでこそすれ、謝る必要はっ」

魂の傀儡子はスマレの口から言われた謝罪の言葉に動揺し、だが、その言葉をスマレは無言で、首を横に振って遮った。

「私……たま、ちゃんのこと……恨んでなんか……ないよ? ……だって……私は……たまちゃんのこと……大好きだから。」  
スマレの口から聞かされた『大好き』の言葉に、魂の傀儡子はそれまで一度も泣いたことがないといくらい、たくさんの涙を流した。次から次へと流れ出るその涙はポタポタとスマレの手の甲に滴り落ちる。

そんな魂の傀儡子の顔を見て、スマレはぎゅっとさらに握った手に力を込めた。

「んあっ! くうっ!」

しかし、次の瞬間、またスマレは激痛に、悲痛の叫びをあげた。

「生まれますよ!」

医者の一言、そして、ほんの刹那、居間に嵐が過ぎた後のような静寂が訪れ、だがそれも、すぐに破られた。

「おぎゃー！ おぎゃー！」

居間には元気な赤ちゃんの産声が響いた。

「元気な女の子ですよ！」

医者は血まみれの赤ちゃんを、お湯で濡らしたタオルで綺麗に拭くと、スマイレの母親に手渡した。

「スマイレ！ 良かったわね！ 元気な女の子よ！」

母親の目からは涙が流れ、でも、これ以上ないほどの幸せそうな笑顔をしていた。

そんな奇跡を目の当たりにした魂の傀儡子は自然と笑顔になっていた。

「……スマイレさん……。命ってこんなにも美しいのですね……」

魂の傀儡子はそう言って、布団に横たわるスマイレに視線を移す。すると、そこには体中汗まみれで弱弱しいスマイレの姿があった。

「スマイレさん……？」

目を閉じたままのスマイレを不信に思った魂の傀儡子はふいに医者を見ると、医者は焦ったように、スマイレの胸に耳を当てた。

「！？ 心臓の鼓動が遅い！？」

「「！！！？？」」

医者の一言にスマイレの母親と魂の傀儡子の表情から血の気が失せた。

「スマイレさん！？ 起きてください！ 赤ちゃんが生まれたのですよ！？」

「スマイレ！ あなたがお母さんになるのよ！」

二人のそんな必死な呼びかけにもスマイレは指先すら動かすことなく、目を閉じたままだった。

そして、数分後、ついに心臓マッサージをしていた医者もその手を止めた。

「そんなっ……」

スミレの母親は医者が無言で首を横に振ったのを見ると、その場に泣き崩れた。

「……スミレさん……」

魂の傀儡子も声を上げてというほどではないにしろ、さきほどまでとは違う涙があふれ出ていた。

蒸し暑い夏の夜、小田切和服店に新たな命が生まれた日、スミレは静かに命を引き取った。

数日後、魂の傀儡子とスミレの母親は喪服に身を包み、居間に飾つてあるスミレの遺影の前に正座していた。

遺影の前には数本の束になった線香が静かに煙を上げ、遺影のスミレはいつも魂の傀儡子に見せていた無邪気な笑顔だった。

「スミレはね、あなたに会った日、ずっとあなたの話をしていたの。」

「……」

ふいに切り出されたその言葉に魂の傀儡子は無言で聞いた。

「自分のことを子供扱いする！　なんて言つて、半分愚痴のようだったけれど。」

「そう、ですか……」

「でもね？　そんなとき、あの子ったら嬉しそうに笑ってるの。とても愚痴には聞こえなかった。傍から見たら惚気のろけのようなもの。」

スミレの母親はそこまで言つと、ふつと居間の端で布団の上で小さな寝息を立てて寝る赤ん坊を見て、口元を緩め、続けた。

「あの子、嫌なことがあつても笑顔でそのことを話す癖があるのよ。私にはそれが分からなかった。でも、あなたのことを話すあの子を見てようやく分かつたわ。」

「……何故ですか？」

魂の傀儡子の問いに、スミレの母親は、スミレが死んでから初めて見せる笑顔で答えた。

「愛していたから。あの子はあなたを愛していたの。そして、そ

れと同じようにこの世界を愛していた。だから笑顔でいられたんだと思うの。」

「……スミレさんらしいですね。」

「ほんとね。」

魂の傀儡子とスミレの母親は笑い合った。そして、その笑い声に目を覚ました赤ん坊も泣き声をあげた。

居間にはそんな賑やかさが一瞬だけけれども戻った。

そして、魂の傀儡子は確かにそこにスミレも一緒になって笑い合っている、そんな感じがした。

「これが、私が世界を救いたいという言葉の意味です。」

廃工場に倒れたまま、魂の傀儡子はひと呼吸おいて、目を開けた。すると、魂の傀儡子の話を真剣に聞く、卓、真理、謙介、要、小鉄、そして、うつすらと瞳に涙を浮かべる蓮華が視界に飛び込んできた。

「……ですが、私は間違っていたのですね。スミレさんが愛したのはこの世界、でもそれは愛する人がいる世界という意味だったのかもしれないね……」

魂の傀儡子は少し寂しげな表情を浮かべた。

そして、真理は卓と少し顔を見合わせると、再び魂の傀儡子に視線を戻して、口を開いた。

「あなたの目的の真意は分かったわ。……でも、何で蓮華なの？」

真理の問いに、魂の傀儡子は涙ぐんでいた蓮華に視線を移し、ふつと笑みを浮かべた。

「似ていた……からですかね。」

「当たり前よ。」

魂の傀儡子の一言に返事したのは、その場にいる誰でもなく、突如、廃工場の天井付近に現れた白い光の中から現れた女性だった。



「……！！！！……」

魂の傀儡子を含め、その場にいた誰もが驚き、目を見開いた。

「その子は私の娘の孫なんだから。」

光の中から現れたのは身長160センチほどの漆黒の長髪の女性だった。

「あつ！ プールのときの！」

この女性は、卓がショッピングモール、そしてプールで出会った女性と同一人物だった。

女性はそんな卓をふつと笑顔で見て、ゆっくりと地面に降り立った。

「……スミレさん……？」

「うん、そうだよ。」

魂の傀儡子の問いを女性は静かに頷いて肯定した。

「えっ？ だってこの人は亡くなったって……」

突然、死んだはずの人間が前に現れ、要が動揺してぼつりと言葉を漏らした。

「私は霊体、まあ幽霊ってことだね。」

驚いていたその場のみんなにスミレは無邪気な笑顔を見せて答えた。

「こんなことが……」

謙介もまた驚きを隠せずにいた。その横で小鉄も珍しいものを見るように、幽霊となったスミレを見据えていた。

「きつと、この石のおかげだね。」

スミレは身体を動かすことのできない魂の傀儡子のロングコートから白桃の贈与の石を取り出した。

「あの」

そんな中、蓮華がおずおずとスミレに訊ねた。

蓮華の目はさっきまで泣いていたせいか少し赤かった。

「おっ！ なんだい？ 私の可愛い子孫！」

「あつ、じゃあやっぱり、あなたは私のひいおばあちゃん……」

「そっだよ！」

蓮華とスミレが並ぶと、そこまで年の差が感じられず、だからこそ、二人の会話の内容は違和感で満ちていた。

「そっだよ！ 可愛い子孫にこれをあげよう！ いいよね？ たまちゃん？」

スミレはぱつと振り返り、魂の傀儡子を見た。

突然のことに驚いた魂の傀儡子は少しの間硬直していたが、すぐに表情を和らげ、縦に頷いた。

「はい、じゃあ大切にしてね。」

魂の傀儡子の承諾に満足げな表情を浮かべたスミレは蓮華の掌に白桃の贈与の石を乗せた。

「で、でも！ これって大切なものじゃ」

蓮華の言葉をスミレは人差し指を立てて遮ると、ウィンクして言った。

「大切だから、あなたに持っていてほしいの。お願い。」

「……………分かりました。」

蓮華はしっかりと頷いて、そして石を両手に握りしめた。

スミレはそんな蓮華を見て、うんうん、と何度も頷くと、すつと魂の傀儡子の元に近寄った。

「私、大きくなったでしょ？」

自慢げに胸を張るスミレを見て、魂の傀儡子はふつと笑って、頷いた。

「ええ、立派になりましたね。もう、子供だなんて言えませんがよ。」

「うん。」

スミレは笑顔だったが、それはどこか淋しげにも見えた。むろん、それに気がつかない魂の傀儡子ではなかった。

「……………スミレさん、実は言いたかったことがあるんですが。」

「うん。」

スミレは魂の傀儡子が言おうとしていることを分かっている。だ

からこそ、しっかりと聞き耳をたてた。

「私も……あなたを愛しています。」

その、何の変哲もない、愛の告白は、月夜に照らされた廃工場に美しく響いた。

そして、スミレの目からは涙がこぼれていた。

「たまちゃんから、初めて愛してるって言われた。」

スミレの顔は笑顔で、けれども、たくさんの涙があふれ出していた。

周りにいた卓たちもその光景を温かなまなざしで見っていた。

真理、蓮華、要はうつすらと涙さえ見せていた。

「これからは何度でも言っておあげます。」

「うん、嬉しい。」

魂の傀儡子とスミレはその場で静かに唇を重ねた。

すると、二人は眩い白い光に包まれた。

そして、次第に魂の傀儡子とスミレの身体は光の粒子のようなものとなって、足から消えていった。

「討伐者のみなさん、そして蓮華さん。これまでの数々の失敬をお許してください。そして、図々しいとは思いますが、お願いがあります。」

そこまで言うと、魂の傀儡子はスミレと顔を見合わせ、そして、再び卓たちに顔を向き直すと、口を開いた。

「世界移転計画ゼロ・フォー・スを止めてください。」

その言葉に返事したのは卓だった。

「お前に言われなくても、俺たちはこの世界を守る。」

「……たくましいお言葉。そうですね。あなたたちに言うことはなかったようです。」

魂の傀儡子とスミレは首のところまで光の粒子になっていた。

「では、最後に。愛する者がいる幸せを、当然だと思わないでください。」

誰に向けられたか分からないその言葉を、その場にいた誰もが、

しっかりと受け止めた。

ついに、魂の傀儡子とスミレは完全に光の粒子となって、夏の夜空に架かる一本の柱のように立ち上って、次第に光の粒子も消えた。  
「!？」

卓がそんな様子を見てみると、ふいに、右手を真理に、左手を蓮華に握られた。

「卓、今は何も言わないで。」

そんなことを呟いて、真理は目に涙を浮かべ、でも幸せそうな笑顔で、それは蓮華も同様に、星が闇を彩る夜空を廃工場から見上げた。

「ふふ、見せつけてくれちゃって……」

そんな3人の少し後ろで要が涙を手で拭いながら言った。

「俺達はそろそろ行くぞ。」

謙介はぶつきら棒に、けれど、しっかりと要の手を取って廃工場を後にした。

要は謙介の手を握り返し、小鉄は2人を追って、要が差し出した手を握った。

ある夏の夜、鳴咲市には幾年にも渡って募った思い、一つの恋が成就した。その気持ちだけは時代に関係なく、誰もがどんな人が無条件で抱くことの許された感情。そして、これからもその感情だけは変わることなく、これからの時代も渦巻き、数々の奇跡を生み出す。奇跡の名は『愛』。

魂の傀儡子との決戦の夜から数日後。

夏休みを目前に控えた学校の昼休みはいつになく活気にあふれていて、クラスには夏休みの予定や、補習に唸りをあげる生徒などが

いた。

「蓮華！ 真理ちゃん！ 一緒にお昼食べよう！」

春奈が弁当箱を持って蓮華と真理の元に駆け寄ってきた。

「あつ！ 俺も！」

蓮華と真理の返事より早く、春奈の後ろから迫ってくる陽介。

「黙れえ！」

が、もちろん、すかさず春奈の蹴りが直撃。陽介はその場に崩れ去った。

「相変わらず過激ね。」

そんなやりとりを真理はため息交じりに見ていた。

「は、春奈ちゃん。たまには一緒に食べてもいいんじゃない？」

蓮華の言葉に春奈は驚いたように目を見開いた。

「えっ！？ こんな変態と！？」

「で、でも、ほら、クラスメイトだし、たつくんの友達だし……」

その一言に完全にノックアウトしていた陽介が飛び上がった。

「蓮華ちゃん！ マジで！？ いいの！？」

陽介の目はきらきら輝いていた。それをうつとおしそくにみている春奈も、観念したのか大きくため息をついて口を開いた。

「まあ、蓮華がそう言うなら今日くらいはいいか。」

「うん。」

「うん。」

春奈の言葉に蓮華は満足そうに笑顔を見せた。

「で？ その城根はどこにいるの？」

春奈は教室を見渡したが、どこにも卓の姿はなかった。

「卓なら、多分……。私が呼んでくる。」

「あ、じゃあ私も！」

真理に続いて、蓮華も教室から出て行った。

「えっ！？ ちょっと！ 変態と一緒にしないでよー！」

後ろで春奈が嘆いていたが、真理と蓮華は足を止めることなく、目的の場所に向け足で向った。

「……風にも匂いがあるんだな。」

卓は学校のフェンスに囲まれた屋上で仰向けで寝転がっていた。

「あ、やっぱりここにいた。」

卓が寝ていると、ふいに金属製の扉が開く音がして、真理と蓮華が卓の顔を覗きこんだ。

「おう、真理と蓮華か。」

「おう、じゃないわよ。お弁当食べる時間無くなるわよ?」

「そうだった。」

卓は腕時計に視線を移すと、ひょいと上体を起こした。

「たつくん、こんなところで何してたの?」

蓮華が訊ねると、卓は目を閉じて、風を浴び、口を開いた。

「こんな何気ない風景も、気分によって違う世界に見えるんだな  
つて。」

「「……」」

卓の言葉に、真理と蓮華は顔を見合わせ、柔らかく笑った。

そして、卓と同じように真理と蓮華を目を閉じ、ささーと心地よい音と共に当ってくる風を感じた。

快晴の下に吹く風は心地よく、3人の髪を優雅に靡なびかせた。

いつもと変わらぬ日常が、このときの3人にはとても新鮮に感じた。

そして、これから訪れる猛暑を知らせるかのように、今日も蝉せみの鳴き声がこの鳴咲市を包んでいた。

「愛」が故に（後書き）

「約束の蒼紅石」第8話、いかがでしたでしょうか？　これが「魂の傀儡子編」も終りとなるのですが、作者的にはなんか感慨深いものがあります（笑）　実は一番深くまで構想を練ったのがこの「魂の傀儡子編」だったので、それだけに思入れがあるのです！　さて、読者の皆様はこの話、いかがでしたでしょうか？　自分的には魂の傀儡子は好きなのでハッピーエンドにしてみました（笑）

さて、次から新章突入となるわけですが、その前にもう一度、この「魂の傀儡子編」を読み返していただけると嬉しいですよ！

それでは今回はこの辺で！　皆様！　よいお年を！！！！

## 偶像と巫女（前書き）

新年、明けましておめでとございます！！ 夢宝むほうです！  
皆さまは、楽しいお正月をお過ごしでしょうか？

ちなみに作者は、小説の執筆をしながら紅白歌合戦を見て新年を迎えました（笑）

昨日は、さすがに小説の執筆はお休みさせていただき、あちこちに買い物に走りまわるといってお正月の風物詩を堪能させていただきました！！

今年も、「約束の蒼紅石」をご愛読いただけよう努めてまいりますので、どうか温かく見守ってくださいとうれしいです。

それでは、新年早々、新章突入！ 「約束の蒼紅石」、第9話お楽しみください！



## 偶像と巫女

魂の傀儡子との決着から一カ月と少し。秋は目前と言えども、まだまだ厳しい暑さが鳴咲市を包み込んでいた。

まだまだ蝉の鳴き声は止むことを知らず、道端には蝉の抜け殻がかなりの数が落ちていた。

世間では未だに夏休み、しかし、夏休み後半というのは宿題に追われる学生が暑い中必死に筆を動かすか、現実逃避に走るものに分かれる季節。街の活気もさらに増し、市街の熱気はすさまじいものだった。

だが、そんな暑さを感じることはない場所がある。鳴咲市、最北部は海岸になっていて、そこには地下に討伐者専用訓練施設を備えた灯台が堂々と聳<sup>そび</sup>え立っていた。

そこは、潮風が吹き渡り、夏の直射日光はあるものの、そんなものは日陰に入れば凌げるし、そうすると、実に潮風が心地よい涼しさを与えてくれる。

灯台の日陰で2人の男女がそれぞれ片手に炭酸飲料を持って涼んでいた。いや、正確にはある人を待っていたのだ。

「まさか、蓮華まで討伐者になりたいなんてな。」

この男は、現在高校1年生の城根卓。討伐者だ。

「でも、蓮華のもらった贈与の石には武器も契約されてるみたいだし、それに、小鉄さんが特別に組んでくれた訓練プログラムだから、心配ないんじゃない？」

隣にいた少女はそう言っただけで、炭酸飲料を口に含む。すると、口の中で広がる炭酸が弾ける刺激が、この暑さを少しでも和らげる。少女の名前は篠崎真理。卓と同様に討伐者で、二人一組を基本スタンスとする討伐者のパートナーでもある。

「まあ、魂の傀儡子がいなくなっただけで、魂玉の数はめっきり減ったし？ そんなに心配するようなことでもないんだろうけど。」

卓は炭酸飲料の入ったペットボトルを太陽の光の下にさらした。透明な炭酸飲料は太陽光を受けて、まるで宝石のようにきらきら光る。

「蓮華はきつと卓が思っている以上に強い子だよ。」

「そんなものか。」

それからしばらく、卓と真理が他愛もない話をしながら時間を潰している、ふいに灯台の鉄の扉が重々しい音と共にゆっくりと開いた。

「おまたせ、たつくん、真理ちゃん。」

扉から、ふわっと広がる茶髪でロングヘア、そして、ジャージ姿の少女が出てきた。長袖、長スボンのジャージなので、肌の露出は少ないが、それでも、少ない露出でも分かるほどに彼女の肌は透き通るように白く、きめ細やかな美肌だ。

「蓮華、お疲れ様。」

そう言っ卓は蓮華の頭にポンと手を置く。

それに対して嬉しそうにするこの少女は赤桐蓮華。彼女はつい先日まで一般人だったが、魂の傀儡子の一件にて、贈与の石を手に入れた彼女は卓と真理と同じく討伐者となることを決め、この一週間、灯台の訓練施設にこもっていた。

「いや、驚きました。まさか、蓮華さんの石に契約されていた武器が神器だったなんて。」

蓮華の後から、卓より少し身長が低く、しかし身だしなみは綺麗に整えた、クールビズ使用のスーツ姿で一人の少年が出てきた。

「小鉄さん、蓮華のことありがとうございます。ところで神器ってのは？」

卓は少年に一礼し、顔を上げると質問を投げかけた。

少年は三浦小鉄。以前にこの灯台下の訓練施設で卓と対峙した討伐者である。本来、この鳴咲市ではなく、東京に配置されていたのだが、真理の兄である篠崎謙介の命によって、訓練施設の管理、及び責任者を任されていた。

「神器というのは、贈与の石の力そのものを取り入れた武器のことです。実は神器には2種類あって、一つは間接型と呼ばれるものです。僕の武器はこれです。一度贈与の石の力を注ぎこめば、そこからは一時的に武器が神器となって、それ単体で石の力と同等、あるいはそれ以上の力が発揮できるのです。」

小鉄の淡々とした説明に真理は何度も頷き、卓は適当に相槌を打ちながら聞いていた。

「そして、蓮華さんの神器はもう一つの方で、こちらは無変型というもの。石から具現させた時点で神器として機能し、それ以降、わざわざ詠唱を唱えなくても強力な力を得る武器なんです。まあどちらの神器もとても珍しいものなので、討伐者でも持っている人はそう多くはありません。」

小鉄の得意げな説明を聞き終えた卓は興奮気味で蓮華に声をかけた。

「すごいな蓮華！ これは頼もしい味方が増えたよ！」

「そんな、私は何もしてないよ」

蓮華はどこか恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに返答する。

「でも、蓮華がいてくれたら助かるよね。」

真理の言葉に卓は大きく頷く。

「うん、私頑張るよ。」

そう言っただけ蓮華は小さくガッツポーズを作っただけ。

「それでは、僕はこの辺で失礼しますね。とりあえず、これから一旦東京に戻ろうと思いますので。」

小鉄はそう言っただけ、灯台近くのバス停からバスに乗って鳴咲市の中心街に向かった。

ちなみに、真理の兄である謙介と、謙介の討伐者としてのパートナー、東条要はもともとの担当国であるドイツへと戻っていた。

小鉄が帰ったそのすぐ後に、卓、真理、蓮華もそれぞれ家に帰った。とはいっても、家族がまだドイツに住んでいる真理は現在、卓の家に居候していて、蓮華の家も卓の家の隣なので、みな帰る方向

は同じなのだが。

これが、昨日までの大まかな夏休み。そして、本日、8月31日。卓はまだ夏の暑さが残っているというのは、この場において全く意味のないものだと思感していた。

鳴咲市から少し離れた街、そこには東京ドームと並ぶ程の大規模なコンサートホールがある。

年中、いろんなバンドや歌手などがそこでライブやらコンサートやらを開催していて、基本的に大勢の人で賑わっていた。

それは今日も例外ではなく、夏の暑さに加え、大勢の人の熱気、そして、会場に地面を揺らすほどの大きな声援が暑さを倍増させていた。

卓は人混みの中で、額からにじみ出る大量の汗も、これだけの人がいると汗を拭くことすら困難な地獄に気がめいつていた。

「陽介……もう帰らないか？」

卓のそんな声はすぐ隣にいるクラスメイトの伊勢陽介にすら届かず、陽介は前のステージに向かって何度も大声を張り上げていた。

「はあ……」

今の陽介にはどんな言葉も届かないのだろうと一瞬で悟った卓は諦めて、出来る限り、流れ出てくる汗を拭くことに専念した。

卓と陽介がなぜこのような場所にいるのかと言えば、夏休みのほとんどが補習でつぶれた陽介の願いで、おひとり様一点までしか売ってもらえない限定グッズがどうしても二つ欲しいといので、一番頼みやすい卓がそのお願いを頼まれたわけで今に至る。

「ミ！ イ！ ナ！」

さっきからずっとこの会場にはその名前を何度も何度も呼ぶ声が響き渡っていた。

それはこれだけ何千人の人間が驚くほどに同じタイミングでコールしていて、一種の芸術とも思えるほどだった。

卓の隣にいた陽介もその芸術を作りあげている一人であった。

しばらく炎天下に晒された会場で名前を呼ぶコールが響き、卓が

汗を拭きとる作業をしていると、突然ピタッとコールが止み、代わりに、大きなステージの両サイドの地面から勢いよくピンクのカラースモークが吹きあげた。

刹那の沈黙の後、会場には再び地面を揺れ動かすほどの声援が沸き起こった。

「みんな〜！ 今日こんな暑いのに来てくれてありがとうお！！」

ステージのセンターに一人の少女がマイクを持って現れた。少女の登場に、会場のボルテージはさらに向上した。

「今日は、みんなで最高のライブにしようね！！」

「おお！！！！」

少女は観客にマイクを向けていたが、そんなことをするまでもなく、隣町にまで聞こえるのではないかというほどの音量で返事が返ってきた。

少女は臍<sup>へそ</sup>を露出した、フリフリのミニスカートの衣装に身を包み、その衣装は少女の引き締まった括<sup>くび</sup>れと、大きすぎず、小さすぎずといった美形を保った胸を強調していた。

髪型は肩にかかるくらいのショートだが、艶もあり、よく手入れされた綺麗な赤い髪。そして、その髪には大き目の黒いリボンが結ばれていて、赤い髪とよく合っていた。

「それじゃ、ミイナのサマーライブ！ 始まるよ〜！！」

少女のその言葉を合図に、ステージにさらに四つのカラースモークが放たれた。

少女はミイナ。もちろんこれは芸名で本名は椎名美奈<sup>しなみな</sup>。芸名、というのには彼女がアイドルだからだ。

歌唱力、そしてその可愛い容姿が大人気となり、今では日本全国に大勢のファンを持つトップアイドルとして活躍している。

「じゃあ早速一曲目！ ラブレター！ 行くよ〜！！」

ミイナがマイクを口元まで近づけると、コンサートホールに軽快なノリのいい音楽が流れ始める。そして同時に、色鮮やかなライト

が、ステージの中心に立つミイナを照らした。

曲が流れ始めると、会場にいるファンはライトスティックを取り出し、リズムに合わせて揺らしたり、その場でジャンプしたりするものも現れた。

ちなみに卓はただただステージで踊りながら歌うミイナに見惚れていて、その横では陽介が『ミイナLOVE』とピンクの文字で書かれた鉢巻きを額に巻いて発狂していた。

曲がサビに入るころ、会場のボルテージは最高潮に達していた。

卓も、騒ぎこそしなかったが、完全にミイナの歌に聞き入っていた。ミイナの歌、ラブレターの歌詞は、恋する女の子が、片思いの気持ち好きな相手に伝えられないもどかしさを書いていたもので、卓にもどこか心に響く歌詞だった。

ミイナは笑顔を絶やすことなく、炎天下と、ライトの熱で大量の汗を流し、ミイナが踊って動いたたびに、その汗はキラキラとミイナの周りを舞った。そんな姿がいちいち絵になるミイナはこれだけのファンを魅了するという事実を納得させるのに十分過ぎるものだ。

それから、2時間におよぶライブはボルテージが下がることもなく、熱気がこもったまま行われた。

会場の暑さは、会場から出たときに、夏の暑さが涼しく感じられるほど強烈だったとしか表現できないほどだった。

帰りの電車の中、卓は疲れて眠り、陽介はその隣で目当てだった限定グッズの入った紙袋を見つめ、にやにやしていた。ちなみにまだ額には例の鉢巻きが健在だ。

「じゃあ、また明日な。」

「おう！ 今日付き合ってくれてサンキューな！！」

鳴咲市に着くと、卓は重たい身体を引きずりながら、そして対照的に陽介は軽い足取りでそれぞれ家に帰った。

「ただいま。」

卓は玄関のカギを開け、家に入った。

「母さん、ただいま。」

卓が、玄関に飾ってある母親、城根結衣子の写真にほほ笑むと、リビングから真理がひょいっと顔を覗かせた。

「卓、今日は蓮華がご飯作ってくれたよ」

「えっ!?!? 蓮華、来てるのか?」

卓は靴を脱ぎ棄ててそのままリビングに直行した。

すると、テーブルにはサラダやハンバーグなどが、豪勢に並べられていた。

「あ、たつくん。おかえりなさい。」

卓がテーブルに並ぶ夕食を眺めていると、キッチンからエプロン姿の蓮華がお盆に茶碗を乗せてリビングに入ってきた。

「蓮華、わざわざ悪いな。」

卓が申し訳なさそうな表情をすると、蓮華はにっこり笑った。

「ううん、私こそ勝手にお邪魔しちゃって。」

「気にするなよ。てかむしろ大歓迎だって。」

卓のその言葉に蓮華は少し気恥ずかしそうに頬を赤らめた。

「卓、蓮華。早く食べようよ!」

そんな中、真理は椅子に座って催促するように言った。

「おう、そうだな。」

「うん。」

真理に急かされて、卓と蓮華もそれぞれ椅子に座った。

同時刻、鳴咲市の外れにある路地。

「はっ、はっ、はっ! いやあああ!」

人気の少ない静かな路地に、全速力で走って息を荒だて、叫ぶ女性ひとけがいた。

女性の目には涙すら見受けられ、走り続けたのか、足に限界が訪れ、もつれた足に引つ掛かり、女性はその場で派手に転んだ。

「ひっ! ひい!」

女性はひどく動揺していて、すぐに自分が走ってきた路地を振り

返る。

すると、後ろから、夜のせいではつきりは見えないが、大きな影が女性に向って迫りくるのが確認できた。

そして、その影が少し動けば、月明かりが、その手にある大鎌を光らせた。

「お、お願い……助けて」

女性はもう立ちあがることも出来ず、その場でただ全身を震わせることしかできなかつた。

だが、そんな女性に向って、迫りくる何者かは、無情にも大鎌を振りかぶつた。

「いつ！ いやああああああ！」

女性の叫び声と同時に大鎌はその身を切り裂いた。

まるで紙を切るかのように女性の身体は切断され、その場で両腕、両足は肢体から切り離され、おびただしい量の血が路地を赤く染め上げた。

何者かは、腕も足もない女性の身体に、大鎌を突き刺し、そして目の高さまで持ち上げた。

持ちあげた際に、腕と足の付け根から再び大量の血が流れ出る。

「……………」

何者かはその女性の無残な死体を無言で見つめた後、大鎌の刃から女性の死体を空中に解放し、そして、落下する前に首を大鎌で掻き切つた。

ついに、頭すら無くなった肢体はベチャリという生々しい音をたてて路地に転がった。

女性の大量の血を帯びた大鎌は月明かりに照らされ、美しく輝いていた。

何者かはその闇夜に姿を眩ませた。

それから数十分後、鳴咲市にはサイレンと音がしきりに鳴り響いた。



「……これはまた、無残な仏さんだな。」  
肢体の周りに切り落とされた手足、そして頭を見て男はポツリと  
呟いた。

殺人現場には4台のパトカーが赤いライトを回していて、すでに  
黄色いテープで立ち入り禁止を記していた。

男は顎に少しの髭をたくわえ、比較的しつかりした体格はスーツ  
に身を包んでいた。白髪混じりの髪からはどこかベテラン臭すら感  
じられる。

すでに現場では鑑識などが血液採取など行っている中、一人の若  
い男が顎鬚の男の元に駆け寄ってくる。

「っ!? う、うげえええ。」

若い男はふいに惨殺された死体を見て、その場で吐き戻してしま  
った。

「いい加減慣れる。そんなことをしては仏さんに失礼だろ。」

「けほっ! けほっ! ……はい。ですが、これはあんまりにも  
……」

若い男は血の気が失せた真つ青な顔でよろよろと立ちあがった。

「……で、私に何か報告があるのではないのか?」

「あつ! はい、この辺一帯の聞き込みを行いましたところ、目  
撃者はこれと言っていませんでした。」

「そうか……」

顎鬚の男は、眉間にしわの寄せ、険しい顔つきになった。

「あの、聞き込み、続けますか、城根警部補?」

若い男の言葉に城根警部補と呼ばれた男は首を横に振った。

「これ以上の聞き込みは無意味だ。とりあえず、この死体の回収  
を最優先しろ。」

城根警部補の言葉に、若い男はおそろおそろ死体に近づいた。

(またなのか。いい加減こんな血肉を拝むのはこれっきりにして  
ほしいものだ……)

城根警部補は、この惨殺現場を美しく照らす月を見上げた。

翌日、9月1日。

夏休みが終わり、新学期初日となったこの日の教室にはどこか落ち着かない、そんな空気が流れていた。

「はあ……夏休み、終わっちゃったね。」

教室で、机に頬杖をついていた春奈はふいにそんなことを呟く。

「でも、2学期には学園祭もあるよ?」

春奈を励まそうと口を開いた蓮華だったが、春奈はわざとらしく目を細めて言った。

「蓮華も、なんか夏休みの最後の方遊んでくれなかったし〜」

拗ねたように唇を尖らせた春奈に蓮華は困惑の表情を浮かべた。

「……ごめんね、春奈。」

落ち込む蓮華を見て、春奈はふっと笑って蓮華の頭を抱き寄せた。

「冗談よ〜! もお蓮華は本当に可愛いわね!」

「春奈〜。苦しいよ〜」

しばらく春奈に頭をもみくちやにされた蓮華はぷは〜と息を吐いて春奈の腕から逃れた。

そんなざわめきが渦巻く教室の中、窓際の席に座る卓はどこか疲れきった表情を浮かべていた。

理由は言わずとも、昨日のミイナのライブにあることは明明白白だが、そんな卓に対して、同じライブに行った伊勢陽介の表情は明るかった。そして、陽介はスキップ混じりの足取りで卓の元に駆け寄った。

「なあなあ! 卓、聞いてくれよ! ニユースだ! ニユース!」  
目をキラキラ輝かせ、陽介はある雑誌のページを開き、卓の机に広げた。

「……お前、なんでそんなに元気なんだよ。」  
卓はあからさまに陽介に向けて疲れきった表情を向けるも、物の見事にスルーされ、陽介は自分の要件を続けた。

「ミイナちゃん、鳴咲市に戻ってくるみたいなんだ！」  
「えっ？」

卓はふいに机に広げられた雑誌に視線を落とす。すると、そこにはミイナが見開きで写っていて、写真の上に黒字でインタビュー形式の文字がつづられていた。

ちなみに、鳴咲市に戻ってくるというのは、ミイナこと椎名美奈は鳴咲市出身で、今はトップアイドルとして最低でも週2で東京またはその付近でイベントを催す彼女は通勤の関係で、東京に一人暮らしをしていた。

実家は神社で、鳴咲市の最西にあるのがそれだ。

「どうやら、この新学期に合わせて戻ってきてるらしいんだ！」

あゝもしかしたら昨日ライブの後待ってたら一緒に帰れたのかな〜」  
陽介は一人でどんどん暴走し、呼吸は興奮のせいか乱れていた。

「それはストーカーだろ。ってか、まさかこの学校に転校してくる、なんてお約束展開じゃないんだろっな？」

卓のそんな何気ない問いに陽介は愕然と肩を落とし、首を横に振る。

「いや、ミイナちゃんは光陵学院に通うらしい。」

私立光陵学院、鳴咲市でも指折りの名門校で、学校の敷地内に希望制の学生寮があり、世間一般に言われるお嬢様学校と呼ばれる部類の学校だ。

「まあ、そりゃトップアイドルなんてもものにもなれば、そうなるよな、普通。」

「現実つてのは厳しいよな〜！」  
陽介はわざとらしく嘆く。

「そういえば、ニュースと言えば、今朝見たんだけど、また鳴咲市で惨殺事件が起きたらしいな。」

卓の振ったその話題に後ろに座っていた真理が答えた。

「これで4人目だっけ。この町ってこんなに物騒なの？」

真理の問いに卓は首を横に振り、否定した。

「いや、こんなの最近だよ。それに、殺し方があまりに無残だから、もはや人間の仕業かどうかすら疑う輩も出てきているらしいしな。」

「人間じゃないって、冥府の使者とでも？」

「さあな。」

真理の質問に卓は肩をすくめるだけだった。

そんな会話をしている中、陽介はまるで無関心のように、雑誌にでかでかと写っているミイナの写真を舐めまわすように見ていた。

その日の学校は新学期初日ということもあり、始業式で学校が終わり、昼時には学校から解放されることとなった。

しかし、それは何の部活にも所属していない、卓、真理、蓮華、陽介のことであり、空手部に所属していた春奈は新学期ミーティングというものに参加しなければならず、泣く泣く空手部の部室へと姿を消した。

帰宅部である陽介も、アイドル、ミイナの初回限定のアルバムを買うとかで、早々に教室から飛び出し、中心街へと向かった。

「今日はどっか寄って行くか？」

校門を出たところで卓が提案すると、真理と蓮華は特に迷った様子もなくすんなり頷いた。

「じゃあ、どこか行きたいところあるか？」

卓が二人に訊ねると、蓮華がふとカバンから一枚のチラシを取り出した。

「なんか、街の方に新しいスイーツカフェが出来た見たいだから、行ってみたいな〜なんて。」

少し照れくさそうに頬を赤らめて提案する蓮華に、卓は少なからず胸の鼓動が速まるのを感じた。

「あ、それ私も気になつてた。」

真理も蓮華が取り出したチラシを横から顔を覗かせて食っているように見た。

「なら、そこに行ってみるか。」

「やった！」

蓮華は卓の承諾に、両手をそつと合わせてにつこりほほ笑んだ。

ちなみに街というのは鳴咲市の中心街のことで、最初に卓と真理が再会したシヨッピングモールを含め、たくさんの娯楽施設や、幅広いジャンルの店がある。

卓たちが通う聖徳高校からはバスで行けば10分ほど、徒歩でも30分はかからないといった距離に位置する。

これは余談となるが、マイナこと椎名美奈が通う光陵学院はこの中心街にある。

「なら、時間もあるし歩いて行くか。」

それから、3人はこれから行われる学園祭のことや、新学期にやりたいことなど、普通の会話をしながら、歩いた。しかし、時折、討伐者について、そしてそれに関連する話も持ち上がってくることもあった。

討伐者となつた蓮華を含め、卓、真理はこれからは基本的に3人1組で行動することを以前に小鉄から指示されていた。討伐者とは普通なら2人一組のだが、何せ急遽討伐者となつた蓮華のパートナーをすぐに探し出し、鳴咲市に連れてくるのはいささか困難なことであり、何よりその提案は蓮華自身が断っていた。

一時は小鉄が臨時で蓮華のパートナーになるかという話も、蓮華が灯台下の訓練室に入るまではあったものの、蓮華の実力を見た小鉄は結局、卓と真理の3人でも十分過ぎるほどにやっつけていけるだろうという判断を下した。上層部もこの小鉄の提案を無碍むげにあしらうこともせず、むしろ快諾したというほうが正しい。というのも、卓と真理が魂の傀儡子を討伐したという事実は無論のこと本部、そして総帥の耳にも届いているわけで、二人の実力は大いに評価されたのだ。

と、そのようなさまざまな話をしているうちに3人は鳴咲市の中心街へと辿り着いた。

「久しぶりに来てみるけど、相変わらず賑やかだね。」

真理は中心街に着くなり、あちこちの店から流れ出る音楽や、店員の呼びかけなどについていちいち耳を傾けた。

「ところで、そのスイーツビュッフェってのはどこらへんにあるんだ？」

卓は少し後ろを歩きながら、チラシを覗きこむ蓮華に問いを投げかけた。

「うん、この道をもうちよつと真つすぐ進むとある　きゃっ！」  
蓮華がふつとチラシから顔を上げて前を見ようとした瞬間、向いから早足で駆けてきた帽子を深く被った少女とぶつかり、二人ともその場で尻持ちをついた。

「大丈夫か！？」

すぐさま卓と真理が二人のもとに駆け寄って卓が見知らぬ少女を、真理が蓮華をそれぞれ立ちあがらせた。

「すみません。急いでいて。」

帽子を深く被った少女は蓮華に頭を下げた。少女はピンク色の可愛らしいセーラー服に身を包み、だからこそ、頭に被っている唾付きの帽子はアンバランスなことこの上なかった。

「い、いえ。こちらこそぼんやりしていて。」

蓮華も釣られるように頭を下げる。

「気にしないでください。では私はこれで」

「居たぞ！　あそこだ！」

「！？」

少女がその場を立ち去ろうとした瞬間、少女が走ってきた方向から、黒ずくめの男が3人ほど、追ってくるようにこっちに向ってきた。

「えっ？　君、もしかして追われてるの？」

卓の問いに少女を口を紡いだが、しつかり頷いた。

そして、卓がふいに真理と蓮華と顔を見合わせると、二人とも何かを承諾したように頷く。

「逃げよう！」

「えっ!？」

卓はとつさに少女の手を取り歩いてきた方向に駆け出した。真理と蓮華もそれにしっかりついてくる。

「待ちなさい!」

そんな4人の後ろから人混みを上手く避けながら黒ずくめの3人は追ってくる。この猛暑の中、スーツ姿の男はそれを苦にしていな  
いかのように、ほとんど汗もかいておらず、ただ足を止めることな  
く駆け続ける。

「よしっ! 真理、蓮華! あれに乗るぞ!」

卓が少女の手を掴んでいない方の手で前方にバス停で止まっているバスを指差した。

「分かった!」

真理と蓮華は後ろを気にしつつも、走り続け、卓と少女の後にバスに駆けこんだ。

バスの運転手は一瞬驚くように目を見開いたが、すぐに気を取り直し、バスを発車させた。

黒ずくめの男たちはぎりぎりバスに乗り合わせることができず、卓たちはバスの最後部座席から、黒ずくめの男3人が立ち往生しているのを確認した。

それから、卓たちが乗り込んだバスは20分少々、舗装された道をひらすら走り、炊くたちの自宅からの最寄のバス停で降りた。

「……えっと、なんか勢いでこんなとこまで来ちゃったけど、暑いし、ちよつとウチに寄って行くか?」

卓が、半分冗談交じりで提案し、指で自宅を指したが、少女は少し間を置いて小さく頷いた。

そんなやりとりがあつて、真理、蓮華、そして帽子を深く被った少女がテレビ前のソファに座っている。

「粗茶ですが、どうぞ。」

キッチンから、お盆に4つのグラスに入った麦茶を卓が運んで、それぞれの目の前に置く。





「改めまして、椎名美奈と申します。先ほどは助けただきありがとうございます。」

少女がアイドルのミイナこと椎名美奈と発覚し、しばらく騒然となったが、それがひと段落したところで、美奈はソファに座ったまま深くお辞儀した。

「まさか、本当にアイドルの椎名美奈だったとは。」

卓のその一言に美奈をむっと表情をしかめて、口を開いた。

「あの、初対面なのに、いきなり呼び捨て？　ちよっと慣れ慣れしいんじゃないの？」

「えっ……」

いきなりの態度の豹変ぶりに卓はもちろん、真理と蓮華もお互い顔を見合わせ戸惑いを露わにした。

「……気に触ったのならごめん。」

「えっ!？」

卓が素直に謝ると今度は美奈が不意を突かれたように驚いた。

「どうした？」

美奈の驚きに卓は首を傾げた。

「……私の本性知って、よくそんな普通にされてられるわね。だって今の私、テレビとかコンサートで見るのと全然違うでしょ？」

美奈の質問に、しばらくリビングに沈黙が訪れたが、卓は平然とした表情で答えた。

「まあ、確かにそうかもしれないけど。……でも、こんなこと言ったらまた怒るかもしれないけどさ、俺はあんまり君のこと知らないから。だから、ちよっとは驚いたけど、それだけだよ？」

卓の答えに美奈は少しの間、驚いたように目を丸くしていたが、ふっと笑みをこぼして口を開いた。

「あゝあ。まだまだ私の知名度も大したことないのかもしれないわね。」

「えっ!？　あつやっぱ怒った。」

美奈の言葉にすぐにフォロー入れようと卓が身を乗り出そうとし

だが、美奈がすかさず卓の目の前でぴつと人差し指を立てて、可愛らしいウィンクを見せたあと続けた。

「だ、か、ら、君にはこれから私の魅力を教えてあげる！」

「……!!??」

そんな危うげな美奈の言葉に、卓は心臓が跳ねあがりそうになり、真理の蓮華の心境も穏やかではなかった。

「ちよ、ちよ、ちよっと！いきなりなんてこと言ってるの！」

真理が思わず身を乗り出して赤面すると、美奈はいたずらに笑みを浮かべ、茶化すように言った。

「もしかして、あなた、この人のこと好きなの？」

「……!!ば、馬鹿なこと言わないでよっ!!!」

美奈の言葉に真理はさらに声を荒げ、一気にグラスに入った麦茶を飲みほした。

「あまり真理をからかわないでやってくれ。」

卓がため息交じりに言うと、美奈ははぐいと返事して、再び麦茶を一口。

「あの、ところで、美奈さんを追っていてあの人たちは……」

おずおずと切り出した蓮華を見て、美奈はふつと表情を和らげた。

「やつぱり、美奈でいいわよ。なんかあなたたちとは仲良くやっていけそうだから。」

その時の美奈の笑顔は卓を問わず、その場にいた誰もが息を飲むほどに魅力的だった。

「じゃ、じゃあ俺達のことと呼び捨てでいいよ。俺は城根卓。」

「……篠崎真理。」

卓の視線を受けた真理はぶつきら棒に名前だけを名乗った。

「私は赤桐蓮華。よろしくね美奈ちゃん。」

「うん、よろしく。」

さすがはアイドルと言ったところで、その笑顔はとても可愛らしく、そして周りの人間を魅了する魔力めいたものさえ秘めていた。

「で、あの追ってきた男たちは」

卓が本題に戻すと、美奈の表情は少しくぐもった。

「もしかしてストーリーカー？」

真理の言葉を美奈は首を横に振って否定した。

「あの人たち……ううん。やっぱりあなたたちを巻き込むのはダメよね。」

そのとき見せた美奈の表情はどこか寂しげで、それを見た卓は少し胸が痛んだ。

「……話すだけでも話してくれないか？　もしかしたら力になれるかもしれないだろ？」

卓のその提案に、真理も蓮華も頷いたが、美奈だけは首を横に振る。

「気持ちは嬉しいけど、でもやっぱりあなたたちには」

「見つけた。」

「……！！？」「……」

美奈の言葉を遮ったのは、卓の家のリビングの窓から顔を覗かせた先ほどの黒づくめの男たちの一人だった。

「なっ！　もう追ってきたのか！？」

卓たちが驚きを露わにしていると、美奈がすかさず、玄関のほうから家を飛び出した。

「美奈！？」

卓と真理、蓮華もすぐに美奈を追って外に出ると、美奈は黒づくめの男たち三人に囲まれていた。

「駄目！　君たちはここから逃げて！」

自分を追って外に出てきた卓達を見た美奈は自分の立場を忘れ、叱咤するように言った。

「そんなこと言ったって」

卓がそれでも美奈に近づこうとすると、黒づくめの男の一人が前に立ち塞がった。

「邪魔はしないでもらいたい。」

「ふざけんな！　目の前で女の子が困ってるのに、見て見ぬふり

なんて出来ないだろうが!!」

そんな卓に真理はため息をついたが、その口元は緩んでいた。

「……そうですか、では、力づくで。」

「!! やめて!!」

美奈の叫びが響いた瞬間、黒ずくめの男たちの身体からみしみしといった軋んだ音が聞こえ始めた。そして、次の瞬間、男たちの身体は真つ二つに引き裂かれ、しかし血飛沫ちしぶきなど出ることもなく、中から、なにやら生々しい物体が出てきて、次第に形を成していった。

「何だよこいつら……」

「……」

卓達が動揺する中、美奈は醜く変貌する男たちを険しい目つきで見据えた。

ついに、スーツ姿の男たちは、その面影など微塵も見られず、さつきまで男たちがいた場所には、幾本もの触手を揺れ動かし、巨大な口腔くわうくうを腹部のあたりに備え、顔は茶色の毛で覆い尽くされ、その素顔は隠された、怪物とでも呼ぶべき生物が居座っていた。

「……おぞましいわね。」

そんな怪物たちを一瞥した真理の放った言葉。この言葉を聞いた怪物たちはより一層激しく触手を揺れ動かす。

「逃げて!!」

怪物を前に立ちつくす卓たちに美奈は大声で指示した。

「……美奈、逃げる前に一つ聞く。こいつらは人間ではないのか?」

美奈に向って、卓は出来るだけ冷静を保って質問を投げかけた。

その質問に、美奈は今度は盾に首を振る。

「信じられないかもしれないけど、あれは人間じゃないわ。簡単に言えば妖怪の類。……だから、早く逃げて。」

美奈の答えに卓はもちろん、真理と蓮華もふつと安堵の息を漏らす。

「美奈、だったら逃げる必要は無くなったよ。」

「えっ!?!」

困惑する美奈をよそに、卓と真理はブレスレッドに加工した贈与の石にふつと手を触れ、そして口を開く。

「具現せよ! 我が剣!」

卓と真理の詠唱が完全に重なり、そして同時に辺りは蒼と紅の光に包まれた。

「!?! 何なの!?!」

突然の出来事に美奈は動揺し、困惑を露わにした。

光が収まると、卓と真理の手にはそれぞれ、長刀と日本刀が握られていた。

「美奈、下がってる。こいつらは俺達が相手する。」

卓と真理が一步踏み出し、それと合わせるように怪物も触手で威嚇する。

「ちよ、本気で戦う気!?!」

しかし、美奈は今の一部始終を見てもなお、不安そうな表情は変わらなかった。

「たつくんたちなら大丈夫。絶対に助けてくれるから。」

不安そうな表情を浮かべる美奈の隣に蓮華が歩み寄って、そして優しく微笑んだ。

「……でも」

心配する美奈をよそに、既に戦闘態勢に入った卓と真理は怪物に向けて刀を構える。

「行くわよ、卓。」

真理の確認に卓は無言で頷くと、真理はすうつと息を吸って、そして口を開く。

「我、この世界との断絶を命ずる!」

真理が断絶の詠唱を唱え、辺りは静寂に包まれ

いや、包まれるはずだったのだが、卓たちの住む住宅街に静寂は訪れず、雑踏が今もなお耳に届いていた。

「えっ!?! 断絶できない!?!」

不測の事態に、動揺を露わにする討伐者三人。

それを見かねた美奈がすつと口を開いた。

「今、何をしようとしたかよく分からないんだけど、この鳴咲市全体には特殊な空間維持の術が発動しているの。だから、空間をいじることは出来ないの。」

「……術、それってどういう」

卓が再び質問を投げかけようとするも、怪物の触手が、卓と真理を狙い、卓たちはそれを後ろに飛び退いて回避する。

勢い余った触手はそのまま地面に激突し、そこは地面が抉<sup>えぐ</sup>れていった。

「とにかく！ 今は断絶は使えないみたいだし、このままこいつらを倒すしかないだろ！」

「分かってるわよ。」

そして、刀を構えなおした卓と真理が全速力で怪物との距離を縮める。

怪物もそれに応戦して、触手で攻撃するも、卓と真理はことごとく、その触手を切り落としていく。

触手が切り落とされる毎に、切り口からおびただしい量の血が噴き出す。しかし、その血は赤くは無く、濃い紫色をしていた。

「はあああああ！」

怪物との距離をほぼゼロまで詰めた真理が大きく日本刀を振りかぶり、そのまま勢いよく振り下ろした。

真理の振り下ろした日本刀は、怪物を一刀両断した。が、一刀両断された怪物は、切り口から肉片を生々しく動かし、そしてそれらを繋ぎ合わせ、元に戻った。

「なっ！！」

真理と卓は驚き、そして怪物と一定の距離を取った。

「それじゃ駄目！ そいつらには心臓部分の役割を果たす急所があるの。そこを直接攻撃しないことには」

「でも、どこが弱点なの！？」

真理の問いに、美奈は奇しくも首を横に振る。

そんなとき、何かを考え込んでいた様子の蓮華はパンと両手を合わせ、ほほ笑んだ。

「なら、私の出番かも。」

蓮華はそう言ってふっとネックレスになった贈与の石に手を触れる。

「具現せよ、我が希望。」

蓮華は静かに美しい声で詠唱を唱えた。すると、蓮華の首元にあった贈与の石が光輝き、なんとも優しい光がその場を包み込んだ。

「これが、蓮華の……」

光が収まり、蓮華の手には一丁の拳銃のようなものが握られ、それを見た卓がぼつりと呟いた。

蓮華の手に握られていた拳銃は、周りに金で出来た波模様が刻まれていて、本体は木製のシックなデザインだった。そして、大きさも拳銃というには少し大き目で、例えるなら海賊が持っている拳銃に近い。蓮華の小さな手で握られたそれは堂々たる存在感を醸し出していた。

「神器、ガーディ守護の式席。」

蓮華は武器の名称を答え、怪物に銃口を向けた。

「あれが、神器。」

初めて神器を目の当たりにする真理はどこか興奮気味にガーディ守護の式席ベンを見ていた。

「でも、蓮華……。弱点がどこのか分からないことには」

まだ不安要素が残った卓に、蓮華は優しく微笑む。

「たつくん、心配しないで。」

そして、その可愛らしい笑顔から一転、少し険しい表情、それでもまだ可愛らしさが抜けない蓮華が再び怪物に向き直った。

そんな蓮華に、三体の怪物は触手を揺れ動かし、これ見よがしに威嚇する。

ウイーク・ボイスター  
「弱点写し！」

蓮華がそう叫ぶと、突如、銃に刻まれた黄金の波模様が光だし、その光が怪物たちのある一点に集まった。

「!?!」

その様子を見た真理は驚きを露わにし、蓮華は口元を緩めた。

「捕捉ロック!」

その一言と同時に蓮華は引き金を引いた。

すると、銃口から黄金の光が銃弾として、怪物に向って、波模様から放たれた弱点写しが示した一点を貫いた。

「ぐぎつい!」

銃弾に撃ち抜かれた怪物は苦しそうに触手を激しく動かし、そして、次第に動きが止まりその場に崩れた。

「すごい!」

一瞬で怪物を倒した蓮華に、美奈は感嘆の息を漏らした。そして、あまりの一瞬の出来事に、卓と真理も無言で立ちつくしていた。

「あれ? これって俺達必要なくない?」

そんな何気ない卓の一言に蓮華は焦ったように口をはさむ。

「そんなことないよ! 私の武器は銃弾を自身のエネルギーから生成するから、どうしても次の攻撃に時間が必要な。だから、後の二体はたつくと真理ちゃんにお願いしたいんだ。」

「分かった!」

卓と真理もここぞとばかりに刀を構える。

「じゃあお願い! ウイーク・ポイント弱点写し!」

蓮華の銃が、残りの二体の急所を指示した。

「あああああ!」

そして、怪物が防御の姿勢を取る前に、速やかに懐まで潜り込んだ卓と真理は、刀を急所に突き刺した。

急所を突かれた怪物二体は、苦しみに悶え、触手が動かなくなると同時に、その場に崩れ落ちた。

「……嘘、倒しちゃった」

戦いの一部始終を見た美奈は驚きを隠しきれずにいた。



そんな立ちくした美奈に、卓は質問を投げかけた。

「今のは何だったんだ？ さっきの様子を見ると、何か知ってるんだろ？」

その後で、真理と蓮華も答えを求める表情を浮かべていた。

「……分かったわ。ううん、あなたたちなら話しても大丈夫かもしれないし。」

そして、四人は再び、卓の家のリビングにあるソファに腰掛けていた。

リビングにはどこか重たい空気が流れていたが、そんな中、ついに美奈が口を開く。

「あなたたちは幽霊や妖怪の類の存在を信じる？」

ふいに投げかけられたそんな質問に、卓と真理、蓮華は顔を見合わせた。その後、真理がさらに質問を投げ返す。

「さっきのあれは、そういったものなの？」

美奈は真理の質問に首を立てに振った。

「うん。正確には妖霊と呼ばれる存在なの。これは日本特有の存在で、妖怪と呼ばれる存在に近いものがあるんだけど、その知能は人間並みまで発達している、とりわけ厄介な存在よ。」

「妖霊……聞いたことないわね。」

美奈の口から語られた存在に真理はむーと唸った。

「うん、本来ならこんな表の世界に出現することのない存在だから、知らないのも当然なんだけどね。それと、さっきみたいに妖霊は人間の姿に扮している場合もあるから、実際に遭遇していても気がつかないことも少なからずあるんだけど。」

「でも、ならなんでさっきの妖霊はこんな街中にいたんだ？ それに美奈を追って」

卓が最後まで話し終わる前に美奈は言葉を被せるように答えた。

「それが本題。妖霊がこんな表の世界に現れるのは大問題なの。

その目的、原因は分からないんだけど……。でも私が狙われる理由なら大体予想は出来るわ。」

「えっ？」

美奈を除く三人が驚くと、美奈はすつとその場に立ちあがった。

「あなたたちは何か特別な力を持つてるみたいだったけど？」

立ちあがった美奈が確認をとるように訊ねると、真理がそれに答えた。

「私たちは討伐者。この石の力を受けて、まあ簡単に言えば異界の住人、この世ならざる存在と戦う者よ。」

真理はこれ見よがしに手首に存在感を知らしめるブレスレッドの贈与の石を見せた。

「……まあ詳しいことは分からないけど、でも信じるわ。それに、妖霊もいるくらいだし、そういつた存在がいても不思議はないわよ。じゃああなたたちには特別に見せてあげる。」

美奈はそう言っつてすつと目を閉じた。それを卓たち三人は固唾の飲んで見ている。

「大地を駆ける者には肉体を、天を統べる者には知能を、妖を司る者には力を！」

美奈が最後の言葉を口にするると、美奈の周りを渦巻く色鮮やかな蛍光色の光が取り巻き始めた。

「な、何!？」

真理は手で影を作りながら困惑する。卓も蓮華もそのような表情で眩しそうにしていた。

光は案外すぐに消え、そこにはさつきと同様に美奈が立っていた。が、その姿は

「……美奈、それって」

卓たちは美奈の変化に嫌でもすぐに気がついた。

「うん、これが私の力。」

卓たちの目の前にはさつきまでセーラー服姿の美奈ではなく、赤と白の巫女装束に身を包んだ美奈がいた。

「美奈ちゃんって巫女さん……?」

蓮華が問いを投げかけると、美奈は少し笑って、答えた。

「巫女は巫女なんだけどね、私の場合、通称妖霊の巫女っていうの。知らないかしら？ 私の実家は鳴咲市の西にある神社なんだ。」

「そういえば陽介がそんなこと言ってたかな。」  
卓の相槌に頷いて美奈は続けた。

「妖霊の巫女はね、本来、妖霊が表の世界に出入りするための媒介、世界のバランスを崩さないための存在だったの。けれど、最近ではその役目が失われ、表の世界に現れた妖霊の殲滅が主な活動になったわ。」

「それが、美奈が狙われる理由？」

真理の質問に、しばらく間を置いてから美奈は首を横に振った。

「半分正解、けど、残り半分が問題なの。妖霊の巫女っていうのは特殊な力を持っているの。そして、それは妖霊にも正の影響を及ぼす力……」

「つまり、あいつらはその力を欲しているから美奈を狙っているのか？」

「そう。そして、ついてないことに、私の力は一族の中でもとりわけ強大なものらしいの。つまり、私の力を取り込めば、それだけ妖霊も強くなれるってことね。」

出来るだけ明るく話そうとしていた美奈だったが、その表情はどこか寂しげで、やはり辛い現実を受け止めきれずにいた。

「でも、待って。なら、どうしてわざわざこんな危険な街に戻ってきたの？」

真理の問いに、美奈はきりつと眉間に眉を寄せて、答えた。

「実家が神社って言ったでしょ？ 妖霊が表の世界に来るための出入り口を発動させているのはウチの神社そのものが術式となっているからなの。」

三人が黙って聞いているのを確認して、美奈は淡々と続ける。

「けれど、先日実家からの連絡で、その術式が何らかの原因で壊されたということを知ったわ。」

「……すると、どうなる？」

卓の問いは美奈の表情をより一層険しくした。

「当然、出入り口をふさがれ、もともと表の世界へと来た妖霊は本来いるべき場所に戻れなくなるわ。もちろん、これだけなら、こちらの世界にきた妖霊を殲滅させればいいだけなんだけど、問題は他にあるのよ。しかも二つも。」

美奈は指を二本立てて、険しい表情のまま続けた。

「まず一つ目として、妖霊は他の生物と同様に生殖するということ。つまり、時間をかければかけるほど、数が増えていき、しかもその成長速度は人間の数百倍。つまり、一日経てば立派な成体として活動することになるの。」

卓たちの無言はリビングの空気をさらに重たくし、そして美奈の口から告げられた事実はその空気に同調すらしていた。

「そして、二つ目。正直こちらの方が問題……。珠の御神楽たまみかぐらって聞いたことないかしら？」

その質問に、蓮華がはつと声を漏らす。

「知ってる。確か、日本に伝わる伝説の妖怪、ううん、それすらも言い伝えなんだけど。その昔、日本の町をいくつも滅ぼしたとされる天災の象徴。けど、そんな天災も、ある一人の陰陽師おんみょうじの大規模術式によって封じられたとされる存在だったかな？」

蓮華の説明に満足げに頷く美奈。

「その伝説の天災よ。珠の御神楽。その陰陽師は私たちの一族の祖先。そして、その術式の書かれた書物は私たち椎名家が保管していたんだけど、それが、こちらの世界にきた妖霊によって持ちだされたみたいだね。」

「……!!!?????」

卓たちは驚き、とっさに美奈の表情を確認したが、美奈の顔からは汗が一滴流れ、その表情は真剣そのものだった。

「もちろん、そんな術を発動されたら、再び珠の御神楽は出現して、この鳴咲市は一夜にして滅びる……ただでさえ、この鳴咲市は妖霊や、それに類似した者を呼びよせる傾向がある、いわば世界の境

界線でもあるのに」

「止める方法は!？」

美奈の言葉を遮り、卓は身を乗り出した。

「一番確実なのは、書物を持った妖霊を倒すことかな。でも、そんなものの妖霊が持っているかも分からないし……雲を掴むような話ね。」

「じゃあ、手立てはないの？」

真理の質問に美奈は首を横に振り否定した。

「あるわ。けど、これは危険を伴う方法、内容は発動した術式を直接破壊するつてもものよ。」

「術式を直接破壊する？」

卓だけでなく、真理と蓮華も顔を見合わせて首を傾げていた。

「ええ、この術式、名は月下通行陣げっかつこうじんは発動するために陣内に無数の命を配置することが条件なの。そして、そのためには、陣を確立する範囲の東西南北に起点を発動させる必要があるのよ。」

「……つまり、その起点を攻撃して、術の発動そのものを封じることが？」

真理の言葉に美奈は口元を緩めて頷いた。

「でも、起点を一カ所だけ壊しても、残りの起点から陣を自発的に確率してしまうのが、この術の強みなの。それが今回は、牙を剥くことになるんだけど。」

「なら、四か所全ての起点を破壊する必要があると？」

卓が質問を投げかけると、美奈は神妙な面持ちで返した。

「そこで、お願いがあるの。私たちの一族、って言っても今では私を含めておばあちゃんと妹の三人しかいないの。でも私以外ではそんな起点を破壊するほどの力はない……けど、さっきの戦いを見て思ったの。卓たちなら、起点を破壊することができるんじゃないかって！」

美奈の必死に懇願するような顔を見て、卓たち三人はそれぞれ顔を見合わせ、表情を緩めた。

「だったら一緒に戦おうぜ。」

卓が笑顔で手を指し伸ばすと、美奈はそれに応じようとするも、手をピタリと止めた。

「……いいの？ 危険だってあるのよ？」

「たつくんは困ってる人を無碍に出来ない人なんだよ。」

蓮華の言葉に、真理も横でうんうんと強く頷いていた。

「こっやっで知り合ったのも何かの縁だろ？」

「……うん。」

美奈もついに笑顔になつて握手に応じた。

「ところで、術の発動する日とかは分かるの？」

真理が訊ねると、美奈は卓と手を離し、答えた。

「うん。術の名前からその理由は分かると思っただけど、満月の夜にしか発動できない術なの。だから、術の発動は恐らく次の満月、つまり二日後つてことになるわね。それと捕捉になるけど、術の起点は何を中心に発動するかによって場所が変わるから、術が発動してから向うしかないわ。」

「それで間に合うのか？」

卓に対して、美奈はふつと笑つて返答する。

「大丈夫、術は大規模になればなるほど、発動に時間がかかるの。月下通行陣なんかは規模も規模だから、最短でも発動に一時間以上はかかるはず。」

「なるほどな、つまりその間に術の起点まで行けばいいのか。」

納得するように頷く卓に美奈は近づき、満面の笑みを浮かべた。

「よろしくね、あなたたち頼りにしてるんだから！」

その時見せた美奈の笑顔は魅力的で、でもそれはアイドルだからではなく、一人のただの女子高生としての魅力だったというのに卓は気がついていた。

同日、東京にある討伐者総本部。

床に赤い高級感漂う絨毯が敷かれ、天井からはその光がまるで寶石のようにガラスを光らせるシャンデリアが吊るされ、その下に漆が光る木製の机とそれとセットになる肘掛付きの椅子がある。その椅子に顎鬚を長く生やした老人が座っていた。

この老人こそ、現討伐者総帥。名は明らかにされていない。そして、机越しに、座っている総帥と向き合っつて小鉄が立っていた。

「以上が夏休みまでの鳴咲市の活動内容です。」  
小鉄の報告を総帥は長い髭を優しく擦りながら聞いていた。

「ふむ、報告御苦労じゃったの。うむ、しかしあれじゃの。主は逐一わざわざ本部まで報告するなど律儀なところがあるの。」  
それに対して小鉄は爽やかな笑顔を浮かべ、返答する。

「ええ、それが僕のアイデンティティですから。それに、元々僕は東京に配置されていた討伐者ですから、今まではそこまで苦になつていませんでしたしね。まあ今回はいままでの癖、といったことです。」

「そおか。いや、別に悪いと言つたわけではないぞ？　むしろ主のそう言つたところは評価に値する。」

「光栄です。」

小鉄はその場で頭を下げた。

「ところで、三浦君。主はこれからも鳴咲市配属、ということではないのかね？」

総帥が、髭を撫でる手を止め、訊ねると、間を置くこともなく小鉄は頷いた。

「はい、これからは鳴咲市を中心に活動していきたいと思ひます。我がままを押し通してしまひすみません。」

「ほつほつほ。よいよい。主は討伐者の中でもとりわけ正確に任務を遂行してくれる優秀な人材じゃからな。それくらいの願ひは聞き入れてやらんのは罰あたりな気もするしの。」

「……恐れ入ります。あと、それと、鳴咲市に活動拠点を移すに

際しまして、直接報告に来ることも少なくなると思います。」

申し訳なさそうな表情の小鉄とは裏腹に総帥はどこか包容力のある笑顔を浮かべていた。

「主は周りに気を遣いすぎる傾向があるのじゃな。」

「そういう生き方しか知らないもので。」

小鉄の言葉に総帥は一瞬、目を見開くも、すぐに元の笑顔に戻った。

「それもまた、人の歩む道、ということかの。」

「かもしれませんね。では、僕はこの辺で失礼します。」

小鉄はそう言って総帥に一礼し、背を向けたが、その時総帥に呼びとめられた。

「三浦君、鳴咲市に行くのはよい。だが、例の件のことも考えてはいてくれるかな？」

「……………その件はすでにお断りしたはずですが？」

少しの沈黙の後、小鉄はそう言い捨てて再び歩き出すも、またしても総帥の言葉に足を止める。

「なぜじゃ？ 何か不満でもあるのかいの？ パートナーを取らずに活動する主にはうってつけじゃと思うのじゃが？」

「……………今回の戦いで、絆のない関係ほど無意味なものもない気がつきましたから。失礼します。」

一度も振り返ることなく、小鉄は今度こそその部屋を後にした。

（ふむ、ただの遂行なる従者かと思っていたのじゃが、少しは変わったのかの。）

部屋を出て行く小鉄の背中を総帥は髭を撫でながら見送った。

部屋を出ると、小鉄はシャンデリアが一定間隔で吊るされ、床は大理石で、シャンデリアの光を反射する廊下へと出た。

そして、そこでスーツ姿でその細い肢体を強調している、総帥直属の秘書である榎本冬音がいた。

「冬音さん……………」

小鉄はふいに足を止めると、冬音は柔らかく微笑み、口を開いた。



「よく、あの提案を断ってくれました。よろしければ場所を移しても?」

「はい。」

それから、小鉄と冬音は、しばらく廊下を歩き、ソファとガラス製のテーブルが設置され、その上に上品に並べられたクッキーがある談話室なる部屋へと場所を移した。

「どうぞ。」

冬音は、部屋の隅にある小さなキッチンで入れた紅茶をおしゃれなティーカップに入れて小鉄の前に差し出した。

「ありがとうございます。」

小鉄は座ったまま一礼した。それに対して冬音はにっこりほほ笑んだ。

「お砂糖とミルクはいかが?」

「あ、じゃあお砂糖を一ついただきます。」

「はい、どうぞ。」

冬音はガラスの容器に入った角砂糖を一つ、トングでつまんでぽちちんと小鉄の紅茶に落した。

冬音も自分の紅茶にミルクを少量入れて、かき混ぜると席に座った。

「ごめんなさいね、お引き留めしてしまって。」

「いえ、僕もこうやって冬音さんとゆっくりお話出来る機会が出来て良かったです。」

「うふ、嬉しいこと言ってくれるわね。」

冬音は少し頬を赤らめて上品に笑った。普段、総帥といるときの冬音は気難しい顔しかしないので、こういった風に笑うことは少ないのだが、その笑顔は魅力的という言葉で表現するにはこと足りなかった。

「私ね、あなたのことは信頼できる人だと思ってるのよ。」

冬音はティーカップに入った紅茶に映る自分の顔をしみじみと見ながら言った。

「……あの、何かあったんですか？」

小鉄の問いかけに冬音は静かに首を横に振った。

「心配の種はさつきあなたが払ってくれたわ。」

「……というと、あの件ですか？」

今度は縦に首を振る冬音。そして、一口紅茶を飲んでから続けた。

「正直、あなたなら総帥の提案を受け入れて『頂いたき』に加わると思

っていましたの。」

「……いえ、僕自身一度は加わることを考えていました。」

「ならなぜ？」

小鉄の予想外の返答に冬音は顔を上げ、質問を投げかけた。

「今回、城根卓と、謙介さんの妹さんを見て思いました。絆の力

と、自分の頑なな意思を持つという意味を。」

「……そう。」

冬音はその答えにふっとほほ笑んだ。

「だからこそ、『頂』の件は蹴ることにしたんです。これからは自分の意思で動いて行きたいと思えますので。」

「私はそれでいいと思うわ。いえ、それでなくてはあなたは一生、

総帥の思いのままに動く、ただの人形かじになってしまふもの。」

冬音はそう言ってクツキーを一口齧る。

「人形ですか……その通りだと思います。」

小鉄もどこかおかしげに笑って、紅茶を一口口に含んだ。

「もしかして、気に触ってしまいましたか？」

小鉄の反応に少し不安げな表情を浮かべる冬音に対して、小鉄はにつこりほほ笑んだ。

「いえ、自分でもそう思っていましたから。ただ、人と自分とで結局自分に対する印象が一緒だということは思いのほか愉快なものだと感じまして。」

「でも、今は違います。あなたはそう思いませんか？」

冬音が少し首を傾げ訊ねる。それに小鉄はふっと口元を緩めて答えた。

「ええ、少しは変わったと思います。少なくとも操り人形から脱却は出来たのではないかと。」

そこで、冬音は頷くと、静かに手に持ったティーカップをテーブルに置いた。

「……さて、ここで少し朗報、とは言い難い報告をあなたの耳に入れておきたいのです。」

冬音が妙に険しい顔つきになると、小鉄もティーカップをテーブルに置いて向き直った。

「はい。お聞かせ願います。」

冬音はすつと息を吸うと、ゆっくりと重たい口を開いた。

「さつき話に出た『頂』が近々行動を起こす、といった様子が確認されたのです。いえ、もしかしたら既に……」

「……それで、目的は？」

小鉄の質問に、冬音は苦い表情で首を横に振る。

「残念ながら私には分かりかねます。一応、総帥にも聞いたのですが、はぐらかされるばかりで。」

「総帥も絡んでいると？」

これにも冬音は首を横に振る。

「おそらくは関与はしていませんでしょうね。多少、内容は知っているまでも所詮はそこまでです。」

冬音は気難しい表情で残りのクッキーを食べた。

「『頂』ですか……。厄介な連中が動きだしたものですな。同じ討伐者と言っても、どうにも仲間意識が生まれにくいです。」

小鉄の言葉に冬音も頷いて賛同した。

「ええ。彼らの存在の在り方とうのも先代とは大きく異なって、今では宗教じみたほどに九鬼に対する崇拜グループと化してますますか  
らね。」

冬音は、はあっとため息をついて、再びティーカップに手をかけた。

「崇拜グループ、ですか。しかし、それについてあの《絶対強者

《の二つ名を持つ九鬼さんはどうおっしゃっているのですか？》

「それが、特に何も言っていないらしいのよ。今まで幾人もの同業者がパートナー申請するたびに殺されているというのに。」

冬音はどこか重々しい口調で言うと、紅茶に角砂糖を一つ落とし、ティースプーンでかき混ぜた。

「……ところで、絶対強者は今どちらへ？ ついこの間まで、こちらに來ていると聞いていたのですが。」

「先日、出て行ったわ。行き先までは分からないけれど、何かをやらかすつもりなのは雰囲気でなんとなく。」

「何か、とは？ 皆目見当もつかないのですか？」

「いいえ、明確なことは分からないけれど、恐らくは見つけた、もしくは手掛かりを手に入れた、と言ったところでしょう。」

冬音の言葉に、小鉄は眉をピクリと動かし

「まさか……。本当に存在するのですか？」

「存在するのは確かよ。だからこそ、問題なの。九鬼が誰よりも早く見つけてしまったことが。……もしかしたらこれから」

冬音の声が震えたのに気がついた小鉄はしかし、起こりうる事実を口にした。

「討伐者が全滅、という危険性も考慮しなくてはいいけませんね。」

「ええ。……私もまた、討伐者として戦うときが来るのかしら。」  
冬音はそう言っ

てスーツの内ポケットからひび割れた紅の贈与の石を取り出し、どこか寂しげにそれを見た。

「それをさせないためにも、僕たち現役が頑張りますよ。」

「……そうね。」

その小鉄の言葉に、冬音はにっこりほほ笑んだ。

「では、僕はこれから鳴咲市に戻ります。『頂』の件は注意します。」

「ええ。お付き合いありがとう。」

「いえ、充実したひと時でした。」

小鉄は立ち上がり、一礼すると、部屋を後にした。

## 偶像と巫女（後書き）

「約束の蒼紅石」第9話、そして新章いかがでしたでしょうか？  
新年早々にこの作品を読んでいただけた方に少しでも楽しいと思っ  
ていただけただのなら幸いです。

さて、この章から新ヒロイン？の美奈も登場し、ますます物語に厚  
みが出てきたと思います！

というわけで、今年もどうかこの作品をよろしくお願いします！（  
笑）

## 術式・七星（前書き）

こんばんは！ 夢宝<sup>むほう</sup>です！ 正月も終わり、皆様も、新年からの新学期やら、仕事やらが始まったころだと思えます。作者も新学期が始まり、完全防具でも寒い中、震えながら登校する日々が始まりました（笑）

朝も、寒さのせいか、なかなか布団から出られない時期ですよ。本当は、1日中布団にくるまっていたいのですが、そういうわけにもいかないのが現実の厳しさってやつなんですかね？（笑）

というわけで、現実のシビアさから一旦身を引いて、この作品を読んでみてください！（宣伝第2段w）

それでは、「約束の蒼紅石」第10話お楽しみください！！！！

## 術式・七星

少し時間は巻き戻り、九月一日の昼時。

鳴咲市の最西にある神社のとある一室に、囲炉裏を挟んで、老婆と青年が向いあつて座つていた。

その部屋は、昼間なのに太陽の光が入らないせい、薄暗く、かといつて電気も囲炉裏もつけずにいた。

老婆は白髪で、使い込んだせいか、色がくすんだ巫女服に身を包み、座布団の上に正座していた。その反対の青年は青髪で、目にかかるくらいの長さの髪。格好はジーパンに薄手の長袖の黒のシャツ、そして、首からは鬮體とくろくに剣が刺さつた不気味な首飾りがその存在を主張していた。

「なら、術式の発動は二日後の夜、つまり満月の夜つてことでいいんだね？」

青髪の青年は目を細め、にっこり笑いながら老婆に確認を取つた。

「……分からんな。主は何奴なのじゃ？ 我らの一族とは関係の無い主がなぜ私に協力なぞする？ 目的はなんじゃ？ 金か？」

老婆はどこか警戒するように、青年を一瞥した。

それに対して青年は

「ぶつ、あはははははははははは！」

大声を上げて笑つた。そして一しきり笑つとふうつと息を整え、ほほ笑んだまま口を開いた。

「目的い？ そんなものはないよ。まあ強いて言うなら、一晩で街一つが消滅するという最高のパフォーマンスが見たいっていう野次馬根性かな？」

「……………」  
青年の返答が気に食わなかつたのか、老婆はまだ青年を睨みつけていた。

それを見た青年は笑顔のまま肩をすくめ、そして立ち上がり再び

口を開く。

「婆さんさ、学校で虐められている人がいて、そして苛めっ子がいる。けど、そこにはどうしても傍観者が存在するだろ？ なぜ、傍観者は傍観者であり続けることを選ぶと思う？ 苛めに介入して、当事者になることは選ばうとしない。なぜかな？」

青年が問いを投げかけても、老婆は無言を決め込んだため、青年はまたしても勝手に続けた。

「一つの理由としては、介入することで自分が苛められるんじゃないかと危険を悟るから。」

青年はピツと人差し指を立てて見せた。

「けど、この理由は二の次なんだよね。一番の理由は何だと思う？」

「……知らんな。」

すると、青年は目を見開き、そしてにたーっと口元を緩め答えた。

「楽しいからだよ！ 人が苛められ、嘆き苦しむところを見るのが楽しいからさ！ 楽しいことをわざわざ自分から止めに行く人間なんていないからね！ もしそんな奴がいたらそいつは馬鹿だよ！」

青年は大きく両手を広げ、天を仰ぐように言い放った。そして、興奮気味となった青年は肩で呼吸をしていて、それを整え、老婆に向き合った。しかし、表情は笑顔のままだった。

「つまり、俺は楽しいから、街が消滅して、人々が嘆き苦しむところを見たいから協力するだけだよ。だから報酬もいらぬ。まあ言うなら、最高にえぐいショーを見せてくれればそれ以上の報酬は無いよ。」

「……本当にそれだけか？」

老婆は再度確認をとるように訊ねた。それに対して青年は軽い口調で返す。

「全く疑り深いババア、あつ間違った。婆さんだなく。だから本当だって。苛めだつて傍観者でいるだけで、それで報酬なんてない



だろ？ 同じさ。俺はサディストなんでね。苛めじゃ物足りないから、大量殺戮を見せてくれるなら何だって協力するさ！」

そんなことを平然に、いや、楽しげに言つてのける青年に、老婆の背筋に悪寒が走った。

「分かった……主のその言葉を信じ、素直に協力を仰ぐことにするかの。」

「いつになつても素直な人つてのはいいものだね。」

青年は笑顔で老婆に頷いた。老婆はそんな青年から目を背けた。

「ふん！ 年よりをからかつとるんじゃないぞ。ところで、月下通行陣の術の発動には4方に起点を設置する必要がある。……じゃが、私は見ての通りこの老体」

「大丈夫。事前の準備は俺が全部やつておくから。婆さんは安心して術を発動させることだけに専念してよ。しかし、あれだよ。婆さんもその年でよくもまあこんな馬鹿げた、いや、思いきつたことを考えたよね。」

「……」

老婆が無言で青年を睨みつけると、青年は気を良くしたのか、さらに弾んだ声で続けた。

「だって、伝説上の生物である珠の御神楽を召喚して、街一つを消し去ろうなんてね。それこそ、目的はなんだい？ この街に恨みでも？」

「外部の人間にそんなことを言うこともあるまい？ それに主はそんなことを望んではいないのじゃろ？」

老婆の反論に、青年は一瞬驚いたように口をぽかんと開けていたが、すぐに笑顔に戻ると、くすりと笑った。

「そうだったね。どうでもいいや、そんなこと。言つてしまえば珠の御神楽なんてものにも興味はないね。俺が興味あるのはただ一つ、どれだけの血を流して、どれだけえぐい殺し方でこの街を破壊するのかってことだけ。正直、ここ数日、あんたに頼んで、妖霊で幾人かの人間を殺してもらったけど、あれじゃまだえぐさが足りない

いよ。今時バラバラ死体なんてドッキリにしてもちやぢぢやない？」  
「すまんの。私にはあれ以上のあんたが望む殺し方なぞ心得ておらんわ。」

そんな老婆の言葉に、青年は嬉々とした様子で口を開いた。

「でも、珠の御神楽って代物ならもつとえぐい殺し方をしてくれ  
るんだろ？ うわゝ楽しみ〜！！ どんな殺し方だろお？ まず眼  
球をえぐって、その場で握りつぶすのかなあ？ その後は腹を引き  
裂いて、内臓を一つ一つ引きずりだして、ベチャリベチャリと踏み  
つぶして行くのかなあ！？ うはあ！ 最高だね！！ いや、でも  
その程度、俺でも出来るな。珠の御神楽さんにはもつと未知の興  
奮を味わせていただきたいものだ。」

青年は、目の前に御馳走が並ぶかのように、舌舐めずりした。

「主の常がそれなのか？ 異常じゃな……」

老婆の言葉に、青年は不気味なほどにたくと笑った。

「婆さんがそれを言う？ あんたもなかなか異常なんじゃない  
かな？ 俺でも街一つをぶっ潰したことなんてないんだから。」

「主の単なる狂気と一緒にするでない！ 私には理由があるのじ  
や。それに私には罪の意識もある。」

老婆に、青年はまたしても驚くように目を見開き、高らかに笑っ  
た。

「罪の意識い？ なんだそれ？ アメリカンジョークにしては面  
白すぎるぜ婆さん！」

「なっ！」

あまりに予想外の反応に、老婆はたじろいだ。

「罪ってなんだい？ 俺にはそもそも、そんな言葉が存在するこ  
とさえ不思議でしょうがないね！ 正義と悪だつてそうさ！ な  
んだい正義って？ 悪い奴を倒すこと？ 弱い者を守ること？ く  
はあ！ 面白い！ そんな言葉を生み出した奴にぜひ会ってみたい  
ものだね！！ 正義と悪の定義なんて誰が決めたのさ！？」

青年が老婆に顔を近づけ訊ねると、老婆は青年を睨みつけた。そ

れに青年はぷぷつと笑って勢いに乗って続けた。

「そんなつまらない定義を作ったのは人間さ！ 未完成な人間が作った茶番も茶番なくそつたれな定義なんだよ！ だってそうだから！？ 未完成なものが作ったものなんて未完成に決まってるんだから！ そんな未完成な定義で判断してるんじゃないやねえよって話さ！ 大体、今、正義の名の元にとか言って死刑で人を殺してるじゃねえか！ なのに？ 一般人が人を殺したら殺人罪！？ その境界線は何だ？ ただ人を殺したことを正当化しているだけじゃねえか！ やってることは人殺しでおなじなんだぜ？ それで、正義だの悪だのと言ってるなんてなんとも滑稽だなあ！ そんな定義をすることすら無駄なんだぜ！？ …… そうだなあ、一つ罪があるとすれば、それは人間が未完成だってことだろうよ！」

興奮の絶頂に達した青年の呼吸は乱れ、そんな様子を老婆は恐ろしくさえ感じていた。

「……主は、本当に人間か？」

老婆の問いに、青年は一瞬ピタリと動きを止め、そしてはつきり返答した。

「ああ、人間さ。未完成で愚かな人間だよ。」

その答えに老婆は何も言い返すことは出来なかった。なぜなら、その時の青年の瞳に見えたものは狂気でも、疑惑の念でもなく、ただただ、純粹無垢な少年のようなものしかなかったからだ。

無垢、それは一見して白く清らかなイメージがあるが、それは裏を返せば何にも干渉しない、つまり何も思わないということにもなる。

例えば、何も知らない赤ちゃんの手にトンボを渡してやるとする。何も知らない赤ちゃんは、そのトンボを掴み、そしておもちゃのようにつまみ張ったりして遊ぶだろう。結果、トンボの羽はその胴体から引きちぎられ、空も飛べないトンボは餌を捕ることも出来ずに飢えて死ぬ

物心ついた者から見ればこれは残酷なことだが、赤ちゃんにとつ

ては何のことは無い、ただの遊び。いや、それすらも分からないのかもしれない。故に無垢。

何にも染まらないというのは時に残酷そのものとなることを老婆はこのとき、この瞬間思い知ることとなった。

「さて、今日は新学期初日だったね。なら、もつそろそろお孫さんたちも帰ってくるんでしょ？ 俺はここらでお暇いとまさせてもらうとするよ。」

「……ああ。」

老婆が立ちあがるうとするのを青年は両手で制した。

「いいよ、気を使わなくても。老人はおとなしくしてなきゃ。それに、ぶつちゃけ迷惑だし？」

そんなことをにっこりと悪意のないような笑顔で言うものだから、老婆も何も言えずに座布団の上に座りこむしかなかった。

神社の境内に出た青年は、街を明るく照らす太陽を手で日陰を作りながら見上げた。

「いい天気だ。うっとりしちゃうよね、こんな綺麗な太陽がもうじき血なまぐさい街を皮肉なまでに輝かせるんだから。」

誰に言うでもなく、軽快な口調でそう言うと神社を後にした。

翌日の九月二日。この日も蒸し暑さが鳴咲市を包んでいた。しかし、まだ生ぬるいなりに風が吹いている分、幾分かましではある。そんな日の放課後、聖徳高校は新学期二日目から通常授業となっているため、時刻はすでに午後4時を回っていた。

卓、真理、蓮華の3人は、鳴咲市の中心街にある街のシンボルである巨大な熊のオブジェの前にいた。

シンボルが熊というのは、まだ鳴咲市が山に囲まれていた時代、外的から熊が守ってくれたというのが理由になっている。

ところで、なぜこんなところに3人がいるのかと言えば、放課後にこの場所で美奈と待ち合わせをしていたからだ。

「美奈、遅いな」

卓はケータイで時間を確認して呟いた。

「お嬢様学校なんでしょ？ 光陵学園って。やっぱり時間割とか厳しいのかな？」

真理が蓮華に訊ねると、蓮華は顔に人差し指を当て、考えるような素振りを見せて答えた。

「聞いた話だとそんなこともないみたいだったけど。あ、でも新学期始まったばかりだから、何かと決めることとか多いのかも。」  
「そんな会話をしていると、向こうからセーラー服の少女が手を振って駆け寄ってきた。」

赤いショートヘアを少しゆさゆさと揺らしながら、ピンクの制服に身を包む彼女は紛れもない椎名美奈だった。

「遅くなつてごめん！ 委員会を決めるのに手間取っちゃってて。」

卓たちの元まで駆け寄ってきた美奈は上がった息を整えながら、走ったときに乱れた制服を手直した。

「気にすんなつて。それより、委員会を決めるのにそんなに時間かかるものなのか？」

卓の疑問を真理と蓮華も思っていたらしく、興味津津の様子で美奈の答えを待っていた。

「うん、ウチの学校、委員会の数が多くて、特にブレンヂィ委員会つてのが人気あつて、殺到しちゃつてね。」

美奈は参るわよねーといったように笑いながら答えた。それに対して、卓たち3人はぽかーんと口を開けていた。

当然、理由は言うまでもなく分かると思うが、一応言っておくとすれば、美奈の口からブレンヂィ委員会という、高校にというか、教育機関に似つかわしくない、なんとも上品な響きの名前が出てきたことだ。

そもそも、カタカナで書かれる委員会なんて、あつてもレクリエーション委員会くらいしかぱっと思いつかない。それなのに、ブレ

ンデイ委員会なんて、その実態が曖昧にもほどがありそんな委員会の名前なんて出されても、無論まともな反応など返せるわけもなかった。

「えつと、美奈？ 日本語訳をお願いしても……？」

卓がおずおずと口を開くと、美奈は下唇に人差し指を当て、うんと、というように考え込む仕草を見せた後、首をちょこんと傾げて、

「おもてなし委員会？」

と、疑問形で返す。それに対して、当然卓たちも頭の上に大量の疑問符を浮かべる。

そんな様子を感じ取った美奈はすぐに補足説明を加えた。

「えつと、ブレンディ委員会っていうのはね、ウチの学校は朝のホームルームと帰りのホームルームにそれぞれ20分の紅茶を飲む時間があつて、その紅茶を準備する委員会なんだ。でもなんで人気がつていうと、その委員会に入ると、毎日どっかの有名な茶菓子を多めにもらえるんだって！ だから、みんな争奪戦に参加しちゃつて。」

軽い口調で比較的丁寧な説明を加えたものの、その実態が分かったところで、それが卓たちの知る高校というものを遥かに凌駕りよつがしているという事実になんの変化もなく、結果、卓たちの反応はただ口をぽかんと開けているままになるわけだが、それでもなんとか口を開いて、3人の言葉が重なった。

「……はい？」

美奈の学校の、通常ではありえないいろいろな掟破りな話をしながら、卓たち一行は、本日の目的である美奈の家、つまり神社へと向かっていった。

鳴咲市の最西にある美奈の実家である神社だが、そこら一帯は未だに昔の名残で、山があり、美奈の実家は山奥とはいかないまでも、周りに店や民間住宅なんてものは存在せず、完全に孤立して建つて

いる。

これはつまり、近くまでは鳴咲市全域を循環じゅんかんしている地域バスも通っていないということを示しており、山のふもとにあるバス停で降りた卓たちはそこから神社を目指すことになった。

卓たちは、山の入り口はそこそこ舗装されているも、少し奥に進むと、木の丸太が地面に埋め込まれ、せいぜい足の引っかけ場が滑り止めにしか役割を果たさない山道を歩いていた。

「まさかアイドルがこんな山の中に住んでるなんてな」

山道を歩くながらふいに呟いた卓のその一言に、先頭を歩いていた美奈はぶおつと振り返り、口調を荒げた。

「なっ！ 馬鹿にする気！？ 悪かったわねこんな山の中で！」  
急に怒りだした美奈に、卓はびくつと身を震わせたじろいだが、すぐに立て直し、

「いや、悪いなんて思っただけよ？ いいじゃん、自然の中に住むアイドルつてのも。なんかオシャレだと思っただけ。」  
にこりと笑って返す。

美奈は不意を突かれたようで、ぼわつという音が聞こえてきそうなほどの勢いで赤面した。

「なあっ！ ちよっ！ ……分かればいいわよ。」

最初は動揺していた美奈も次第に声が小さくなり、人差し指同士をくつつけてもじもじしだした。

それに対して卓はどうした？という感じで首を傾げていたが、蓮華は隣で苦笑いを、真理はじとーとした視線で卓を見ていた。

「卓、それわざとやってるの？」

不服そうな表情の真理がそんなことを訊ねると、卓は何が？といった顔で首を傾げたものだから、真理ははあつとため息をついて、

「まあ、それが卓のいいところでもあるんだけどね……」  
と苦笑い。

そんな調子で、足元が若干不安定な山道を歩いて行くと、美奈が足を止めて、卓たちに振り返った。

「ここよ。」

美奈の後ろには少し離れた所から見れば壁なのではないかと思うほど、急な斜面に設置された石の階段があった。

それまで、舗装されていない道が続いていたので、そのあまりにも人工的に造られた階段は違和感を覚えさせた。

「結構長い階段……」

その壁のような階段を見て、蓮華はほえーと感嘆の声を漏らした。「うん。でも、これはこれで運動になって良いわよ?」

美奈は一定のリズムで準備運動のように身体を捻る。

「確かに、これなら必然的に下半身の鍛錬になりそうね。」

真理は階段をどこか楽しげに見上げ、その場で地団駄するように足を上げ下げした。

「競争する?」

真理の様子を見て、美奈は妖艶な笑みを浮かべ、それに対し真理もにやりと笑う。

「「よーい、どん!」」

二人は同時に駆けだし、勢いよく階段を駆け上げって行った。

「……すごいね」

蓮華はあれよあれよと姿が小さくなっていく二人を見て卓にはほ笑んだ。

「俺達はゆっくり行こうか。」

後を追うように、卓と蓮華もゆったりとした速度で階段を登り切った。

卓と蓮華が階段を上る終わると、そこには多少息があがっているものの、まだまだ余裕の表情を浮かべた真理と美奈が待ちわびていた。

「遅いよ卓!」

「本当よ!」

見事なまでに意気投合した真理と美奈に卓は乾いた笑いを見せた。そして、前を見ると、すぐ目前に縦5メートル、幅7メートルほど



の巨大な鳥居が聳え立っていて、鳥居からは石畳の道が20メートルほど伸びている。道の脇には一面に白いビー玉ほどの大きさの石が敷き詰められていて、太陽の光を浴びたその石は反射してふんわり柔らかな光を放出していた。

最後に、石畳の道の先には年季の入った木製の神社が、その姿を堂々とさらけ出していた。神社自体もかなり大きく、その広い敷地にふさわしいと言えるものだった。

卓たちは、美奈に率いられて石畳の道を歩き、神社の正面から、ではなく横に回ったところにある玄関から入った。

しかし、玄関は洋式のがつちりしたドアで、鍵穴もなぜか3つもあるという、神社に似つかわしくないものだった。しかし、これは考えれば必然的なことで、今やトップアイドルとなった美奈の実家ともなれば、当然ファンの人が押し掛けてくることもしばしば起こりうるし、それを狙った盗人だつていても不思議はない。そんな今の物騒な時代に、神社に似合うからといって、鍵穴があつてもなくても、外すだけでいとも簡単に入れてしまふ引き戸しておくほうが愚かしいことである。

「おじやましませーす」

卓たちは、比較的広い玄関で順に靴を脱いで家が上がった。

玄関から続く廊下の両側面には全部で5つの部屋があり、向って右手に3つ、左手に2つとなっていた。そして、正面にもドアが一つ。廊下の横には2階に続く階段もあつた。

「あまり綺麗じゃないかもだけど、どうぞ。」

そう言つて美奈が部屋に案内しようとする、左手の手前にあるドアが開き、そこから一人の少女が出てきた。

少女は美奈より数センチほど身長が低く、つまり約153センチほどで、髪は栗色のセミロング、前髪の片方をハートのピンで留めている。さらには、美奈に負けず劣らずの美貌の持ち主で、胸の大きさは別としてスタイルも申し分なかった。

少女はどうやら、制服らしく、白手のワイシャツに、ブルーとブ

ラックのチェック柄のスカートの上にエプロンを身につけていた。

「あ、恵美……。もう帰ってたんだ。」

「はい。ところで、その方たちはお客さんですか？ 美奈さん。」

「……?」「……」

この短い会話でも、卓たちはある疑問が浮かんだ。それはこの二人の関係性が見えなかったから。

「うん」

美奈が頷くと、少女はでは、お茶の用意を、と言って出てきた部屋へと戻って行った。

このところから見ると、その部屋はどうやら台所らしい。

「あ、じゃあ卓たちは悪いんだけど、右手の一番奥の部屋で待ってて。すぐにお茶を運ぶから！」

美奈も少女の後を追うように台所に入って行ってしまったため、廊下に取り残された卓たちは言われた通り、右手の一番奥の部屋に入った。

卓たちがそのドアを開けると、そこにはよく整理された綺麗な部屋があった。

しかし、その部屋は和洋混同で、床は畳になっているが、その端は、可愛らしい熊の絵がプリントされた絨毯の上に白いデスクとキヤスター付きの椅子が置かれ、デスクの横には木製の本棚が置かれ、そこには教科書や漫画などが敷き詰められていた。反対側には今度は無地の黄色い絨毯の上にベッドが置かれていた。

さすがに備え付けの襖はそのままだようで、それだけがその部屋に見れる唯一と言ってもいい和の部分だった。

「さすがアイドル、綺麗にしてあるわね。」

真理は部屋の真ん中にべたつと座りこんだ。

「おい、真理。少しは遠慮とかしろよ。」

すかさず口を挟む卓に、真理はむっとした表情を向ける。

そんなことをしていると、空いたままのドアから、お盆にお茶の入った茶碗を4つ乗せて持ってきた美奈が現れた。

「あ、いいよいいよ。遠慮なく座って。ベッドの上でもいいから。」

「えっ！？ ベッド……」

美奈の一言に本能的にベッドを見る卓。卓の視界には、しっかりとベッドメイキングされてあるベッドが飛び込んできて、ピンクの可愛らしい掛け布団と、それにセットになっているだろうベッドカバーと枕。そして、枕の横には顔のサイズほどのウサギのぬいぐるみが添えられていた。

「ちよつと、変な目で見ないですよ？ ベッドに座っていいのは真理ちゃんと蓮華ちゃんだけよ？」

美奈はデスクにお盆を置きながら卓に釘を刺すように言い放った。「ばっ！ 見てねーよ！！ そ、それよりさっきの子って……」話を反らすために言ったその一言に、美奈は眉をピクツと動かした。そして、その後、部屋に数秒間の沈黙が訪れた。

「……？」

卓は首を傾げ、真理と蓮華と顔を見合わせるも、二人とも困惑しているようだった。そんな気まずい沈黙を、美奈の言葉が打ち破る。

「あの子は、妹よ。」

はつきりとした口調で、でもどこか重々しい感じすら受け取れた。その時の美奈の表情は笑顔を作ってはいたが、それでも引きつっていた。

「妹って、でも美奈のこと……」

真理は訊ねた。気になることは卓と蓮華も同じだった。そう、さつき廊下で、彼女、つまり美奈の妹である椎名しいなえみ恵美が姉である美奈をさん付けで呼んだという一点。他人や、友達ならむしろ自然と言ってもいいその呼び方だが、家族間でのその呼び方というのはとてもないほどに不自然そのものだった。

「……昔はね、ちゃんとお姉ちゃんって呼んでくれてたんだよ？

でも、私がアイドルになってからは美奈さんって……。変よね、実の姉妹なのに。」

あははと笑う美奈だったが、その声は少し震えていて、そんなことは美奈を含め、その場にいた全員が感じていたことだった。

けれど、そんなことを指摘するものはおらず、ただ、少しの沈黙の後に、卓がふつと美奈の頭に手を乗せた。

「俺達は美奈って呼ばせてもらうけどな！」

卓がにゅと笑いかけると、後ろで真理と蓮華も頷いていた。

それに美奈は感極まったように瞳を潤ませたが、耐えて、卓の手を振り払うと、強がったように腕を組み、

「ふん！ 今さらそんなこと言わなくても分かってるわよ！」

と声を張り上げた。

それから、卓たちは出された冷たいお茶で、暑い中歩いてきた、（と言つても、山道は街中に比べると日陰も多いせいかいくらか涼しいのだが）せいで乾いた喉を潤すと、少し真剣な顔つきになった。

今日、美奈の家に来たのは、たまたま知り合いになった少女が今をときめくトップアイドルで、お近づきのしるしとしてアイドルの家にお邪魔し、あわよくばいつでも遊びに行ったり、逆に遊びに来たりという仲になる、というわけではもちろん無くて、明日の夜に発動されるであろう巨大術式、月下通行陣げっかつこうじんを止めるべくして立ち上がった4人のいわば作戦会議なのである。

ちなみに、なぜ美奈の家かと言えば、2階は書庫となっていて、そこには妖霊に関する書物や、探せばもしかすると月下通行陣げっかつこうじんに関する情報も手に入れることができるのではないかという話になり、結果的に美奈の家で作戦会議を行うわけになったのだ。

ところで、結局、座る位置は真理と蓮華がベッドの上、美奈が向いのキャスター付きの椅子に、床に用意されたクッションに卓といった風に位置取りされた。

「昨日、あれから考えたんだけど、その術式ってやっぱり月の何かを必要とするものなの？」

不意に質問を投げかける真理に対して、美奈はそれほど動じた様子もなく、こくりと頷いた。

月下通行陣げっかつこうじんという巨大術式は、その発動条件の一つとして、満月の夜でなくてはならないというのがある。つまり、その条件のおかげで、発動日時が、明日の夜だということが分かったのだが。

「月下通行陣げっかつこうじんはね、あまりに巨大すぎる術式から、術者の力だけじゃ発動することさえ出来ないの。そして、術の発動に必要な力の性質は闇を照らす光源。そもそも、この性質を持つ術者が少ない上に、術者が何千人と集まったところで、たかが知れてるわ。そこで月が放つ光の力を術の発動に必要な力として使うってわけ。」

美奈の淡々とした説明に頷いた真理は、さらに問いを投げかけた。

「じゃあ、4つの起点っていうのは？」

「起点、っていうのは、この術の発動に必要な力のバランスを整えるものっていうのが一番簡単かしらね。なにせ、規模が規模だから、起点でもないし、術の陣すらまともに造ることさえ困難なものなの。まあ私もその起点がどんなものなのか、まではさすがに知らないけど。というか、そもそも月下通行陣げっかつこうじんについて書かれた書物なんて一度も見たことないわ。話に聞いたくらいのものよ。」

「そんなんで、大丈夫かよ？」

卓がお茶を飲みながら訊ねると、美奈はちよつと待ってて、と言い残し、部屋を出て行った。すると、玄関の方から、ドタドタと階段を駆け上る音が聞こえてきた。と思ったたら、すぐに今度は駆け下る音が聞こえ、美奈は部屋に戻ってきた。

手には何冊か高積みされた古臭く、ページも湿気を吸い込みしなっているような書物をドサツと床に置いた。

「まあ、卓ならそんなこと言うと思ったから、昨日の夜のうちに参考になりそうな書物をピックアップしておいたの。」

ふふんと得意げに胸を張る美奈。

「アイドルって柔軟体操とかもやらなくちゃいけないんだろ？」

忙しいのにそんなことまでやってくれたのか！ ありがとうな！」

卓が素直に褒めるものだから、

「ほへっ？ ちょ！ 何よ急に素直になっちゃって……」

案の定、美奈は動揺を露わにしたが、その表情はどこか嬉しげだった。

「卓、いちいち話の腰を折らないでくれる？」

美奈とのやりとりをすこし不機嫌そうに見ていた真理がこほんとか払いをしながら言った。

「え？ 俺、なんかやった？」

卓の問いに、真理は無言でスルーして、パラパラと書物を捲り始めた。仕方ないので、卓も積み上げられていた一冊を手にして、ページを捲る。

しかし、そこには、筆記体のようにつなげ文字で綴られた文字が書き連ねられ、正直、日本語であるはずなのに全然解読することが出来なかった。最低限、所々に描かれた墨絵を見て、これが妖怪、もしくは妖霊について書かれているものだけということだけ判断することができた。

しかし、そんな書物ですら、真理はテンポよくページを捲り、そして、なるほど、などと相槌を打ちながら解読していく。偏差値78は伊達ではないのだと改めて痛感する卓だった。

「ねえ美奈、これって……」

真理はふとページを捲る手を止めて、その見開きを美奈に見せた。そこには、左のページには墨絵で、老婆だろうか、子供のようにも見える、とりあえず人の形をした絵が描かれていて、右のページにはずらりと墨で書かれた文字がびっしりと書き込まれていた。

「これって魑魅魍魎ちみもつりようよね？ ここには妖霊ちみもつりようって書かれてるけど？」

真理の問いに美奈は頷いて、答えた。

「うん、魑魅魍魎ちみもつりようをはじめとして、いくつかの、世間一般では妖怪と称される部類には本来は妖霊であるという事例は結構あるの。まあ妖霊なんて言葉は普通聞かないだろうし、妖怪と妖霊の違いなんてのも、正直、その境界線は人それぞれだからね。普通の人なら、両方を合わせて妖怪という一つのカテゴリーに入れちゃうのも分かるんだけど。」

美奈の答えに納得したような表情を浮かべる真理。

そんな真理の横では、同じく積み上げられた書物を読む蓮華がいる。真理に比べたら読む速度は大分遅いが、それでも少しずつ、確実にそれを読み解いていく。それでも分からないところは、その都度真理に訊ねたりもする。

「ねえ美奈ちゃん、この本はどうやら記録帳みたいなものらしいんだけど、ここ、これって月下通行陣のことじゃないかしら？」

「ふつと頑張つて書物を解読していた蓮華はすつと開いていたページを差し出し、人差し指で示した。

「どれどれ？」

それに、美奈だけではなく、真理と卓も顔を覗かせた。

今度は、挿絵すらなく、見開きいっぱい読みにくい筆記体が綴られていたが、それを真理が音読する。

「我らが村に、突如現れし四方の光にて、我らはそれを導き手の象徴と崇められたし。我らは村中の穀物を、その光の集まりし源の光に壇上させるれど、光、我らに恩恵を与えられん。しからば、我らは穀物を撤退させんとするその時、四方の導き手の光、激しさを増さんとするを目視するも、我盲目となりて。我、意を気付くも、八方から伝わりくる熱き火の山にて、我らの村の終焉とす。」

よく見ると、そのページの端の部分は酸化した血で黒ずんでおり、この記録帳を書いた本人も通常の状態ではないことが見て取れた。

「確かに、この記録帳に書かれていることと、月下通行陣の陣形は全くと違っていいほど瓜二つね。でも、そうだとして、これじゃ珠の御神楽についての記録が残っていないことになるんだけど……」

美奈がふいに漏らす疑問に卓も乗った。

「不自然じゃないか？ だって珠の御神楽は幾つもの村を破滅させてきたつていう伝説があるんだろ？ それが事実だとして、そんな記録が残っているのに、何でその場に居合わせた人間がこんなあやふやな記録しか残していないんだ？」

卓の疑問は最もだった。伝説なんてものは全くの空想から生み出

される場合もあるが、今回のような場合、月下通行陣という実在する術式と、それに関する書物には続いて書かれている珠の御神楽の存在がある。つまり、珠の御神楽の存在は昔の誰かが見たということを示していると言ってもいい。いや、見ていないにしろ、そもそも村一つを消滅させた事実は揺るぎないのだから、それだけの存在を造り出すのも領けるのだ。それなのに、ここに来て、こんな曖昧な表記しかされていない書物が発見されたのは前進とも後退とも言えるものとなってしまった。

「これは憶測なんだけど、恐らく、珠の御神楽って私たちが知っている妖霊とはどこ異なる部分があるんじゃないかしら？ 例えば、姿自体は見えないとか、何らかの別の物か者になるとか。」

美奈が唇に人差し指を当てて言った。

「確かに、そう考えるのが普通かも。月下通行陣については明確に記されている書物があるのに、逆にその陣の結果が書かれていないなんて、それ相応の理由があるんだろうし。」

真理は持っていた書物をパタンと閉じて、はあっとため息をついた。

それから、美奈の部屋に短い沈黙が訪れた。これは、無論、明日来る、鳴咲市の危機を打開するための策に行き詰ったためである。

「……ねえ、美奈ちゃん。一つ聞いてもいいかな？」

沈黙のせいかわ、どこか気まずそうに手を上げる蓮華に対して、美奈は案外けるつとしたように、ん？、と言って蓮華に顔を向けた。

「どうして鳴咲市なの？ やっぱりこの神社があるから？」

蓮華の質問に、美奈はちょっと考える間を置いて、口を開いた。

「理由の一つにすぎないけど、それも正解。でも、それよりも、もつと根源的な理由があるの。」

そこで美奈が一旦言葉を区切ると、次は真理が質問を投げかけた。

「昨日言っていた『世界の境界線』っていつの間に関係が？」

真理の質問に美奈は頷いた。

「そう、ここ、鳴咲市は『世界の境界線』と一部で呼ばれている



街でもあるの。別にこの地球に一カ所、というわけではないんだけど、それでも数はごく少数。世の中にはパワースポットというものがあると思うんだけど、『世界の境界線』っていうのはその強大版とというのが一番分かりやすいかな。パワースポットっていうのは、この世界のある一定の条件を満たした自然と、他の世界との自然が境界線すれすれで接触することで、その力を発揮するもの。」

美奈の言葉に、静かに耳を傾ける卓たち3人は、その表情は真剣そのものだった。美奈の言葉を一単語ですら聞き逃すまいというのが態度に出ていた。それに美奈は淡々と続けた。

「『世界の境界線』ってのはこの世界と他の世界が一部重なってしまう現象から起きる、いわば未知の土地となってしまうわけ。もちろん、その重なった世界が何なのか、そんなことまではさすがに分らないけどね。」

「それがこの鳴咲市だっていうわけか。」

卓は納得したように頷いた。

よくよく考えてみれば、思い当たる節はあった。……というのもつい先日までこの鳴咲市には魂の傀儡子という異界の住人、冥府の使者がいたわけで、事実、魂の傀儡子は鳴咲市を中心に活動を繰り返していた。その目的が蓮華の探索だったというのもあるが、それすらも鳴咲市が『世界の境界線』であるが故に生み出した連鎖なのかもしれないと、このとき、卓と真理は考えていた。

ちなみに、以前にイザイとヴァーグナーが魂の傀儡子と対峙した、スイスにある山に囲まれた湖も、その上空を含め、『世界の境界線』であった。

「うん。でも妖霊自体は日本全国にいるから、鳴咲市だけってわけじゃないんだけどね。まあ数が多いのは確かだけど。」

美奈は肩をすくめ、もう一冊書物を手に取った。そして、慣れた手つきでパララとページをめくり、ページの上が三角折りにされたところで止め、床に置いた。

「これみたいに、昔の書物からでも鳴咲市については書かれてい

るの。」

「つまり、今回だけがイレギュラーというわけでもないわけか。」  
卓が納得していると、真理が腕を組んで、口を挟んだ。

「あと、昨日戦ってみて、断絶が出来なかったっていうのも大きいわね。」

真理の心配は最もと言える。断絶とは、贈与の石の力によってある一定の範囲の空間を世界から切り離すことで、その範囲での戦いによる街の破損などを、元の世界に反映させないためのもので、今までの激戦で破壊されたはずの鳴咲市も断絶のおかげで最小限にとどめることが出来たのだ。しかし、今回はそれが使えない、ということとは、

「今回はむやみに石の力を使えないってことになるな。」

当然、そういうことになる。断絶は石の力、もしくは異界の力の影響を受けている者には無効となり、つまり切り離された世界に残ることができるが、それ以外の人間、生物は断絶された世界から追いやられる。よってむやみに人に見られることも、巻き添えにしてしまうことも避けられていたのだが、今回はそれが出来ない。これは卓の蒼波滅陣そつはめつじんや真理の紅蓮槍風くれんそうふうなど、技そのものに強大な破壊力を持つ技を使えば、一般人に見られ、最悪巻き添えにしてしまう恐れすらあるのだ。

「蓮華の神器なら、被害は最小限に抑えられるかもしれないけど、  
真理はちらりと蓮華を見る。蓮華は頷くも、少し困った顔をしていた。」

「私の神器、守護ガーディアンの式席セッションなら、確かに余計な被害を出さずに済むかも。でも、同時に何体もの相手を倒すのはちよつと難しいかな。  
弱点写しもそんなに何十もの相手には使えないの。」

卓たち、つまり討伐者組がそんなことを言っていると、美奈がすつと制服のスカートにあるポケットから何やら7枚の一万円札ほどの紙を取り出した。

「それは？」

卓だけでなく、真理、蓮華も興味深げに美奈が取りだしたそれを見る。

「卓たちも何か不思議な力を持っているみたいだけど、私も一応ね。」

美奈は笑みを浮かべながら、指に7枚の紙を挟んで見せた。

よく見ると、その紙は和紙で、中心には墨で筆記体で悪霊退散と書かれていた。つまりお札ふだというわけだ。

「私だって妖霊の巫女なんだから、ある程度の力はあるわよ？」

さすがに今発動している空間術式までは破壊出来ないと思うけど。」

美奈は話しながら床に7枚のお札を横に並べていく。

「私の術、その名は術式・七星しちせい。この七枚のお札からその組み合わせによって多種多様な術式を発動することが出来るのよ。」

術式・七星。由来は、星座の力を利用し、7つの属性の術として発動する強力術式。科学の発展が無かったころは、その術式で生活を手助けしていたりなどという記録も残っている。

「それが美奈の力……」

卓がふいに呟くと、美奈は少し得意げな表情になって、並べたお札の上に両手をかざした。

「術式・七星、巻水かんすい」

「「「「!!??」」」」

美奈が呟くと、7枚の札がすうつと宙に浮き、部屋の天井付近で円を描くように、一定のスピードでお札は回り始めた。そして、数秒間回った後、円の中心に、小さな水の渦が突如現れた。その水は決して跳び跳ねることもなく、まるで容器の中で渦巻いているように、全く部屋を濡らさなかった。

「これが、術式・七星……」

真理は感嘆の息を漏らした。真理とて、贈与の石の力を使わずにこれほどの奇跡を目の当たりにしたのは初めてだったので当然である。

美奈はしばらく水を出現させると、右腕を上げて、すつと左から右に振り切ると、しゅつと水の渦は消え、宙に浮いていたお札も、元の位置、つまり床の上に降り立った。

「今のは大分力の制御をしたから、用途としては洗濯するくらいにしか出来ないんだけどね。」

美奈は魅力的なウイנקを飛ばす。しかし、卓はそんなことよりも、内心、便利な術だな。光熱費の節約になるんじゃないか……などと思っていた。まあウイנקもすっかり目に焼き付けていたのもまた事実なのだが。

「とにかく、妖霊は私の七星と、卓たちの武器で倒すしか方法もないのが現状。けど、激戦で鳴咲市を壊してしまったら本末転倒だから、そこらへんは各々気をつけてってことで。」

美奈の言葉に卓たちも了承したように頷く。

「妖霊が必ずしも人気の少ないところに現れるわけではないの。卓たちの力は人に見られるとまずいのよね？ 私が言うのもなんだけど、銃刀法違反とかに引っ掛かるよね、あれ……」

美奈の厳しい指摘に、討伐者組は苦笑いを浮かべるしかなかった。少し考えれば分かることで、卓と真理の刀は、光の力を得なくても、それ自身で立派に凶器として成り立つし、蓮華の守護の式席ガーディアンにソックスしても、本物の銃弾を使用しないまでも、石の力を内部に得ていることで、引き金を引けば、十分な殺傷能力を発揮することに変わらない。

それらの問題も含め、断絶が解決していたので、なおのこと、今回の戦いは気を配る必要が大いにあることを改めて実感する討伐者組。

「と、ところで美奈の術は他にもいろいろあるの？」

話題を変えるために卓が振った話に、美奈はえへん、と胸を張って得意げに口を開いた。

「あるわよ。術の応用次第で、同じ術でも、攻撃にも防御にも転じることができるの。一応、結界系の術もあるんだけど、今、鳴咲

市全域には、月下通行陣を安定させるために何らかの巨大結界のよ  
うなものが張られてるせいで、使えないんだけど。」

美奈がはあつとため息をつく、真理がさらに追及した。

「つまり、結界の中に、別の結界を張ることは出来ないってこと  
？」

真理の問いに、美奈は頷いて肯定する。真理もなんとなく分かっ  
てはいたが、それが確信に変わった。

確信、というのは、断絶も結界の中では張れないということが分  
かり、結果、美奈の術式・七星と、贈与の石には似た、もしくはど  
こかに共通点がある力なのだ。

「ん？　まてよ、月下通行陣の起点が4つあって、それを俺達が  
一つずつそれぞれ壊すとするのはいいけど、鳴咲市には妖霊がいる  
んだろ？　そっちはどうする？」

卓が質問を投げかけると、美奈はさらにもう一枚のお札をポケッ  
トから取り出した。そのお札はさっきのとは違い、薄い紫色の和紙  
で、ほかは特に違いはない。

「妖霊払いの呪符よ。あまり強力な妖霊には通用しないけど、あ  
る程度ならこれで退けられるの。ここ数日で、出来るだけ人の多い  
特に中心街には張り付けておいたから、そんなに心配することもし  
ないと思うよ？」

美奈の用意周到さに、討伐者組は感心し、同時に少しの安堵感を  
覚えた。

同日、ドイツ・フランクフルト。日本との時差は夏時間の現在は  
9時間。つまり、フランクフルトは朝と昼時の間といったところだ。  
篠崎謙介。彼は卓の討伐者のパートナーである篠崎真理の実兄で、  
同じく討伐者。その実力は極めて優秀で、ヨーロッパ支部○騎士  
の一人でもある。彼の胸元にはネックレスになった紫の贈与の石が  
太陽光を浴びて、光輝く。

そして、その横には、謙介の討伐者としてのパートナー、東条要。黒髪のロングヘアーで、顔立ちも良く、細身のモデル体型はドイツでも変わらず映える。片耳に翠の贈与の石が付けられたイヤリングを付けている。

二人は、フランクフルトの街中にある噴水の淵に腰掛けている。街中と言っても、東京のような都会とはまた意味が違って、フランクフルトには高層ビルもあるが、それよりも、歴史を感じさせるレンガで出来た建物や、戦争の跡を生々しく残した大聖堂が立ち並ぶ。謙介たちがいる広場にも、中央に噴水があり、広場の端端にはソーセージやカップに入れられたホットな赤ワインが売られる出店があり、朝から人で賑わっていた。

広場の地面はコンクリートではなく、レンガを敷き詰められて出来ており、所々、レンガが外れかかっている部分などもあり、そこに躓いて泣く子供の姿なども見られた。

もちろん、フランクフルトの街並み全てがこうというわけではなく、中心街になれば、近代を思わせる高層ビルや、店がたくさんある。特に、目立つのは鉛筆形のビルで、通称メッセタワーと呼ばれる建物は、フランクフルトを象徴することく、堂々と聳え立っていた。名前の通り、このビルでは年に何回か、メッセが行われる。そんな近代と歴史が入り混じった街、フランクフルトのとある広場で、謙介と要は近くの店で買った、紙製のカップに入ったコーヒを口にしながら、ある人物を待っていた。

背後にある噴水、中央にドイツの偉人だろうか、おじさんの石像から流れる大量の水が、残暑を忘れさせてくれる涼しげな音を立て、そんな水に手を濡らす子供たちの嬉々とした声が広場にのどかな午前を与えていた。

「……遅いな、」

謙介は、ある程度冷めたコーヒを一口飲むと、カップの中でポチャンとコーヒが波打つ。まあそれも、背後の噴水の音で、要には届かない程度のものだったが。

「まだ5分しか過ぎていないわよ？ 電車でも遅れてるんじゃないかしら。」

要はクスリと笑って、時計を見せた。

電車が遅れるというのは、ドイツに限らず、ヨーロッパでは日常茶飯事で、特に珍しいことでもないので、謙介は納得したように、再びカップを口元に運ぶ。

その時、広場の端から、一人の男性がこちらに向って慌ただしく駆け寄ってきた。

「Mir tut es leid. Ein Zug wird verzögert und... (すまない、電車が遅れてしまつて.....)」

男は健介たちの元に来るなり、流暢なドイツ語で話し始めた。

男は身長190センチ近くある大男で、しかし、骨格はしっかりしているが、見た目はスリムで、金髪の短髪に、耳にいくつかのピアスを空けている。

さすが外国人と言ったところで鼻は高く、掘りが深い顔つきはかなりイケていた。

「Kömmern Sie nicht. Weil wir auch jetzt kamen. (気にしないで、私たちも今来たところだから。)」

金の短髪の男に対して、要も違和感のない発音で、返答する。

「?brigens haben Sie redet in Japanisch? (君なら日本語で話せるだろ?)」

唐突な健介の質問に、短髪の男は豪快に笑った後、ふうつと一息ついて、ゆっくりと口を開いた。

「相変わらず、小生意気なボーイだね、君は。」

しかし、嫌味というよりは、短髪の男はむしろ本当に楽しげに言った。

「そんなことより、ネルヴィ。持つて来たんだろっな?」

ネルヴィ。それがこの金髪短髪の長身の男の名前だ。その正体は、

謙介たちと同じく討伐者である。あらかじめ言っておけば弐〇騎士ではない。むしろ、ネルヴィは先陣きつて戦う、というよりは裏方で情報収集する側の人間なのだ。つまり、戦うことの少ない彼にパートナーと呼べる相手はおらず、こうして単体で行動している。

以前、魂の傀儡子と戦ったイザイとヴァーグナーとも何度か面識もあり、ヨーロッパにいる討伐者の中では顔が広い人物でもある。

年は、謙介より3つ上。なのに、年上に対する言葉遣いがない謙介を咎めることもなく、逆に快く受け入れているネルヴィはケラケラと笑う。

なぜか、と言えば立場の問題を考えれば分かるのだが、謙介と要はヨーロッパ支部弐〇騎士であり、弐〇騎士というのは立場はかなり上なので、仮に年下が生意気な口調でも、弐〇騎士でないものがそれについてとやかく言えることではなかった。むしろ、年上であっても、相手が弐〇騎士なら赤ん坊だろうと敬語を使うのが必然となっていた。そのことから、謙介に対しても普通に話せる、彼ら3人の関係は良好と言える。

謙介の問いに、ネルヴィはすつと、ポロシヤツの胸ポケットからUSBメモリを取り出し、謙介に向けて投げた。

謙介はパシツとUSBメモリを受け取ると、それをじつと見据えた。

「しかし、一体どうしたんだい？　突然、そんな昔のデータが欲しいなんて。」

ネルヴィは特にそこまで気にした様子でもなかったが、そんなことを訊ねた。

「……場所を移そう。」

要も謙介の提案に頷き、それから、ネルヴィも話の内容を何となく察したのか肩をすくめ、謙介たちについて行った。

そして、場所を移した先は、謙介たち以外誰もお客がない、裏路地の階段を下ったところにあるバーだった。

お世辞にも綺麗とは言い難く、よく言えば歴史を感じさせる、悪



く言えば汚らしいバーだった。昼間なのに、電気が薄暗く、まるで夜のようなだった。木製の円状のテーブルを囲むように、謙介と要、ネルヴィは座っていた。それぞれの目の前には少し大きなグラスに、ロックアイスが2つ3つ入っていて、中に紅茶が入っていた。ちなみにこのバーは店主が一人で経営しているのだが、その店主も紅茶を出すなり、買いだしに出かけてしまつて今は謙介たちだけ。紅茶が次第にロックアイスを溶かしていき、時々、カランと涼しげな音を立てる。

「で、聞かせてくれるかい、謙介？ なぜ今さらそのデータ。5年前のそれを欲する？」

ネルヴィはロックアイスで冷たくなつたレモン風味の紅茶を一口飲む。謙介はネルヴィがグラスをテーブルに置くのを待つてから口を開く。

「報告があつたからだ。」

「報告？」

ネルヴィが首を傾げると、謙介は重々しい口調で言葉を放つ。たった一言。

「九鬼が動いた。」

それだけで、その場を凍りつかせるには十分だった。さつきまで陽気な雰囲気を出していたネルヴィすらも顔を強張らせていた。

「……なんだって……？」

開いた口から出た言葉はそれだった。

「先日、日本総本部にいた九鬼がそこを発つたそうだ。」

またしても、凍りついたバーにロックアイスが溶け、カランと音を立てる。しかし、ネルヴィの額から一筋の汗が流れる。

「まさか、見つけたのですか？」

ネルヴィの質問に、謙介と要は残念そうに首を横に振る。そして、要が口を開く。

「詳しい動向の理由は分からないの。でも、それが一番あり得る、そして一番望ましくない大きな理由なの。だからこそ、あなたにこ

のデータを持ってきてもらったの。」

要が指差したのは謙介の手元に置かれたUSBメモリ。そして、ネルヴィもそれに視線を移す。

「……なるほど。それで、5年前の境界線の歪みの入ったそのデータを。」

「ああ、もし、九鬼が見つけているのなら、また5年前に生じた歪みが起きているはず。このデータから歪みの特徴を割り出して、九鬼よりも先になんとしても見つけなければいけない。」

謙介は話しながら、足元に置いてあった手提げから、ノートパソコンを立ち上がらせた。そしてパソコンにUSBメモリを差し込み、画面に表示されたフォルダの一つをカチカチとクリックする。

すると、同時に幾つもの小さなウィンドウが表示され、その一番前に、何やら曲線グラフが表示された。

「これが5年前、フランクフルトに魂の傀儡子が現れ、真理と弟くんが襲われた日の、境界線の空間を表しているグラフだ。ここから、ここまではいたって通常。」

謙介は説明するように、そつと画面に指を当て、範囲を示した。

「そして、ここが、問題の歪みだ。」

トントンと謙介が指で2回叩いたところのグラフだけ、それまではほぼ一直線だったのに、急に上昇したり下降したりで、上と下に凸のグラフが交互に描かれていた。

「この歪みが生じたと同時に、真理はその場から姿を消したことになる。」

謙介はノートパソコンの画面から顔を離すと、ふとネルヴィの方を向いた。

ネルヴィはネルヴィで難しい顔で画面を覗き込んでいる。

「しかし、空間の歪みはせいぜい10分から20分といったところですよ。なのに、九鬼がこの歪みを見つけたとして、私たちが今からでは間に合わないのでは？」

ネルヴィの質問に、要も同じことを思ったのか、謙介の答えを気

にしたように謙介を見る。

「そう、それを確かめるためにも今回、このデータを持ってきてもらったんだ。正直、まさかここまで短時間だとは思わなかったよけれど、そうなってくると、九鬼はどうやってこの歪みを観測したんだ、という疑問が次に湧きあがってくる。」

謙介の言うことに、はっとネルヴィと要は目を見開く。

そもそも、このデータの観測も、5年前にたまたま近くに居合わせた討伐者観測班が専用の機器で記録したもので、その機器は使い方次第ではかなり強力な兵器にも成り得ることから、本部から正式に認められた一部の観測班しか使用することが出来ないことになっているのだ。それに、使用を認められた観測班も、申請を出さないことにはその機器を手にするさえも難しく、その申請も面倒なことこの上ないシステムになっている。

「観測自体は九鬼の何らかの力で行うことが出来るのかもな」

謙介は、ネルヴィのその言葉に一つの可能性を見出した。

「仮に『観測自体』が出来たとして、それが確証に繋がる手立てを、奴が持っていると思うか？」

謙介の問いに、ネルヴィは首を横に振り、口をゆっくりと開く。

「いや、その可能性は無い。あれの観測データはそれを含め、2つしか存在しないし、もう片方のデータもそれと同様に、嚴重過ぎるほどの警備システムに守られているからな。USBメモリにも、規定のパソコン以外からの接続の場合、自動的にデータの消滅がされるようにプログラムされている。しかも、そのパソコンは、謙介の持つそれと、もう一つはアメリカ支部に置かれている2機のみ。確認したところ、ここ数年で、そのパソコンが持ち出された形跡はない。」

ネルヴィの答えに、要はほっと胸をなでおろすも、謙介はむしろ状況の悪化を確信していた。

「なら、ネルヴィ。歪みの正体を確認したい九鬼が次に出る行動とは何か、分かるか？」

「……………」  
謙介の真剣な表情で投げかけられたその質問の意図に、ネルヴィの顔からは次第に血の気が引いた。

例えば、新種の生き物が発見されたとのニュースがあったとする。しかし、その生き物がなぜ新種か否か分かるのか、それは図鑑や、過去のデータから一致するものがないことを確認するから明白になることであり、その手段が断たれてしまえば、例え珍しい新種を見つけたとしても、それを確認することは出来なくなってしまう。

つまり、今の九鬼もこれと同じ状況下であり、歪みの正体を確実にするためには、今テーブルに置かれているノートパソコンと、それに繋がっているUSBメモリが必要なのだ。

ネルヴィが顔面蒼白になったのは、それに気がついたのと、狙うなら嚴重な警備が施されているところよりも、今、この瞬間、手薄な外に持ち出されているものを狙った方が確実にということに気がついたからである。

ネルヴィがそんなことを思っていると、ドドンと大きな爆発音が聞こえ、そして、次の瞬間、地下バーの木製の扉が爆風に巻き込まれ木端微塵こっばみじんに消し飛んだ。

「……!?」「……」

謙介はすぐさまパソコンからUSBメモリを引き抜くと、自分のズボンポケットにそれを突っ込んだ。

「はい、観賞タイムはそこまで〜！ 大人しくそのパソコンとデータを寄こしやがれや〜！」

爆発で壊されたバーの入り口から、一人の少女が入っていた。

少女は身長150後半といったところで、胸を黄色い布地で巻いているだけで、ほぼ上裸といった状態の上に、黒のパーカーを肩からはおっているだけ、ズボンには下着と変わらないほどのショートパンツと大胆な格好だった。髪は金髪のロングでツイントールが爆風に靡なびいていた。

そんな少女の登場に無言を決め込む謙介たちに、少女はニツと口

元を緩め、

「聞こえなかったかよ!? それを寄せさせて言ってるんだろ、このクサレザコ共!」

大声で罵声はなせを浴びせた。

「要、ネルヴィ、裏口から逃げる。」

少女から目を反らすことなく、謙介は自分の一步後ろにいる二人にそつと言った。

「ちよつと、何言ってるの!?!」

要は反論しようとしたが、その手をネルヴィに引っ張られ体勢を崩す。

「お気をつけて。」

ネルヴィは謙介の意図を知っているような様子で、テーブルの上のパソコンを持つと、何のためらいもなく謙介をその場に残し、地下から出られる裏口へと、要の腕を引っ張りながら向い、出て行った。

「あらら? いいのかなあ、聖者アンタとも言えども私にたった一人で戦うつもり? 笑えない冗談は嫌いな!!」

少女はこめかみに血管を浮かべながら、怒りを露わにするも、謙介は動じた様子もなく、滑らかに唇を動かす。

「あまり見くびるなよ? 俺とて、貴様に手加減をするつもりはない。かといって女の子を傷つけて喜べるほど腐ってもいない。うまく避けてくれよ。」

「……ぶつ殺す!! その後で、あんたのポケットにあるソレと、あのパソコンも奪い取ってやるわ!」

怒りに逆上する少女が放った一言に、謙介は口元を緩めた。それが強がりなのか、本当に余裕があったのかは分からないが、

「それを聞いて安心したよ。つまり、今ここにいるのはお前だけで、特に仲間もないわけだろ? 九鬼がいたらどうしようかと思っていたが。」

などと口走る。それに対して、少女ははんつ、と鼻で笑って、口

を開く。

「絶対強者がいなくても、私一人で十分なのよ！！ いい加減理解しなさいよこのゲスキザ野郎！！」

罵声を聞き流す謙介はふうつと息を吐き、そして、

「具現せよ、我が聖剣！」

謙介の首元にある贈与の石が紫の光を放ち、薄暗いバーを怪しく照らす。そして、瞬間、謙介の手には西洋風の剣が握られ、その刃には黄金の光も纏っていた。

「なあゝにそれ、玩具？」

少女がケラケラと笑うのに対して、謙介は間髪いれずに剣を振るう。黄金の斬撃は美しいまでに光輝き、少女へと向かっていき、そして直撃

「な……に……」

謙介は開いた口が塞がらなかった。

つい今放ったはずの斬撃は、少女に当たる直前で消えた。

「きゃはははははは！！！！ だから言ったじゃない！ それって玩具って！」

腹を抱えて笑う少女。彼女の手にはいつの間にかまるで氷のような、透き通る透明な短刀が握られていた。

「……それで、消したのか……」

謙介は鋭い目つきで握られた短刀を見ると、ふいにそんなことを口からこぼしていた。

「正確には、二酸化炭素に変換した。コイツの名前は気体原核刀ソリッド・リターナー！！ コイツの刃で切られた石の力は二酸化炭素に変換されつつまうってな寸法なんだよ！」

少女は興奮気味に声に出して大笑いした。

パソコンを持ちだしたネルヴィと要はいつもとなんら変わらない平穏なフランクフルトの街を駆けていた。

「どうして謙介を置いて行くの!? あのUSBメモリが奪われたらまずいんでしょ!？」

要は走る足を止めることなく、一步先を走るネルヴィに訊ねた。すると、ネルヴィも走りながら、当然振りかえることもなく返答する。

「大丈夫、あのUSBメモリにはもうデータはないから。」

「? どういうこと?」

要がさらに問いを続けると、ネルヴィは走って乱れた呼吸を少し整え、無論走り続けてだが、答える。

「あのUSBメモリは、決められた手順を行わずにパソコンから抜くと、自動的に記憶されていたデータは消滅するようにプログラムされていたのです。謙介はそれを知っていて、あえて手順を踏まずにUSBメモリを抜いたんだ。そして、一瞬にしてパソコン側にデータを移し終えることまで出来る。もちろん、こちらにも仕掛けがあるんだけどね。実を言えばこのパソコンにはデータは無い。」

「!!!???」

背中越したが、要が驚いているのにネルヴィは気がついた。

「一度移されたデータはもう片方のパソコンに転送され、自動的にこちら側の情報も消去されるって寸法です。」

「ならどうしてパソコンまで持ち出したの?」

「あそこでパソコンを持ちださなければ、あの襲撃者はどう思うと思いますか?」

質問を質問で返され、要は少し考えたあと、はっと何かに気が付き、答えた。

「パソコンの重要性が軽視されて、すぐに私たちを追ってデータの在りかを力づくでも吐かせる……」

「ご名答。つまり、これはあの襲撃者をあの場に少しでも長く留めておくための演技なんだよ。」

話を一旦終えても、要とネルヴィはフランクフルトの街を駆け続けた。

「ぐはっ！」

謙介はバーのカウンターに強く背中を打ちつけられ、その場に倒れ込んだ。

何度か断絶を試みた謙介だったが、そんな暇を与えてくれるような相手でもなく、その度に短刀で攻撃されるのだった。

「きやはははは！　なあーにが聖者だよ！？　こんな無様な聖者なんて誰も敬わねえよ！」

少女は短刀で、木製のテーブルを真つ二つに切り裂き、謙介へと近づく。

「……貴様のそれは、神器、なのか……」

身体を打ち付け、よろよると起き上がり、謙介は少女の手にある短刀を睨みつけた。

だが、少女もまた、あん？と言って謙介を睨みつける。

「神器であゝ？　笑えない冗談は嫌いって言ったろ！！　悪魔を崇拜する私が神の力なんか借りるわけねえだろうがあああああ！！！」

少女は怒り狂ったように<sup>ソリッド・リタイナー</sup>気体原核刀を振りまわし、謙介に向っていく。謙介はそれに対応するように、黄金の斬撃を放つ。が、それはすぐに<sup>ソリッド・リタイナー</sup>気体原核刀に打ち消され、その場に二酸化炭素が充満する。

「はあああああ！」

が、謙介はひるむことなく、直接、剣で応戦する。<sup>ソリッド・リタイナー</sup>気体原核刀の刃の交わった瞬間、聖剣に纏っていた黄金の光は消滅し、金属と金属がぶつかり合うような甲高い音がバーに響き渡った。

「きやははは！　石の力を使えない気分はどうよおおお！？」

少女は無理矢理、剣を押しつけ、2歩ほど後退する。

「はあ、はあ……。……神器でないなら、それは何だ！？」

謙介の問いに、少女は急に苛立ちを見せたような表情になり、「言っただでしょ、私は悪魔を崇拜する者、なら悪魔の力、とでも





先に逃げた要とネルヴィはバーから1キロほど離れたところにある石の階段の一段に腰掛けていた。

「やつぱり、謙介が心配!」

貧乏ゆすりをしていた要がぼつと立ち上がり、走ってきた方向に歩き出そうとするのを、ネルヴィが腕を掴んで止めた。

「謙介なら大丈夫。心配しすぎだよ。」

「でも! さっきの敵はとんでもない感じがしたし、謙介死にかけてるかも」

「人を勝手に瀕死にするなよ。」

「!?!?!」

突如、背後から聞こえる声に要は振り返ると、そこには要とネルヴィが走ってきた方にボロボロの姿で立っていた謙介がいた。

「お帰りなさい。」

ネルヴィはにつこり笑って、手を差し出す。それに謙介は応じて、握手した。

「囿になったおかげで奴が『頂』という情報と、危うい武器を持っているということは分かった。」

謙介の事後報告に、要とネルヴィは驚きを隠せずにいた。

「ついに動き出すのね。」

要のその一言が、謙介とネルヴィ、そして要自身にこれから起こる大惨事を脳裏に想像させた。

それでも、空に広がる青空に浮かぶ純白の雲は変わらずに風に流されていた。

術式・七星（後書き）

「約束の蒼紅石」第10話いかがでしたでしょうか？ 話のほうもだんだんと進展していき、思わせぶりなセリフも増えてきたと思います（笑） 今回は思いのほかバトルシーンが少なくなってしまったんですけど、それでも、会話だけでキャラの特徴などが伝わってくれてたらいいなーというのが作者の願望です！

これからもっと白熱した展開にしていきたいと思しますので、これからもこの作品をどうぞよろしく願います！

では、また第11話でお会いしましょう！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4238y/>

---

約束の蒼紅石

2012年1月6日20時27分発行